

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第235集

# 名古屋城三の丸遺跡IX

2026

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

名古屋城三の丸遺跡IX

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書  
第235集

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第235集

なごやじょうさんのまるいせき  
名古屋城三の丸遺跡 IX

2026

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

## 序

愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、今回で第9次となります。この広大な遺跡には名古屋城が築かれた江戸時代ばかりでなく、それ以前の室町時代から戦国期の屋敷地の遺構、さらに古くは奈良時代、古墳時代、弥生時代それぞれの時期の建物跡からなる集落跡が確認されており、陶磁器、土器、金属製品や石器などの出土遺物とともに各時代の人々の暮らしの有り様が調査のたびに鮮やかに浮かびあがります。

今回の調査でも貴重な資料が得られました。尾張藩上級藩士のうち、重臣の屋敷地には池のある庭園が造られていました。縁先には「水琴窟」があり、19世紀にもなると鉢植を用いた園芸趣味が城内でも盛んであったようです。

このように、名古屋城三の丸遺跡においても新しい成果が蓄積していくことによって地点ごとの歴史はしだいに面となり、その都度再評価の機会を得て継続的な文化財保護活動に繋がっています。

調査におきましては関係諸機関、周辺地域の皆様から多大なご協力をいただきましたことを深く感謝申し上げます。今回の調査成果が、地域の歴史理解と埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

令和8年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 佐藤正美

## 例言

1. 本書は、名古屋市中区丸の内に所在する名古屋城三の丸遺跡（県遺跡番号 007027）の発掘調査報告である。
2. 名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局の名古屋第4地方合同庁舎整備等事業に伴う事前調査として、株式会社佐藤総合計画より愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は令和 5 年 5 月から 8 月、調査面積は 1,119 m<sup>2</sup>である。
4. 発掘調査は、永井宏幸（主任専門員）・武部真木（主任専門員）・梶田真由（調査研究主事）が担当した。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。  
国土交通省中部地方整備局 愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室 愛知県埋蔵文化財調査センター  
名古屋市教育局 名古屋城調査研究センター 株式会社佐藤総合計画 大成建設株式会社
6. 名古屋城三の丸遺跡 23A 区の発掘調査については、株式会社島田組（現場代理人：田中崇宏・林 那智  
調査補助員：安孫子雅史 測量技師：竹村一真・前田芳孝）より調査業務全般の支援を受けた。
7. 報告書作成にかかる整理作業において、出土遺物の接合・抽出作業の一部を株式会社アーキジオ、実測・ト  
レース業務を株式会社アコードおよび株式会社文化財サービス、自然科学分析を株式会社パレオ・ラボ、出土  
遺物の写真撮影を有限会社写真工房 遊 にそれぞれ委託して行った。
8. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏からご指導、ご協力を得た。  
赤羽一郎 井上喜久男 岩淵 寛 梅本 博志 岡田圭司 岡本直久 小澤一弘 金子健一 木村有作  
久保禎子 小島章弘 佐藤公保 柴垣勇夫 清水芳昭 城ヶ谷和宏 鈴木とよ江 鈴木正貴 仲野泰裕  
丸山 宏 水野裕之
9. 本編の執筆は、第 1 章、第 2 章、第 3 章と全体の編集を武部真木、第 4 章を鈴木正貴が担当した。なお、  
第 5 章 1 は（株）パレオ・ラボ分析結果を武部がまとめて編集を行った。
10. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、  
厳密な統一性はない。  
SK：土坑 SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SE：井戸 SD：溝 NR：自然流路 SX：その他不明遺構
11. 発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第七系に準拠した。ただし、表記は新測地系（世界測地系）  
による。
12. 海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。
13. 本編で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
14. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター  
で保管している。なお、名古屋城三の丸遺跡の略記号は「2NS」である。
15. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。  
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24

### 発掘調査現地作業スタッフ

（発掘作業員）加藤雄二 山本 學 坂井隆三 服部勝敏 奥 淳一 大西信成 水谷久子 奥野基史  
山本敏男 中神京子 濱崎弘三 鶴飼伸夫 平岩暉司 佐々木隆夫 関 敦子 木村光之 後藤秀夫  
森 清司 平野武邦 福井清治 北村泰一 大嶽友美 青山隆生 戸松康樹  
（重機オペレーター）伝代賢治 川島貴志 駒村大輔 福田健二 南山昌彦 佐藤剛士  
（現場代理人）田中崇宏 林 那智  
（調査補助員）安孫子雅史（測量技師）西尾唯史 前田芳孝 竹村一真

### 整理作業スタッフ

阿部裕恵 一柳純子 梅本陽子 唐木美早 川添奈穂美 鈴木好美 瀧 智美 時田典子  
永井智子 堀田祐美 前田弘子 山田有美子 山本孝枝

# 目次

第1章 調査の経緯・経過	……………(武部) 1
1 調査理由	
2 調査の経過	
3 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	……………(武部) 3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第3章 遺構	……………(武部) 8
1 調査の概要	
2 時期区分と遺構の概要	
3 戦国期の遺構	
4 江戸時代以降の遺構	
(1) 屋敷地 1	
(2) 屋敷地 2	
第4章 遺物	……………(鈴木) 35
1 出土遺物の概要	
2 戦国期以前の遺物	
3 江戸時代以降の遺物	
(1) 屋敷地 1 の遺構出土遺物	
(2) 屋敷地 2 の遺構出土遺物	
(3) 23A 区出土陶磁器の検討	
(4) 江戸時代の瓦類	
(5) 江戸時代以降の金属製品	
第5章 自然科学分析	……………(武部) 74
1 名古屋城三の丸遺跡の花粉分析	
2 武家屋敷で用いられた「タタキ(三和土)」成分	
第6章 総括	……………(武部) 82
1 戦国期区画溝	
2 江戸時代における重臣武家屋敷の内部空間	
(1) 「埋甕遺構」	
(2) 庭園に関連する遺構の配置	
(3) 居住者と屋敷地内部の様相	
付表 遺構一覧表 1～4	
登録遺物一覧表 1～10	
図版 基本平面図 上面 1～5	
124SG(池) 付近平面図	
基本平面図 下面 1～5	
写真図版 1～24(遺構・遺物)	

## 挿図 目次

図 1 名古屋城三の丸遺跡の位置	1
図 2 調査範囲の位置および 23A 区調査区配置図	2
図 3 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図（『名古屋城三の丸遺跡 VIII』図 4 より）	3
図 4 名古屋城三の丸遺跡調査地点（縮尺 1/5,000）	5
図 5 名古屋城および城下の主な調査地点（江戸時代）	7
図 6 23A 区 江戸時代・戦国期検出レベル模式図	8
図 7 23A 区 主要遺構配置図（戦国期）	9
図 8 23Ad 区 東壁断面図（縮尺 1/50）	10
図 9 23Aa 区 060SD 付近 西壁断面図（縮尺 1/50）	10
図 10 23Ab 区 西壁 120SD-a,-b 断面図（縮尺 1/50）	11
図 11 23Aa 区 060SD,23Ab 区 126SD 平面・断面図（縮尺 1/50）	12
図 12 23Aa 区 065SD 平面・断面図（縮尺 1/50）	13
図 13 23Aa 区 121SD 平面・断面図（縮尺 1/50）	14
図 14 23Aa 区 122SD 平面・断面図（縮尺 1/50）	15
図 15 23A 区 主要遺構配置図（江戸時代以降）	16
図 16 23Aa 区 東壁断面（縮尺 1/50）	18
図 17 23Aa 区 北壁断面（縮尺 1/50）	19
図 18 001SK,002SK,076SK,062SK,063SX 平面・断面図（縮尺 1/50）	20
図 19 015SK 埋甕遺構 平面・断面図（縮尺 1/50）	21
図 20 025SK 埋甕遺構 平面図（縮尺 1/50）	22
図 21 025SK 埋甕遺構断面図（縮尺 1/40）	23
図 22 042SK 埋甕遺構 平面・断面図（縮尺 1/40）	23
図 23 016SX 埋甕遺構,177SX,182SK,183SD 平面・断面図（縮尺 1/50）	24
図 24 213SK,218SK 平面・断面図（縮尺 1/50）	25
図 25 23Aa 区 東壁断面（縮尺 1/50）	26
図 26 23Ab 区 北壁 128SX 断面（縮尺 1/50）	29
図 27 23Ab 区 120SD 上層埋土の縦方向断面（縮尺 1/50）	31
図 28 23Ab 区 124SG 平面・断面図（縮尺 1/50）	31
図 29 23Ab 区 102SE,105SK,106SK 平面・断面図（縮尺 1/50）	32
図 30 23Ab 区 111SX 平面図（縮尺 1/70）・断面図（縮尺 1/50）	33
図 31 23Ab 区 101SK,104SE/23Ac 区 162SX 平面・断面図（縮尺 1/50）	34
図 32 土器・陶磁器・石製品実測図 1（縮尺 1/4）	37
図 33 土器・陶磁器・石製品実測図 2（縮尺 1/4）	38
図 34 土器・陶磁器・石製品実測図 3（縮尺 1/4,一部 1/6）	41
図 35 土器・陶磁器・石製品実測図 4（縮尺 1/4,一部 1/6）	42
図 36 土器・陶磁器・石製品実測図 5（縮尺 1/4,一部 1/6）	43
図 37 土器・陶磁器・石製品実測図 6（縮尺 1/4）	44
図 38 土器・陶磁器・石製品実測図 7（縮尺 1/4）	45
図 39 土器・陶磁器・石製品実測図 8（縮尺 1/4）	46
図 40 土器・陶磁器・石製品実測図 9（縮尺 1/4）	47

図 41	土器・陶磁器・石製品実測図 10 (縮尺 1/4)	48
図 42	土器・陶磁器・石製品実測図 11 (縮尺 1/4)	51
図 43	土器・陶磁器・石製品実測図 12 (縮尺 1/4)	52
図 44	土器・陶磁器・石製品実測図 13 (縮尺 1/4)	53
図 45	土器・陶磁器・石製品実測図 14 (縮尺 1/4, 一部 1/2)	54
図 46	土器・陶磁器・石製品実測図 15 (縮尺 1/4)	55
図 47	土器・陶磁器・石製品実測図 16 (縮尺 1/4)	56
図 48	土器・陶磁器・石製品実測図 17 (縮尺 1/4, 一部 1/6)	59
図 49	土器・陶磁器・石製品実測図 18 (縮尺 1/4)	60
図 50	土器・陶磁器・石製品実測図 19 (縮尺 1/4, 一部 1/6)	63
図 51	土器・陶磁器・石製品実測図 20 (縮尺 1/4)	64
図 52	土器・陶磁器・石製品実測図 21 (縮尺 1/4)	65
図 53	土器・陶磁器・石製品実測図 22 (縮尺 1/4)	66
図 54	土器・陶磁器・石製品実測図 23 (縮尺 1/4, 一部 1/6)	67
図 55	土器・陶磁器・石製品実測図 24 (縮尺 1/4, 一部 1/6)	68
図 56	土器・陶磁器・石製品実測図 25 (縮尺 1/4)	69
図 57	江戸時代の瓦実測図 1 (縮尺 1/6)	70
図 58	江戸時代の瓦実測図 2 (縮尺 1/6, 拓本 1/2)	71
図 59	江戸時代の瓦実測図 3 (縮尺 1/6, 拓本 1/2)	72
図 60	金属製品実測図 (縮尺 1/3)	72
図 61	瓦刻印の拓本 (縮尺 1/1)	73
図 62	池 124SG ①から産出した花粉化石	75
図 63	花粉分布図	77
図 64	分析対象試料	79
図 65	X線回析パターン図 (分析 No.1 ~ 5)	81
図 66	23A 区と県三の丸庁舎地点の戦国期溝 (堀) の配置	82
図 67	名古屋城三の丸遺跡の戦国期溝 (堀) の分布	83
図 68	名古屋城三の丸遺跡の埋甕遺構の事例	85
図 69	武家屋敷内の構造	86
図 70	武家屋敷内の主要遺構配置図	87
図 71	屋敷割の推定範囲と居住者の変遷	89
図 72	三之丸屋敷割推定図と遺跡調査地点	90

## 表 目次

表 1 名古屋城三の丸遺跡 関連年表	6
表 2 瓦刻印の種類と部位	73
表 3 花粉分析試料一覧	74
表 4 産出花粉孢子一覧表	76
表 5 モルタル状物質分析対象一覧	78
表 6 蛍光 X 線半定量分析結果 (mass%)	80
表 7 X 回析分析による検出鉱物一覧	80

# 第 1 章 調査の経緯・経過

## 1 調査理由

愛知県名古屋市中区三の丸に計画された名古屋第 4 地方合同庁舎整備等事業にともない、国土交通省中部地方整備局および株式会社佐藤総合計画より愛知県民文化局文化部文化芸術課文化財室を通じて委託を受け、公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（以下愛知県埋蔵文化財センター）が調査を行った。

## 2 調査の経過

発掘調査は、株式会社島田組の調査支援を受けて、愛知県埋蔵文化財センターが現地で管理する体制で行った。

調査は、23A 区として令和 5 年（2023）5 月から 8 月の期間で 1,119㎡の面積について行った。これは事業地敷地内において旧建物の建造時に削平されていない範囲を中心に設定された範囲であり、建物基礎外側に沿う形で全体では幅の狭いコの字形の形状の調査区となった。作業区分としては、北東部の Aa 区、北西部を中心とする Ab 区、南西部を中心とする Ac 区、南東部を中心とする Ad 区の 4 調査区に分割して行った（図 2）。23A 区としての発掘調査は 8 月末までに一旦終了し、大成建設株式会社による建物基礎構造物等の撤去工事および壁面養生の作業が終了したのち、令和 6 年 1 月から 3 月までの期間で旧建物範囲の下層を 23B 区として調査を行った。こちらの調査面積は 3,344 ㎡である。

本書は、23A 区の調査成果を報告するものである。

### 23A 区調査日誌抄

令和 5 年 5 月 18 日：Aa 区より表土掘削開始

6 月 12 日：現地指導：丸山 宏氏（名城大学名誉教授）

6 月 21 日：現地指導：丸山 宏氏（名城大学名誉教授）・赤羽一郎氏

7 月 22 日：地元説明会 午前 10 時 30 分から

8 月 17 日：愛知県生涯学習推進センター県民講座（現地学習）

8 月 28 日：現地作業終了

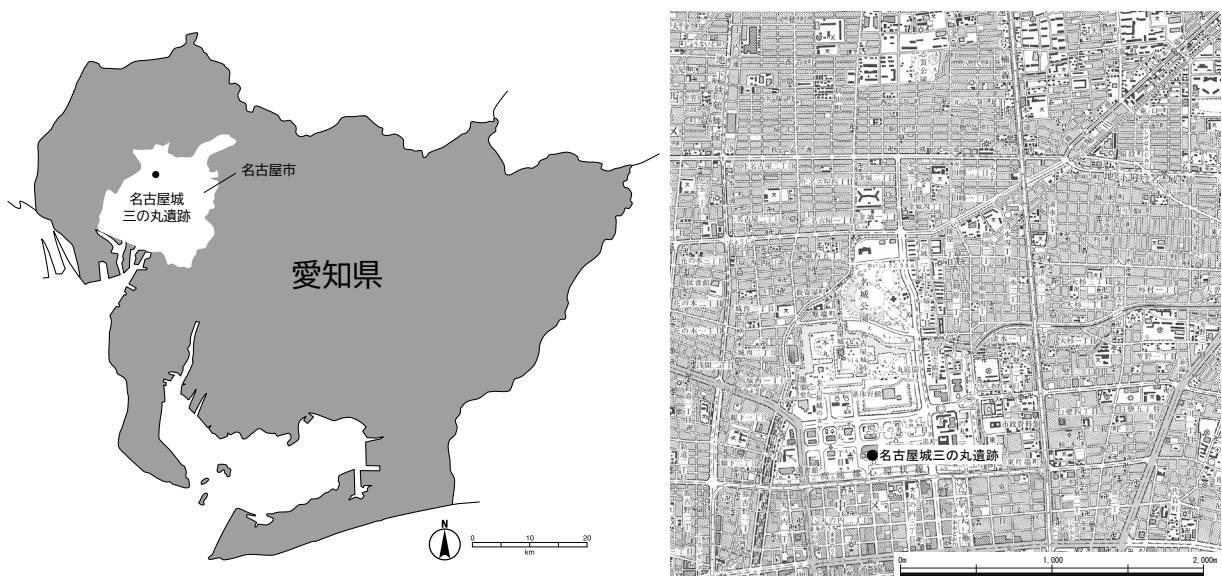


図 1 名古屋城三の丸遺跡の位置

### 3 整理作業の経過

整理作業の期間は、令和6年（2024）4月から令和7年（2025）3月の期間である。出土遺物の整理では、土器・陶磁器類の分類・接合作業、報告書掲載遺物の抽出作業補助とそれらのリスト作成は（株）アーキジオに委託して行った。掲載遺物の実測・トレース作業は（株）文化財サービスと（株）アーキジオ、掲載遺物の写真撮影は有限会社写真工房遊に委託して行った。そのほか、自然科学分析については（株）パレオ・ラボに委託して行った。

出土陶磁器類の鑑定には井上喜久男・岡本直久・金子健一氏らを招聘した。そのほか原稿執筆は鈴木正貴と武部真木が分担し、そのほか図版作成・編集作業は武部が行った。

なお、整理作業完了後、出土遺物はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターへ移管されている。

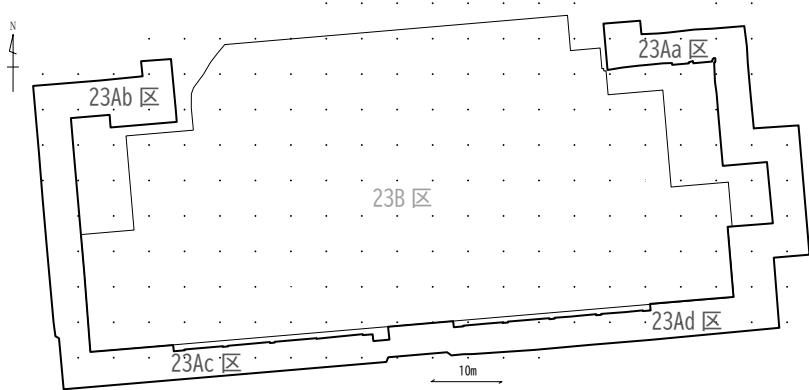
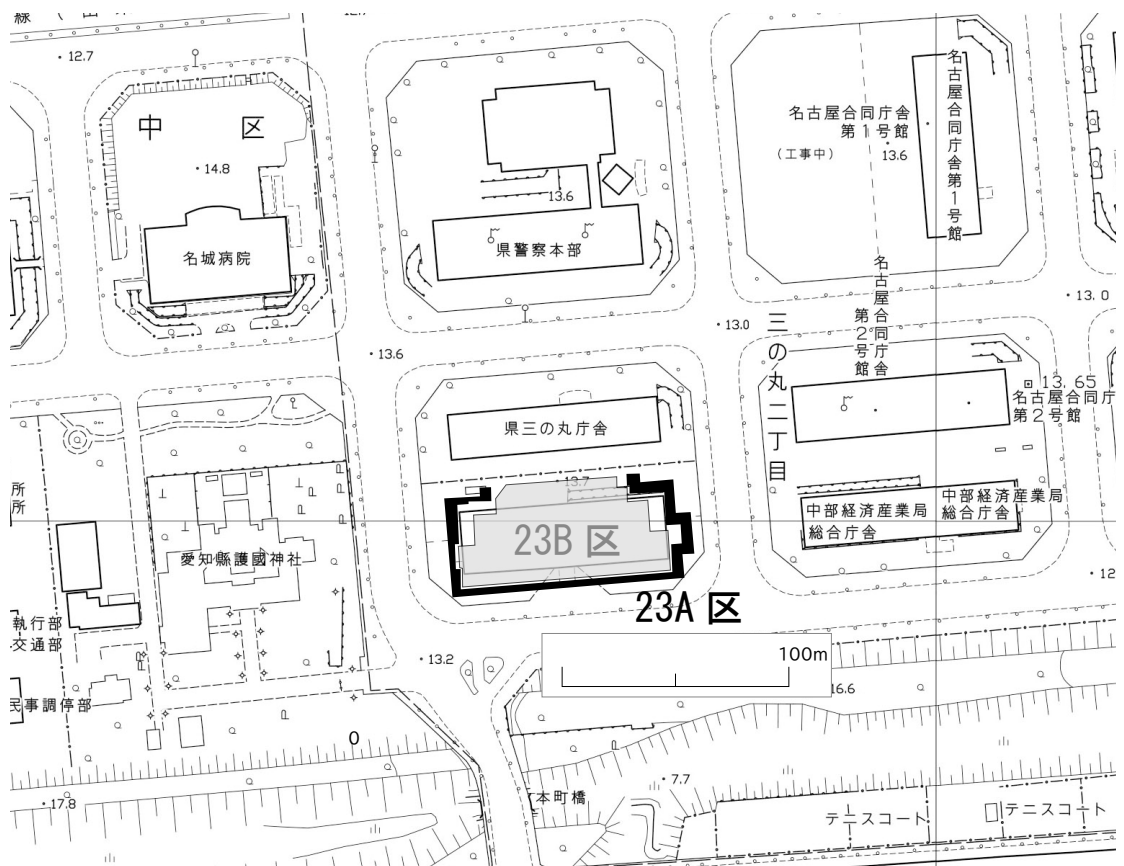


図 2 調査範囲の位置および 23A 区調査区配置図

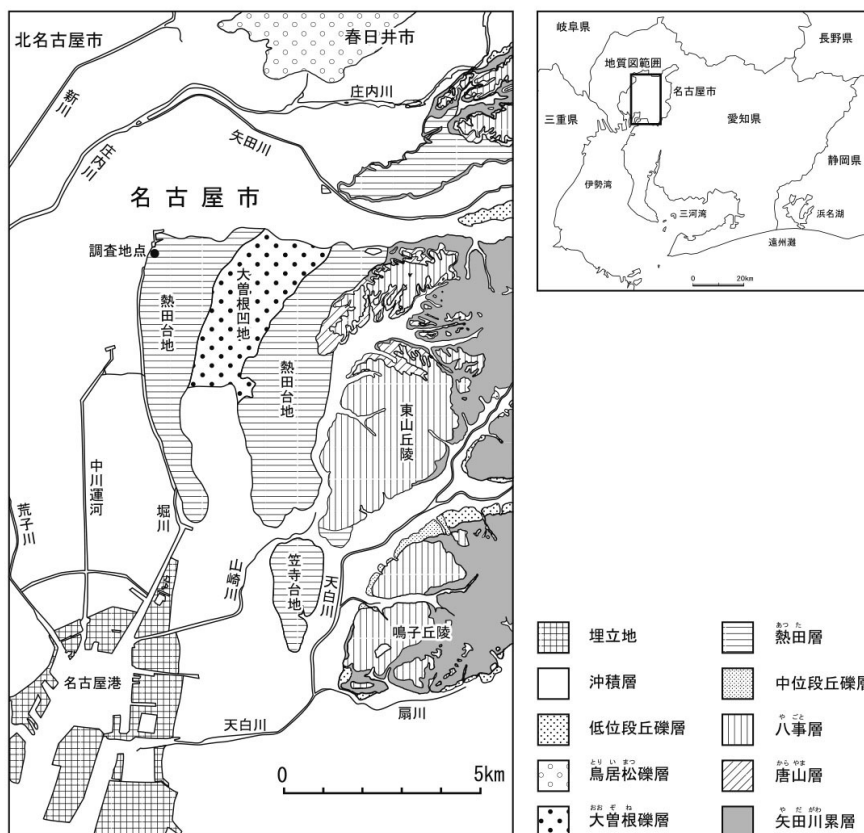
## 第 2 章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

名古屋市中区三の丸に所在する名古屋城三の丸遺跡は、愛知県の西部に位置する名古屋市では北西部に位置する（図 3）。名古屋駅からは北東に約 1.8km、熱田からは北へ約 7km の距離にあり、熱田台地の北西端に築かれた名古屋城域の南辺をなす「三の丸」が遺跡の範囲である。名古屋城が築かれた台地の周囲には低地が広がり、その標高差は約 10m、北側は湿地環境を利用した外堀と下御深井御庭が配置され、西側には築城時の慶長十六年（1611）頃に整備された堀川がめぐる。

名古屋城三の丸遺跡周辺の地下地質について、地層は全体として砂礫・泥互層からなり下位より東海層群（新第三系）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層下部（上部更新統）、熱田層上部（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）などの第四系の累層から構成される。これらのうち中部更新統は丘陵～高位段丘を、上部更新統は中・低位段丘を、上部更新統最上部～完新統は沖積低地を構成している。名古屋城三の丸遺跡の立地する熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。

2001 年調査時の深掘りの結果では、標高 7.97～11.20m までに粗粒砂層と粘土層からなる層序が得られており、標高 7.97～8.30m にみられる粗粒砂層中の標高 8.01m の層準から阿蘇 4 テフラ（Aso4:86～90ka（ka は 103 年前を表す地質年代単位））、その直上の標高 8.18m の層準からは大山生竹テフラ（DNP:80±40ka（木村ほか,1999））とともに斜方輝石および単斜輝石を主体とし角閃石を含む特徴をもつ、岐阜県と長野県との県境をなす御嶽火山起源の御岳 - 奈川（On-Ng: 約 5 万年前（中村ほか,1992））も含まれた。黒褐色シルト質粘土層（標高 11.11m～11.20m）の標高 11.15m からはバブルウオールタイプの火山ガラスが認められる始良 Tn テフラ（AT: 約 2 万 4 千年前（村



●が調査地点を示す。地質図は坂本ほか（1984）、坂本ほか（1986）を基に作成。

図 3 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図（『名古屋城三の丸遺跡 VIII』図 4 より）

井ほか,1993)) が検出され、さらに始良 Tn テフラが検出された層準よりも上位の標高 11.19m のシルト質粘土層の放射性炭素年代が暦年代較正值で 10890-10755cal yrs BP(PLD-1594) を示し、阿蘇 4 テフラの約 9 万年前以降から始良 Tn テフラの約 2 万 5 千年前、放射性炭素年代測定値の約 1 万年前までの地質年代や数値が得られている。

## 2 歴史的環境

これまでに名古屋城の城郭内および名古屋城下で江戸時代の調査が行われた地点を図 4,5 に示す。

名古屋城域で初めて発掘調査が開始されてからおよそ 50 年が経過する。これまでに特別史跡に指定された本丸・二之丸・三之丸の土塁と石垣では名古屋市による調査が、名古屋城三の丸遺跡では名古屋市教育委員会と愛知県埋蔵文化財センターにより 20 地点を超える調査が行われている。これに加え、近年には、愛知県新体育館建設事業にともない城域の北側の名城公園遺跡において 27,000 m<sup>2</sup>もの広範囲で発掘調査が行われた。時々の尾張藩主の趣向を反映するかのような整備・改変が行われた下御深井御庭に関する遺構が検出されたほか、江戸時代以前では奈良時代・古墳時代・弥生時代の集落跡、複数の溝や流路跡が検出されている。

さて、近世名古屋城以前の中世には那古野城が存在したとされる。那古野城の実像については不詳である。史料が記す那古野城は、大永年間(1521～1528)に駿河国主今川那古野氏により築かれたとされる。今川氏豊が城主の時、天文七年(1535)に織田信秀が奪取し、これを信長に譲った。その後、信長が清須城へ移ると、城主は織田信光、林秀貞へと代わり、天正十年(1582)には那古野城は廃城になっていたという。

17 世紀末から 18 世紀初頭に天野信景が著した『尾州古城志』には「那古野村 今本丸之地是也、古或謂今市場ノ城 今川左馬助氏豊享禄年中築之、天文元年二月織田信秀奪之信長誕生於此城云々 織田備後守信秀 織田三郎信光弘治元年信長使信光居当城其冬為家臣被殺 林佐渡守信勝 至天正八此後廢城慶長十五年新築大城」と記す。位置は近世名古屋城本丸に比定されている。

正徳四年(1714)までに成立したとされる、尾張藩士朝日重村・重章の『塵点碌』では、「那古野ノ城今川左馬之介氏豊始而築之、柳の丸と号ス、今の御本丸の西御深井丸ノ所也云々、御本丸ヨリ南山澄氏の家なんとあたり迄今市場といいしとかや」と記され、この時には既に位置は仔細不明となっている。

二之丸付近説の根拠は、文化十四年(1817)に写された奥村得義所蔵の「御城取大体之図」と「那古野古城之図」であり、「古城跡」は近世名古屋城の二之丸の位置に比定され描かれているのである。

発掘調査により検出された 15 世紀終わりから戦国期の屋敷地区画溝については、資料の増加とともに規模・形状・方位を元に展開の傾向が整理されてきた(松田 2002 ほか)。台地縁辺に近く主要な道路も含めて地形の影響の大きい西部地域を除くそのほかの地点では、「準方位」の軸線をとる溝から正方位に代わっていくという変遷が認められること、早い段階の 16 世紀初頭から「正方位」に更新していく地点と、やや遅れて変化していく地点とがあり、正方位の軸線方向が早く成立する二の丸の付近に戦国期の中心域が想定された。

こうした戦国期の様相は近世武家屋敷の整備の段階に削平されなかった大型の区画溝群の展開を遺跡調査で繋ぎ合わせるものであり、これまでも時期を明確に示す資料は非常に少ない。

### 【参考文献】

名古屋市,1959,『名古屋城史』

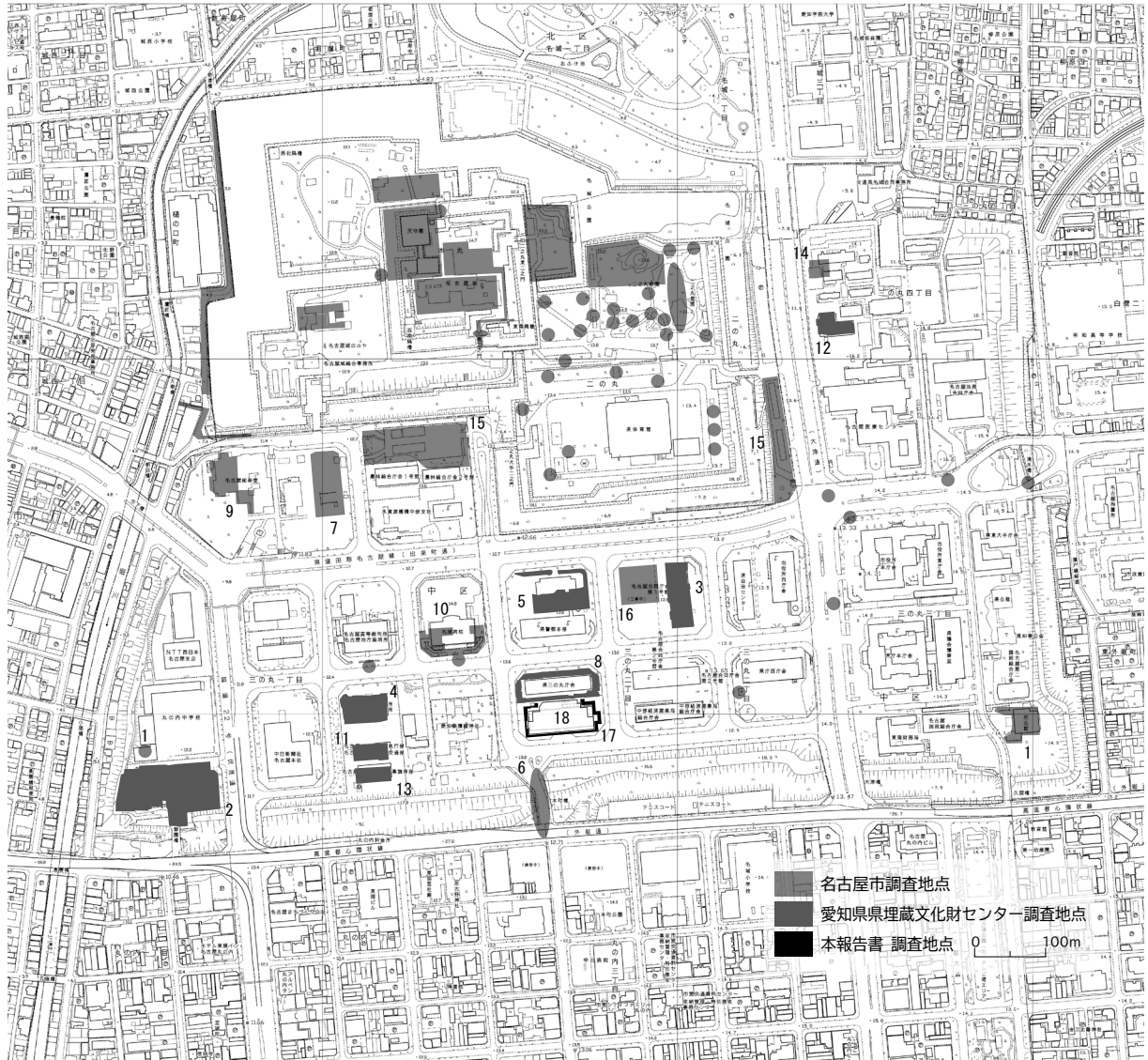
尾野善裕,1998,「掘り出された戦国時代の那古野城」『新修名古屋市史 第二巻』名古屋市

松田 訓,2002,「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要 3』愛知県埋蔵文化財センター

鬼頭 剛,2007,「第 1 章 2 周辺の自然環境」『名古屋城三の丸遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161 集

松田 訓編,2003,『名古屋城三の丸遺跡 VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集

名古屋市,2013,『新修名古屋市史 資料編 考古 2』



図中地点番号	調査年	報告書
1 名古屋市公館 (1次・3次) 丸の内中学校 (2次)	1975~1976	『名古屋城三の丸遺跡-1,2,3次調査の概要』名古屋市教育委員会,1989
2 愛知県図書館	1988	『名古屋城三の丸遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター,1990
3 名古屋第一地方合同庁舎	1988	『名古屋城三の丸遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター,1990
4 名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎	1990~1991	『名古屋城三の丸遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター,1992
5 愛知県警察本部	1991	『名古屋城三の丸遺跡 IV』愛知県埋蔵文化財センター,1993
6 本町門	1991	『名古屋城本町御門跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会,1992
7 中部電力地下変電所	1992~1993	『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書-遺構編・遺物編』名古屋市教育委員会,1994
8 愛知県三の丸庁舎	1993~1994	『名古屋城三の丸遺跡 V』愛知県埋蔵文化財センター,1995
9 名古屋市能楽堂	1993~1994	『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会,1995
10 名城病院地点	1995~1996	『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会,1997
11 地方簡易裁判所庁舎	2001	『名古屋城三の丸遺跡 VI』愛知県埋蔵文化財センター,2003
12 国立名古屋病院	2002	『名古屋城三の丸遺跡 VII』愛知県埋蔵文化財センター,2005
13 地方簡易裁判所合同庁舎	2006~2007	『名古屋城三の丸遺跡 VIII』愛知県埋蔵文化財センター,2008
14 名古屋医療センター職員宿舎	2011	『名古屋城三の丸遺跡一職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』名古屋市教育委員会,2011
15 名城公園宿泊所 二の丸東駐車場	2014	『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』 名古屋城三の丸総合事務所,2015
16 名城東小公園	2015~2016	『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査 (中央新幹線「名城非常口」地点)』 名古屋市教育委員会,2017
17 名古屋第四地方合同庁舎	2023	『名古屋城三の丸遺跡 IX』愛知県埋蔵文化財センター,2026
18 名古屋第四地方合同庁舎	2023	『名古屋城三の丸遺跡 X』愛知県埋蔵文化財センター,2026

図 4 名古屋城三の丸遺跡調査地点 (縮尺 1/5,000)

表1 名古屋城三の丸遺跡 関連年表

年代・年号	できごと
12世紀	小野法印顯恵（1175没）を開発領主として「那古野荘」が成立
1192 建久3	鎌倉幕府はじまる
1338 暦応1	室町幕府はじまる
14世紀	『江家次第』の紙背文書「建春門院法花堂領尾張国那古野庄屋職相伝系図」／「那古野」初見
1364 貞治3	大須真福寺文庫の『弘法大師入定勸決記』写本奥書に那古野荘安養寺で写すとあり
1431 永享3	この頃那古野今川氏が屋敷を構える
1467 応仁1	応仁の乱
1493 明応2	細川政元の政変／この後、今川氏那古野在地の強化
1521～24 大永1～4	この頃駿河国主今川氏親が「那古野城」を築き、氏豊を城主に置く（別称 柳の丸）
1534 天文3	織田信長生まれる／父、尾張国勝幡城主・織田信秀
1538 天文7	この頃織田信秀が那古野城攻略／安養寺・天主坊・若宮八幡社など焼失
1555 弘治1	織田信長が清須城に移る／織田信光（後に林通勝）を名古屋城主に置く
1560 永禄3	桶狭間の合戦
1573 天正1	室町幕府の滅亡（織田信長が將軍足利義昭を追放）
1582 天正10	本能寺の変／この頃那古野城廃城
1590 天正18	豊臣秀吉が天下統一
1600 慶長5	関ヶ原の戦い／松平薩摩守忠吉（家康第四子）清州城主に、徳川義直（家康第九子）誕生
1603 慶長8	徳川家康が江戸幕府を開く
1607 慶長12	松平忠吉没する／閏4月26日徳川義直（当時は義利）甲府城から清須城主に移る 伊奈忠次による検地と木曾川改修工事（犬山～弥富間48km「お囲い堤」の完成）
1609 慶長14	徳川家康が名古屋城築城を決定する
1610 慶長15	名古屋城築城はじまる（20大名による石垣普請六月から十二月まで）、「清須越し」はじまる
1611 慶長16	堀川開削（福島（羽柴）左衛門大夫正則普請奉行）
1612 慶長17	十二月天守建築の完成（小堀遠江守作事）、本丸御殿作事開始（作事奉行中井正清）
1614 慶長19	大阪冬の陣／この頃までに築城工事ほぼ終了、本丸御殿大奥作事
1615 元和元	大阪夏の陣（豊臣氏滅亡）／本丸御殿完成、紀州浅野幸長女春姫お興入れ
1617 元和3	二之丸御殿完成
1620 元和6	二月義直二之丸御殿へ移る
1627 寛永4	二之丸庭園内に聖堂（金声玉振閣）建設
1634 寛永11	將軍家光が上洛に際して本丸御殿に宿泊
1663 寛文3	二之丸南の尾張藩家老竹腰・成瀬の両邸を三之丸へ移し、以後馬場や矢場で構成される向屋敷を整備
1669 寛文9	昨年大破した大天守の大修理（2代光友の代）
1730 享保15	金鯱が金網で覆われる
1751～63 宝暦年間	本丸天守の大修理（2～5階屋根銅瓦葺きに改変、天守台石垣の修理（8代宗睦の代））
1822 文政5	二之丸御殿の大改造（10代斉朝の代）
1836 天保7	天守修理と二之丸御殿改修（11代斉温の代）
1867 慶応3	大政奉還、新政府は発足
1868 明治元	明治維新、幕藩体制の崩壊／前藩主徳川慶勝が佐幕派藩士を処分（青松葉事件）
1871 明治4	廃藩置県／二之丸の大半は兵營に
1872 明治5	東京鎮台第三分營が名古屋城本丸（本部＝本丸御殿）に置かれる／二之丸御殿取り壊し
1873 明治6	東京鎮台第三分營が名古屋鎮台に改称／二之丸御殿を取り壊し、兵舎を建設
1874 明治7	三之丸全域が陸軍省に移管される
1881 明治14	二之丸庭園の一部を移築（三の丸庭園）
1887 明治20	名古屋鎮台司令部庁舎新築（三の丸）、本丸御殿から本部が移動
1889 明治22	下御深井御庭、小牧山と交換で徳川家から陸軍へ移管
1891 明治24	10月28日濃尾大地震／本丸西南隅櫓崩壊、被害甚大だった本丸等多門櫓を撤去
1893 明治26	本丸・西之丸・御深井丸が宮内省に移管され、名古屋離宮となる
1923 大正12	宮内省による本丸西南隅櫓再建
1930 昭和5	名古屋離宮廃止、名古屋市へ「下賜」
1931 明治6	名古屋城管理事務所の設置と一般公開の開始
1932 明治7	12月12日「史蹟 名古屋城跡」の指定を受ける
1939 昭和14	第2次世界大戦はじまる
1945 昭和20	5月14日空襲により本丸天守・御殿など焼失
1945 昭和20	敗戦／名古屋市を中心に米軍第25師団27,000人が進駐する
1948 昭和23	二之丸旧兵舎を名古屋大学校舎に使用
1950 昭和25	戦災免れた隅櫓3棟および表二之丸の門が重要文化財の指定を受ける
1952 昭和27	3月29日「特別史蹟 名古屋城跡」の指定を受ける
1959 昭和34	10月1日天守・榎多門（旧・江戸城蓮池門）など名古屋城再建竣工（1957.6.13～）
1964 昭和39	二之丸名古屋大学校舎移転、二之丸愛知県体育館建設竣工
1975 昭和50	6月23日二之丸東鉄門（本丸東二之丸跡に移動）西鉄門を重要文化財に指定
1978 昭和53	本丸不明門の復元、二之丸東庭園公開

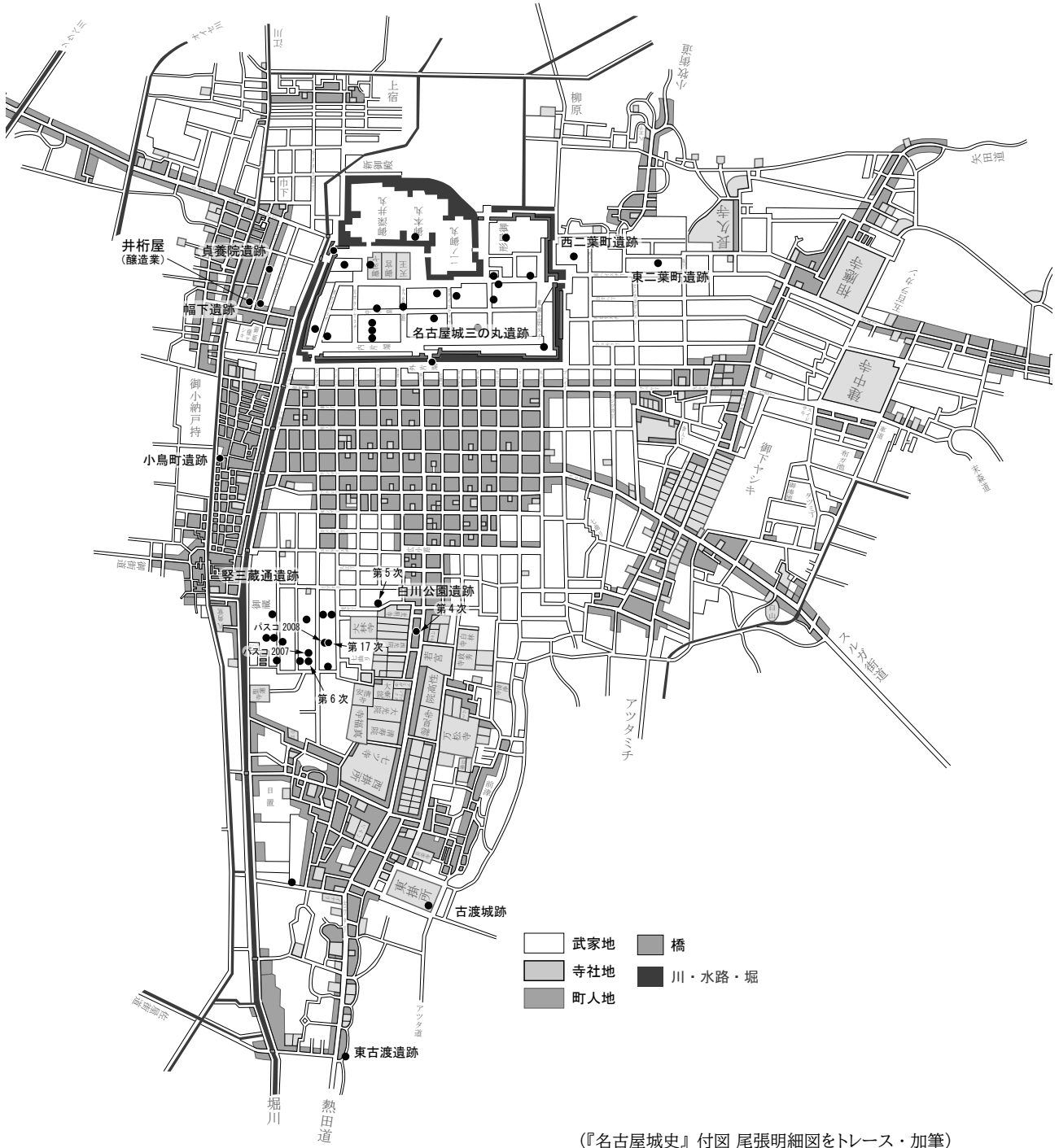


図 5 名古屋城および城下の主な調査地点 (江戸時代)

## 第3章 遺構

### 1 調査の概要

調査は 23Aa・23Ab・23Ac・23Ad の 4 区に分割し、上・下2面の把握を計画して行った。今回の調査区は細長い狭小な形状であり、特に下層遺構の調査時には安全のため掘削範囲（深さ）は限定的となった。各区での主な検出面上端の標高は、23Aa 区では 12.2～12.5m、23Ab 区では約 12.4m、23Ac 区では 11.9m、23Ad 区北部で 12.4m、南部では 11.5～11.8m であり（図 6）、各調査区壁面の土層断面図の位置は、図 7 に示している。

出土した遺物は、瓦類、陶磁器類、石器・石製品、金属製品、など 28 ℓ コンテナにして 143 箱である。これらとは別に貝・骨類を含む土壌も採取した。なお、動物遺体の同定結果は 23B 区試料との比較検討を行い『名古屋城三の丸遺跡 X』にまとめて掲載している。

### 2 時期区分と遺構の概要

16 世紀代の室町時代から江戸時代、近代の遺構がある。

上面では、近代の井戸、建物基礎（レンガ、コンクリート）、江戸時代武家屋敷の土坑、ピット、井戸、溝、庭園関連遺構（池跡）を確認した。江戸時代の埋蔵遺構と陶磁器・瓦類を多数含む廃棄土坑は 23Aa 区北東部に集中が認められた。23Ac 区東部から 23Ad 区西部にかけての範囲には大型の廃棄土坑群が展開した。23Ab 区では埋蔵遺構と井戸、池底の一部と思われる白色粘土層の広がりを確認した。

下面では、戦国期の屋敷地区画溝および大型の溝を確認し、埋土上部の掘削を行った。

出土遺物および検出状況により 1 期：戦国期以前、2 期：江戸時代以降とに時期区分し、2 期については屋敷地 1（東側の屋敷地）・屋敷地 2（西側の屋敷地）ごとに土坑、井戸、その他の順に記述を行う。

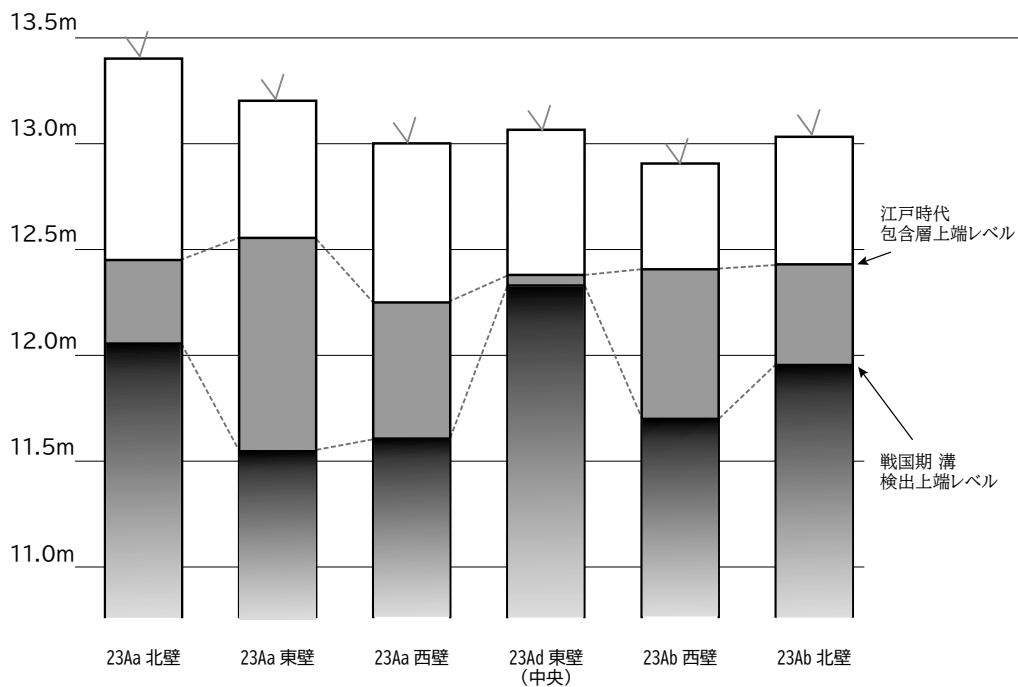


図 6 23A 区 江戸時代・戦国期検出レベル模式図

### 3 戦国期の遺構

検出状況、埋土、少量の出土遺物などこれまでの調査情報を加えて 1 期：戦国期と判断した主な遺構は図 7 の通りである。

065SD (図 12) 23Aa 区北端で確認した東西方向の溝である。黄灰色砂質土の小ブロックが混じる暗褐色土を主な埋土とする。南辺のみが確認された溝の壁面は平坦であり、これまでの調査成果から推定すると断面が V 字状となる、いわゆる「薬研堀」の形状をなす区画溝の一部と考えられる。検出範囲は東西に約 12m 程度であり、検出面標高は 11.8m、掘削は標高 10.65m まで行ったが底面には達していない。出土資料は 16 世紀初めから後半の大窯製品と土師器皿、鍋がある。近世遺物は上面遺構（整地層）の混入と考えられる。

060SD (図 8,9,11) 23Aa 区北東端で確認した大型の溝の屈曲部である。北壁は近世の土坑により断面は観察できていないが、グリッド 980115 において北から西へ屈曲する部分が基盤熱田層を削る形で確認できた。締まりの弱い黄灰色砂質土のブロック状の斑土からなる埋土が厚く堆積する。検出面標高は 23Aa 区で 11.5m、人力掘削は標高 10.7m まで行った。その後に地上から重機による掘削を試みたが、底面には達しなかった。東西方向部分の溝南側の肩は、23Ad 区東壁北端で確認されている (図 8)。こちらでは先行する溝 220SD との重複関係も明らかとなった。遺物は、16 世紀前葉と 16 世紀後半から 17 世紀初頭の陶器など少量が出土している。

120SD-a・120SD-b (図 10) 23Ab 区北西端で確認した東西方向の溝である。西壁断面で 2 条の溝の重複が確認され (写 4-1)、先行する南寄りの溝を 120SD-a、これに重複して構築された大型の溝を 120SD-b として調査を行った。

120SD-a は西壁付近において溝南側の肩部が確認された。西壁断面で確認されたのは、近世の改変を受けている上層を除き、黄色砂質土の小ブロックが混じる暗褐色土を主体とする埋土と、急角度で斜めに落ち込む断面形状である。これは断面形状が V 字状となる区画溝の一部と考えられる。検出面標高は 11.9m、人力掘削は 10.6m まで行った。遺物は出土していない。なお、南西端付近では遺構の重複があり、井戸 108SE 構築よりも 121SD-a が先行する状況が認められた。

120SD-b は推定上端幅 11～12m 規模の大型の溝である。検出面標高は北西端で 12.0m、人力掘

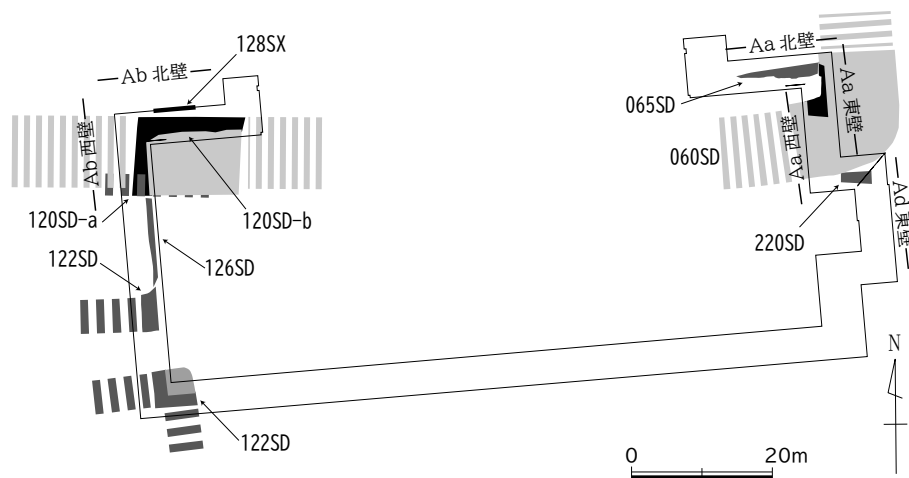


図 7 23A 区 主要遺構配置図 (戦国期)

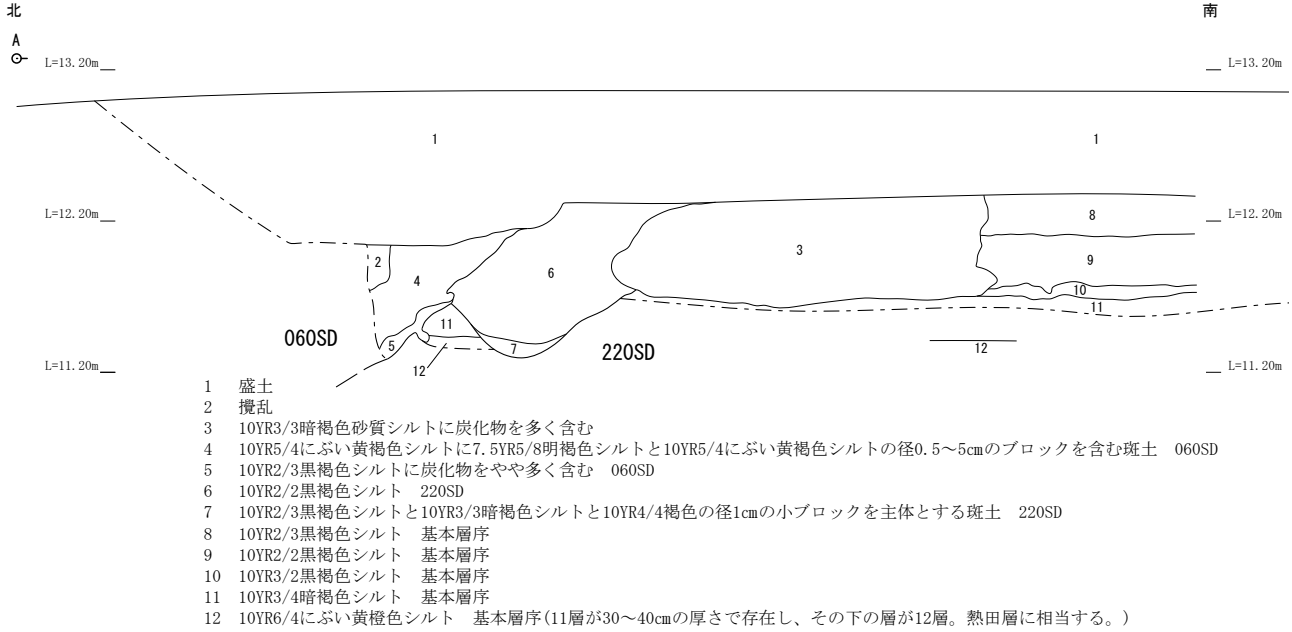


図 8 23Ad 区 東壁断面図 (縮尺 1/50)

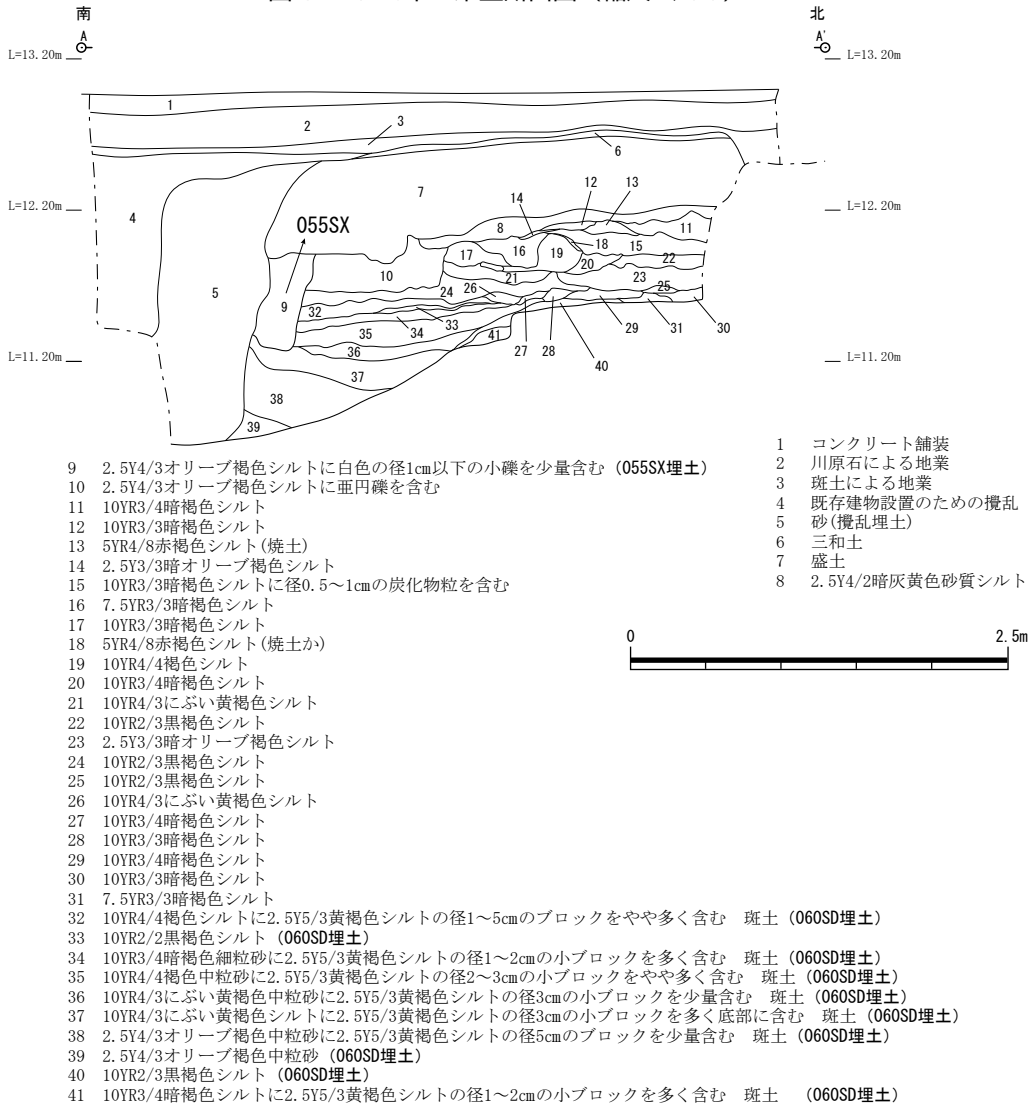


図 9 23Aa 区 060SD 付近 西壁断面図 (縮尺 1/50)

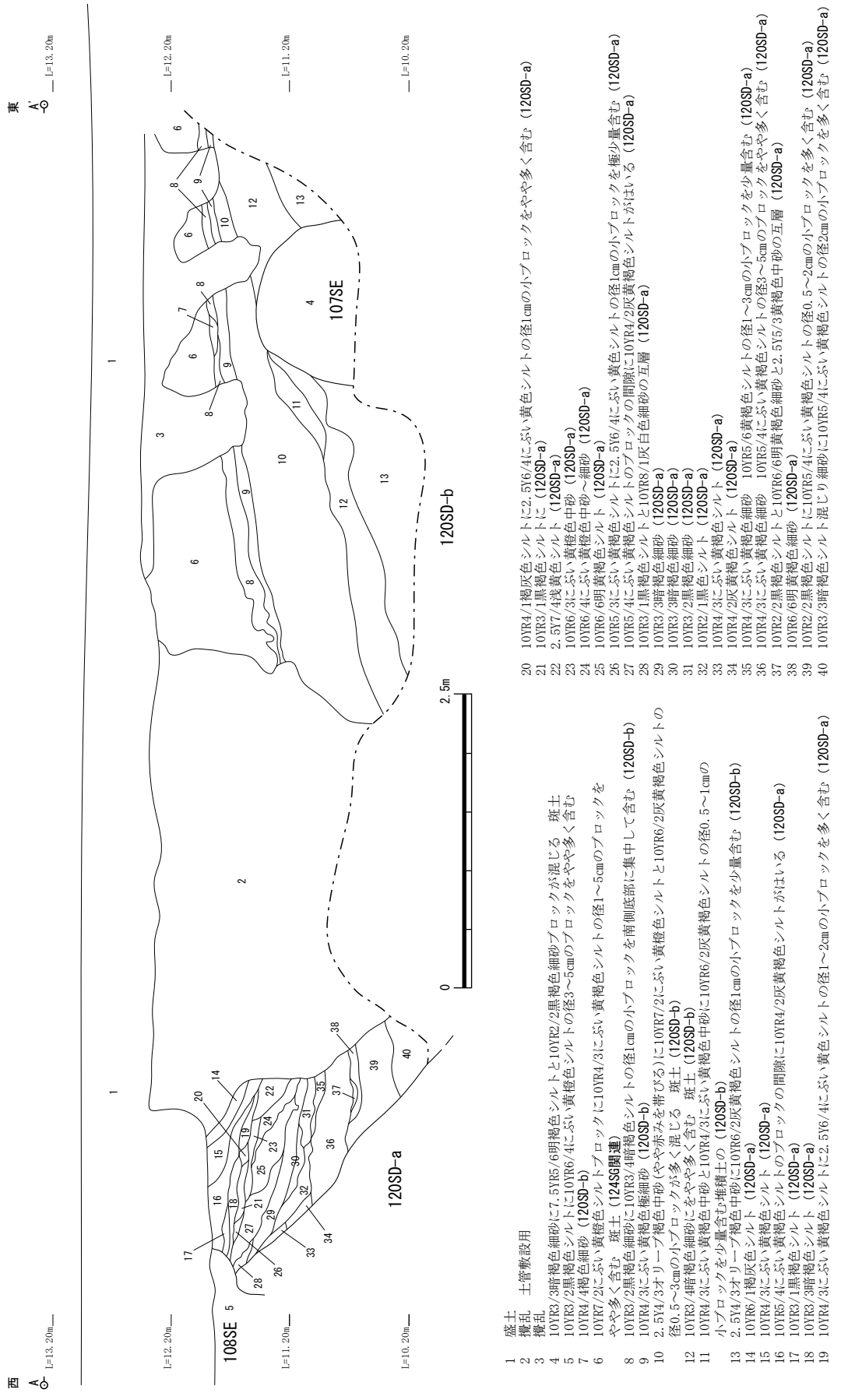


図 10 23Ab 区西壁 120SD-a, -b 断面図 (縮尺 1/50)

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 盛土<br/>2 土管敷設用<br/>3 攪乱<br/>4 10YR3/3暗褐色細砂に7.5YR5/6明褐色シルトと10YR2/2黒褐色細砂ブロックが混じる 斑土<br/>5 10YR3/2黒褐色シルトに10YR6/4にぶい黄褐色シルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む<br/>6 10YR4/4褐色細砂 (120SD-b)<br/>7 10YR7/2にぶい黄褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトの径1~5cmのブロックをやや多く含む 斑土 (124SG間連)<br/>8 10YR3/2黒褐色細砂に10YR3/4暗褐色シルトの径1cmの小ブロックを南側底部に集中して含む (120SD-b)<br/>9 10YR4/3にぶい黄褐色細砂に10YR3/4暗褐色シルトの径1cmの小ブロックを少量含む (120SD-b)<br/>10 2.5Y4/3オリーブ褐色中砂(やや赤みを帯びる)に10YR7/2にぶい黄褐色シルトと10YR6/2灰黄褐色シルトの径0.5~3cmの小ブロックが多く混じる 斑土 (120SD-b)<br/>11 10YR4/3にぶい黄褐色中砂と10YR4/3にぶい黄褐色中砂に10YR6/2灰黄褐色シルトの径0.5~1cmの小ブロックを少量含む堆積土の (120SD-b)<br/>12 2.5Y4/3オリーブ褐色中砂に10YR6/2灰黄褐色シルトの径1cmの小ブロックを少量含む (120SD-b)<br/>13 10YR6/4褐色細砂に10YR3/4暗褐色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む (120SD-a)<br/>14 10YR4/3にぶい黄褐色シルト<br/>15 10YR5/4にぶい黄褐色細砂<br/>16 10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックの間隙に10YR4/2灰黄褐色中砂の互層 (120SD-a)<br/>17 10YR3/1黒褐色シルト (120SD-a)<br/>18 10YR3/3暗褐色シルト (120SD-a)<br/>19 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを多く含む (120SD-a)</p> | <p>20 10YR4/1褐灰色シルトに2.5Y6/4にぶい黄褐色シルトの径1cmの小ブロックをやや多く含む (120SD-a)<br/>21 10YR3/1黒褐色シルト (120SD-a)<br/>22 2.5Y7/4浅黄色シルト (120SD-a)<br/>23 10YR6/3にぶい黄褐色中砂 (120SD-a)<br/>24 10YR6/4にぶい黄褐色中砂~細砂 (120SD-a)<br/>25 10YR6/6明黄褐色シルト (120SD-a)<br/>26 10YR5/3にぶい黄褐色シルトに2.5Y6/4にぶい黄褐色シルトの径1cmの小ブロックを極少量含む (120SD-a)<br/>27 10YR5/4にぶい黄褐色シルトのブロックの間隙に10YR4/2灰黄褐色シルトがはいり (120SD-a)<br/>28 10YR3/1黒褐色シルトと10YR8/1灰白色細砂の互層 (120SD-a)<br/>29 10YR3/3暗褐色細砂 (120SD-a)<br/>30 10YR3/3暗褐色細砂 (120SD-a)<br/>31 10YR3/2黒褐色細砂 (120SD-a)<br/>32 10YR2/1黒褐色シルト (120SD-a)<br/>33 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (120SD-a)<br/>34 10YR4/2灰黄褐色シルト (120SD-a)<br/>35 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 10YR5/6黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む (120SD-a)<br/>36 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 10YR5/4にぶい黄褐色シルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む (120SD-a)<br/>37 10YR2/2明黄褐色シルトと10YR6/6明黄褐色細砂と2.5Y5/6黄褐色中砂の互層 (120SD-a)<br/>38 10YR6/6明黄褐色細砂 (120SD-a)<br/>39 10YR2/2黒褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトの径0.5~2cmの小ブロックを多く含む (120SD-a)<br/>40 10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトの径2cmの小ブロックを多く含む (120SD-a)</p> |
|--|---|

削は 23Ab 区北東端で標高 10.5m まで行ったが底面には達しなかった。遺物は確認されなかった。

遺構埋土の状況は、整地を含む近世段階に改変された上層部分では地点により異なる。ただ、これらを除く下位では 23Aa 区 065SD とよく似た状況を示した。23Ab 区西壁断面では、060SD と同様の締まりの弱い黄灰色砂質土が北側から南側へ傾斜して厚く堆積する状況が確認できた。この時点で 060SD と 120SD-b が連続する同一遺構として想定され、上端で幅は約 11m、おそらく土塁を伴い、距離にして 103m 以上の規模となる大溝の存在が認識された。

220SD (図 8) 23Ad 区で確認された東西方向の溝である。溝の形状が確認できる最も高い位置は

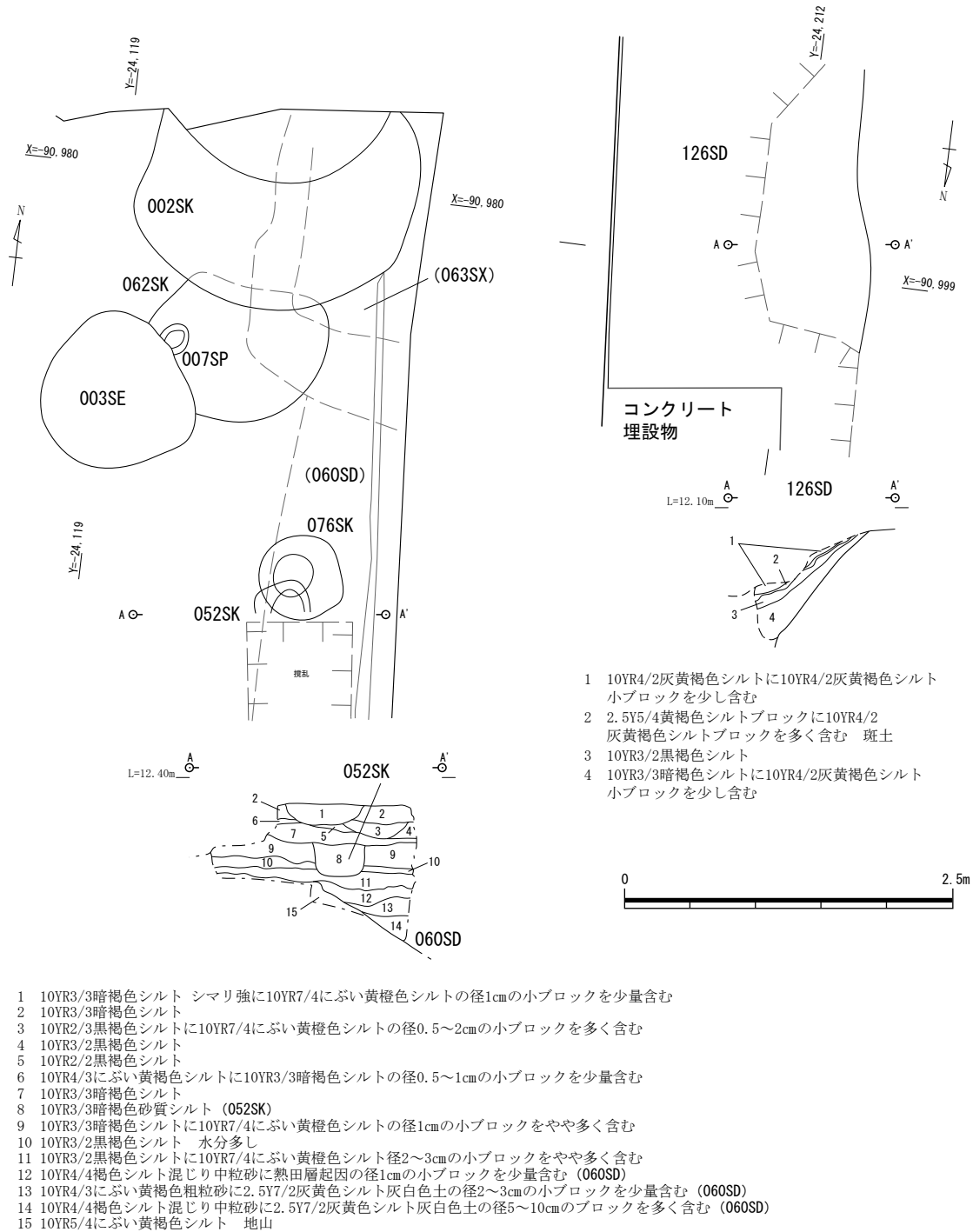
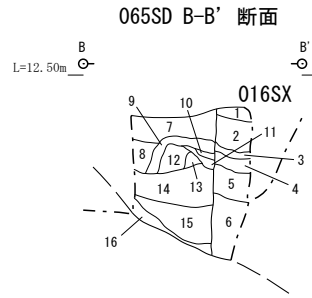
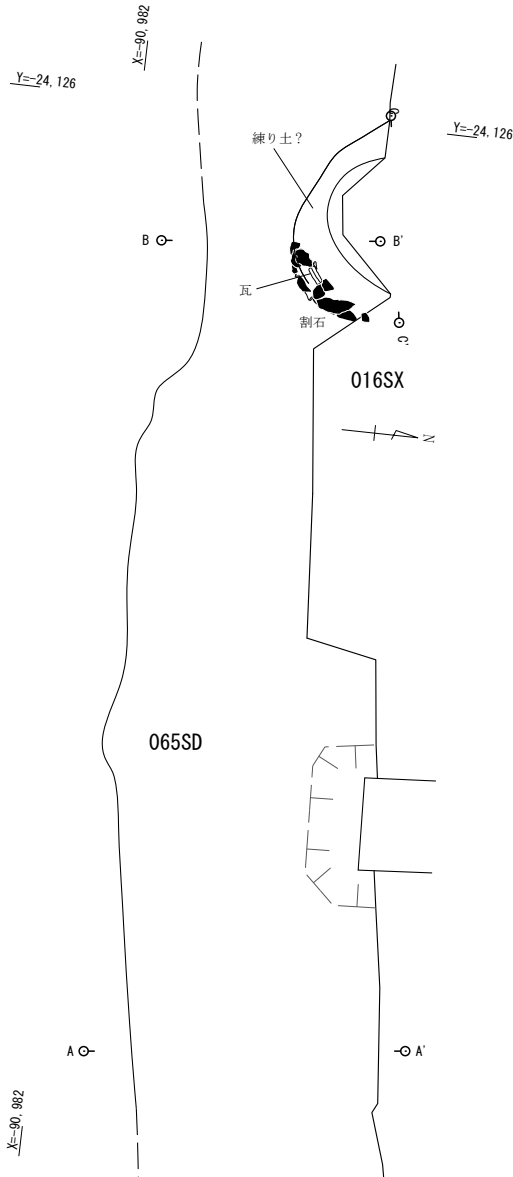
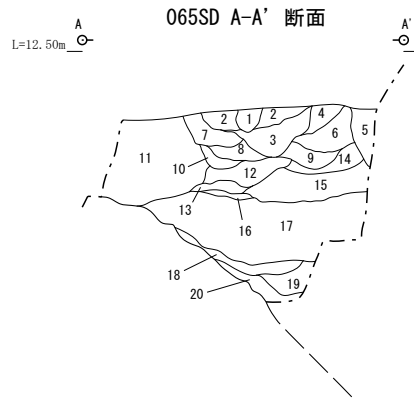


図 11 23Aa 区 060SD, 23Ab 区 126SD 平面・断面図 (縮尺 1/50)



065SD B-B' 断面

- 1 10YR6/6明黄褐色シルト (016SX)
- 3 10YR5/8黄褐色シルト (016SX)
- 2 10YR5/6黄褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトおよび10YR3/4暗褐色シルトの径3cmの小ブロックを含む 斑土 (016SX)
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色シルト (016SX)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径3cmの小ブロックを含む 斑土 (016SX)
- 7 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色シルトと10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径3cmの小ブロックを含む層の互層 (016SX)
- 8 10YR3/3暗褐色シルト
- 10 10YR3/3暗褐色シルト
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径1cmの小ブロックを含む 斑土
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 13 10YR3/3暗褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径1cmの小ブロックをやや多く含む
- 14 10YR3/4暗褐色シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径3cmの小ブロックを多く含む 斑土 (065SD)
- 15 10YR3/3暗褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルトの径3cmの小ブロックをやや多く、10YR7/3にぶい黄褐色シルトの径1cmの小ブロックを少量含む 斑土 (065SD)
- 16 10YR3/1黒褐色シルト (065SD)

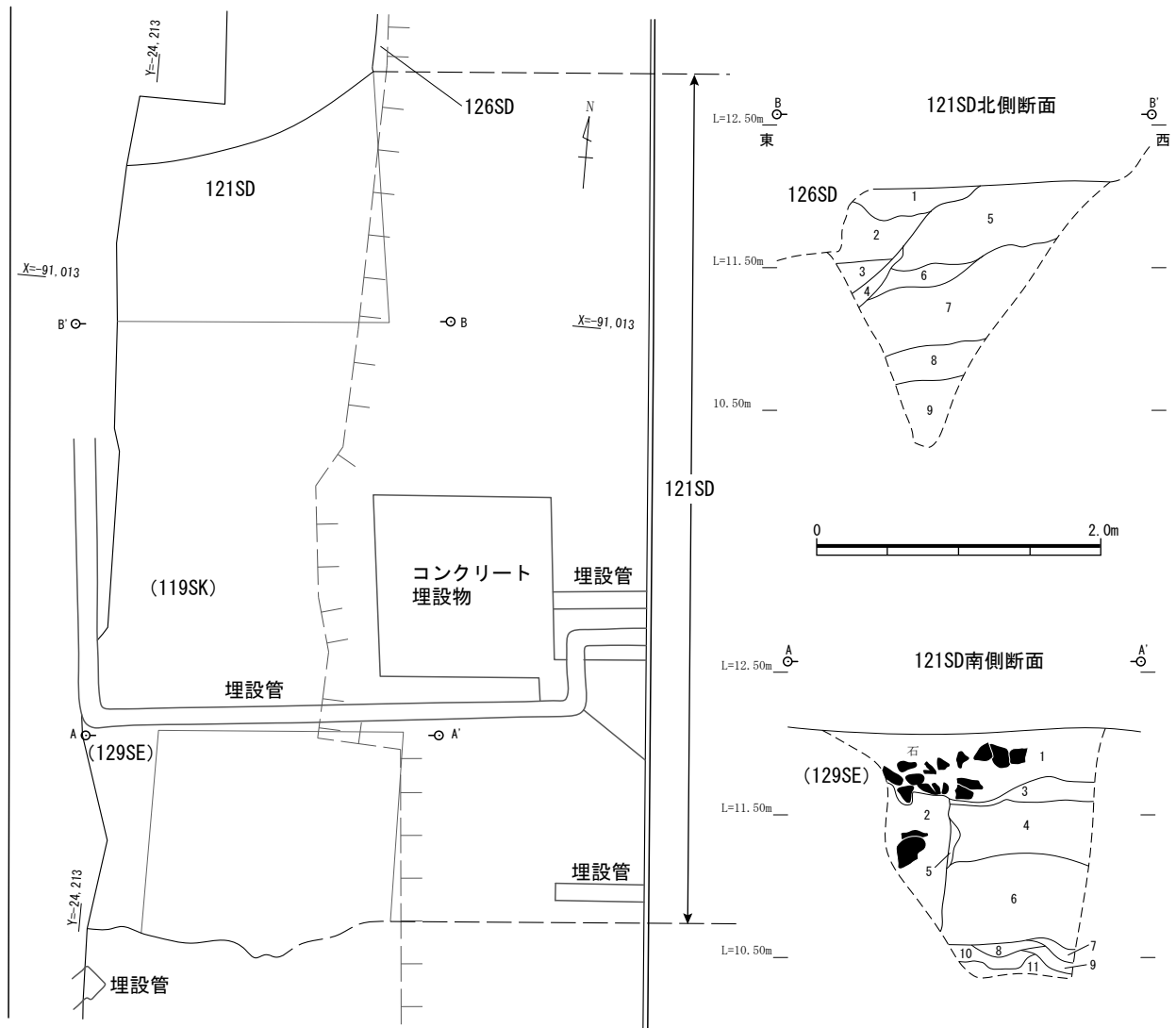


065SD A-A' 断面

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 土器片を少量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物粒をやや多く含む
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト 炭化物粒を少量含む
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- 8 10YR4/2灰黄褐色シルト 炭化物粒を極少量含む
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックおよび土器片を少量含む
- 10 10YR4/4褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックを極少量含む
- 11 10YR4/4褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックを少量含む
- 12 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
- 15 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 16 10YR3/2黒褐色シルト (065SD)
- 17 10YR3/3暗褐色シルト (065SD)
- 19 10YR3/3暗褐色シルト (065SD)
- 18 10YR2/3黒褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径2~3cmの小ブロックをやや多く含む (065SD)
- 20 10YR3/2黒褐色砂質シルト (065SD)



図 12 23Aa 区 065SD 平面・断面図 (縮尺 1/50)



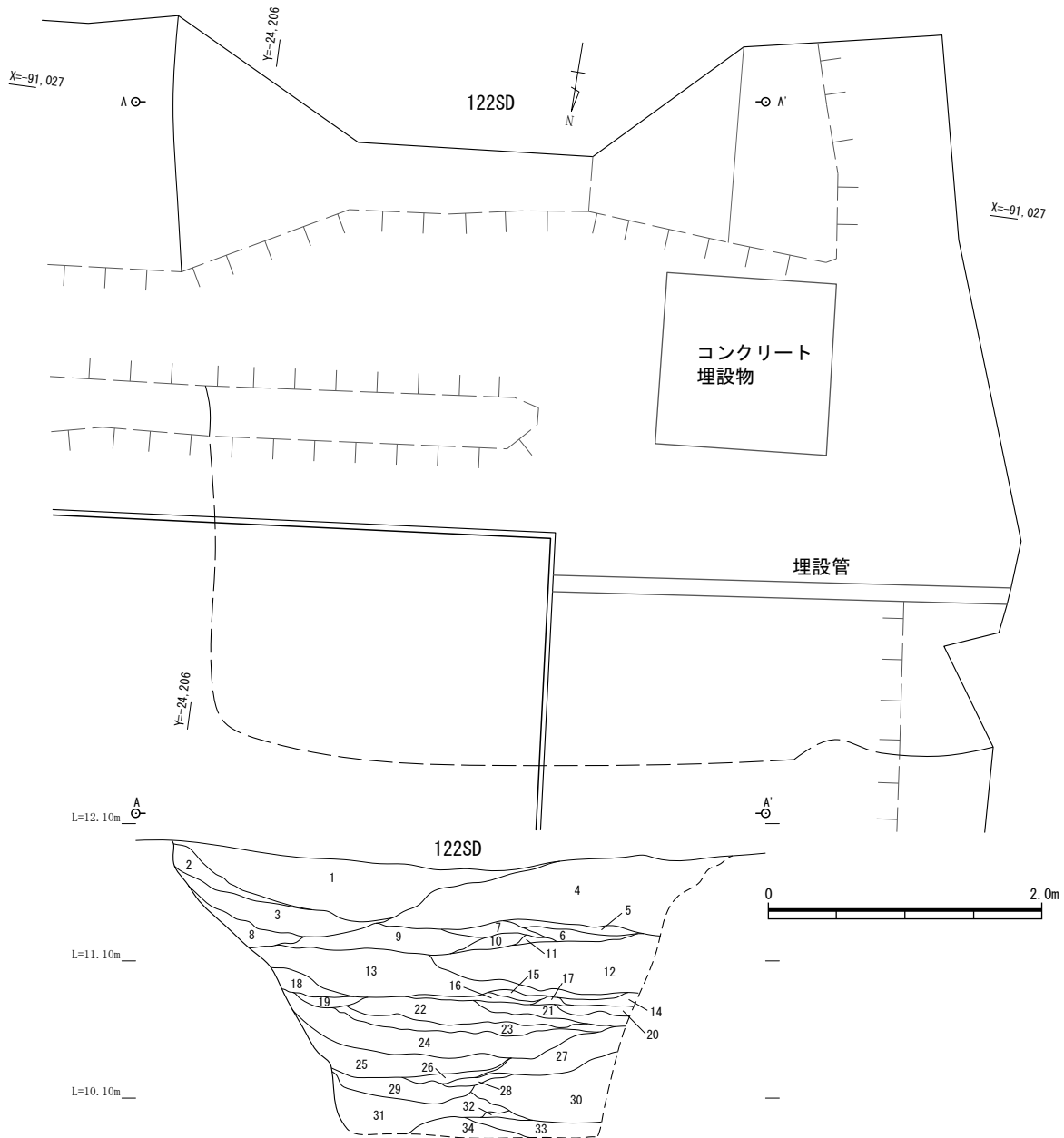
**121SD北側断面**

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト (126SD)
- 2 10YR4/1 褐灰色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~2cm の小ブロックをやや多く含む (126SD)
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト (126SD)
- 4 10YR3/1 黒褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~1cm の小ブロックを少量含む
- 5 10YR4/1 褐灰色砂質シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~5cm のブロックを多く、10YR3/2 黒褐色シルトの径 3~5cm のブロックを少量含む 斑土
- 6 10YR4/1 褐灰色砂質シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~1cm の小ブロックをやや多く含む
- 7 10YR5/1 褐灰色シルトに 2.5Y3/2 黒褐色シルトの径 1~7cm のブロックおよび 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 1~2cm の小ブロックをやや多く含む 斑土
- 8 10YR5/2 灰黄褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトおよび 2.5Y3/2 黒褐色シルトの径 1~2cm の小ブロック、小礫を少量含む
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト

**121SD南側断面**

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトに角礫~円礫を多く含む (129SE)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトに 2.5Y7/2 灰黄色シルトの径 3~5cm のブロックを多く、円礫の割れたものを少量含む (129SE)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト (121SD)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルトにの径 1~3cm の小ブロックを多く含む (121SD)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色シルト (121SD)
- 6 10YR5/1 褐灰色シルトに 2.5Y6/4シルトの径 1~3cm の小ブロックをやや多く、2.5Y7/1 灰白色シルトの径 10~15cm のブロックを少量含む (121SD)
- 7 10YR4/1 褐灰色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~5cm のブロックを多く含む (121SD)
- 8 2.5Y3/1 黒褐色シルト (121SD)
- 9 10YR4/1 褐灰色シルト (121SD)
- 10 2.5Y3/1 黒褐色シルトに 2.5Y6/4 にぶい黄色シルトの径 0.5~5cm のブロックを多く含む (121SD)
- 11 2.5Y3/1 黒褐色シルト (121SD)

図 13 23Aa 区 121SD 平面・断面図 (縮尺 1/50)



- |   |  |
|---|--|
| <p>1 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む 斑土</p> <p>2 10YR2/1黒色シルト</p> <p>3 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>4 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径1~3cmの小ブロックを非常に多く含む</p> <p>6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトの径1~2cmの小ブロックを少量含む</p> <p>5 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径1cmの小ブロックをやや多く含む</p> <p>8 10YR2/1黒色シルトの下層に10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR2/1黒色シルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む</p> <p>7 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR2/2黒褐色シルトの径3cmの小ブロックを少量含む 下層部に10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径1cmの小ブロックをやや多く含む</p> <p>9 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>10 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトおよび10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む</p> <p>11 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの径3cmの小ブロックをやや多く含む</p> <p>12 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色シルトおよび10YR2/2黒褐色シルトの径1~5cmのブロックを少量含む 斑土</p> <p>13 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>14 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト</p> <p>16 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>17 10YR3/1黒褐色シルト</p> | <p>18 2.5Y4/2暗灰黄色シルトの下層部に10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトおよび10YR2/2黒褐色シルトの層が存在</p> <p>19 2.5Y4/2暗灰黄色シルト</p> <p>20 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>22 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>21 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む</p> <p>23 2.5Y4/2暗灰黄色細砂 この時に水の流れたと判断できる</p> <p>24 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>26 10YR6/4にぶい黄橙色シルト</p> <p>25 10YR6/4にぶい黄橙色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色シルトの径3~7cmのブロックを多く含む</p> <p>27 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR6/4にぶい黄橙色シルトの径3~7cmのブロックを少量含む</p> <p>29 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色シルトの径3~10cmのブロックを多く含む</p> <p>28 10YR6/4にぶい黄橙色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色シルトの径3~7cmのブロックを多く含む</p> <p>30 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y4/2暗灰黄色シルトの径3~10cmのブロックを少量含む</p> <p>31 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに2.5Y7/3浅黄色シルトの径5~20cmのブロックをやや多く含む</p> <p>33 10YR4/2灰黄褐色シルト</p> <p>32 10YR6/4にぶい黄橙色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの径3~7cmのブロックを少量含む</p> <p>34 10YR6/4にぶい黄橙色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの径3~7cmのブロックをやや多く含む</p> |
|---|--|

図 14 23Aa 区 122SD 平面・断面図 (縮尺 1/50)

標高 11.7m、その地点での幅は 1.15m、底面の標高は 11.09m であり、やや開く V 字状の断面形態を呈する区画溝である。長さ 3.9m の範囲で確認した。遺構そのものは底面付近の痕跡と調査区東壁断面で確認されたのみである。この東壁断面では 220SD に重複して北側に 065SD の南肩が認められ、065SD が 23Aa 区付近で西へ屈曲することが明らかとなった。遺物は確認されなかった。

121SD・126SD (図 11,13) 121SD は 23Ab 区で確認された東西方向の溝の北方向へ直角に折れる屈曲部である。東西方向の部分の上端幅は 5.4m であり、検出範囲は 1.8m、検出面標高は 12.0m、人力掘削は標高 10.3m まで行ったが底面には達していない。断面形状が V 字状を呈する区画溝と考えられる。遺構のほぼ中央付近に近代のコンクリート製井戸 (119SE) と石組の一部が残る井戸 (129SE) が重複していたため、その周囲で可能な範囲のみ掘削した。埋土は黄灰色砂質土の細かいブロックを含む暗褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

121SD の北東部において、先行して構築された南北方向の溝 (126SD) との重複を確認した。126SD は西側の肩の一部のみではあるが、12.8m の範囲で検出され、埋土と断面形状の様相からこちらも断面 V 字状の区画溝と推定される。検出面標高は 11.9m、11.1m の深さまでの残存状況を確認した。遺物は確認されなかった。

122SD (図 14) 23Ac 区の南西隅で確認された溝の屈曲部である。全体像は不明ながら、埋土と断面 V 字状の形状から区画溝の一部と推定される。検出面の標高は 11.9m、人力掘削は標高 9.9m まで行ったが底面には達していない。北側に近接する 121SD とはほぼ同軸の方位にあり、同時期に隣接して両者の区画が並ぶ状況が想定できる。122SD は調査区外南側へ展開する方形区画の北東角の部分に相当すると考えられる。遺物は確認されなかった。

#### 4 江戸時代以降の遺構

江戸時代以降の主な遺構を図 15 に示す。これまでの調査から推定される武家屋敷の境界は、今回の調査範囲の中央付近を南北に通ることが想定される。ここでは東側を「屋敷地 1」、西側を「屋敷地 2」

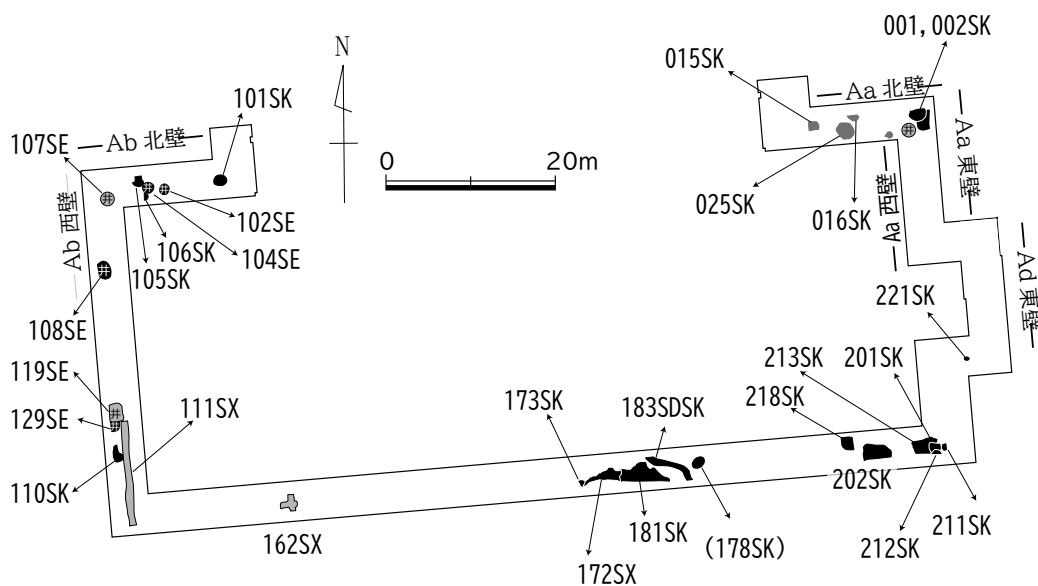


図 15 23A 区 主要遺構配置図 (江戸時代以降)

として、それぞれについて土坑、埋甕遺構、井戸、その他の遺構の順に記述する。底部に穿孔のある常滑窯産の甕が天地逆の状態です坑内に据えられた江戸時代の遺構をここでは「埋甕遺構」として記述する。

#### (1) 屋敷地 1

001SK・002SK (図 17,18) 23Aa 区北東部で検出された重複する廃棄土坑である。001SK は 002SK の上部に重なる径 1.7m、深さ 46cm 程度の土坑である。江戸時代中期の遺物も含まれるが、特に 19 世紀前半にまとまりがあり、一括廃棄された状態で大量の瓦や植木鉢を中心とした陶器、タタキ (三和土) の破片などが出土した。002SK は 001SK に先行する土坑で、径 2.1m、深さ 40cm 程度、底面の標高は 11.8m であり、こちらは埋土に瓦、陶磁器類が含まれる形で出土した。

063SX (図 16,17,18) 23Aa 区北東隅に位置し、001SK、002SK に先行する土坑である。調査では 1.8m × 0.8m の範囲で方形プランの一部を確認したが、調査区外へさらに広がりをもつ地下室であった可能性が考えられる。標高 11.2m までの掘削を行った。最終的には廃棄土坑に利用されたと考えられる。18 世紀代の遺物が多く含まれる。

172SX (図 25) 23Ac 区東部に位置する大型の土坑であり、東側の 181SK と隣接する。確認できたのは、東西に 4.23m、南北 2.78m の不整形なプランの範囲であり、土坑自体は調査区外の南側にさらに広がりをもつ。検出面の標高は 11.8m である。掘削は底面には達していない。181SK と同様に周囲壁面が内側へ崩落している箇所がある。19 世紀中葉を中心とした時期の大量の遺物が廃棄されている。

181SK (図 25) 23Ac 区東部に位置する大型の土坑であり、西側の 172SX と隣接する。確認できたのは、東西に 5.91m、南北 2.18m の不整形なプランの範囲であり、土坑自体は調査区外の南側にさらに広がりをもつ。検出面の標高は 11.8m であり、さらに深さ 90cm 程度まで掘削を行ったが、底面には達していない。土坑北側の壁面基盤層には亀裂があり、一部内側へ崩落している箇所もみられた。遺構内全体に遺物は広がって大量に出土し、上面には常滑窯産の大甕がまとまりをもって廃棄されていた。このような深い大型の遺構は、地下室であった可能性も考えられる。出土遺物には 17 世紀後半から 19 世紀中葉まで幅広い時期のものが含まれる。

201SK 23Ad 区の南東部に位置する。1.38m × 1.26m 以上の方形に近い形状の土坑である。検出面の標高は 12.2m、底面の標高は、11.59m である。出土遺物には 19 世紀代のものが含まれる。

202SK 調査区の南辺東寄りに位置する。3.29m 以上 × 1.77m 以上の不整形の土坑である。調査区外の南側へさらに広がりをもつ。検出面の標高は 12.2m、底面の標高は、11.5m である。出土遺物には 19 世紀前半のものが含まれる。

213SK (図 23) 23Ad 区の南東部に位置する。3.0m × 1.58m の検出範囲では方形に近い形状の土坑である。検出面の標高は 12.2m、底面の標高は、11.19m である。19 世紀前半頃までの多種多様な土器・陶磁器類が多く出土している。

218SK (・217SK) (図 25) 調査時の 217SK は 218SK の上層として位置付けられる。218SK は北東側が建物基礎工事の段階に削平され全体の形状は不明である。検出範囲は 1.49m × 1.25m であり、検出面標高は 11.83m、遺構底面の標高は 10.95m である。方形に近い形状であったと思われる。

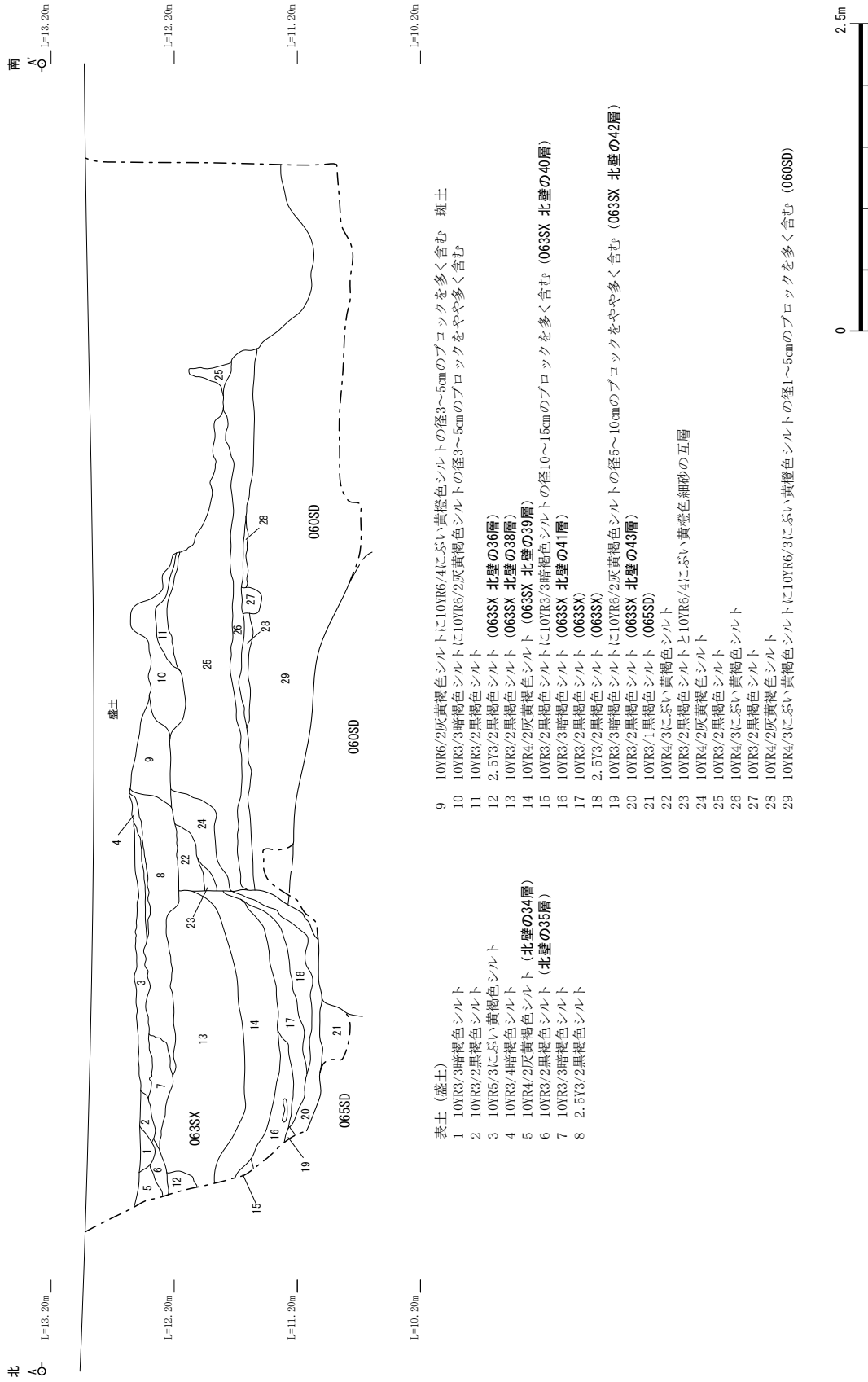
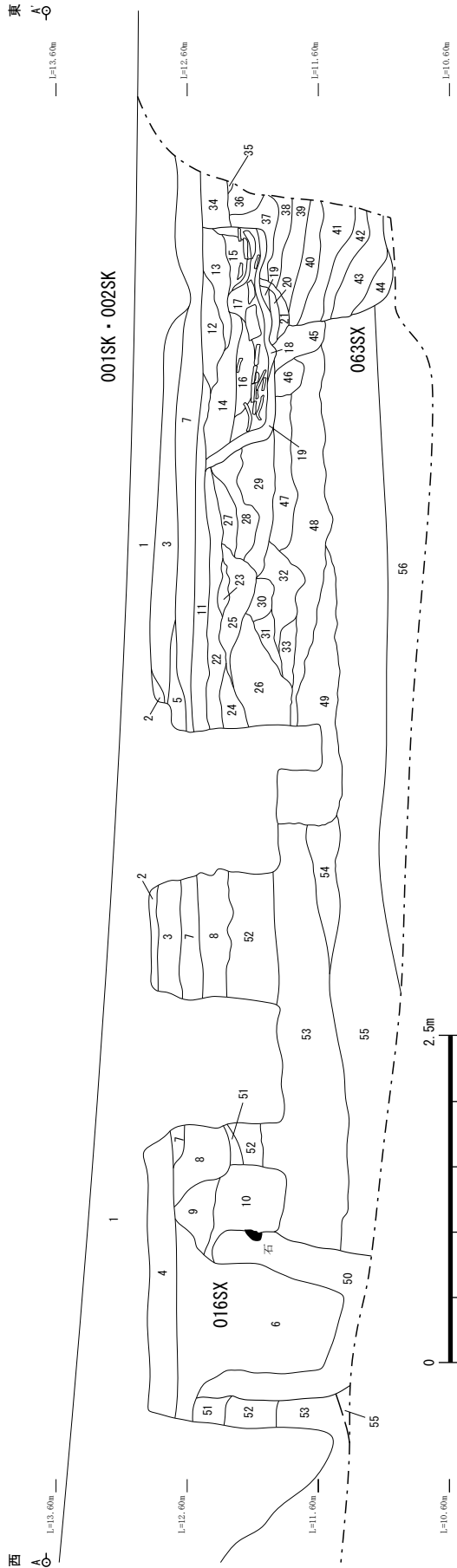


図16 23Aa区 東壁断面 (縮尺1/50)



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 盛土<br/>2 10YR3/2黒褐色シルト<br/>3 10YR6/2灰黄褐色シルトに10YR6/3にぶい黄褐色シルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む<br/>4 10YR3/3暗褐色シルト<br/>5 10YR5/2灰黄褐色シルトに径10~15cm円礫(河原石)を含む<br/>6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルトに円礫を含む<br/>7 10YR3/3暗褐色シルト<br/>8 10YR3/2黒褐色シルト<br/>9 10YR3/3暗褐色シルト<br/>10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト<br/>11 10YR4/2灰黄褐色シルト<br/>12 10YR3/2黒褐色砂質シルト(001SK)<br/>13 10YR3/2黒褐色シルト(001SK)<br/>14 10YR3/1黒褐色シルト(001SK)<br/>15 2.5Y3/1黒褐色シルト(001SK)<br/>16 2.5Y3/1黒褐色シルトに10YR6/3にぶい黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む(001SK)<br/>17 10YR3/2黒褐色シルトに稜瓦片を多く含む。また、西側部分には植木鉢を含む(001SK)<br/>18 10YR3/1黒褐色シルト(002SK)<br/>19 2.5Y3/2黒褐色シルト<br/>20 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト<br/>21 10YR6/2灰黄褐色シルト<br/>22 2.5Y3/2黒褐色シルト<br/>23 10YR3/2黒褐色シルト<br/>24 10YR3/2黒褐色シルト<br/>25 2.5Y3/2黒褐色シルト<br/>26 10YR4/2灰黄褐色シルト<br/>27 2.5Y3/2黒褐色シルト<br/>28 10YR5/2灰黄褐色シルト</p> | <p>29 10YR4/2灰黄褐色シルト<br/>30 10YR3/2暗褐色シルト<br/>31 10YR3/3暗褐色シルトに10YR6/3にぶい黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む<br/>32 10YR3/2黒褐色シルト<br/>33 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト<br/>34 10YR4/2灰黄褐色シルト(東壁の5層)<br/>35 10YR3/2黒褐色シルト(東壁の6層)<br/>36 2.5Y3/2黒褐色シルト(063SX 東壁の12層)<br/>37 10YR3/3暗褐色シルト(063SX)<br/>38 10YR3/2黒褐色シルト(063SX 東壁の13層)<br/>39 10YR4/2灰黄褐色シルト(063SX 東壁の14層)<br/>40 10YR3/2黒褐色シルトに10YR3/3暗褐色シルトの径10~15cmのブロックを多く含む(063SX 東壁の15層)<br/>41 10YR3/3暗褐色シルト(063SX 東壁の16層)<br/>42 10YR3/2暗褐色シルトに10YR6/2灰黄褐色シルトの径5~10cmのブロックをやや多く含む(063SX 東壁の19層)<br/>43 10YR3/2黒褐色砂質シルト(063SX 東壁の20層)<br/>44 10YR3/2黒褐色シルト(063SX)<br/>45 10YR5/2灰黄褐色シルト<br/>46 10YR4/2灰黄褐色シルト<br/>47 10YR4/2灰黄褐色シルト<br/>48 10YR4/3にぶい黄褐色シルト<br/>49 10YR6/4にぶい黄褐色シルト 南東部分に角礫を多く含む(016SX)<br/>50 10YR3/3暗褐色シルト<br/>51 10YR3/2黒褐色シルト<br/>52 10YR3/2灰黄褐色シルトに10YR6/3にぶい黄褐色シルトの径1~5cmのブロックを多く含む斑土(065SD)<br/>53 10YR4/2灰黄褐色シルト(065SD)<br/>54 10YR3/2黒褐色シルト(065SD)<br/>55 10YR3/2黒褐色シルト<br/>56 10YR3/1黒褐色シルトに10YR6/3にぶい黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む斑土(065SD)</p> |
|---|---|

図17 23Aa区 北壁断面 (縮尺1/50)

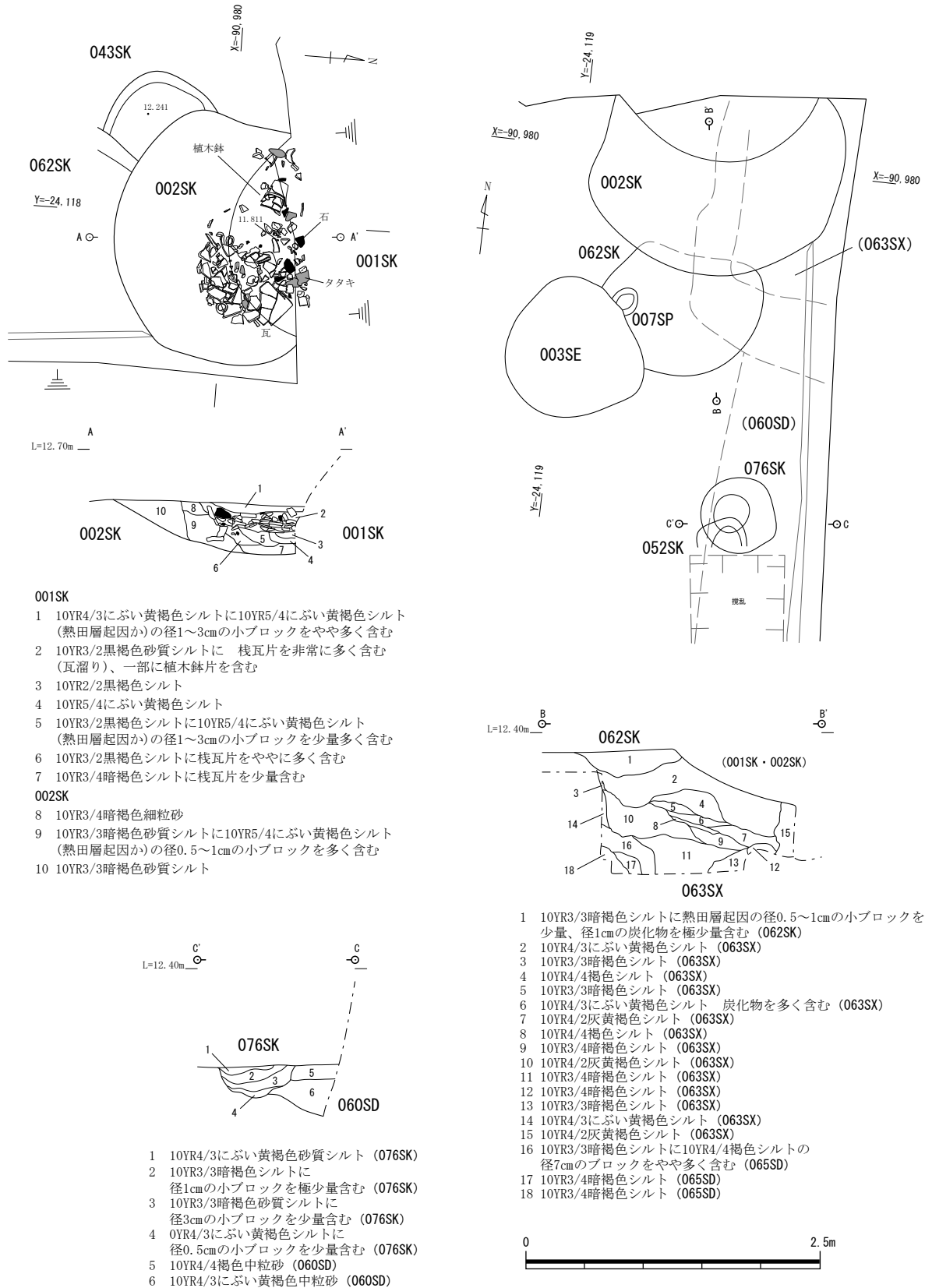


図18 001SK,002SK,076SK,062SK,063SX 平面・断面図 (縮尺 1/50)

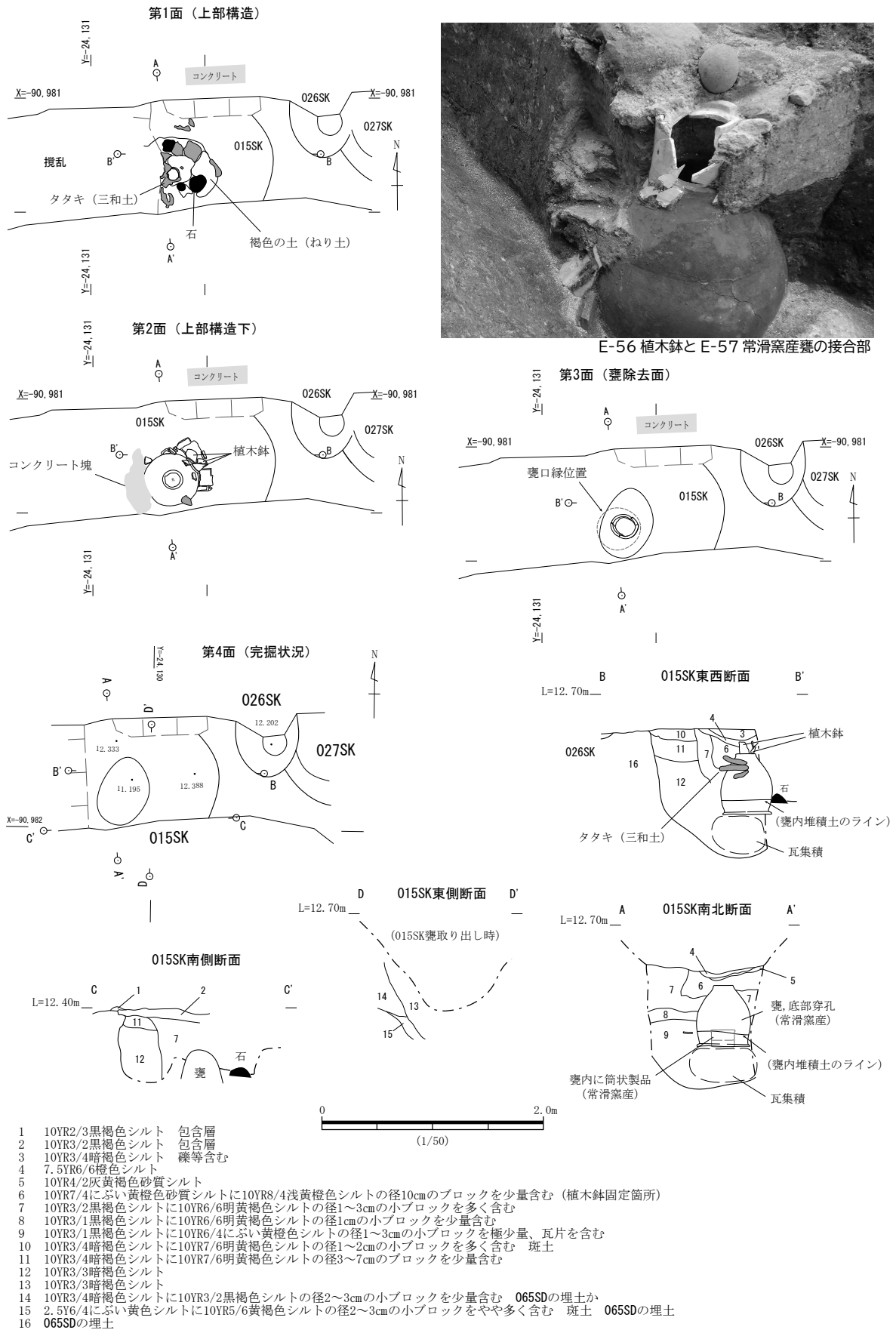


図 19 O15SK 埋甕遺構 平面・断面図 (縮尺 1/50)

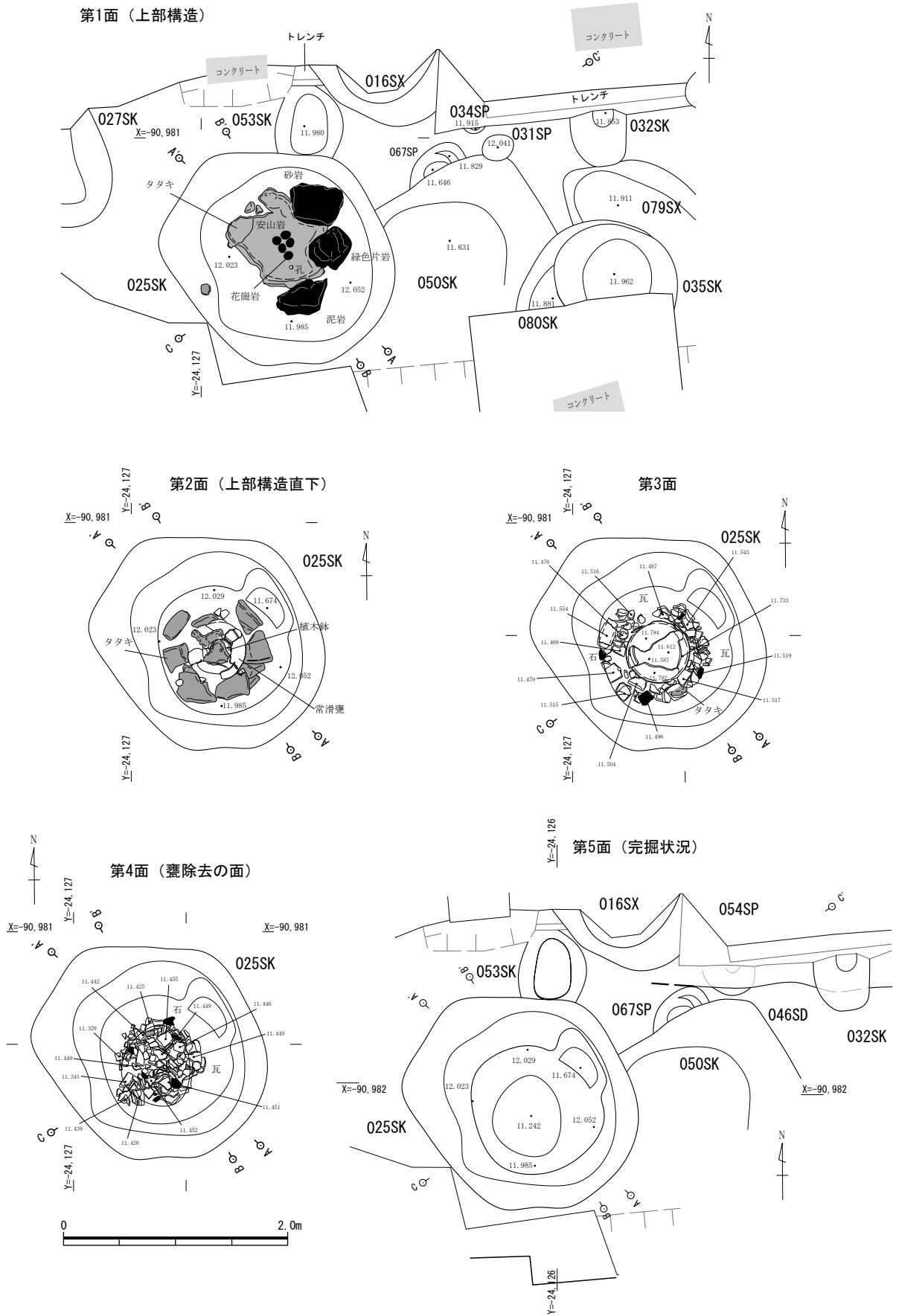


図20 025SK埋甕遺構 平面図 (縮尺 1/50)

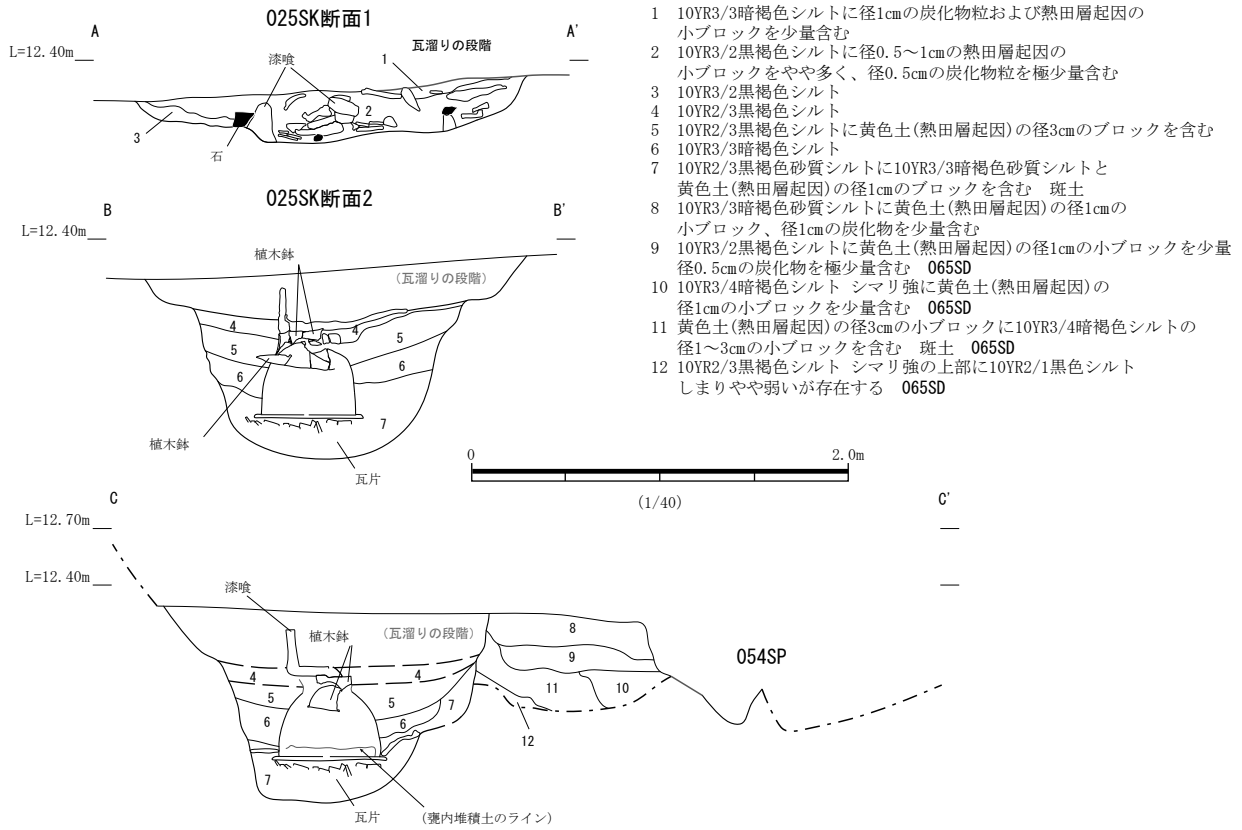


図 21 025SK 埋甕遺構断面図 (縮尺 1/40)

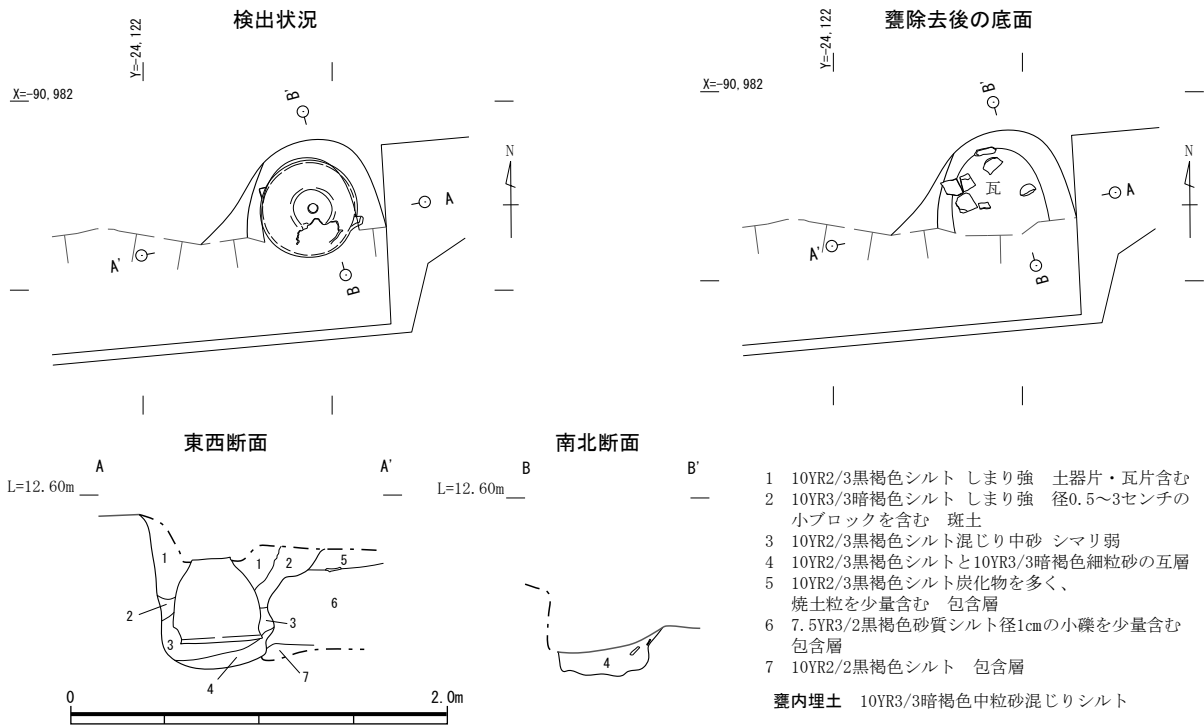


図 22 042SK 埋甕遺構 平面・断面図 (縮尺 1/40)

221SK 23Ad 区の東部に位置する。0.6m × 0.34m、深さ 12cm の楕円形の土坑であり、遺構底面の標高は 11.54m である。周辺に他の遺構はなく単独で検出された。

埋甕遺構 015SK (図 19) 23Aa 区北西端に位置し、後述する 025SK とは中心間で約 4.0m の距離にある。平面形の全体は不明であるが、残存部から直径約 2.0m の円形と推定される。深さは 1.18m、底面の標高は 11.19m である。

地上部の構造は、直径約 70cm の円形のタタキ (三和土) と黄褐色土の範囲となっている。中央の孔に向かって緩やか傾斜をなす。黄褐色土の上で自然円礫 (花崗岩) 1点を検出した。

地下の構造は、タタキに設けられた孔に接続するように天地を逆にして植木鉢 (56) を固定し、その下に口縁部を下にして置いた常滑窯産の甕 (57) を配置している。甕の口径は 46.0cm、高さ 53.8cm、底径 19.4cm であり、焼成は硬質であり 18 世紀末頃の時期に比定される。検出時は底面は約 16cm の穴となっていた。土坑内は底面から約 40cm の高さまで大量の瓦片で埋められており、甕の口縁部はそ

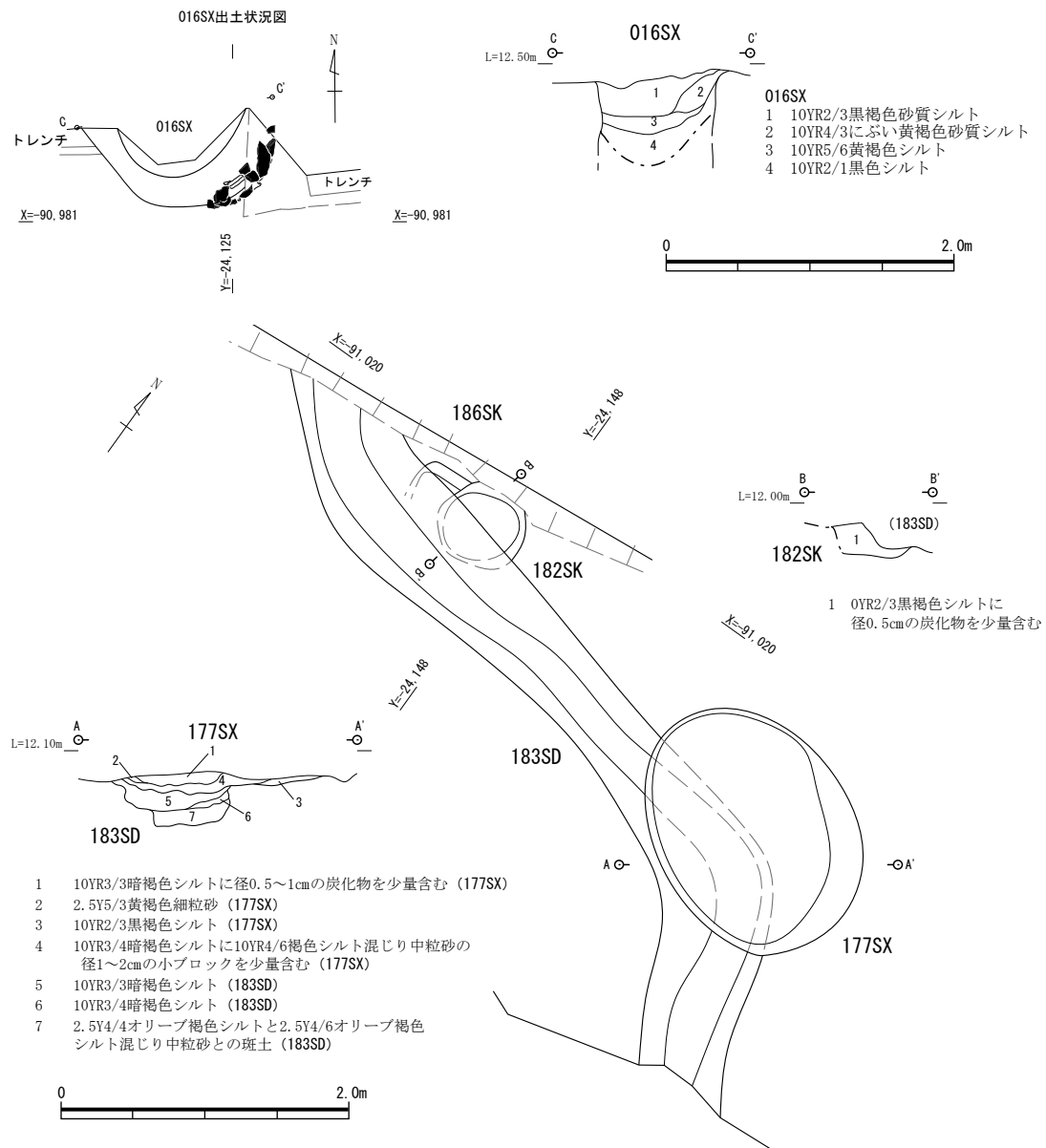


図 23 016SX 埋甕遺構, 177SX, 182SK, 183SD 平面・断面図 (縮尺 1/50)

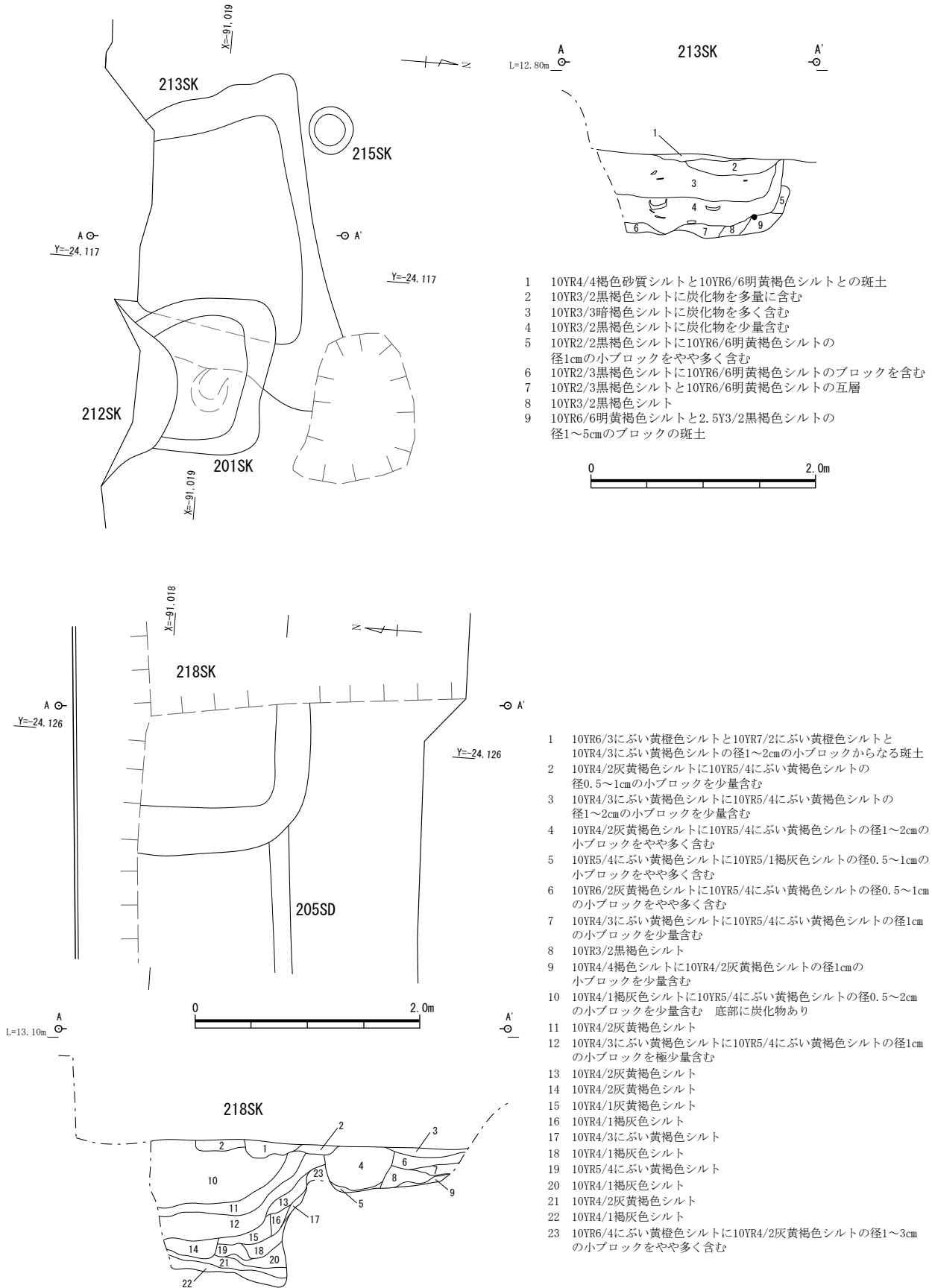


図 24 213SK,218SK 平面・断面図 (縮尺 1/50)

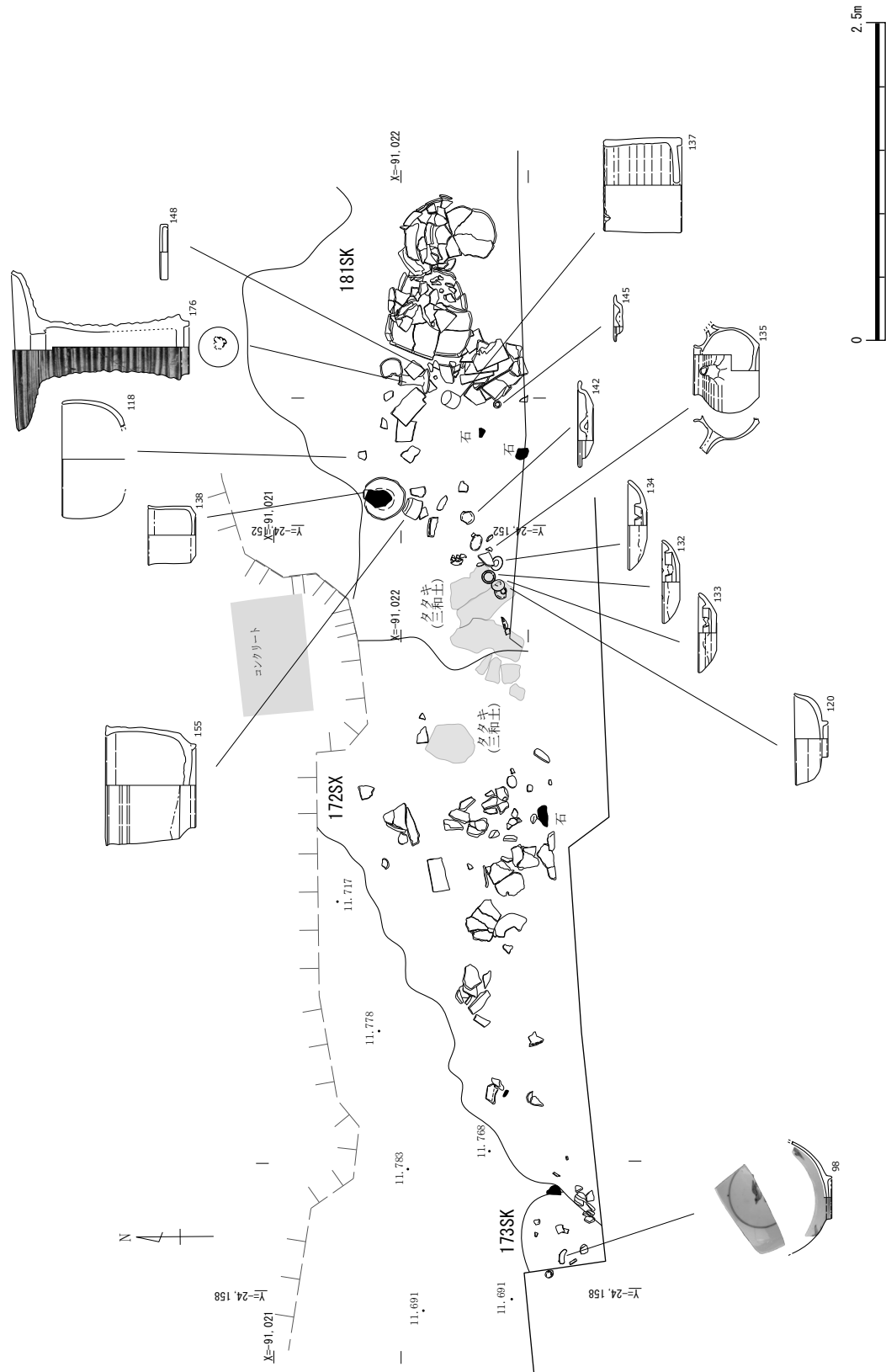


図 25 23Aa 区 東壁断面 (縮尺 1/50)

の上に据え置かれる。ほぼ中央付近には直径約 16cm、高さ 13.8cm の円筒状の陶器 (58, 常滑窯製品) が配置されていた。甕の周囲充填する土には、特に下位に集中して瓦片、上位では植木鉢片 (52, 53, 54) が含まれていた。

なお、この甕の内側では若干の泥の堆積があり、甕の器壁内側には湛水時の水位の痕跡が汚れとして視認できた。

016SX (図 23) 23Aa 区の北側中央のあたりに位置し、埋甕遺構 025SK の北側に近接する性格不明の遺構である。検出面では幅 10cm 程度の環状に黄灰色の粘土質土が認められた。黄灰色土外側にはところどころに割石が埋め込まれてあり、調査区北壁断面では内側に粗粒砂が充填し、黄灰色土層が上部をカットした釣鐘状を呈することが確認できた。伏せた甕を黄灰色粘土質土で覆っていた可能性も考えられる。

埋甕遺構 025SK (図 20, 21) 23Aa 区北西端に位置し、前述した 015SK とは中心間で約 4.0m の距離にある。

少量の水を扱う排水施設の遺構と思われる。地上部の構造ではタタキ(三和土)でつくられた 0.9×0.71m 規模の不整形の範囲があり、周囲にやや大型の石材 3 基 (緑色岩、砂岩、泥岩) が残存する。このうちの緑色岩と砂岩については配置後に形状に合わせてタタキが整形されている。残りの泥岩はタタキによる壁の外側に当たる位置にあり、当初に設置された位置から離れていると考えられる。タタキで造られた水溜め部分を検出するまでに、上層は廃棄された大量の瓦と常滑窯産の甕など大型品の破片で覆われていた。この面ではほぼ同じサイズの自然円礫 5 点 (花崗岩 4, 安山岩 1) を検出した。

地下の構造では、水溜め部分の南端付近に設けられた直径約 3cm の孔の下に植木鉢 (61)、常滑窯産の甕 (62) が配置されているのは 015SK の場合と同様である。甕の口径は 44.7cm、胴部最大径 55.1cm、高さ 58.1cm、底面の穿孔部は直径約 4cm である。この甕は 18 世紀に比定される。下部構造を収める土坑は直径 2m 前後、水門上端からの深さが 0.9m となる円形土坑であり、底面から 21cm の高さまでは大量の瓦片で埋められている。据えられた甕の脇には、下位からまず瓦片が埋められ、その上位に破砕された多量のタタキ片が充填される。このタタキ片には半球形の曲面をもつもの、口縁帯のような部位が含まれており、先行して別の設備で使われていたタタキ素材の転用 (廃棄) と考えられる。甕の内部には泥の堆積が認められた。地上部、下部構造それぞれのタタキ試料についても成分分析を行い、比較データを収録した (第 5 章 2)。

埋甕遺構 042SK (図 22) 上部構造は検出時にすでに存在せず不明である。土坑は直径 1.0m 前後、深さ 0.85m であり、底面から 15cm の高さまで瓦片混じりの土が堆積する。その上に 18 世紀中葉に比定される常滑窯産の甕 (69) が天地を逆にして据えられる。甕の口径は 40.8cm、胴部最大径 52.3cm、高さ 44.3cm、底面に直径約 5.4cm の穿孔がある。土坑は甕よりも僅かに大きい程度であり、甕の周りはほぼ土のみで埋められている。

003SE 23Aa 区東部で検出された直径 1.17m のほぼ正円形の井戸である。構造物はなく、底面は未確認である。時期を判断できる遺物はなく、検出状況では最も新しい時期に属する。近代の遺構と考えられる。

#### 池の痕跡 (白色粘土層の分布範囲)

23Ad 区の東壁付近の表土直下の標高 12.4m 前後の面で白色粘土の広がりを確認した。この場所で

は基盤層の黒色砂質シルトが厚く高い位置まで残存しており（図 6）、遺構は希薄で整地などによる大きな改変の痕跡も見られない。少なくとも江戸時代まで大きくは改変されていなかった範囲と考えられる。

## (2) 屋敷地2

101SK（図 31）23Ab 区東端で確認された径 1.3 ～ 1.6m の楕円形土坑である。竪穴状であることから井戸として掘削を開始したものの、硬い地盤の熱田層ではなく、大型の溝 120SD-b に半分程度かかることが判明して途中で断念した可能性も考えられる。

105SK（図 29）常滑窯産の軟質焼成の甕（赤物）が天地逆で据えられていたものである。上部はすでに削平されており、土坑下部と甕の口縁部付近のみが残存していた。土坑は推定で直径 1.3m 前後の円形を呈し、底面はほぼ平坦、標高は 12.03m であった。土坑中央に配置された甕の最大径は約 52cm 程度で 18 世紀後半以降の資料である。排水施設と考えられる。

106SK（図 29）常滑窯産の軟質の焼成の甕が天地逆で据えられていたものである。上部はすでに削平されており、土坑下部と甕の口縁部付近のみが残存していた。土坑は直径 0.7m 前後の円形を呈し、深さは 8cm、底面はほぼ平坦で標高は 12.32m であった。土坑中央に配置された甕の最大径は約 54cm 程度と推定される。18 世紀後半以降の資料である。排水施設と考えられる。

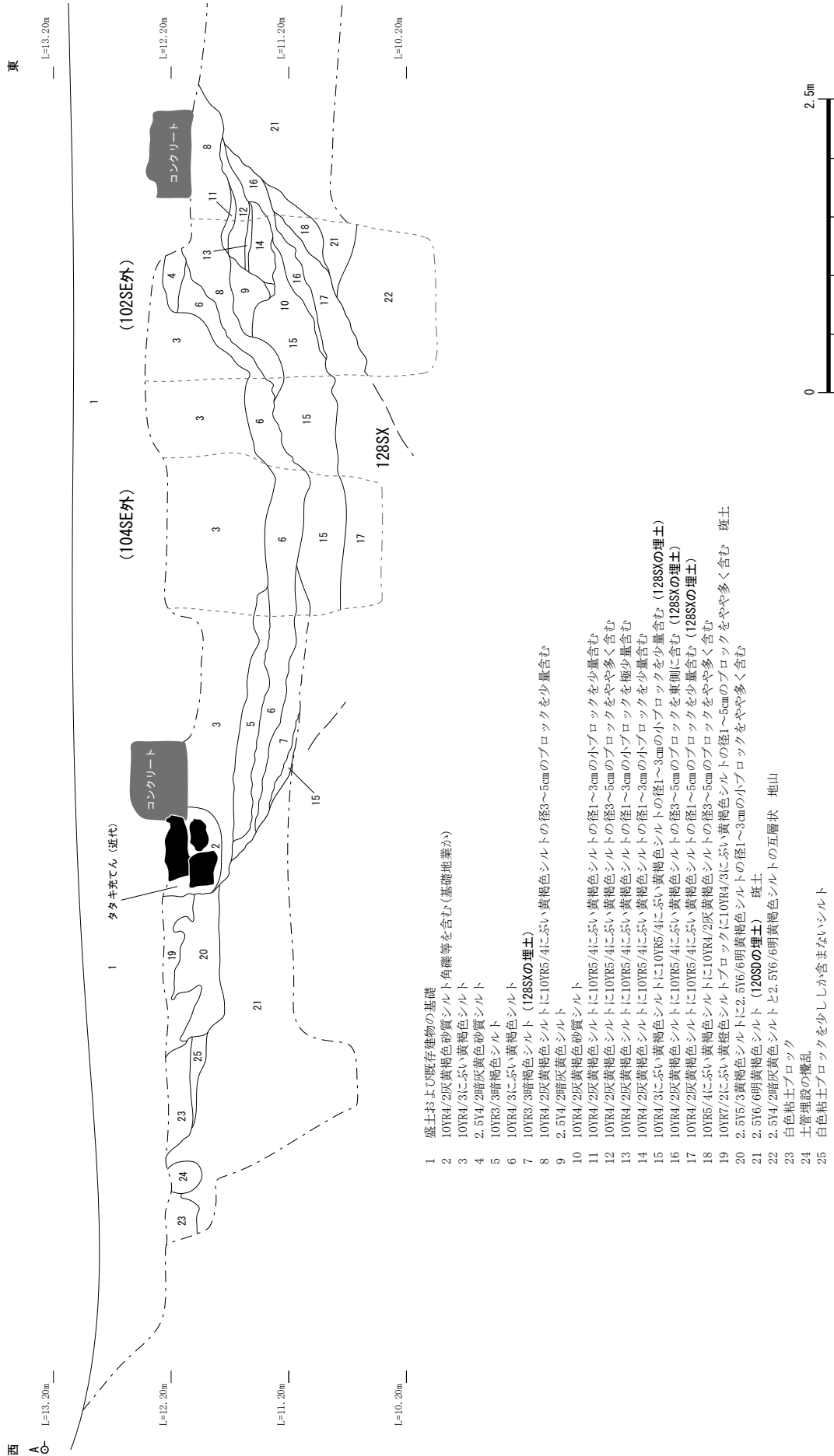
102SE（図 26,29）23Ab 区北辺の中央付近、104SE の南東に位置する。掘りかたは 1.2m × 1.05m の円形に近い形状で、常滑窯製品の井戸筒（528）を積み重ねて井戸側としている。調査では井戸筒は 5 個体分を検出したが、最上段として検出した個体は、上下を逆に幅をもつ口縁端部を合わせ口にして置かれていた。また、井戸筒の接合部には瓦片を土で固定した箇所も見られた。このような処置は他の個体では認められず、この井戸筒の端部のみ補強する必要があったかと想像される。断面観察では、井戸筒外側には版築のように土が突き固められた単位を確認することができ、井戸筒を配置・固定する作業工程が想像される。人力掘削は標高 9.9m まで行った。底面には達していない。

104SE（図 26,31）23Ab 区北辺の中央付近、102SE の北西に位置する。掘りかたは 2.12m × 1.39m の円形に近い形状で、常滑窯製品の井戸筒（566）を積み重ねて井戸側としている。調査では井戸筒は 5 個体分を検出した。井戸筒外側の掘りかた埋土に版築のような工法が明瞭には認められず、やきものとしての井戸筒の仕上がり、形状なども 102SE とでは異なる点が見受けられる。人力掘削は標高 10.2m まで行った。底面には達していない。

107SE 23Ab 区北西部で検出された直径 1.3m 前後のほぼ正円形の井戸である。構造物はなく、底面は未確認である。検出状況では最も新しい時期に属し、廃棄された金属片やタタキ（三和土）などが含まれる。近代の遺構と考えられる。

108SE 23Ab 区で確認された井戸である。平面形は直径 2.1m の円形を呈し、締まりの弱い暗褐色土を埋土とする。遺物では錆蝕播鉢片が検出されている。調査区西壁の断面では重複関係が認められ、121SD-a の廃絶後に構築されていることが明らかとなった。掘削は底面には達していない。

111SX（図 30）23Ab 区南側で確認された南北方向の溝であり、直線状に調査区外南側へ延びる。119SE 近代井戸から南側の 23.3m 分を検出した。箱形の断面をなす幅約 1.0m、深さは約 28cm、溝



- 1 盛土および既存建築物の基礎
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト角礫等を含む(基礎地業か)
- 3 10YR4/3にぶい、黄褐色シルト
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
- 5 10YR3/3暗褐色シルト
- 6 10YR4/3にぶい、黄褐色シルト
- 7 10YR3/3暗褐色シルト (128SXの埋土)
- 8 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
- 10 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
- 11 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 12 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む
- 13 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む
- 14 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 15 10YR4/3にぶい、黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 16 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む (128SXの埋土)
- 17 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/4にぶい、黄褐色シルトの径1~5cmのブロックを少量含む (128SXの埋土)
- 18 10YR5/4にぶい、黄褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの径3~5cmのブロックをやや多く含む
- 19 10YR7/2にぶい、黄褐色シルトに10YR4/3にぶい、黄褐色シルトの径1~5cmのブロックをやや多く含む
- 20 2.5Y6/6明黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 21 2.5Y6/6明黄褐色シルトと2.5Y6/6明黄褐色シルトの互層状 地山
- 22 白色粘土ブロック
- 23 土管理設の攪乱
- 24 白色粘土ブロックを少ししか含まないシルト
- 25 白色粘土ブロックをやや多く含む

図 26 23Ab 区北壁 128SX 断面 (縮尺 1/50)

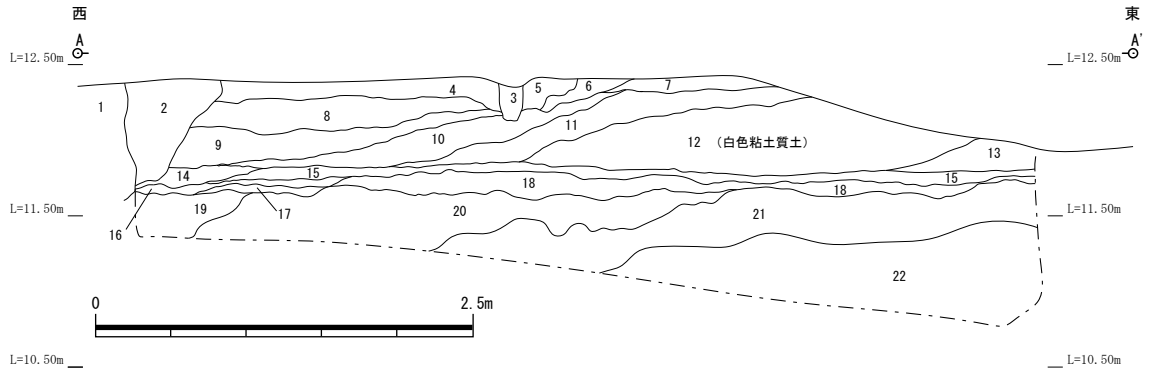
内は多数の割石で埋められている。近代の建物基礎構造の一部と思われる。稀に砂岩の大型円礫が混じり、これら円礫は武家屋敷で用いられていた礎石の可能性が考えられる。

119SE (図 30) 23Ab 区で戦国期の溝 121SD に重複して構築された近代の井戸である。検出時は花崗岩の板状の石で上部が覆われ、その周囲はタタキ (三和土) が充填され平坦に仕上げられてあった。井戸南側では別の石組井戸 (129SE) にも重複していることが確認できた。102SE や 104SE と同様に、戦国期の溝に重複するように井戸が掘削されている傾向を読み取ることができる。

124SG (図 28、基本平面図 6、写真図版 1、11) 23Ab 区北西部に位置する。広く白色粘土層 (ブロック状となった範囲も含む) が分布する周辺一帯のうちで、この粘土層が表面に配置された約 90cm の高低差を検出した。人為的に持ち込まれた白色粘土は、ここでは池の底面を構成する素材であったと考えられる。池が想定される凹みの範囲は硬い熱田層の掘削を避けるかのように、埋没した戦国期大溝 121SD の埋土の範囲に重複している。土坑 123SK は池の景石などが抜き取られた痕跡の可能性も考えられる。

128SX (図 26) 121SD-b に重複したため、範囲・方向など不明である。削平を免れた 23Aa 区調査区北壁断面でのみ確認された遺構であり、断面形状は幅の広い半球形のような形状を呈し、上部は複数回の掘り返しが認められる。大型の土坑あるいは溝と考えられる。検出面の標高は 12.4m、上端で幅 6.1m、深さ約 1.9m である。遺構埋土の掘削は行っておらず遺物は確認できていない。北壁に近い位置に掘削された井戸 102SE、104SE の掘りかた外の断面に確認できることから、少なくともこれらの井戸より先行することは明らかである。

162SX (図 31) 23Ac 区西寄りの範囲で確認された平面形が十字字となる溝である。断面形状が箱形となる幅約 70cm、深さ約 70cm の規模をもち、北側は調査範囲外へと延びる。名古屋城三の丸遺跡の地方簡易家庭裁判所合同庁舎地点で検出された遺構の形状とよく似ており、終戦間際に盛んに掘削された防空壕の痕跡の可能性が考えられる。



- 1 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y8/2灰白色シルトの径1~5cmのブロックを多く、10YR3/1黒褐色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む 斑土
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y8/2灰白色シルトの径1~5cmのブロックをやや多く、10YR3/1黒褐色シルトの径3cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR3/1黒褐色シルトの径5cmのブロックを含む
- 4 2.5Y8/2灰白色シルトの径3~5cmのブロックに10YR4/2灰黄褐色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y8/2灰白色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 6 10YR4/1褐灰色シルトに2.5Y8/2灰白色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む 斑土
- 7 2.5Y8/2灰白色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む 斑土
- 8 10YR3/2黒褐色シルトに10YR3/1黒褐色シルトの径10cmのブロック、2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを少量含む
- 9 10YR3/2黒褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックを極少量含む
- 10 10YR3/3暗褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~3cmの小ブロックをやや多く含む
- 11 2.5Y3/2黒褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~5cmのブロックを少量含む 斑土
- 12 2.5Y8/2灰白色シルトに2.5Y8/2灰白色シルトの径1~5cmのブロックを少量含む 斑土
- 13 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 14 10YR3/4暗褐色シルト
- 15 10YR3/2黒褐色シルト (整地層上端)
- 16 2.5Y3/2黒褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径10cmのブロックを少量含む
- 17 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックを多く含む
- 18 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~7cmのブロックを多く、10YR3/1黒褐色シルトの径5~10cmのブロックを少量含む
- 19 10YR3/4暗褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックを多く含む
- 20 10YR4/2灰黄褐色シルトに2.5Y5/4黄褐色シルトの径1~2cmの小ブロックをやや多く含む
- 21 10YR5/1褐灰色シルト
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR5/1褐灰色シルトの径3~7cmのブロックを多く含む

図 27 23Ab 区 120SD 上層埋土の縦方向断面 (縮尺 1/50)

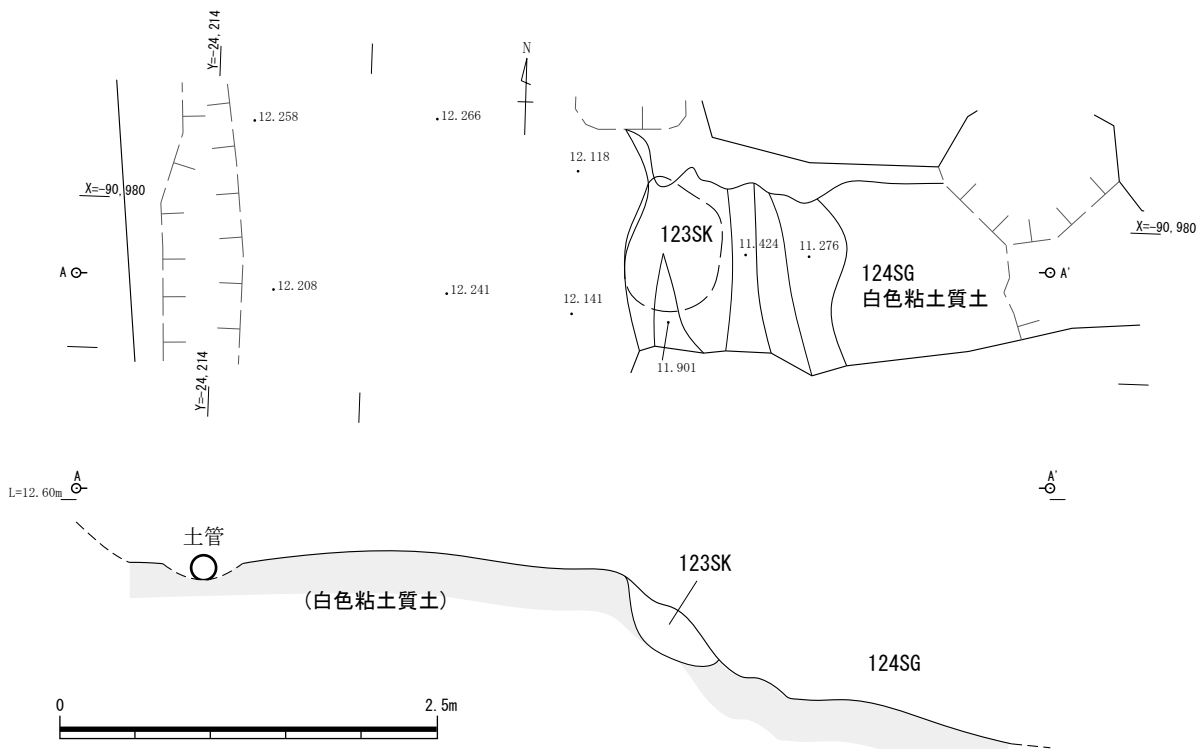


図 28 23Ab 区 124SG 平面・断面図 (縮尺 1/50)

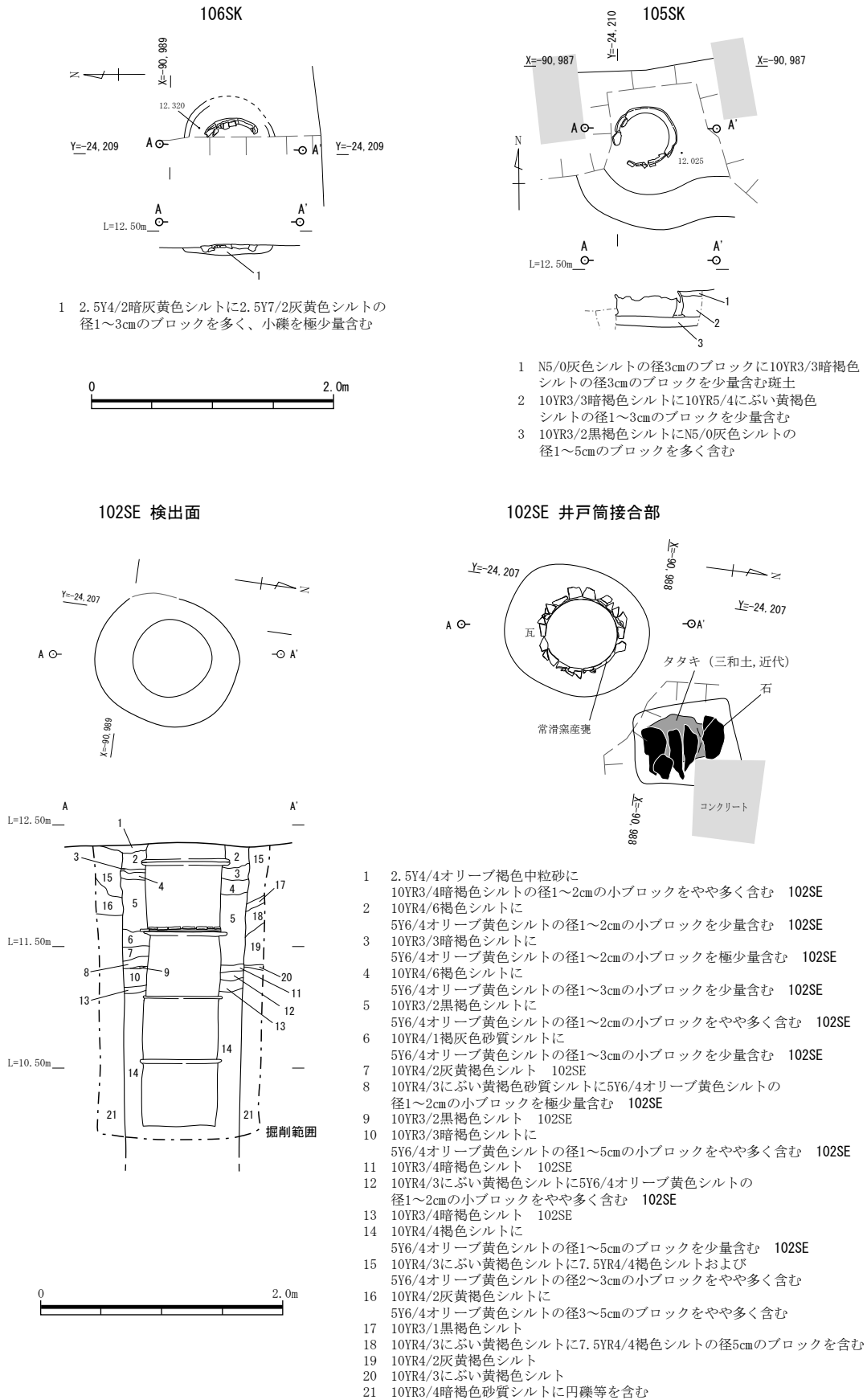


図29 23Ab区 102SE,105SK,106SK 平面・断面図 (縮尺 1/50)

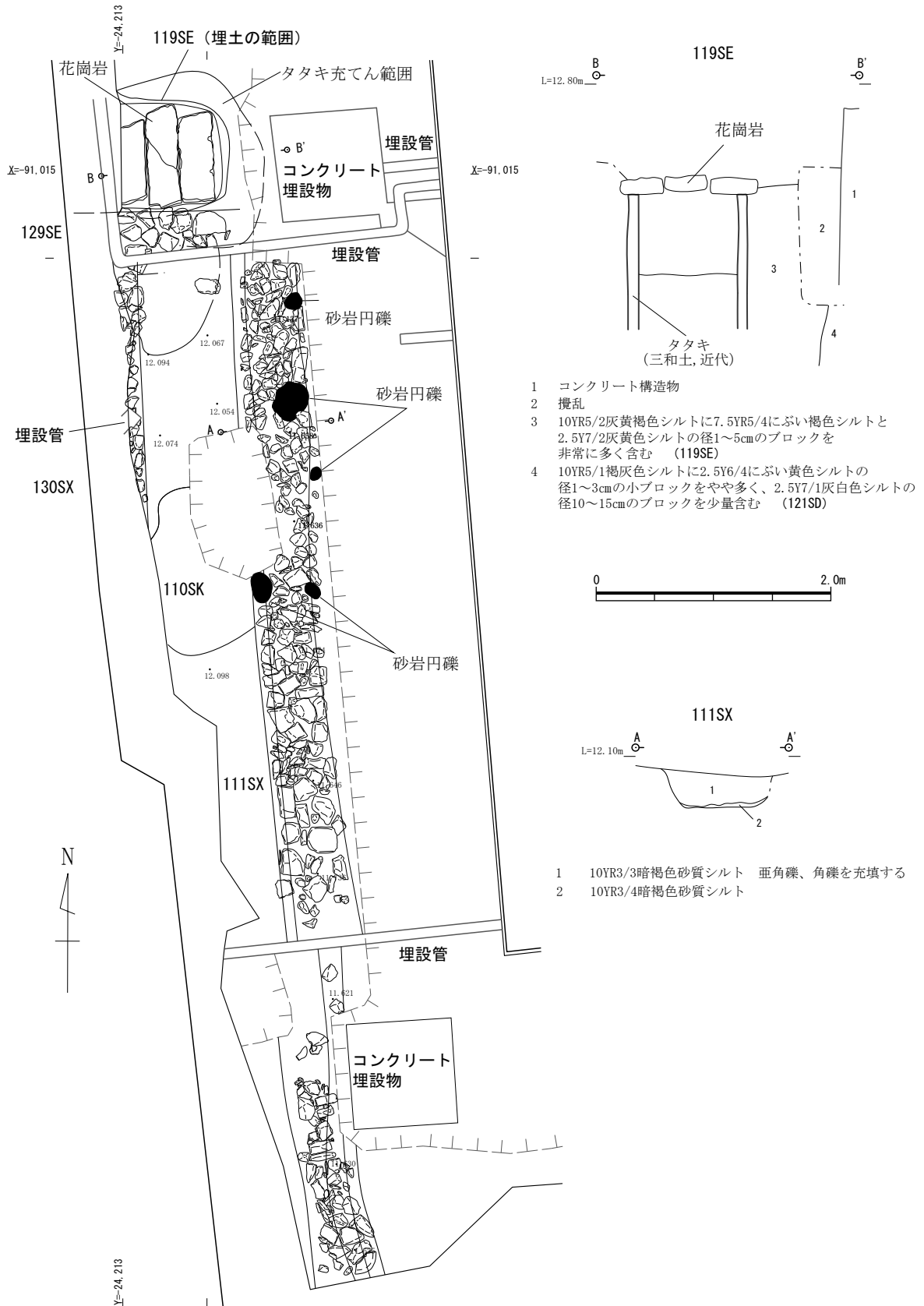
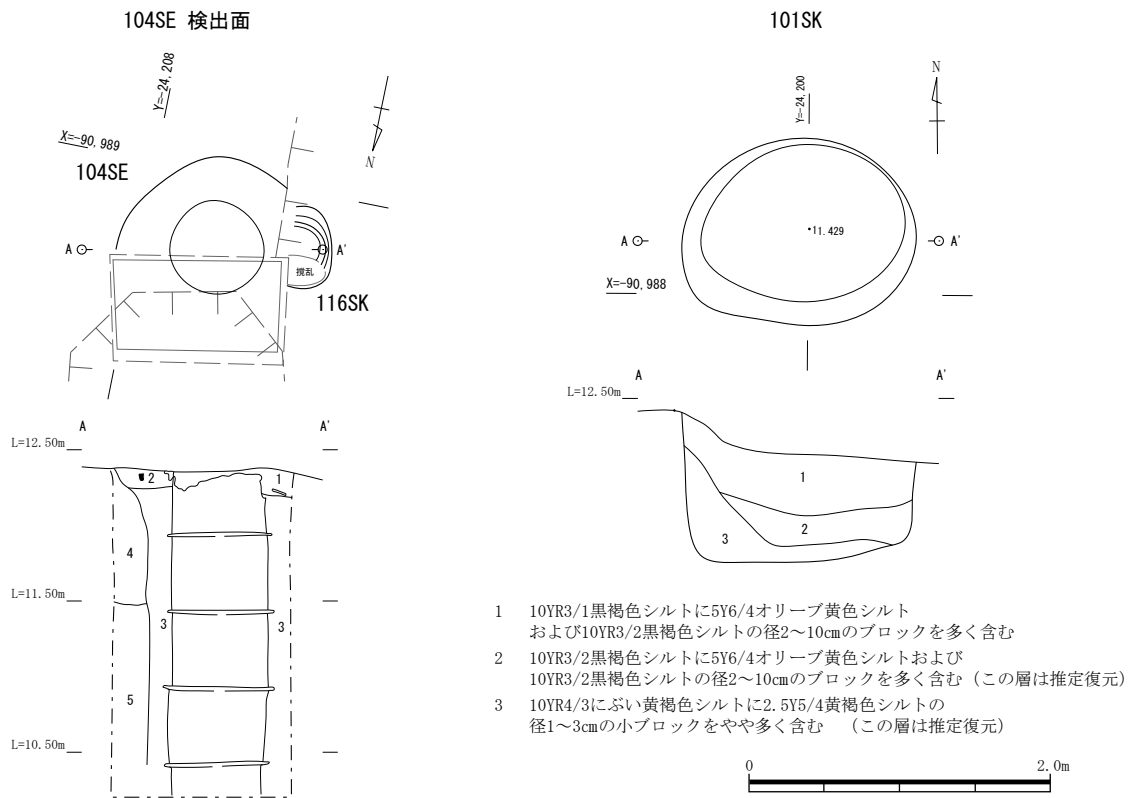


図 30 23Ab 区 111SX 平面図 (縮尺 1/70)・断面図 (縮尺 1/50)



- 1 2.5Y4/1黄灰色シルトに2.5Y5/1黄灰色シルトの径15cmのブロックを少量含む
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルトに7.5YR5/4にぶい褐色シルトの径10cmのブロックをやや多く下位に含む
- 3 10YR3/1黒褐色シルトに5Y6/1灰色シルトの径3~5cmのブロックを少量含む
- 4 10YR3/2黒褐色砂質シルト
- 5 10YR3/3暗褐色砂質シルト

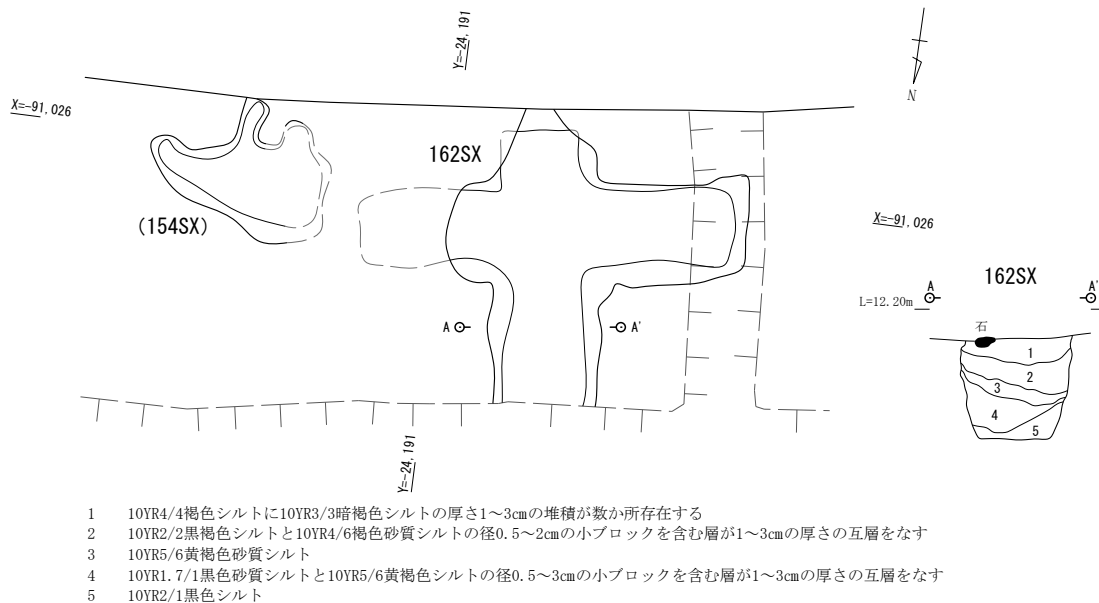


図 31 23Ab 区 101SK,104SE/23Ac 区 162SX 平面・断面図 (縮尺 1/50)

## 第4章 遺物

### 1 出土遺物の概要

今回の発掘調査で出土した遺物は陶磁器類・土師器・石製品・金属製品などがあり、全部で 28 のコンテナ 143 箱である。整理作業に際しては材質ごとに行い、掲載資料は主要遺構出土遺物を優先的に選択し図化作業を実施した。

今回の調査で出土した遺物は1期：戦国時代以前、2期：江戸時代以降があり、後者はさらに2期6段階に区分できる。

### 2 戦国期以前の遺物

戦国時代の遺物には、瀬戸・美濃窯産陶器、土師器などがある。以下、遺構出土資料ごとに紹介する。065SD (図 32,E-1 ~ 9) 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器甕 (8) と土師器がある。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗 (5)、鉄釉筒型碗 (6)、灰釉端反皿 (1)、鉄釉稜皿 (2) と鉄釉甕 (7) があり、天目茶碗と灰釉端反皿と鉄釉甕は大窯第1段階に、鉄釉稜皿は大窯第2段階、鉄釉筒型碗は連房式登窯第1~2小期に位置付けられる。天目茶碗と鉄釉筒型碗は鉄釉に灰釉が流し掛けされている。一方、土師器には体部から口縁部にかけて緩やかに内彎するロクロ調整皿 (3・4) と口縁部がやや内傾する半球形内耳鍋 (9) があり、いずれも 16 世紀中頃から後半にかけてのものと推定される。

060SD (図 32,E-10 ~ 13) 大溝 060SD 出土遺物は、遺構の規模に比して多くなく、図化できる資料は瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (11 ~ 13) と志野向付 (10) が認められる程度である。天目茶碗は口縁端部が短く折れるもので大窯第1段階に位置づけられる。志野向付は脚部が欠損し被熱痕が認められる製品で、17 世紀初頭と推定される。

179SK (図 32,E-14) 須恵器袋物 (壺か) の頸部付近の小破片が出土した。外面に櫛書き波状紋が確認される。

225SK (図 50,E-442) 瀬戸・美濃窯産陶器鉄釉稜皿 (442) は大窯第2段階に位置付けられるものである。

### 2 江戸時代以降の遺物

#### (1) 屋敷地 1 の遺構出土遺物

江戸時代の遺物には、瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産陶磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、瓦、石製品、金属製品など多種多様な製品がある。以下、遺構出土資料ごとに紹介する。

001SK (図 32,E-15 ~ 21) 瀬戸・美濃窯産陶磁器などが出土した。瀬戸窯産陶器には播鉢 (16) と鉄釉半胴 (19) と鉄釉甕 (20・21) が、瀬戸窯産磁器には染付端反碗 (17) が、美濃窯産陶器には笠原鉢 (15) と鉄釉植木鉢 (18) などがそれぞれ確認される。鉄釉植木鉢 (18) は内面に別の灰釉製品破片が溶着していた。鉄釉甕 (21) には高台裏の露胎部分に墨書が認められるが判読できない。

001SK 出土遺物は連房式登窯第4小期から第10小期までの範囲で分布しており、時期的なまとまりは見出しにくいのが、染付磁器端反碗 (17) の存在からみて 19 世紀前半に位置付けられる。

002SK (図 33,S-1) 硯の小破片 (S-1) が1点出土した。石材は凝灰質泥岩。

011SK (図 33,E-22) 連房式登窯第4小期に属する美濃窯産陶器笠原鉢 (22) などがある。

019SK (図 33,E-23) 肥前窯産磁器染付紅猪口 (23) などがある。

027SK (図 33,E-24・25) 肥前窯産磁器青磁香炉 (25) と産地不明陶器灰釉湯呑 (24) などがある。湯呑 (24) は赤色の上絵付で体部外面に「乾」が描かれた乾山写しの製品と思われ、18 世紀後葉と考えられる。

044SK (図 33,E-26) 瀬戸窯産陶器灰釉仏花瓶 (26) があり、灰釉に上野釉がかかる。江戸時代後期に属する。

045SD (図 33,E-27 ~ 29) 土師器ロクロ調整皿 (27 ~ 29) がある。27 と 28 は赤色系 (明褐色) の胎土で焼成がやや良好で、体部下半がやや外側に膨らむものである。一方、29 は肌色に近い焼成がやや甘い胎土である。詳細な時期は特定しがたいが 18 世紀頃と推定される。

049SK (図 33,E-30) 30 は瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗で、17 世紀前半に属する。

050SK (図 33,E-31) 31 は瀬戸・美濃窯産陶器掛け分け碗で、外面は鉄釉に灰釉が流し掛けされ下半は錆釉が、内面は灰釉が施されていた。江戸時代中期と思われる。

062SK (図 33,E-32) 32 は瀬戸窯産陶器染付蓋で、外面には灰釉が掛かっており呉須で草花紋が描かれている。

063SX (図 33,E-33 ~ 46) 美濃窯産陶器、肥前窯産陶磁器、京・信楽窯産陶器、土師器など多様な産地の製品が含まれている。美濃窯産陶器には灰釉摺絵皿 (33)、染付小碗 (40)、掛け分け花瓶 (42)、長石釉大皿 (43)、灰釉植木鉢 (46) などがある。摺絵皿 (33)、花瓶 (42)、大皿 (43) は 18 世紀に属するが、染付小碗 (40) や植木鉢 (46) は 19 世紀に下る可能性がある。42 は上下で灰釉と鉄釉が掛け分けられた製品である。

肥前窯産陶磁器には内面が蛇の目釉剥ぎされた緑釉皿 (34) がある。京・信楽窯産陶器には灰釉陶器丸碗 (39) があり、口縁端部に鉄釉が施されている。38 は産地不明陶器丸碗で、長石釉に上絵付が施された乾山写しの製品と思われ、18 世紀後葉と考えられる。土師器には口縁部がわずかに外反する中型のロクロ調整皿 (35・36) と口縁端部がわずかに内湾する小型のロクロ調整皿 (37) があり、いずれも胎土は肌色系である。17 世紀から 18 世紀前半と推定される。また、土師器には犬型の土人形 (45) も存在する。063SX 出土遺物は一部に 19 世紀にかかるものも含まれるが、全体としては 18 世紀に属する一括資料とみることができよう。

072SK (図 34,E-47・48) 美濃窯産陶器灰釉丸碗 (47) と瀬戸・美濃窯産陶器志野丸皿 (48) があり、前者は江戸時代後期、後者は連房式登窯第2小期に位置づけられ、内面に黒色付着物が確認される。

074SK (図 34,E-51) 中国景德鎮窯系青花皿 (51) が 1 点出土している。

076SK (図 34,E-49・50) 美濃窯産陶器灰釉鉄絵丸碗 (49) と黄瀬戸鉢 (50) があり、前者は江

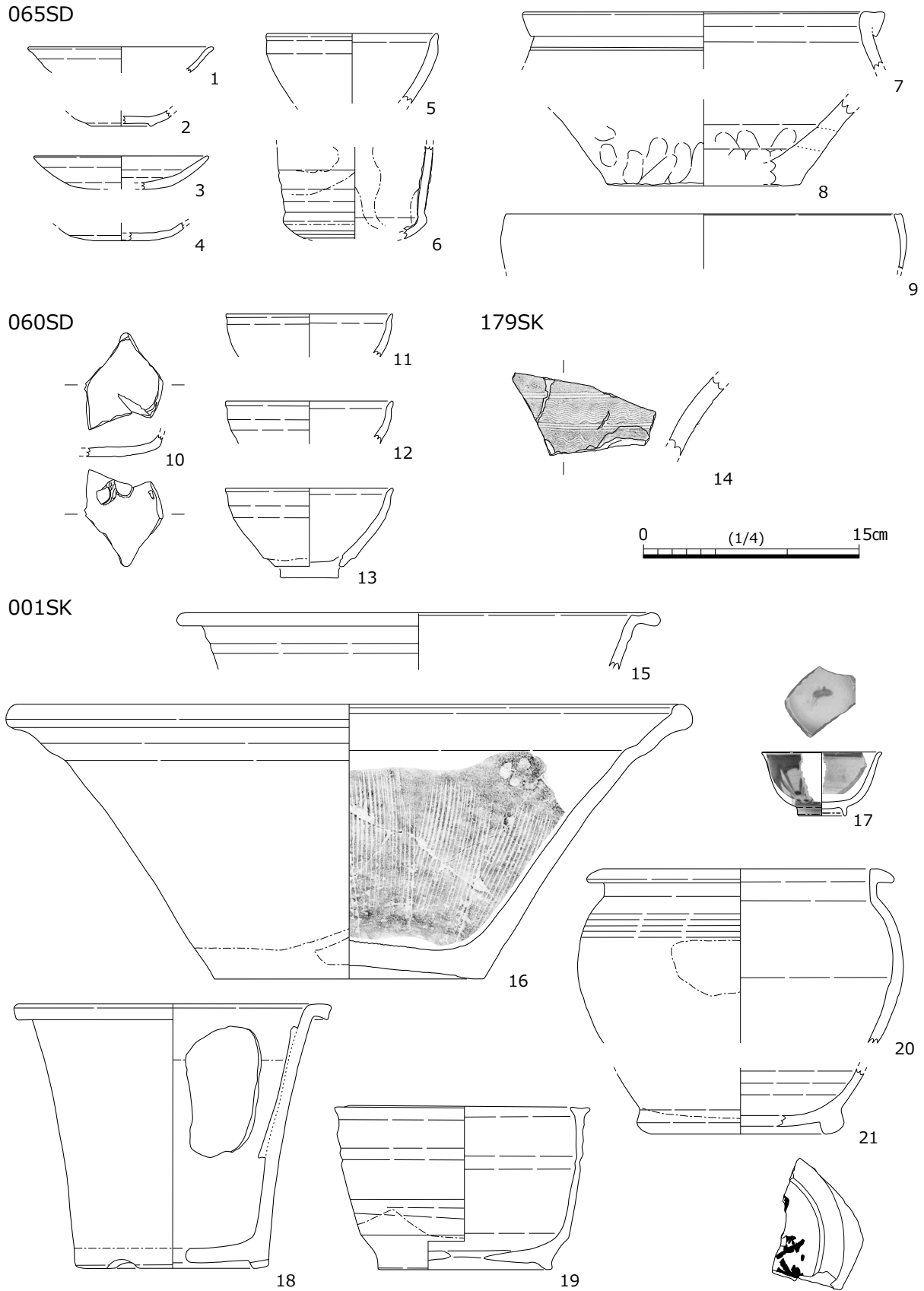


図 32 土器・陶磁器・石製品実測図 1 (縮尺 1/4)



戸時代後期、後者は連房式登窯第3～4小期に位置づけられ、膽礬（銅緑釉）や櫛描き文が確認できる。

015SK（図 34,E-52～58・S-2）水琴窟と思われる遺構 015SK に関連する遺物には瀬戸・美濃窯産陶器灰釉植木鉢（52～54・56）および常滑窯産陶器甕（55・57）と筒状製品（58）がある。57 は遺構中央部に伏せた状態で出土した常滑窯産陶器赤物甕で、底部を焼成後に大きく人為的に欠損させたもので、口縁部の形状から 18 世紀末頃の製品とみられる。体部外面に別の甕破片が溶着した状態のままであった。57 の上位に配置されていた瀬戸・美濃窯産陶器植木鉢（56）も伏せた状態で出土しており、江戸時代後期に属すると考えられる。57 の下位に据えられた常滑窯産陶器筒状製品（58）は下部が欠損している土管と思われる筒状製品である。上記以外の植木鉢（52～54）は 57 の横に接する形で出土しており、口縁部から体部までの破片で江戸時代後期に位置づけられる。いずれも口縁端部は直角に折れる形状で、53 は体部外面に鉄釉が流し掛けされている。55 は 57 の上位で出土した常滑窯産陶器甕の口縁部小破片で 18 世紀のものである。S-2 は 57 の上位から出土した玉石（安山岩の円礫）である。

016SX（図 35,E-59・60）016SX 黄色土層からは美濃窯産陶器尾呂茶碗（59）と瀬戸・美濃窯産陶器灰釉植木鉢（60）が出土している。前者は江戸時代中期、後者は江戸時代後期に属すると考えられる。

025SK（図 35,E-61～66・S-3～5）水琴窟と思われる遺構 025SK に関連する遺物には瀬戸・美濃窯産陶器灰釉植木鉢（61）と鉄釉植木鉢（63）および常滑窯産陶器甕（62・64～66）と玉石（S-3～5）がある。62 は遺構中央に伏せた状態で出土した常滑窯産陶器甕で、底部中央が焼成後に穿孔されており、口縁部の形状からみて 18 世紀のものと思われる。62 の上位に配置されていた灰釉植木鉢（61）も伏せた状態で出土しており、鉢の底部＝図の上位にタタキ（三和土）が付着したままで、植木鉢の孔に連続してタタキにも孔が続いている。江戸時代後期に属すると考えられる。鉄釉植木鉢（63）も江戸時代後期に位置づけられる。64～66 は常滑窯産陶器甕の破片で、64 と 65 は 19 世紀に属するものである。S-3～5 は玉石（円礫）で、長さが 8.4～8.9cm、幅が 6.5～8.1cm、厚さが 5.2～7.0cm の範囲で収まり球体よりもやや扁平な形状となっていて、形状は類似する。石材は S-3 と 4 は安山岩、S-5 は花崗岩である。

042SK（図 36,E-67～69）甕埋設遺構 042SK からは、埋設された常滑窯産陶器甕（69）の他に、瀬戸窯産陶器播鉢（67）と肥前窯産染付碗（68）が出土している。播鉢（67）は連房式登窯第5小期に、甕（69）は底部中央が穿孔されていて 18 世紀中葉に属すると考えられる。

172SX（図 36,37,E-70～94・S-6）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産陶磁器、産地不明陶器、土師器など多様な製品が含まれている。

瀬戸窯産陶器には播鉢（86・87）と鉄釉銭甕（85）がある。銭甕（85）は底部が焼成後に穿孔されていた。美濃窯産陶器には鉄釉丸碗（70）、灰釉小皿（74）、灰釉灯明皿（75）、灰釉油皿（76）、鉄釉油皿（77）、鉄釉徳利（81）、灰釉蓋（83）、灰釉筒形容器（84）、鉄釉四耳壺（88）、灰釉水甕（89）などがある。これらは連房式登窯の第4小期（74）から第11小期（87）までの長期間にわたる遺物が含まれている。鉄釉丸碗（70）はうのふ釉が施された連房式登窯第8～9小期に位置づけられるもの、灰釉水甕（89）は鉄釉が流し掛けられた製品で連房式登窯第8小期に位置付けられるものである。

肥前窯産磁器には染付端反碗（71）、染付丸碗（72）、染付向付（73）があり、18 世紀後半から

19 世紀に属する。産地不明陶器には鉄釉徳利（80）があり、器壁が極めて薄い。

土師器には赤色系ロクロ調整皿（78・79）、焼塩壺（82）、半球形内耳鍋（90）、土人形（91～94）があり、焼塩壺（82）には泉州麻生の刻印が確認される。土人形は灯籠型の器物をモチーフにしたものの部材が多いとみられる。91 は六角柱状の火袋の一部と思われ、1面には楕円形窓が穿たれ、もう1面には墨書で格子紋様が描写され表面に薄く白化粧が施されている。92 は平面六角形の笠の一部とみられ外面の一部が剥がれ落ち中央の孔の内側に煤が付着している。93 も笠の一部とみられるが形状は滑らかで表面に白化粧が施されていた。94 は宝珠または火袋の一部とみられ、脚部の平面形は六角形状、上位は球状を呈して円形の窓が穿たれていた。

173SK（図 37,E-95～101）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産陶磁器、土師器などの製品が認められる。このうち瀬戸窯産陶器には灰釉丸碗（96）、灰釉植木鉢（100）などが、美濃窯産陶器には端反碗（95）、笠原鉢（101）などがある。端反碗（95）は内面に白化粧が施され全体に透明釉が掛かり外面も梅紋が施されるもので、連房式登窯の第 10 小期に位置づけられ、本資料群の中では最も新しい遺物である。一方、肥前窯産陶磁器には染付丸碗（97）と染付鉢（98）などがあり、土師器には板作り成形の焼塩壺（99）が存在する。

175SK（図 37,E-102～107）瀬戸窯産陶器、肥前窯産陶磁器、土師器などがあり。瀬戸窯産陶器には鉄釉丸碗（103）と灰釉片口（102）と播鉢（107）が、肥前窯産磁器には染付小碗（104）と染付猪口（105）があり、中国漳州窯系磁器青花菊花紋皿（106）も認められる。灰釉片口（102）は鉄釉が流し掛けされている。概ね 17 世紀後半から 18 世紀前半に収まる資料群である。

178SK（図 37,E-108～111）瀬戸窯産陶器鉄釉火鉢（108）と美濃窯産陶器花瓶（111）と肥前窯産磁器染付丸碗（109）および太鼓もしくは南蛮壺と思われる土人形片（110）などが存在する。

177SX（図 38,E-112・113）美濃窯産陶器鉄釉双耳鍋（112）と瀬戸・美濃窯産陶器窯道具エンゴロ蓋（113）などがある。113 の口縁部付近には煤が付着している。

179SK（図 38,E-114～116）17 世紀初頭に位置づけられる瀬戸・美濃窯産陶器志野織部四方向付（114）と肥前窯産磁器染付皿（115・116）があり、17 世紀前半の資料と考えられる。

180SK（図 38,E-117）瀬戸窯産陶器播鉢（117）は底部しか残存していないが、江戸時代中期のものと思われる。

181SK（図 38～41,E-118～179）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産陶磁器、常滑窯産陶器、京・信楽窯産陶器、土師器など多様な製品が存在する。瀬戸窯産陶器には染付広東茶碗（125）、染付丸皿（129）、灰釉灯明皿（134）、灰釉灰落とし（137）、灰釉蓋物（139）、鉄釉筒形鉢（154・155）、播鉢（159～167）、灰釉植木鉢（169）、水盤（175）、灰釉石皿（174）、鉄釉火鉢（177）、灰釉練鉢（178）などがある。瀬戸窯産陶器播鉢の時期は連房式登窯の第 4 小期（159）から第 11 小期（161・162 など）までの範囲に分布している。

美濃窯産陶器には灰釉丸碗（119）、灰釉浅碗（120）、長石釉鉄絵端反碗（121）、染付広東茶碗（124）、灰釉反り皿（127）、鍍釉灯明皿（130～133）、灰釉有耳壺（136）、灰釉蓋物（140・141）、灰釉蓋（142～148）、鍍釉徳利（156・158）、灰釉徳利（157）、灰釉鉄絵鉢（179）などがある。一方、

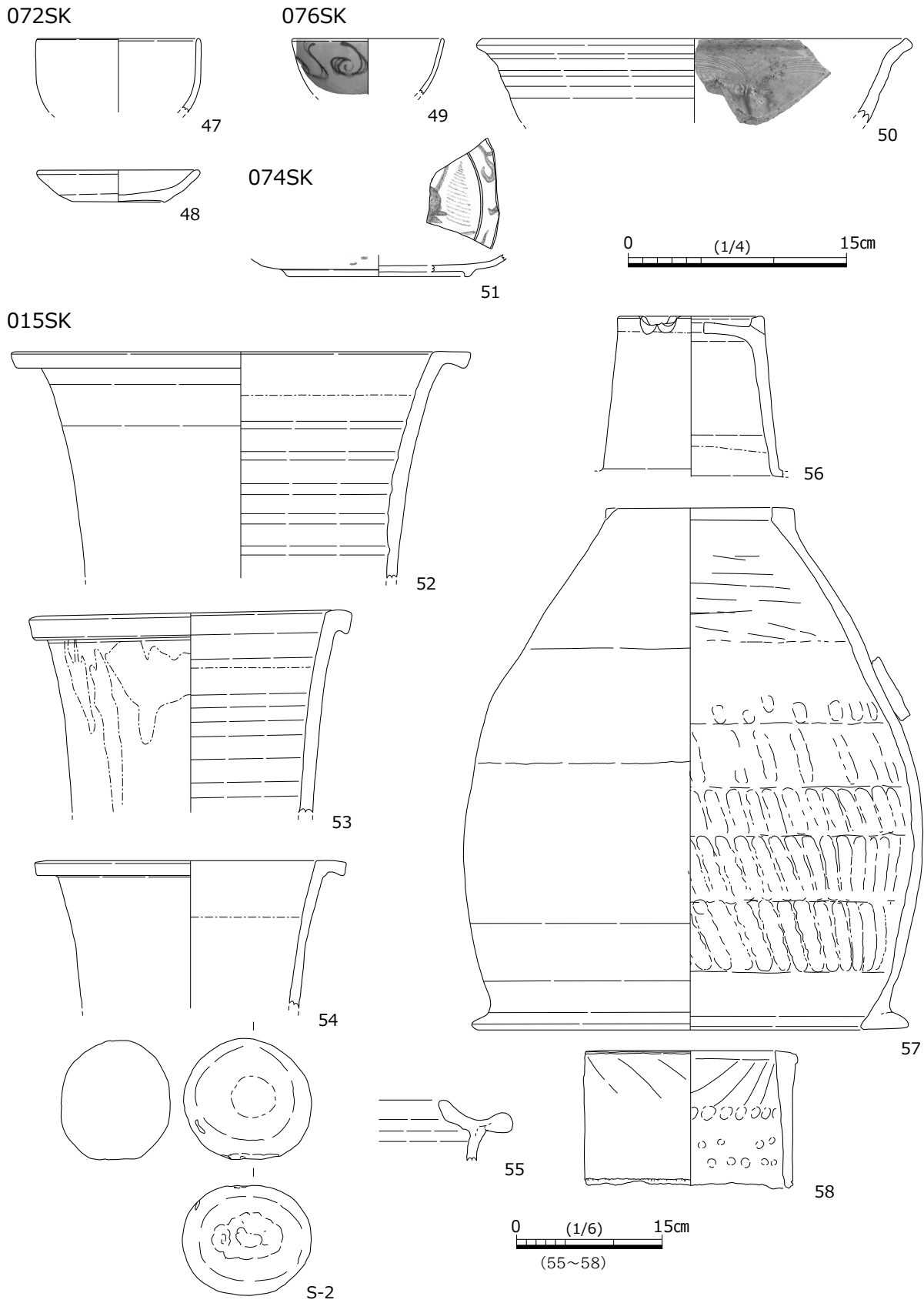


図 34 土器・陶磁器・石製品実測図 3 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

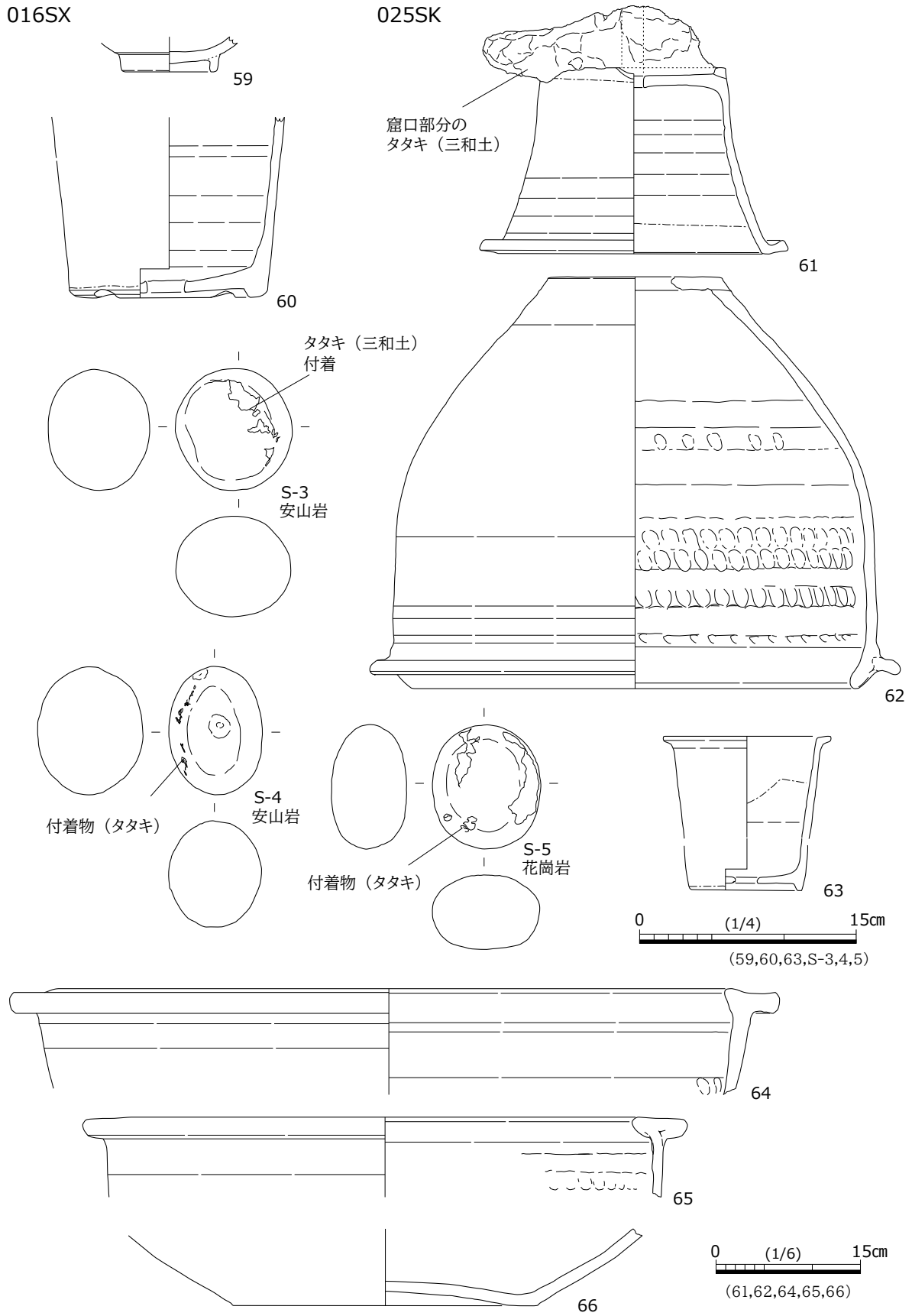
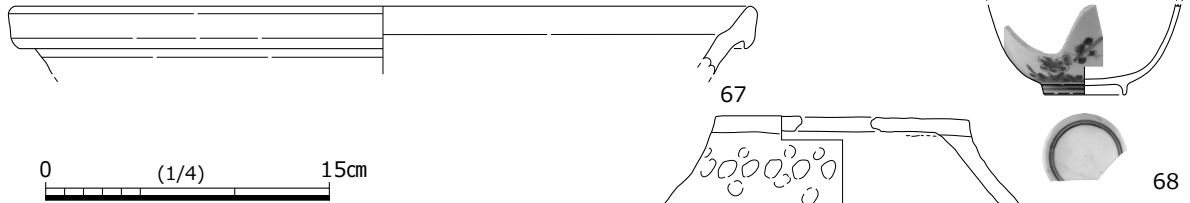


図 35 土器・陶磁器・石製品実測図 4 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

042SK



172SX

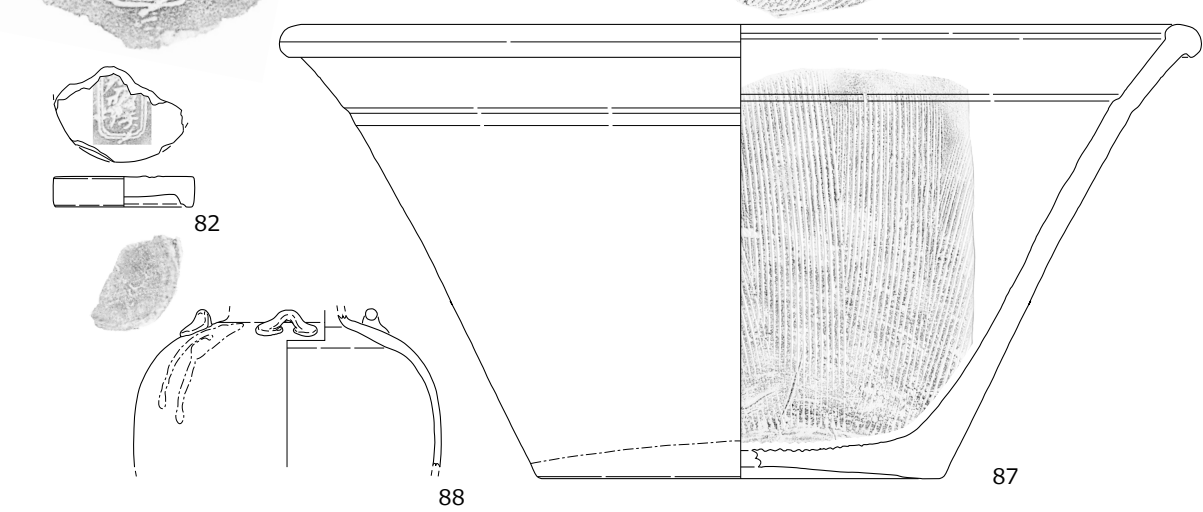
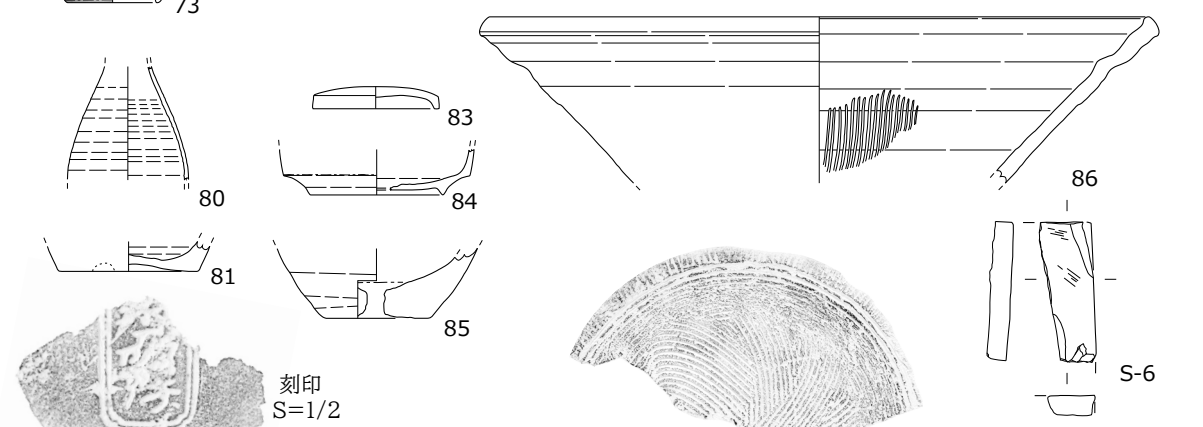
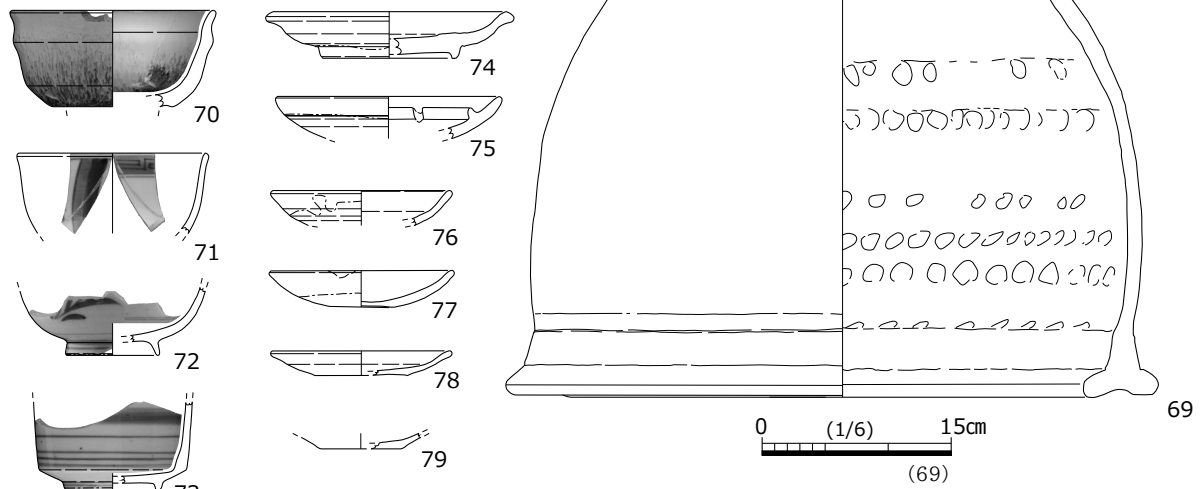


図 36 土器・陶磁器・石製品実測図 5 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

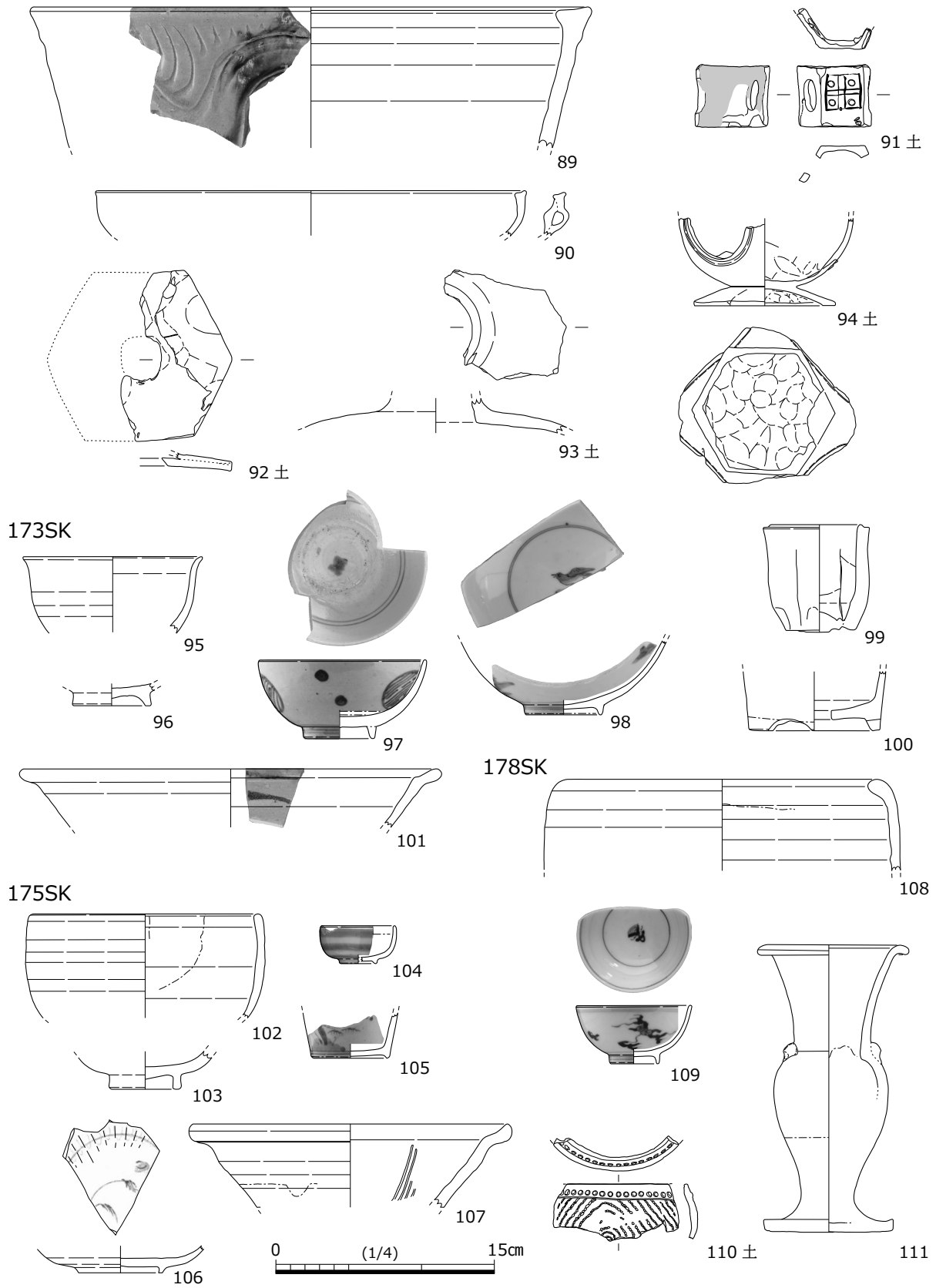


図 37 土器・陶磁器・石製品実測図 6 (縮尺 1/4)

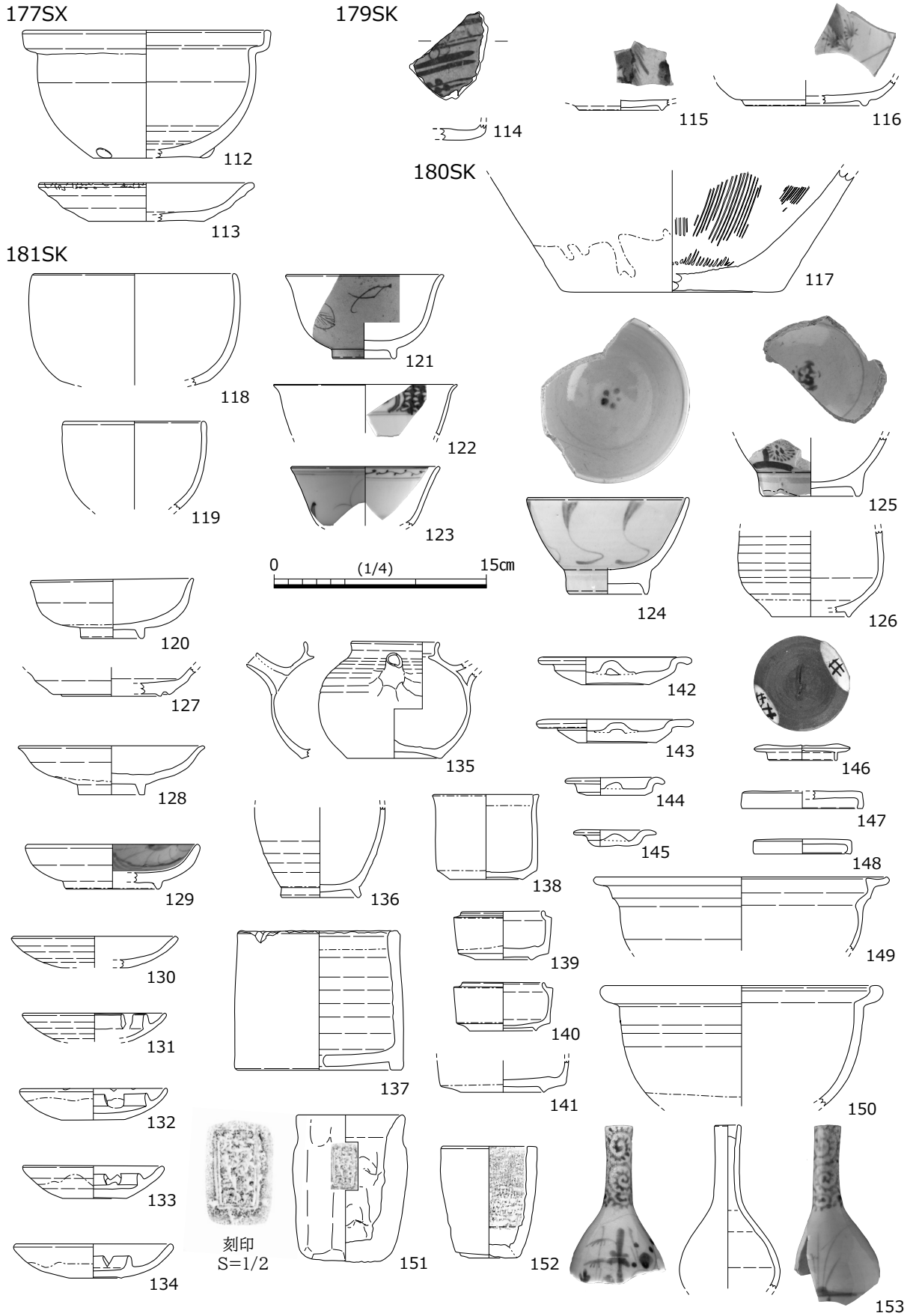


図 38 土器・陶磁器・石製品実測図 7 (縮尺 1/4)

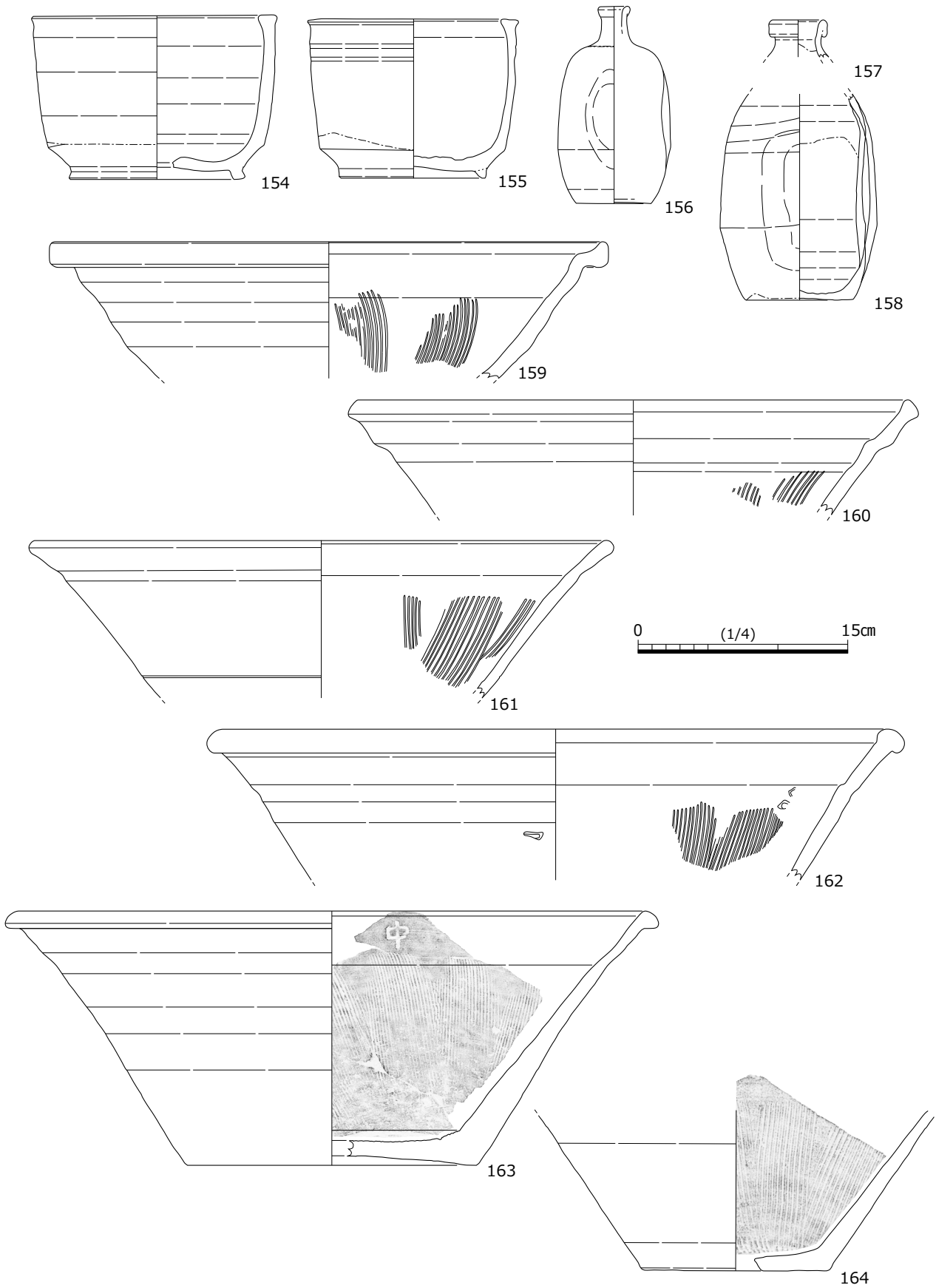


図 39 土器・陶磁器・石製品実測図 8 (縮尺 1/4)

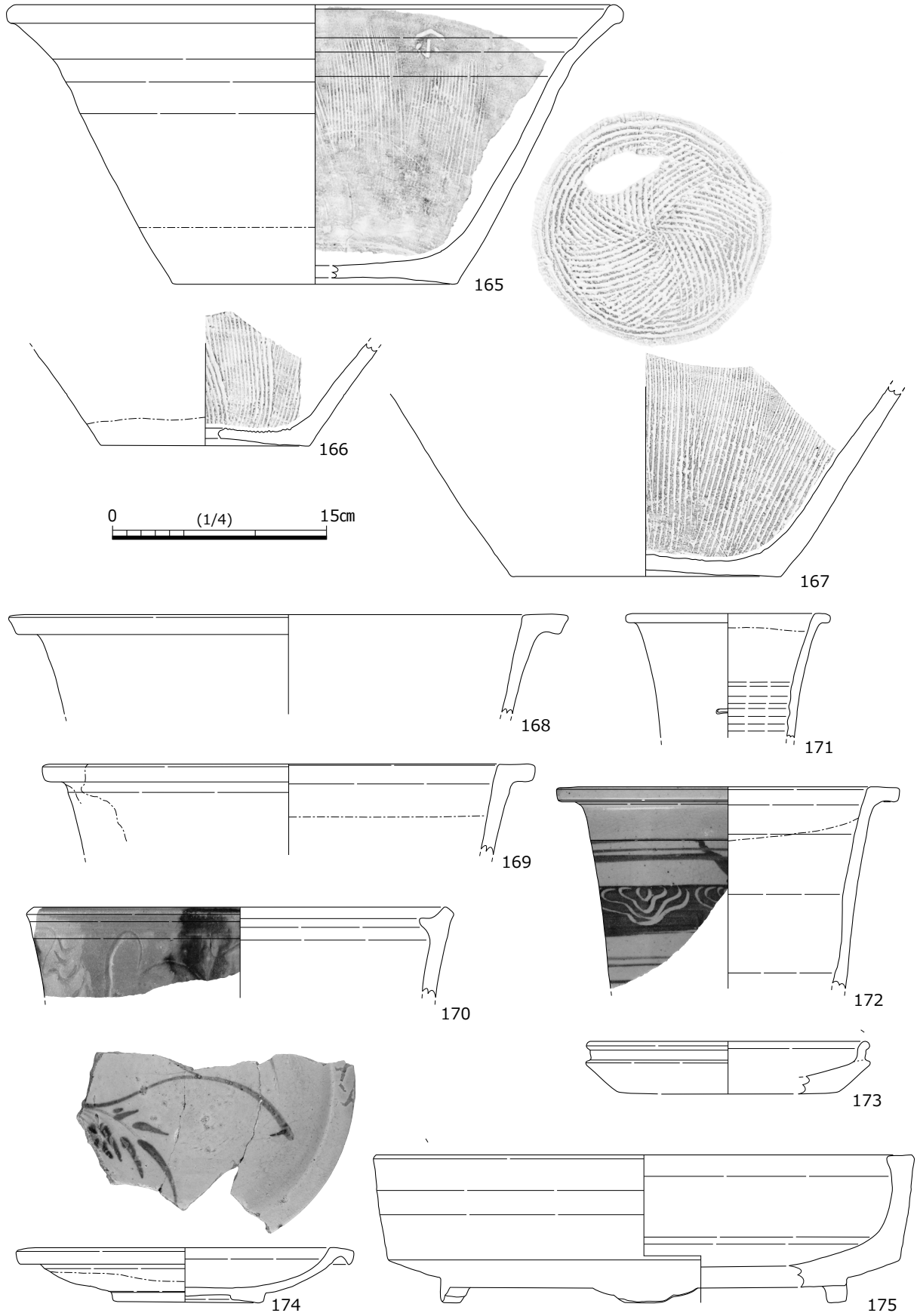


図 40 土器・陶磁器・石製品実測図 9 (縮尺 1/4)

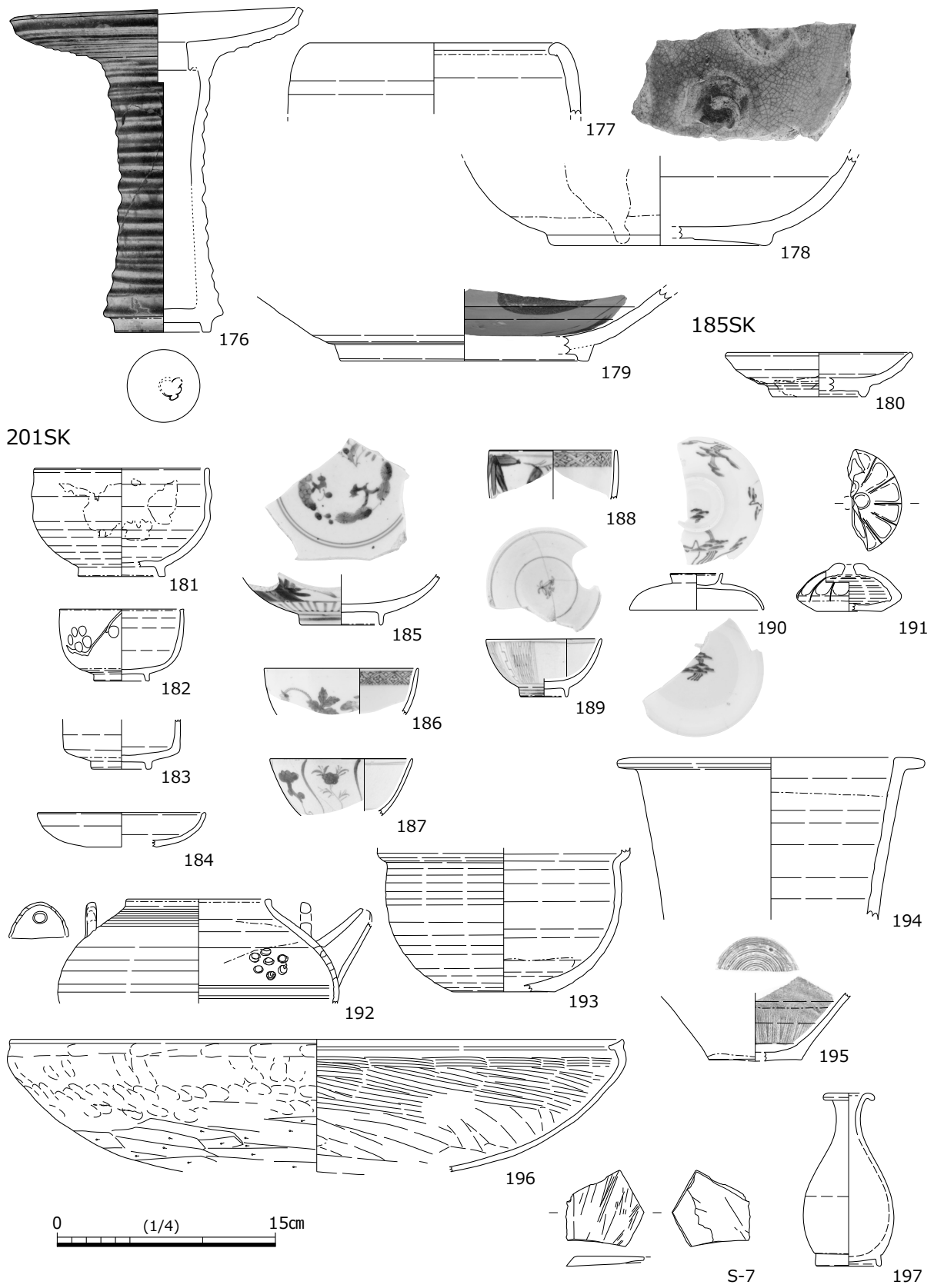


図 41 土器・陶磁器・石製品実測図 10 (縮尺 1/4)

どちらか特定できない瀬戸・美濃窯産陶器には灰釉丸碗（118）、鉄釉双耳鍋（150）、灰釉植木鉢（168・171）、水甕（170）、志野鉄絵植木鉢（172）、花生（176）などが存在する。このうち花生（176）は外面が灰釉に鉄釉を合わせた釉薬が施され口縁目に沿って黒褐色と白濁色の縞状にみえるもので、金属製薄端を模倣した製品と考えられる。破損部がガラス継ぎされている。広東茶碗、灯明皿（133）と灰釉徳利は連房式登窯の第 10 小期に、端反碗は第 10 ～ 11 小期に位置付けられるが、反り皿など江戸時代中期以前に遡る資料も多く存在する。

一方、肥前窯産陶磁器には染付端反碗（122・123）、青磁皿（128）、染付徳利（153）が、常滑窯産陶器には朱泥急須（135）が、京・信楽窯産陶器には灰釉筒形香炉（138）と鉄釉双耳鍋（149）が、土師器には焼塩壺（151・152）などがある。126 は産地不明陶器の薄造りの火入れで外面には錆釉上に灰釉が施されている。底部は碁笥底で京焼かそれに類する製品と考えられる。

185SK（図 41,E-180）17 世紀第 2 四半期に属する美濃窯産陶器灰釉丸皿が出土している。

201SK（図 41,E-181～197）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産陶磁器、京・信楽窯産陶器、土師器などがある。瀬戸窯産陶器には鉄釉双耳鍋（193）、灰釉植木鉢（194）があり、連房式登窯の第 8 ～ 9 小期に属する。美濃窯産陶器には鉄釉丸碗（181）、鉄釉湯呑（183）、灰釉浅碗（184）、御深井釉水滴（191）、鉄釉土瓶（192）、灰釉小瓶（197）などがあり、時期は全体として、江戸時代中期から後期に位置付けられる。

肥前窯産陶磁器には染付鉢（185）と染付丸碗（186・188）が、関西系窯産磁器には染付丸碗（187・189）、染付蓋（190）がそれぞれ存在する。京・信楽窯産陶器には黄褐色の胎土に透明釉白化粧が施された丸碗（182）があり、土師器には 19 世紀代に位置付けられる半球形内耳鍋（196）がある。なお、195 は産地不明陶器鉄釉餌摺である。

202SK（図 42,43,E-198～250）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、瓦質土器、常滑窯産陶器など多種多様な製品がある。瀬戸窯産陶器には麦藁手碗（198）、染付丸皿（218～221）、鉄釉植木鉢（211）、志野鉄絵水盤（222）、播鉢（226）、緑釉筒形香炉（231）があり、播鉢は連房式登窯の第 6 小期に、麦藁手碗と染付丸皿と植木鉢は連房式登窯の第 8 ～ 9 小期に属する。

美濃窯産陶器には灰釉丸碗（199）、長石釉丸碗（200）、柳茶碗（202）、灰釉染付せんじ（203）、腰錆碗（204）、灰釉浅碗（212～217）、錆釉灯明皿（223）、灰釉折縁皿（225）、錆釉徳利（210）、鉄釉土瓶（227）、鉄釉急須（228）、錆釉双耳鍋（229・230）、柿釉火鉢（232）などがあり、長石釉丸碗・柳茶碗・灰釉浅碗・灯明皿・徳利・土瓶・急須など大部分の製品は連房式登窯の第 8 ～ 9 小期に属するが、腰錆茶碗のみが第 10 小期まで下る。灰釉浅碗は薄造りで高台が小さい京焼風製品で、212 は高台裏に墨書が存在し、215～217 は関西系陶器の可能性が有る。火鉢（232）の体部内面の露胎部分には逆向きに「本口孫口」と記されている。

肥前窯産磁器には染付小杯（206）と染付丸皿（208）があり、これらは 18 世紀に属すると考えられる。染付丸皿（208）は高台裏に蛇の目釉剥ぎがされている。京・信楽窯産陶器には灰釉丸碗（201）、灰釉小杯（205）、灰釉線香立（209）、灰釉蓋（234・235）などがある。209 は碁笥底で内面は露胎となっている。中国産（清朝）磁器には外面に鉄釉、内面に青花が施された端反碗（207）がある。

土師器皿には口縁調整皿（224）、火消壺蓋（233）、土師器皿（224）、焙烙（236）、鍋底部片（238）、焼塩壺蓋（240・241）、焼塩壺（242～246）、土人形（247）、焜炉（248）などがある。224 は白色系の口縁調整皿で焼成は良好で堅緻である。焼塩壺は 242・243・246 が板作り成形、

244・245 がロクロ成形で、242・243 の体部外面には「泉湊伊織」の刻印が施されている。この他に、瓦質土器双耳鍋（237・239）、常滑窯産陶器赤物火鉢（249）と赤物竈（250）がある。

204SK（図 44,E-251～257）瀬戸・美濃窯産陶器志野鉄絵向付（251）、美濃窯産陶器御深井釉（灰釉）型打ち皿（252）、瀬戸窯産陶器灰釉双耳鍋（253）、常滑窯産陶器鮫肌釉急須（254）、瀬戸窯産磁器染付筒形容器（段重）（255）、美濃窯産陶器灰釉蓋物（256）、土人形（257）などがある。

211SK（図 44,45,E-258～291）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器など多種多様な製品がある。瀬戸窯産陶器には灰釉丸碗（259）、灰釉浅碗（262）、刷毛目碗（263）、染付丸皿（264～266）、播鉢（270）、灰釉蓋（274）、小型製品（276）、灰釉壺（279）、灰釉徳利（281）、灰釉水甕（286・287）などがある。灰釉丸碗、灰釉浅碗、染付丸皿と灰釉水甕の時期は連房式登窯第 8～9 小期に該当し、全体として 18 世紀後葉から 19 世紀前葉に位置付けられる。播鉢のみが連房式登窯第 3 小期である。

一方、美濃窯産陶器には鉄釉沈線碗（258）、錆釉灯明皿（267）、染付蓋（273）、灰釉合子蓋（275）、錆釉双耳鍋（278）などがある。染付蓋は連房式登窯第 7 小期に属するが、これ以外の製品は江戸時代後期に位置付けられるものが多い。なお、どちらか特定できない瀬戸・美濃窯産陶器には長石釉乗燭（280）、灰釉植木鉢（282・283）がある。

肥前窯産磁器には蓋物（271）と丸皿（272）が、京・信楽窯産陶器には灰釉小碗？（260）、灰釉浅碗（261）などがある。277 は褐色の胎土に鉄釉がかかる産地不明陶器土瓶である。土師器にはロクロ調整皿（268・269）と焼塩壺（288）と土人形（289～291）がある、268 は全体が赤色胎土で中央部が三角形に黒色を呈する堅緻な焼成で口縁部から体部にかけて緩やかに内彎している。一方、269 は肌色系の砂粒を含む胎土で焼成はやや甘く、口縁端部にタールが付着している。291 はミニチュア製品で京・信楽窯産陶器の可能性もある。常滑窯産陶器には赤物竈（284・285）で、外面に楯描き波状紋が施され、284 の内面上位に煤が付着している。

213SK（図 45～48,E-292～372）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、関西系窯産磁器、土師器、常滑窯産陶器など多種多様な製品がある。瀬戸・美濃窯産陶器には燭台（292）、丸碗（296）、鉄釉双耳鍋（326～328）がある。燭台（292）は長石釉に緑釉を掛け合わせた再興（復興）織部の製品で 19 世紀に位置付けられる。丸碗（296）は鉄釉に部分的に灰釉を流し掛けた製品で 18 世紀と考えられる。鉄釉双耳鍋は江戸時代後期に属する。

瀬戸窯産陶器には染付丸皿（311）、灰釉蓋（324）、灰釉土瓶（329）、播鉢（331）、灰釉植木鉢（351）、灰釉練鉢（352）、瓶掛け（353）、鉄釉半胴（354～356）がある。土瓶と植木鉢は連房式登窯第 8～9 小期、播鉢は第 9 小期、染付皿と練鉢は第 10 小期に属しており、瀬戸窯産陶器全体で見ると時期的には江戸時代後期の範囲内に収まっている。

一方、美濃窯産陶器には染付浅碗（309・310）、錆釉灯明皿（313・314）、灰釉摺絵皿（315）、灰釉蓋（316）、灰釉蓋物身（317・318）、錆釉徳利（319・321）、灰釉双耳壺（325）、灰釉土瓶（330）がある。時期は摺絵皿が連房式登窯第 7 小期、徳利と土瓶が 8～9 小期、灯明皿は第 10 小期に属しており、この他の器種も江戸時代中期に属するものが多く、瀬戸窯産陶器に比べるとやや古いものが多い傾向を読み取ることができる。

肥前窯産磁器には白磁紅皿（295）、染付丸碗（301～304・308）、染付端反碗（蓋碗 305）、青磁深皿（306）、白磁端反皿（307）がある。305 は口縁部に鉄釉が施された製品（口紅）で、306 は外面に青磁釉、内面に透明釉具須絵が施されている。

202SK

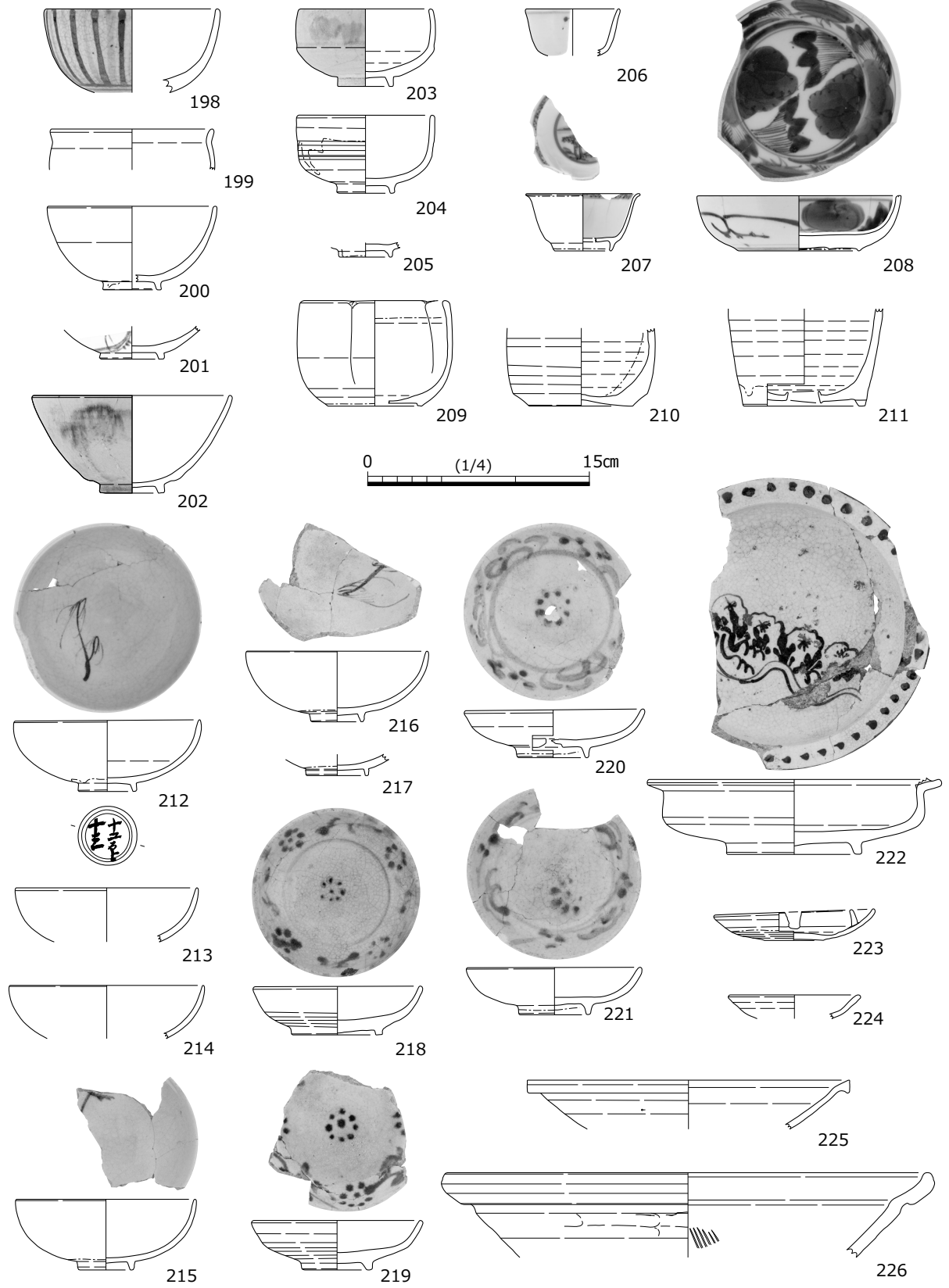


図 42 土器・陶磁器・石製品実測図 11 (縮尺 1/4)

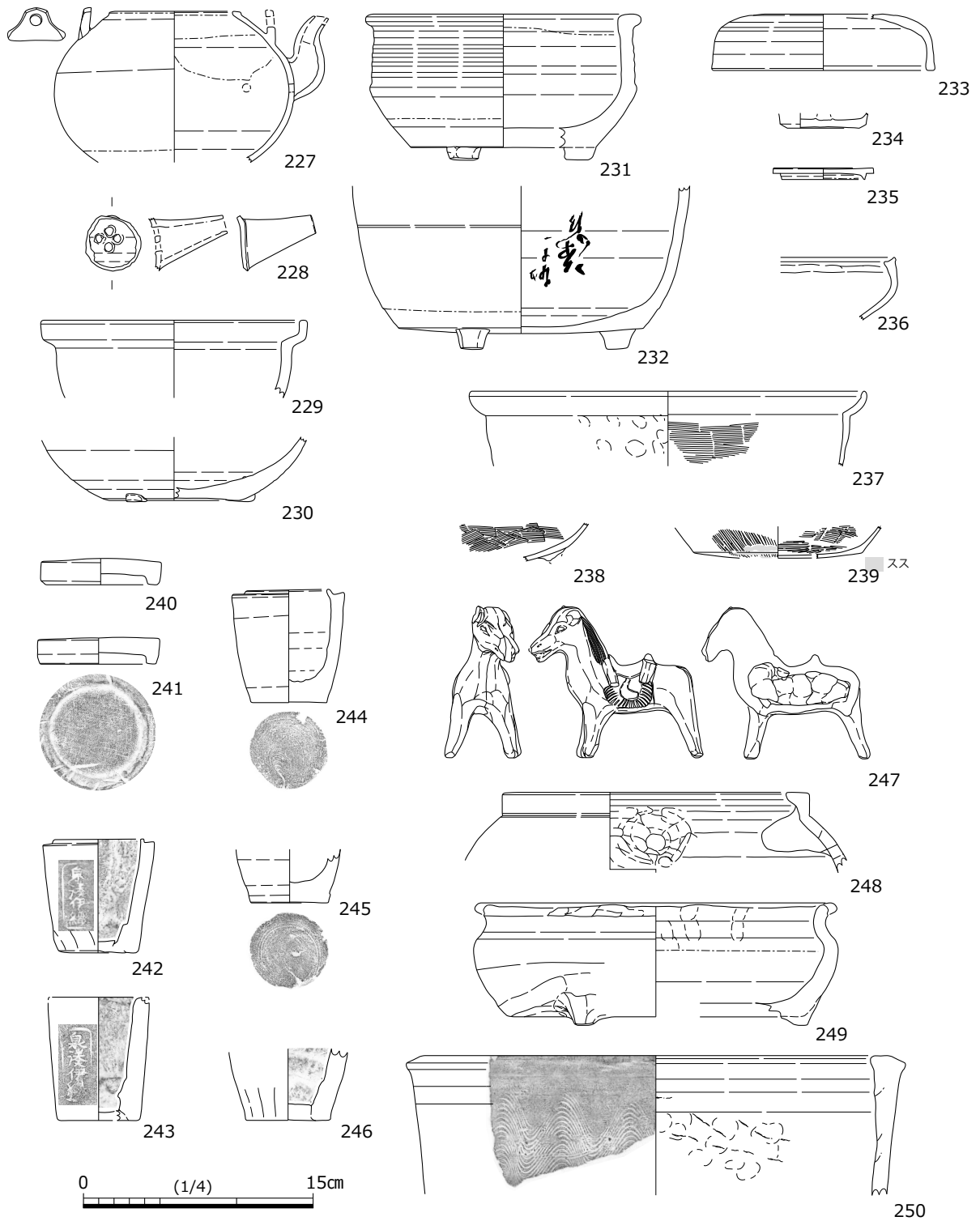


図 43 土器・陶磁器・石製品実測図 12 (縮尺 1/4)

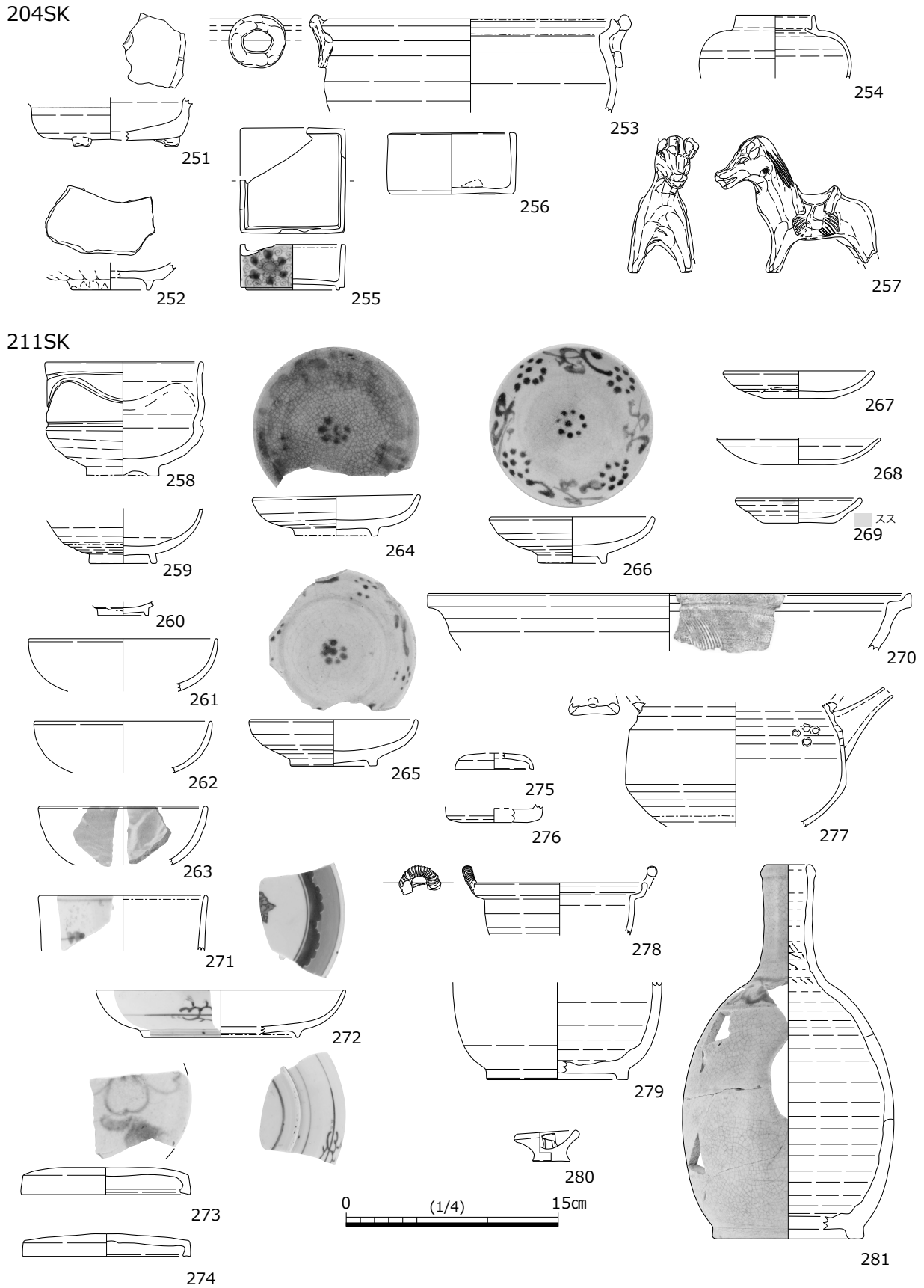


図 44 土器・陶磁器・石製品実測図 13 (縮尺 1/4)

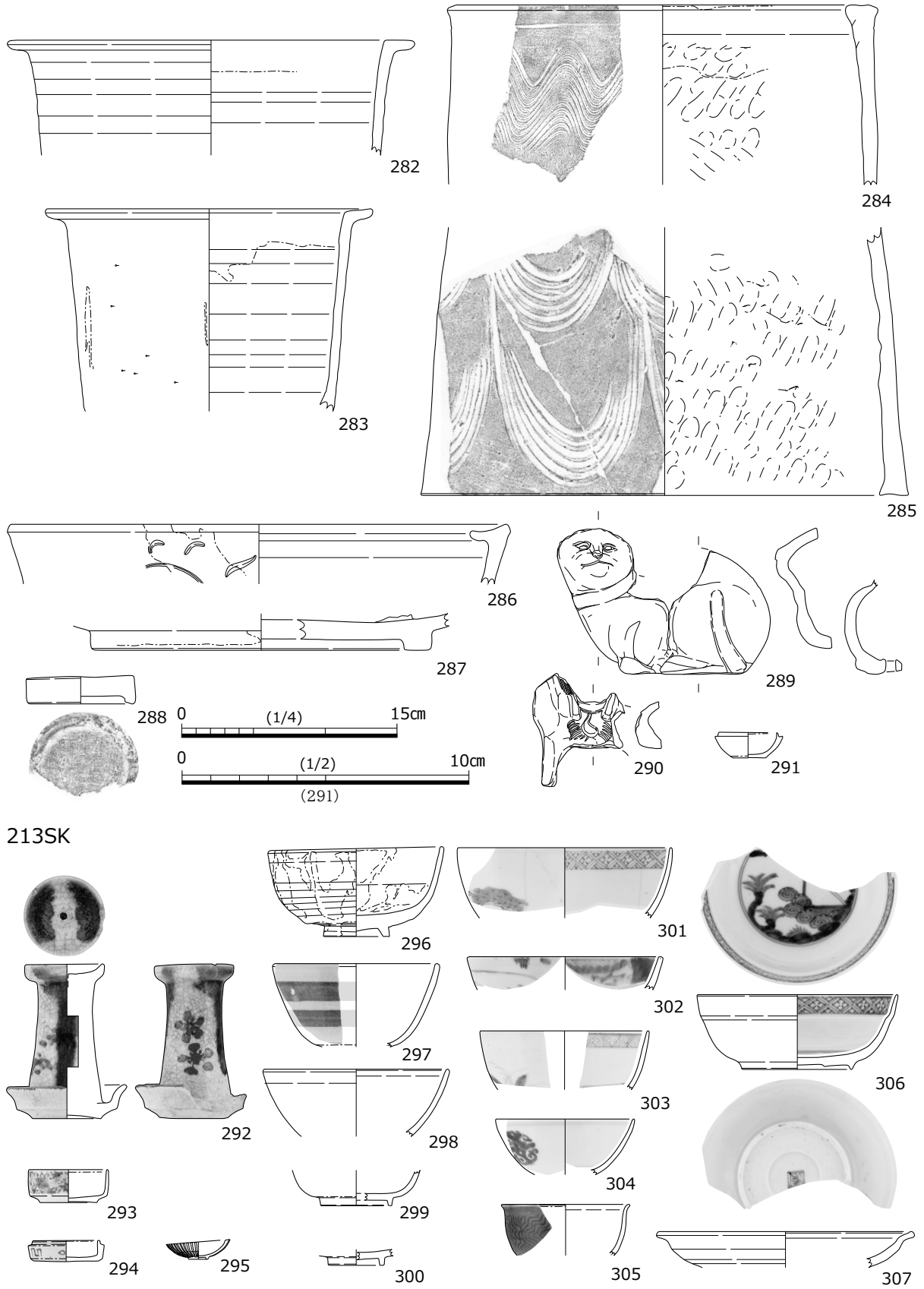


図 45 土器・陶磁器・石製品実測図 14 (縮尺 1/4, 一部 1/2)

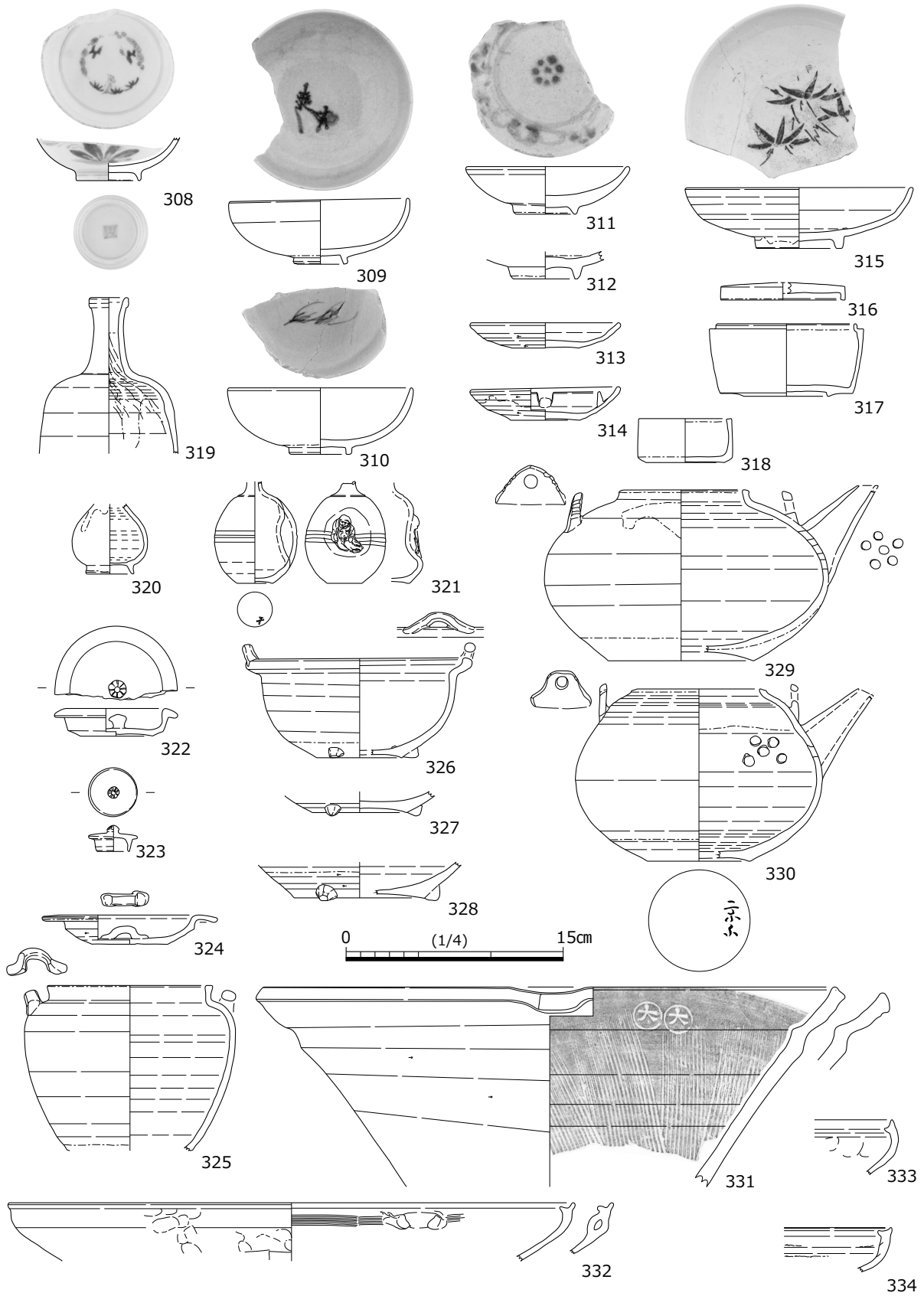


図 46 土器・陶磁器・石製品実測図 15 (縮尺 1/4)

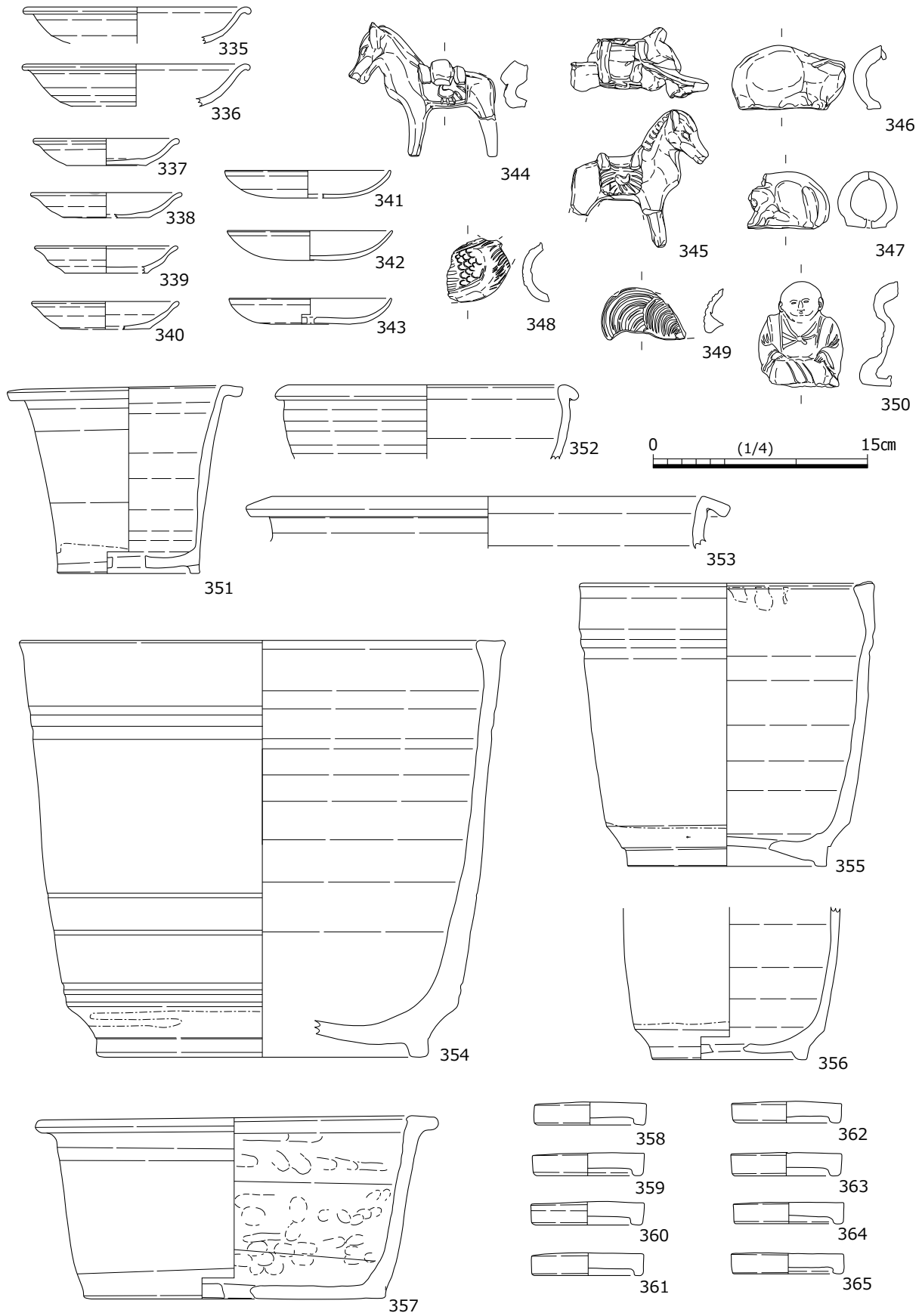


図 47 土器・陶磁器・石製品実測図 16 (縮尺 1/4)

京・信楽窯産陶器には灰釉鉄絵丸碗(297)、灰釉丸碗(299・300)、小瓶(320)、灰釉蓋(323)などがある。320は外面が白化粧の上に透明釉を掛け緑釉を流し掛けした製品で江戸時代後期に属すると思われる。関西系窯産磁器には染付合子身(293・294)、白磁碗(312)がある。298は褐色の胎土に鉄釉が施された丸碗で、現状では産地不明陶器と言わざるを得ない。

常滑窯産陶器には赤物火鉢(357)があるが、これは底部中央が穿孔されており、植木鉢に転用されたものと推測される

土師器には焙烙(332～334)、ロクロ調整皿(335～343)、土人形(344～350)、焼塩壺蓋(358～366)、焼塩壺(367～372)がある。焙烙は器壁が非常に薄く、333と334は口縁部が強く内傾する形状となっている。

ロクロ調整皿は3タイプに分類できる。Ⅰ類は口縁端部が外反し玉縁状に丸くなり、体部下外面にヘラケズリ調整が施される赤色系(明褐色)の胎土を持つもので焼成は良好である(335・336)。口径は15cm強を測る。Ⅱ類は口縁端部が緩やかに外反するもので、胎土は口縁端部ほど白色を呈し、中央部は明褐色に変化しており焼成は良好である(337～340)。口径は10cm前後、器高は1.9cmとなっており規格性は高い。Ⅲ類は体部下半から口縁端部にかけて強く内湾するもので、胎土は赤色系(濃い明褐色)で、中央部は平面三角形状に黒色に変化している。表面は丁寧なミガキ調整が施されており、焼成は極めて堅緻である(341～343)。口径は11.5cm前後、器高は1.9cm前後となっており、やはり規格性は高い。211SK出土遺物の土師器皿268がこのタイプに属する。

土人形には飾馬(344・345)、猫(346・347)、鳥(348)、福助(350)などのモチーフが確認される。焼塩壺は全て板作り成形がなされている。

217SK(図48,49,E-373～413)瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器などが確認される。

瀬戸・美濃窯産陶器には長石釉丸碗(375・376)と灰釉植木鉢(400・401)があり、江戸時代後期に属する。375は外面に呉須絵と鉄絵が描かれている。瀬戸窯産陶器には染付梅文皿(386)、染付丸皿(387)、灰釉水甕(407)、灰釉練鉢(408)がある。水甕は連房式登窯第8小期、梅文皿は第8～9小期、染付丸皿は第9～10小期にそれぞれ位置付けられる。

美濃窯産陶器には灰釉鉄絵丸碗(377)、腰鍔茶碗(378)、灰釉浅碗(380～384)、鍔釉灯明皿(388)、灰釉蓋(390)、灰釉双耳壺(391)、灰釉合子身(397)、鉄釉徳利(398)、染付蓋(399)がある。灰釉鉄絵丸碗と灰釉浅碗と灯明皿は連房式登窯第8～9小期、腰鍔茶碗は第10小期にそれぞれ位置付けられる。

肥前窯産陶器には刷毛目碗(373)があり、18世紀末葉から19世紀前葉に比定される。肥前窯産磁器には青磁蓋(392)、青磁丸碗(393)、染付丸皿(394)、染付丸碗(395・396)がある。青磁蓋と青磁丸碗は外面に青磁釉、内面に透明釉に呉須絵が施されている。京・信楽窯産陶器には丸碗(374)、灰釉浅碗(385)があり、丸碗は白化粧に透明釉が施されていた。

土師器にはロクロ調整皿(389)、焼塩壺(402)、焼塩壺蓋(403～406)、焙烙(410・411)、土人形(412・413)がある。ロクロ調整皿は胎土が肌色を呈するやや厚手の製品である。焼塩壺は板作り成形で外面に「泉湊伊織」の刻印が残されている。常滑窯産陶器には赤物火鉢(409)がある。

218SK(図49,E-414～422)瀬戸・美濃窯産陶器と土師器が認められる。

瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(414)、志野鉄絵丸皿(415)、志野筒形香炉(416)、黄瀬戸鉢(417)、播鉢(418・419)、灰釉浅碗(420)などがある。天目茶碗は連房式登窯第1小期、志野鉄絵丸皿は第2小期、志野筒形香炉と黄瀬戸鉢と播鉢は第1～2小期に位置付けられ、灰釉浅碗のみ第8～

9小期に属する。土師器にはロクロ調整皿（421・422）があり、両者とも肌色系の胎土で底部から体部にかけて丸く立ち上がり口縁部に至る形状で、底部外面に板状圧痕が残存する。器高が低いので17世紀前半と推定される。全体としてみれば、灰釉浅碗（420）を除き、17世紀前半の良好な一括資料と評価できよう。

221SK（図 50,E-423～435）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器などが確認される。

瀬戸窯産陶器には播鉢（423）、灰釉浅碗（424）、灰釉火入れ（426）、鉄釉蓋（428・429）、鉄釉銭甕（430）がある。播鉢は連房式登窯第1小期に位置付けられるが、多くは江戸時代後期に属する。美濃窯産陶器には鍍釉灯明皿（425）、灰釉双耳壺（427）があり、灯明皿は連房式登窯第1小期に位置付けられる。

瀬戸窯産磁器には染付丸碗（432・433）、染付端反碗（434）があり、染付丸碗は連房式登窯第10小期に位置付けられる。一方、肥前窯産磁器には染付丸碗（431）、関西系窯産磁器には染付端反碗蓋（435）などがあり、江戸時代後期のものと推定される。

224SK（図 50,E-436～441）瀬戸窯産陶器灰釉浅碗（436・437）、美濃窯産陶器灰釉蓋物（438）、土師器焼塩壺蓋（439）と焼塩壺（440）、常滑窯産陶器赤物竈（441）がある。これらは江戸時代後期の資料群である。

23Aa 区包含層出土遺物（図 51,52,E-443～494・S-8）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、常滑窯産陶器などが確認される。

瀬戸・美濃窯産陶器には志野丸皿（443～448）、灰釉蓋（449）、灰釉皿（450～452）、織部向付（456）、志野織部皿（457・458）、御室茶碗（461）、灰釉碗（462）、天目茶碗（463）、播鉢（464～469）、鉄釉筒形香炉（470）、鉄釉植木鉢（472）、鉄釉火鉢（473）などがある。志野丸皿は444が大窯第4段階末葉、448が連房式登窯第2小期に位置付けられる他は、連房式登窯第1小期に属する。播鉢は464が古瀬戸後Ⅳ期新段階、465が連房式登窯第2小期、467が第3～4小期、468が第6小期、469が第5小期にそれぞれ位置付けられる。

美濃窯産陶器には灰釉摺絵蓋（459）と灰釉摺絵鬘皿（460）がある。肥前窯産磁器には青磁皿（453）、染付皿（476・482）、染付碗（479・480・483・484）、瀬戸窯産磁器染付小瓶（481）などがある。肥前窯産陶器には緑釉皿（454・455）、筒形香炉（471）、植木鉢（477）などがある。中国漳州窯系磁器には青花大皿（474・475）と青花碗（478）がある。

土師器にはロクロ調整皿（485～491）、焼塩壺（493）がある。ロクロ調整皿は胎土が赤色系（明褐色を呈するもの：485・486・490・491）と肌色系（487～489）があり、後者は17世紀に属すると推測される。常滑窯産陶器には赤物火鉢（492）があり、底部に多数の孔が存在する焜炉（494）はクリーム色を呈する胎土で産地不明である。S-8は硯である。

23Ac 区包含層出土遺物（図 52,53,E-495～504）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、京・信楽窯産陶器、土師器などが存在する。瀬戸窯産陶器には灰釉筒形香炉（497）、鉄釉乗燭（502）がある。美濃窯産陶器には灰釉摺絵皿（496）、灰釉合子蓋（498）、灰釉合子身（499）、灰釉双耳壺（500）、長石釉壺か瓶（501）などがある。京・信楽窯産陶器には端反碗（495）が、土師器には焼塩壺（503・504）がある。焼塩壺は503が輪積み成形、504は板作り成形の2者がある。

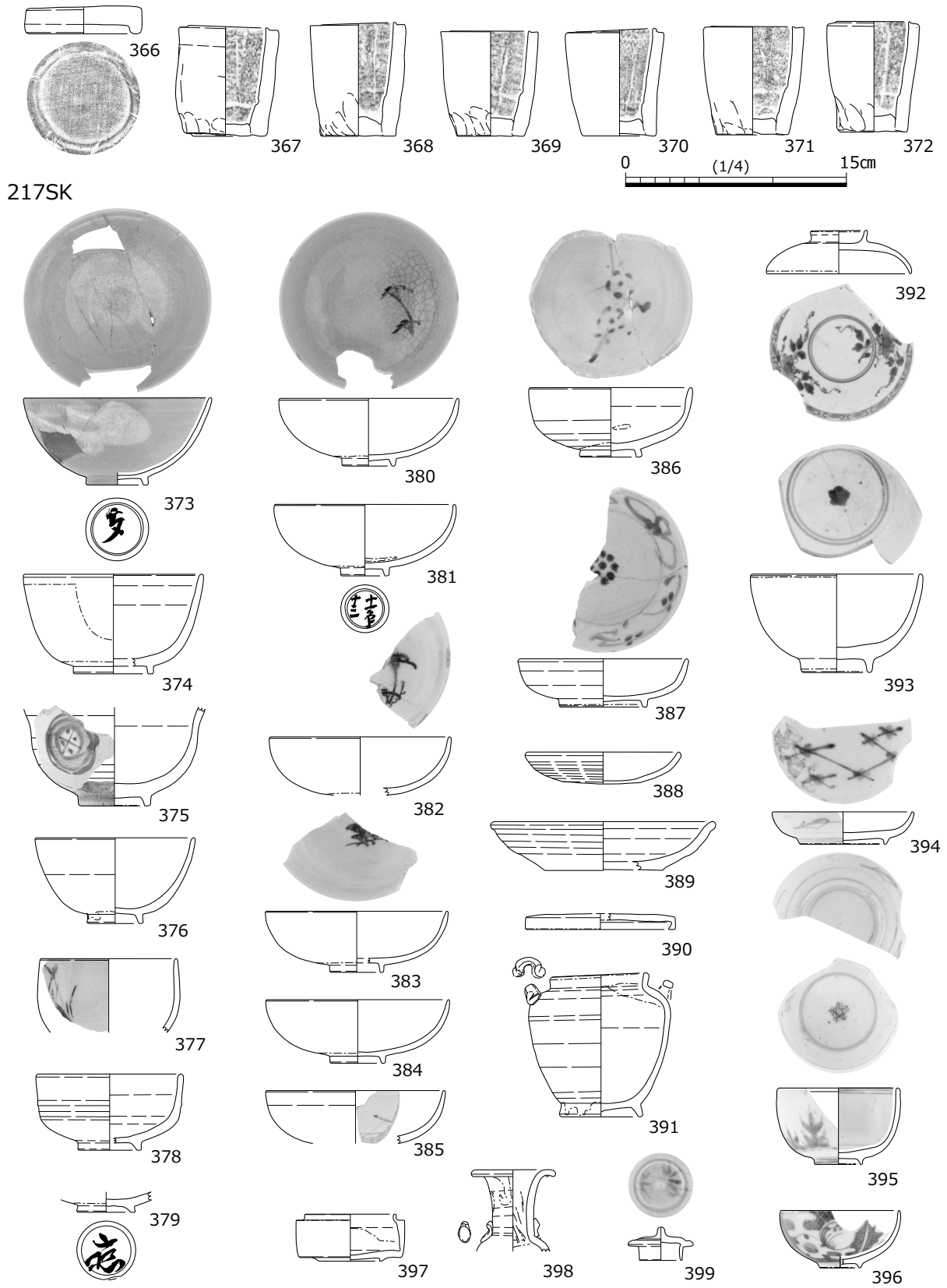


図 48 土器・陶磁器・石製品実測図 17 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

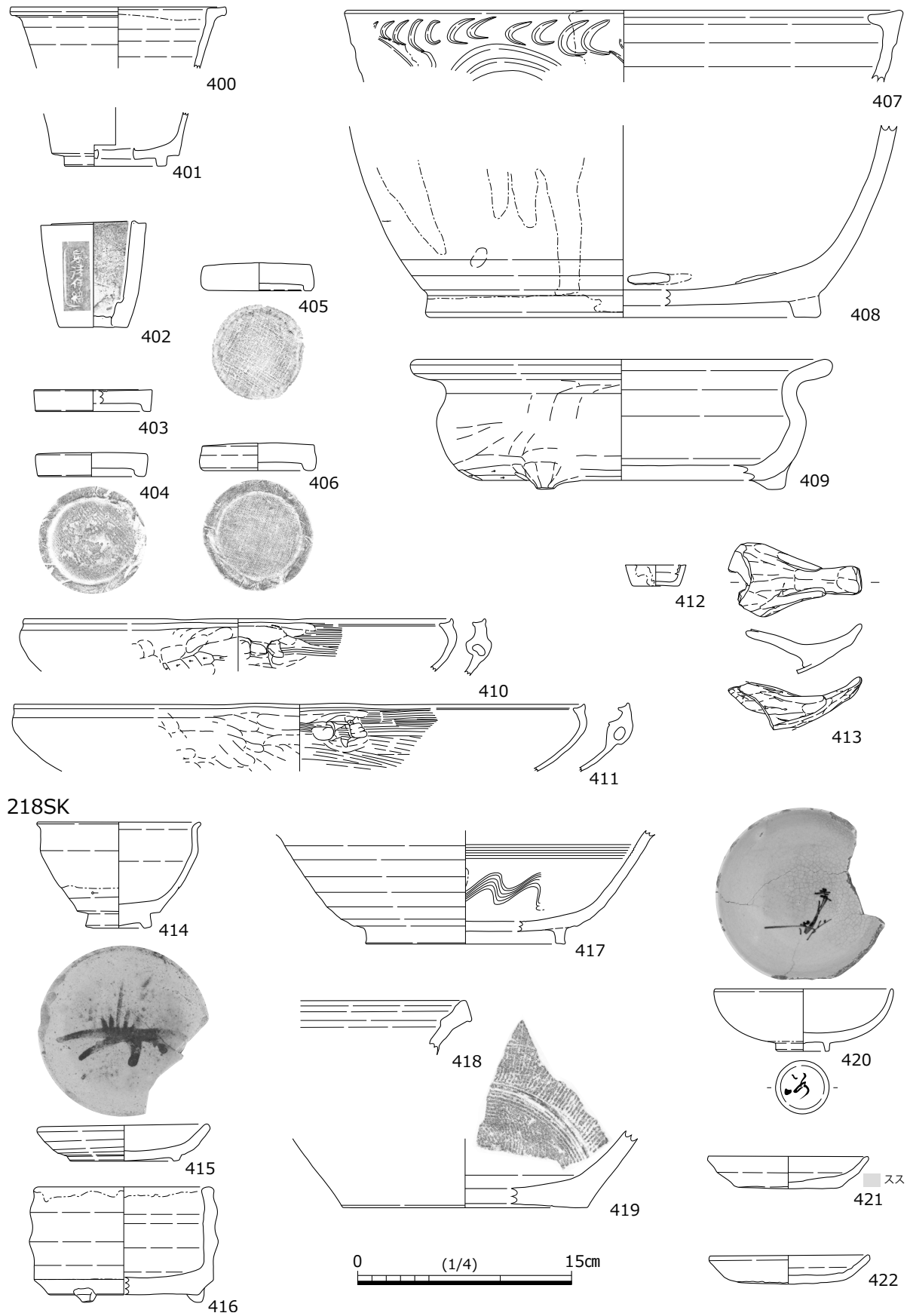


図 49 土器・陶磁器・石製品実測図 18 (縮尺 1/4)

23Ad 区包含層出土遺物（図 52,53,E-505 ~ 522）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器には拳骨茶碗(505)、灰釉植木鉢(518)、鉄釉土瓶(519)、鉄釉双耳鍋(520・521)などがある。美濃窯産陶器には摺絵皿(507)と灰釉ひだ皿(508)がある。肥前窯産磁器には染付丸碗(512)、染付蓋(513)、染付猪口(514)、染付蓋物身(515)などが存在する一方、肥前窯産陶器には灰釉皿(516)がある。この他に京・信楽窯産陶器鉄釉丸碗(506)や堺播鉢(517)がある。

土師器にはロクロ調整皿(509)と土人形(510)と焼塩壺(511)があり、瓦質土器には双耳鍋(522)が認められる。

## (2) 屋敷地 2 の遺構出土遺物

江戸時代の遺物には、瀬戸・美濃窯産陶磁器、常滑窯産陶器、肥前窯産陶磁器、京・信楽窯産陶器、土師器、瓦、石製品、金属製品など多種多様な製品がある。以下、遺構出土資料ごとに紹介する。

102SE（図 54,E-523 ~ 529）瀬戸・美濃窯産陶器などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器には灰釉直縁大皿(523)、志野丸皿(526)、播鉢(524)、植木鉢(527)、美濃窯産陶器鉄釉蓋(525)、常滑窯産陶器赤物井筒(528)土師器焼塩壺(529)などがある。直縁大皿は古瀬戸後IV期、志野丸皿は大窯第4段階末葉、播鉢は連房式登窯第4小期に比定され、植木鉢と鉄釉蓋と常滑窯産陶器赤物井筒は江戸時代後期と考えられる。土師器焼塩壺は輪積み成形で17世紀前葉と推定される。

本資料群は江戸時代初期と江戸時代後期の遺物が混在する資料群とみることができる。

104SE（図 54,55,E-530 ~ 566）瀬戸窯産陶器、美濃窯産陶器、肥前窯産磁器、京・信楽窯産陶器、土師器などが存在する。

瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(530・531)、鉄釉丸碗(532)、志野四方向付(536)、鉄釉双耳鍋(551)、播鉢(557)、灰釉植木鉢(558)、灰釉浅碗(559)がある。天目茶碗は大窯第4段階、志野四方向付は大窯第4段階末葉、播鉢は連房式登窯第9小期、灰釉植木鉢は第9~10小期に比定される。

美濃窯産陶器には灰釉小碗(533)、飴釉片口(534)、鍔釉油皿(535)、灰釉合子蓋(537・542)、灰釉合子身(538・539)、土瓶に伴う鉄釉蓋(540)、染付徳利(548)、鍔釉徳利(549)、鍔釉双耳鍋(550)などがあり、江戸時代中期から後期に属している。肥前窯産磁器には染付丸碗(544~547)が、京・信楽窯産陶器には赤色の上絵付が施された灰釉蓋(541)が、関西系窯産磁器には口縁端部に鉄釉が施された染付蓋(543)がある。

土師器には焼塩壺(552・553)、焼塩壺蓋(554~556)、土人形(560)、ロクロ調整皿(561~565)などがある。焼塩壺は板作り成形で、焼塩壺蓋(556)の上面と内面にはそれぞれ墨書が確認できるが判読できない。常滑窯産陶器には赤物井筒(566)がある。

105SK（図 55,E-567）瀬戸窯産陶器灰釉丸碗(567)は江戸時代中期のものと考えられる。

108SE（図 55,E-568）瀬戸・美濃窯産陶器播鉢(568)があり、連房式登窯第1小期に位置付けられる。

114SX（図 55,E-569・570）瀬戸・美濃窯産陶器播鉢(570)は江戸時代前期に属するものとみられ、美濃窯産陶器灰釉丸皿(569)は連房式登窯第1~2小期に比定される。江戸時代初期の資料群とみることができる。

120SD (図 56,E-571・572) 瀬戸・美濃窯産陶器播鉢 (571) は連房式登窯第1小期に、美濃窯産陶器腰鍔茶碗 (572) は第5～6小期位置付けられる。戦国期大溝上層の混入遺物である。

121SD (図 56,E-573～575) 瀬戸窯産陶器灰釉鉢 (573)、瀬戸窯産陶器播鉢 (574)、関西系窯産磁器染付碗 (575) などがある。播鉢は連房式登窯第6小期に位置付けられ、全体として18世紀の資料群とみることができる。戦国期大溝上層の混入遺物である。

124SG (図 56,E-576) 瀬戸・美濃窯産陶器志野丸皿 (576) は連房式登窯第1～2小期に位置付けられ、底部に墨書が記されている。池の機能時、または埋没時に関連する遺物と考えられる。

23Ab 区包含層出土遺物 (図 56,E-577～581) 備前窯産陶器には焼締無釉大皿 (577) があり、外面に火襷痕が確認され16世紀末から17世紀前葉のものと思われる。肥前窯産磁器には染付丸皿 (578) がある。瀬戸・美濃窯産陶器には志野丸皿 (579) があり、連房式登窯第1～2小期に位置付けられる。土師器には輪積み成形の焼塩壺 (580) の他に、弥生時代後期から古墳時代前期の高坏脚部 (581) など存在する。

23A 区包含層出土遺物 (図 56,E-582～589) 瀬戸窯産陶器には鉄釉火鉢 (587) が、美濃窯産陶器には京焼風の灰釉浅碗 (582) が、肥前窯産磁器には染付碗蓋 (583) と染付丸皿 (584) が、肥前窯産陶器には白化粧に緑釉などが流し掛けされた二彩手鉢 (585) が、備前窯産陶器には薄手の焼締花入 (586) がある。土師器ロクロ調整皿 (588) は肌色系の胎土で底部外面に板状圧痕などが残存する。焼塩壺 (589) は輪積み成形である。

### (3) 23A 区出土陶磁器の検討

遺構一括出土遺物の主に組成から、段階区分を考察する。検討の結果、以下のように区分できた。

戦国時代：瀬戸・美濃窯産陶器鉄釉稜皿などの器種を主体とする資料群で、大窯第2段階＝16世紀第3四半期を中心とした年代に比定できる。225SK が該当する。

江戸時代 1a 期：瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗・志野丸皿・向付、中国産磁器青花皿などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第1～2小期＝17世紀前半を中心とした年代に比定できる。049SK・074SX・179SK・108SK・114SX・124SG と 060SD・065SD 上層混入資料が該当する。

江戸時代 1b 期：瀬戸・美濃窯産陶器笠原鉢などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第4小期＝17世紀後半を中心とした年代に比定できる。011SK・185SK が該当する。

江戸時代 1c 期：瀬戸・美濃窯産陶器鉄釉丸碗などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第5～6小期＝18世紀前半を中心とした年代に比定できる。175SK・120SK・121SK が該当する。

江戸時代 2a 期：瀬戸・美濃窯産陶器灰釉摺絵製品・染付小碗、乾山写などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第7～8小期＝18世紀後半を中心とした年代に比定できる。027SK・063SX が該当する。

江戸時代 2b 期：瀬戸・美濃窯産陶器柳茶碗・染付梅文皿・植木鉢などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第9小期＝18世紀後葉から19世紀前葉を中心とした年代に比定できる。201SK・202SX・211SD・218SK・221SK・224SK・015SK・016SX・025SK・102SE・104SE が該当する。

江戸時代 2c 期：瀬戸・美濃窯産陶器染付端反碗・火鉢・双耳鍋などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第 10 小期 = 19 世紀前半を中心とした年代に比定できる。001SK・044SX・173SD・178SK・204SK・213SK・217SK が該当する。

江戸時代 2d 期：瀬戸窯産磁器端反碗などの器種を主体とする資料群で、連房式登窯第 11 小期 = 19 世紀中葉を中心とした年代に比定できる。172SX・181SK が該当する。

(4) 江戸時代の瓦類

江戸時代以降の遺物のうち瓦が多数出土しているが、ここでは軒瓦を中心に紹介する。まず、瓦当面の紋様構成から、以下のとおりあらかじめ分類しておく。

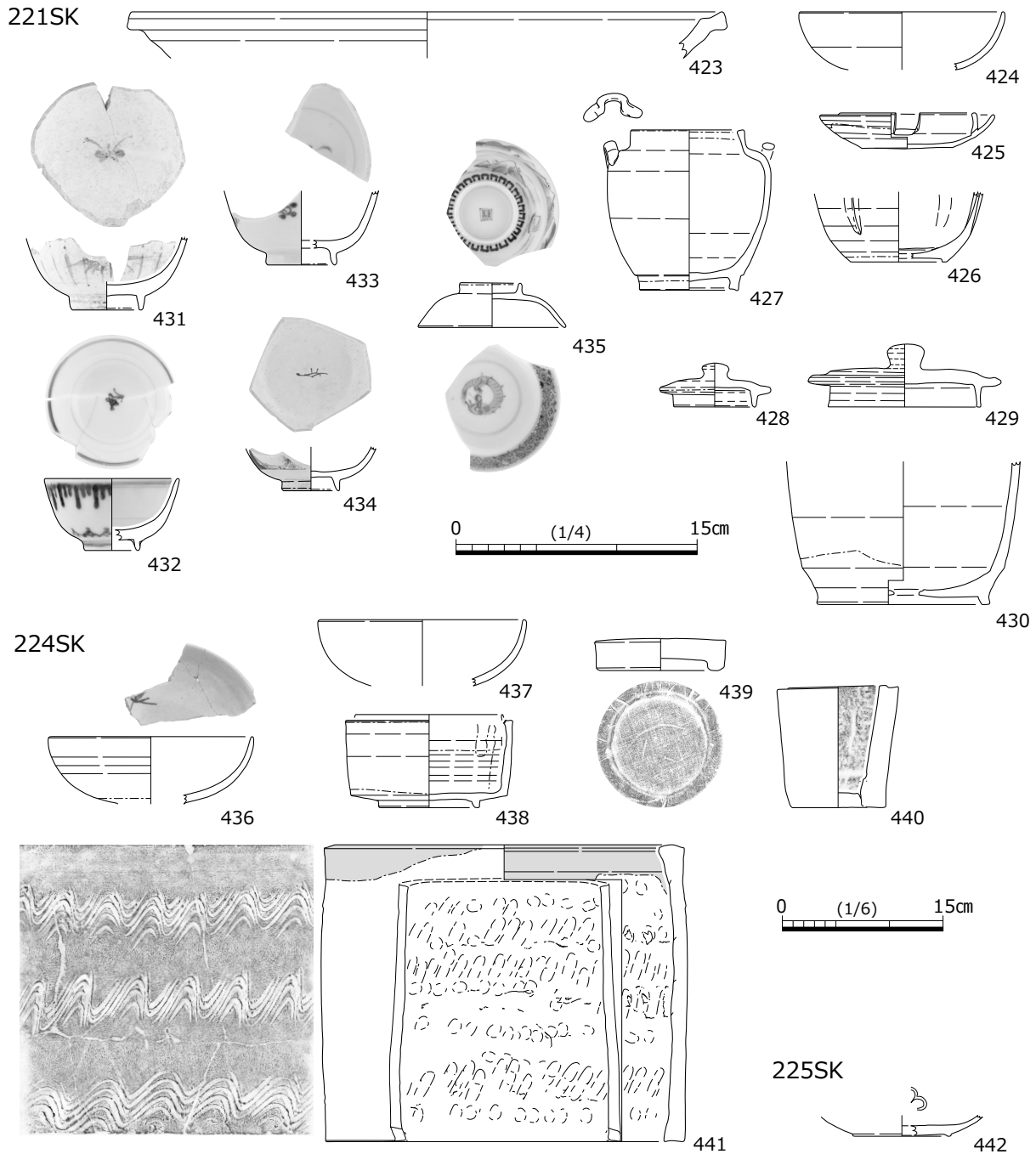


図 50 土器・陶磁器・石製品実測図 19 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

23Aa 区包含層

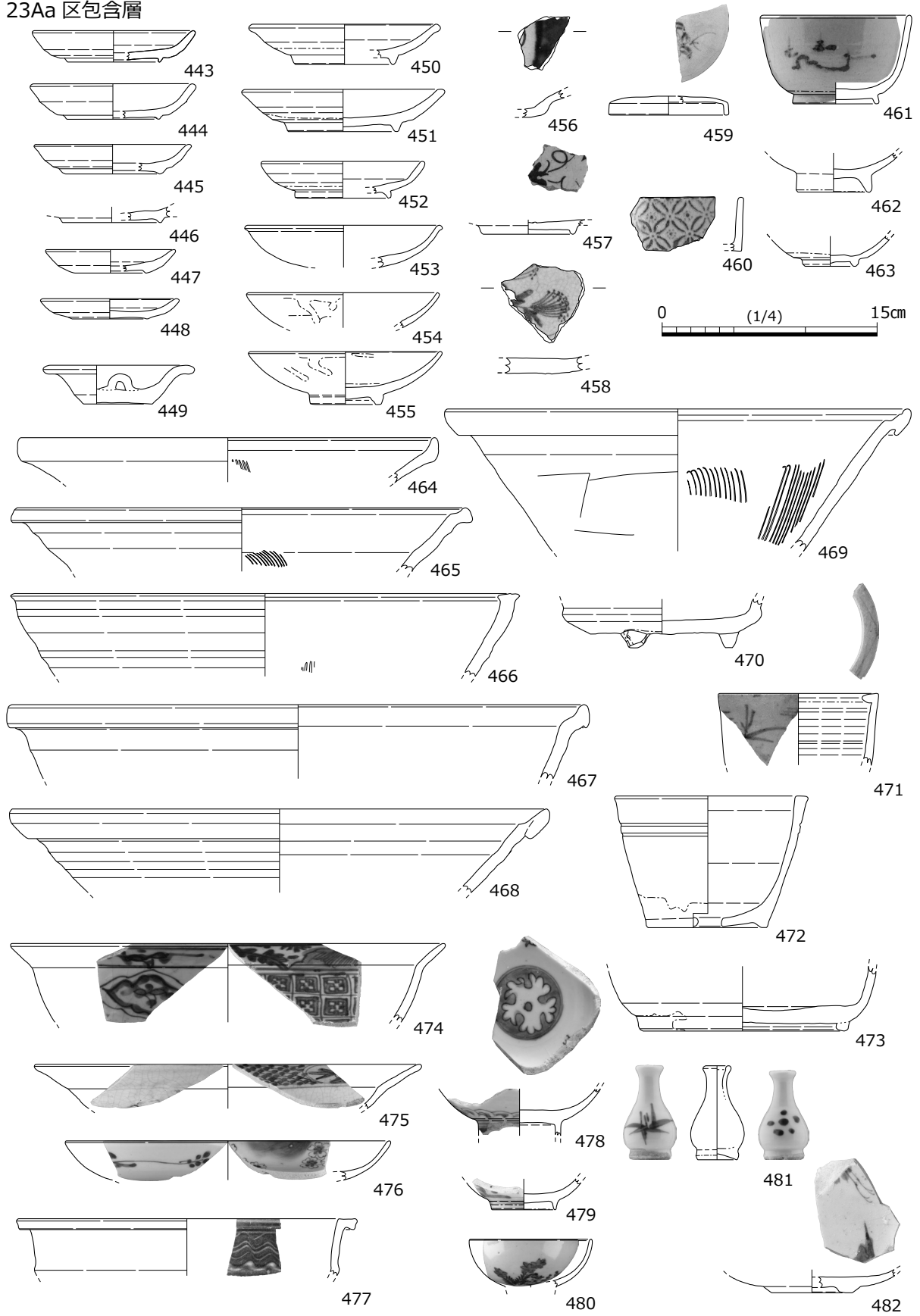


図 51 土器・陶磁器・石製品実測図 20 (縮尺 1/4)

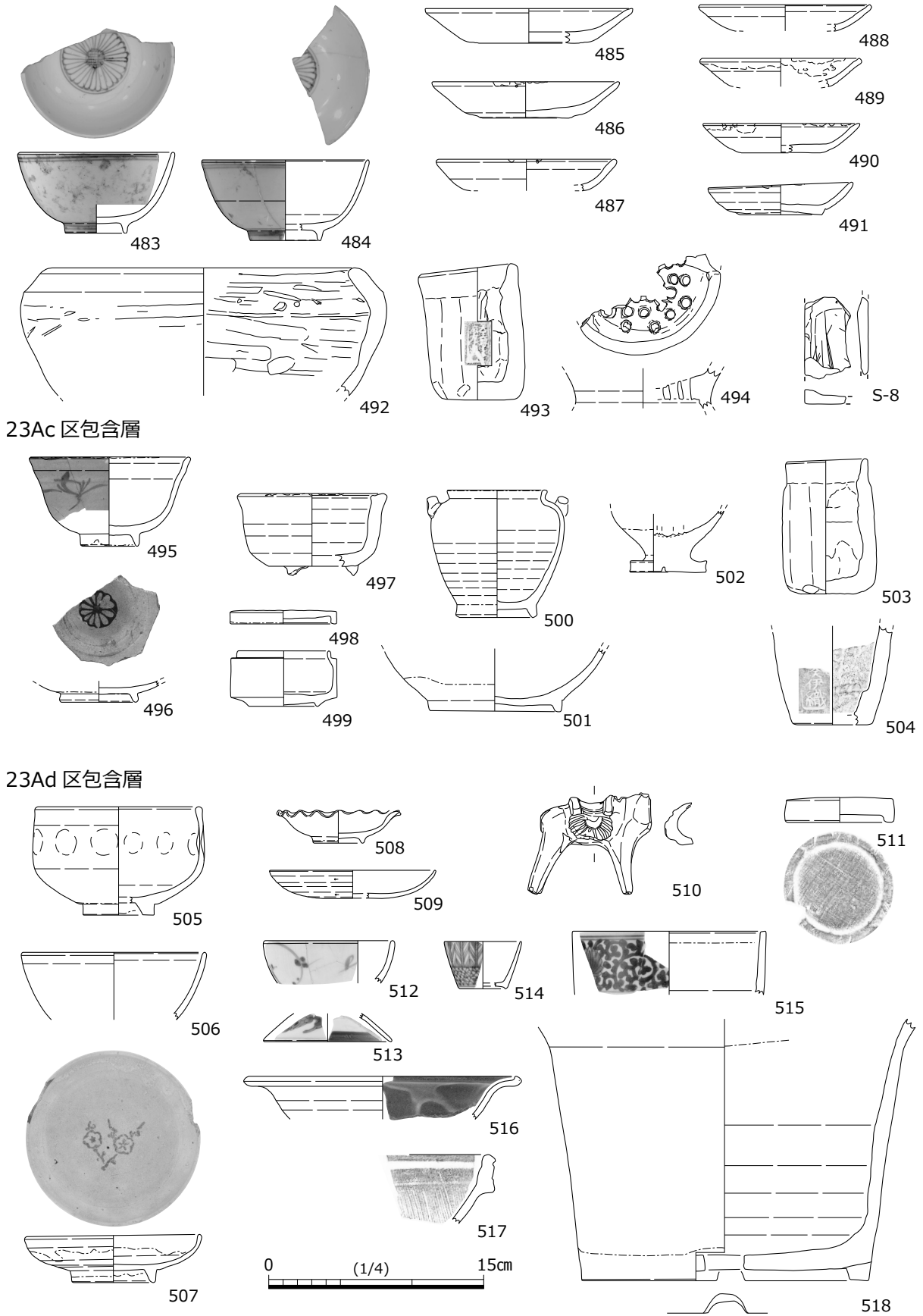


図 52 土器・陶磁器・石製品実測図 21 (縮尺 1/4)

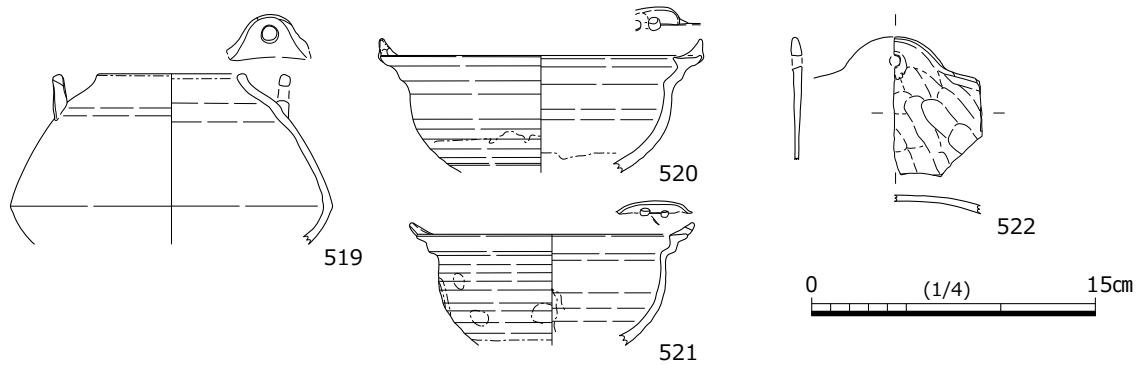


図 53 土器・陶磁器・石製品実測図 22 (縮尺 1/4)

軒丸瓦 01 型式：左巻き三巴紋に 12 珠紋が配置されるものである。巴紋は太く短く、珠紋は大きい。

軒丸瓦 02 型式：右巻き三巴紋に推定 16 珠紋が配置されるものである。巴紋はやや短く、珠紋はそれほど大きくはない。

軒平瓦 01 型式：中心飾りに花紋を置き、左右に 4 反転唐草紋が配置されるものである。愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』の H01 型式に該当する。

軒棧瓦 01 型式：丸瓦部は左巻き三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部は中心飾りの上位に宝珠を配置し唐草紋が左右に 3 条伸びるものである。

軒棧瓦 02 型式：丸瓦部は左巻き三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部は中心飾りに 7 珠紋を配置し左右に 2 反転唐草紋が配置されるもので、反転唐草紋が太くやや大きいタイプである。

軒棧瓦 03 型式：丸瓦部は左巻き三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部は中心飾りに 7 珠紋を配置し左右に 2 反転唐草紋が配置されるもので、2 反転唐草紋が細くやや小さいタイプである。

軒棧瓦 04 型式：丸瓦部は左巻き三巴紋に 10 珠紋が配置され、平瓦部は全体の紋様構成は不明であるが、少なくとも 2 反転唐草紋が確認されるものである。

軒棧瓦 05 型式：丸瓦部は 12 弁からなる菊花紋が配置され、平瓦部は中心飾りに 5 弁からなる半菊花紋を置き左右に上方に向かう唐草紋と 3 反転唐草紋が配置されるものである。

軒棧瓦 06 型式：丸瓦部は不明だが、平瓦部は中心飾りに 3 子葉紋を置き 2 反転唐草紋が配置されるものである。

001SK (図 57,E-1001 ~ 1009) 001SK 出土瓦には軒棧瓦 01 型式 (1001 ~ 1005)、軒棧瓦 03 型式 (1006・1007)、軒棧瓦 05 型式 (1008・1009) がある、このうち、1002 と 1006 は表面がやや強く銀色の光沢を有するもので、1001 と 1005 と 1009 はやや銀色の光沢を持つものである。

015SK (図 57,E-1010 ~ 1015) 015SK 出土瓦には軒丸瓦 01 型式 (1010)、軒棧瓦 02 型式 (1012・1013)、軒棧瓦 04 型式 (1011) および輪違い瓦 (1014・1015) がある、このうち、1010、1012 と 1013 は表面がやや強く銀色の光沢を有する。輪違い瓦は平面形が台形状を呈しており、焼成はやや不良である。

025SK (図 58,E-1016 ~ 1026) 025SK 出土瓦には軒平瓦 01 型式 (1016)、軒棧瓦 01 型式 (1017・1018)、軒棧瓦 02 型式 (1021)、軒棧瓦 03 型式 (1022・1025)、軒棧瓦 04 型式 (1019・1023・1024)、軒平瓦 06 型式 (1020)、および菊丸瓦 (1026) がある、このうち、1019 ~ 1024 は表面がやや強く銀色の光沢を有するもので、1017 と 1025 はやや銀色の光沢を持つものである。1015 と 1026 は焼成がやや不良である。

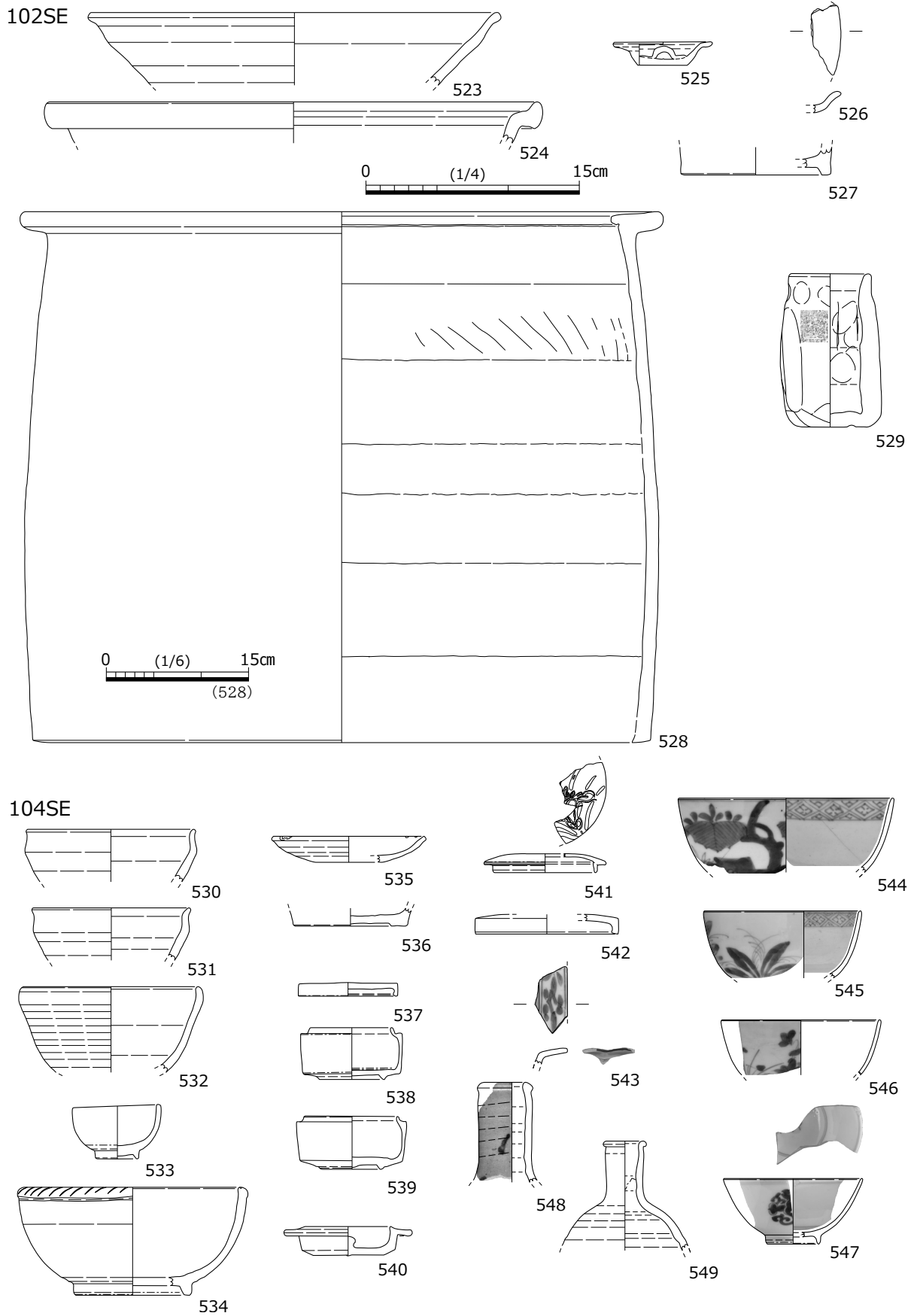


図 54 土器・陶磁器・石製品実測図 23 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

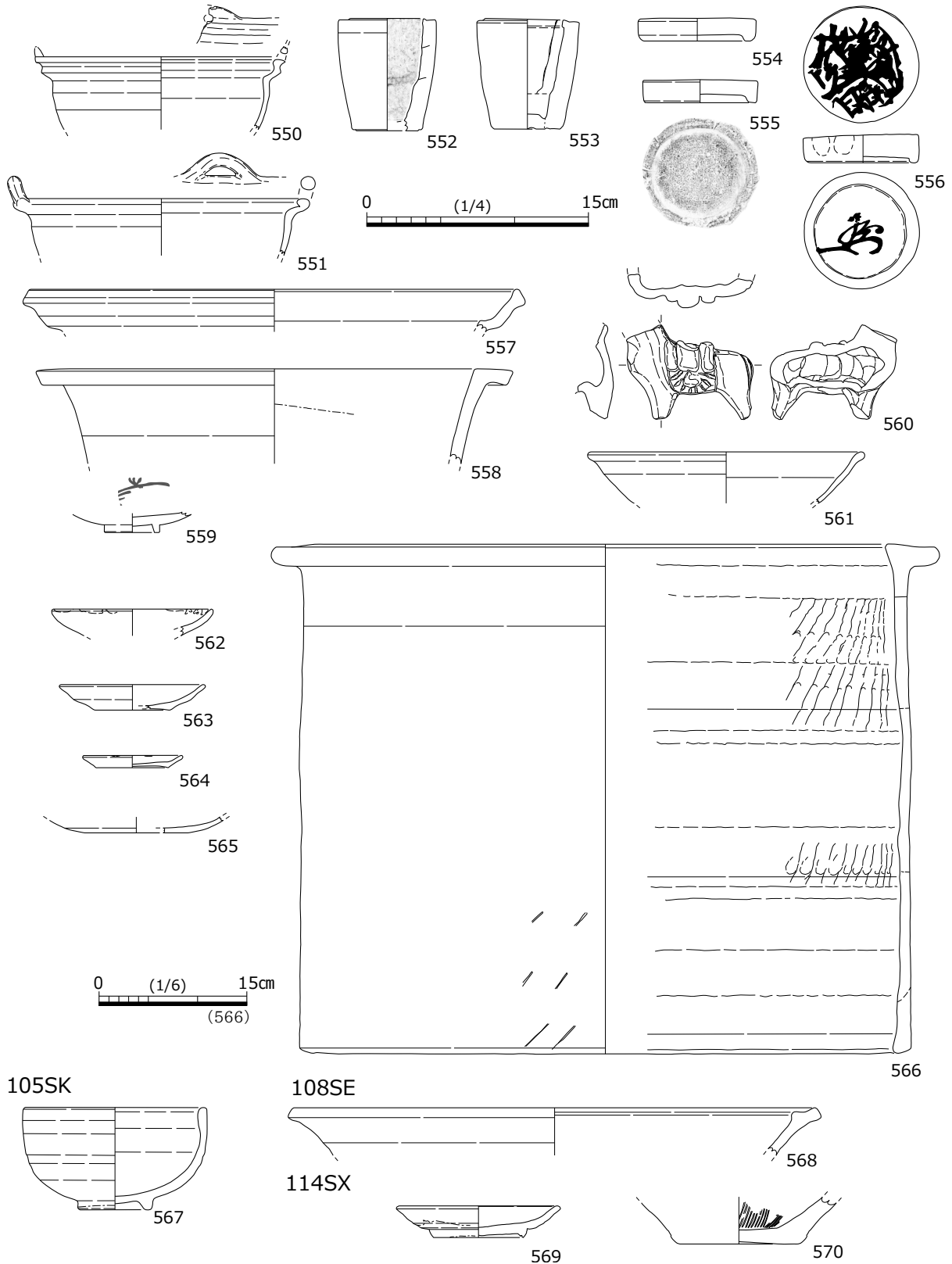


図 55 土器・陶磁器・石製品実測図 24 (縮尺 1/4, 一部 1/6)

042SK (図 58,E-1027) 042SK 出土瓦には菊丸瓦 (1027) があり、焼成がやや不良である。

172SX (図 58,E-1028) 172SK 出土瓦には棧瓦系の道具瓦 (1028) があり、丸に「三」の刻印が施されている。

181SK (図 58,E-1029 ~ 1034) 出土瓦には軒棧瓦 06 型式 (1032) の他に、棧瓦片 (1029 ~ 1031・1033) と丸瓦 (1034) がある。1029 と 1030 の小口面には「棚尾左兵衛」、1031 の小口面には「三州棚尾左兵衛」の刻印が施されている (なお棚は正確には木偏に明である)。棚尾左兵衛は天明年間に開業されたと伝えられる現在の碧南市棚尾にある瓦職人永坂左兵衛に該当すると考えられる。このうち、1031 と 1032 は表面がやや強く銀色の光沢を有するもので、1029 と 1030 はやや銀色の光沢を持つものである。

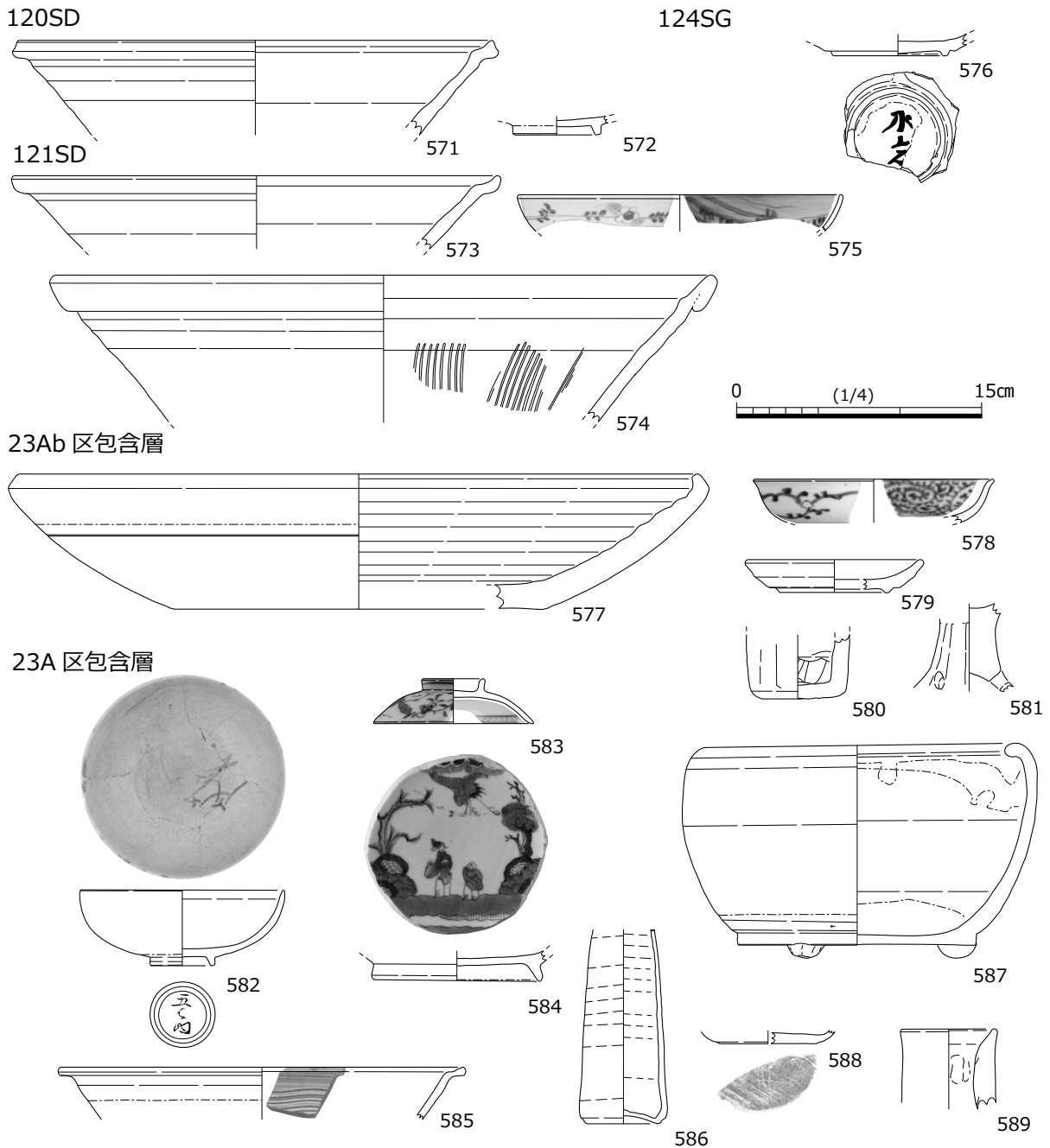


図 56 土器・陶磁器・石製品実測図 25 (縮尺 1/4)

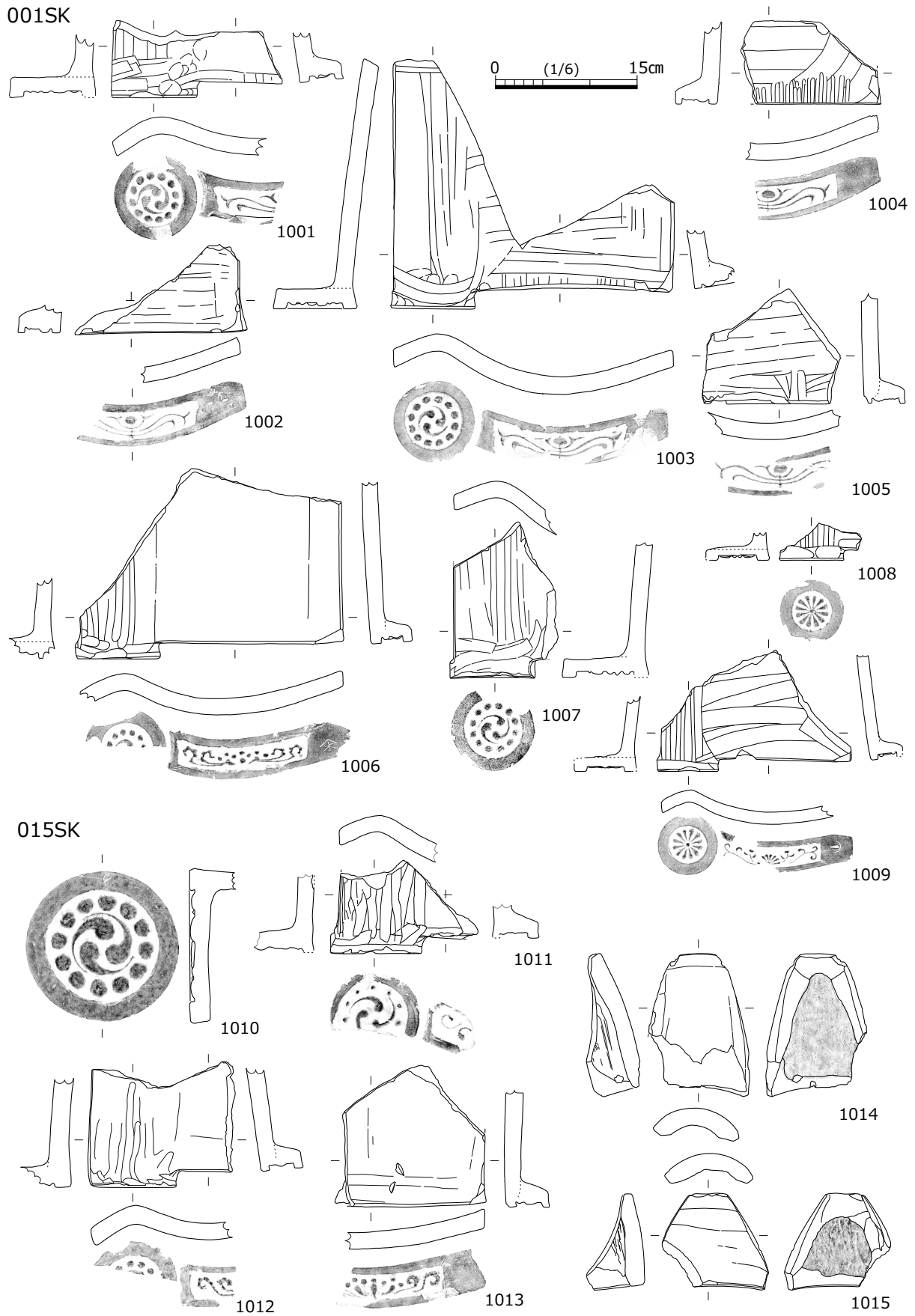


図 57 江戸時代の瓦実測図 1 (縮尺 1/6)

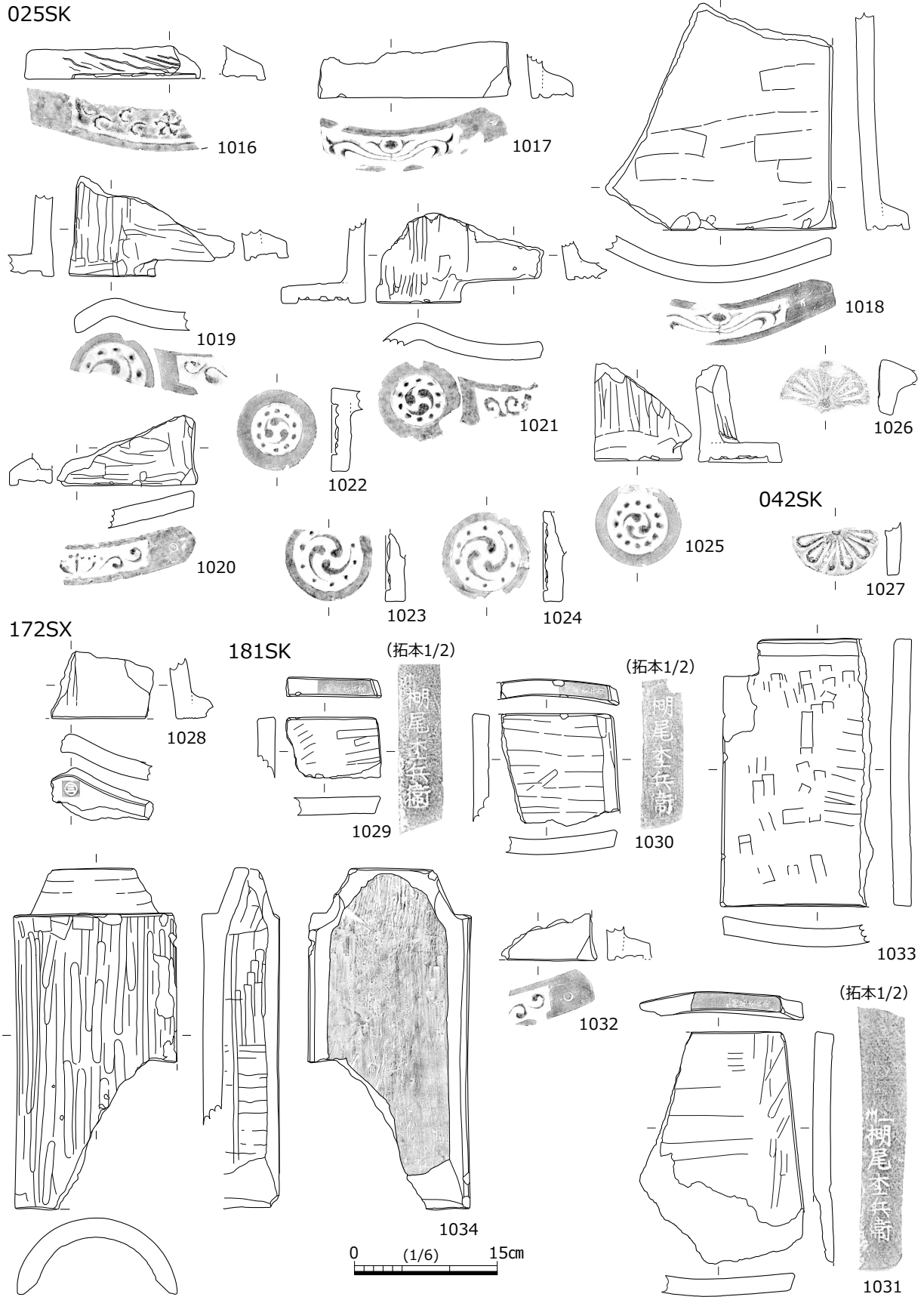


図 58 江戸時代の瓦実測図 2 (縮尺 1/6, 拓本 1/2)

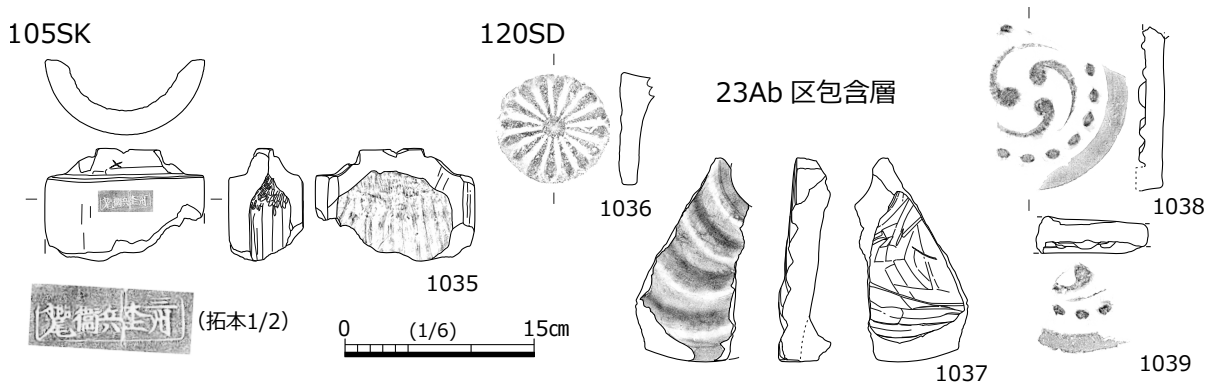


図 59 江戸時代の瓦実測図 3 (縮尺 1/6, 拓本 1/2)

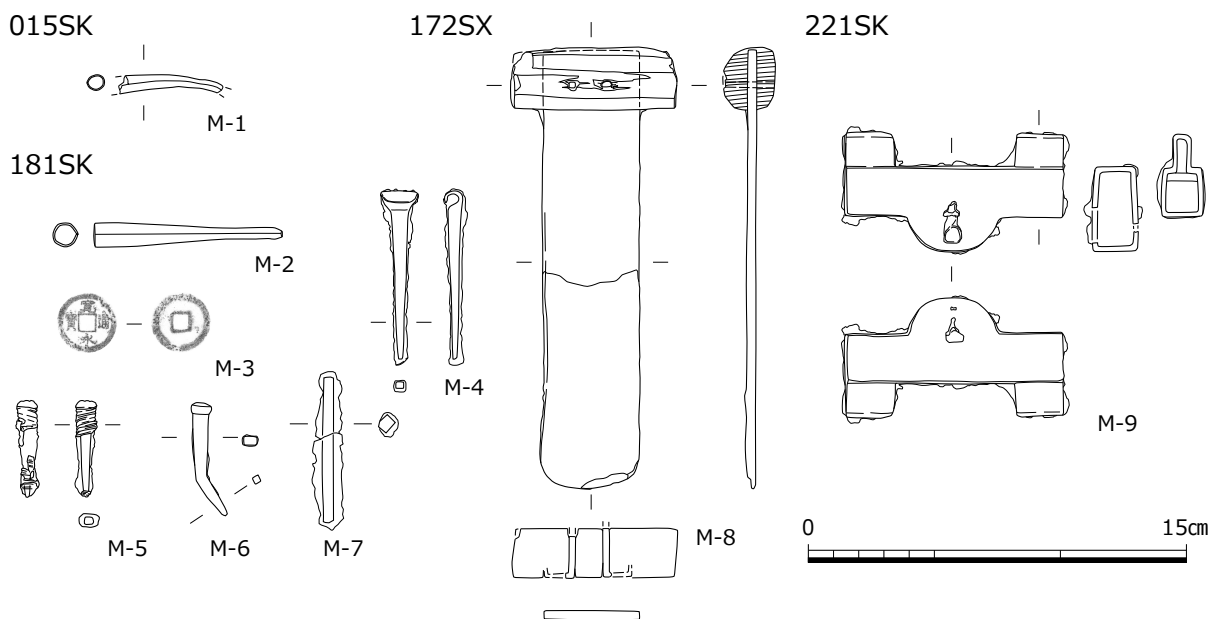


図 60 金属製品実測図 (縮尺 1/3)

105SK (図 59,E-1035) 丸瓦 1035 の外面には「三州棚尾左兵衛」の刻印が施されている。

120SD (図 59,E-1036) やや焼成不良の輪違い瓦 (1036) がある。

23Ab 区出土瓦 (図 59 ~ 59,61,E-1037 ~ 1039) 1037 は鯪瓦の破片で、表面には強い銀色の光沢がある 1038 と 1039 は軒丸瓦 02 型式である。

(5) 江戸時代以降の金属製品

015SK (図 60,M-1) M-1 は銅製品煙管羅字部の破片である。

181SK (図 60,M-2 ~ 7) M-2 は銅製品煙管吸口部、M-3 は銅製品銭貨「寛永通寶」である。M-4 ~ 7 は鉄製品釘である。

172SX (図 60,M-8) M-8 は板状金属片に木質の取手が付く。先端は使用により丸く摩滅している。

221SK (図 60,M-9) M-9 は和錠、鉄製品錠前である。

表 2 瓦刻印の種類と部位

刻印タイプ	種別	刻印位置	調査区	遺構番号	E-no.
三州棚尾空兵衛 (ヨコ)	丸瓦	玉縁寄りの凸面	Ab1	105SK	1035
三州棚尾空兵衛 (タテ)	平瓦	端面	Ac1	181SK	1029
	平瓦	端面	Ac1	181SK	1030
	平瓦	端面	Ac1	181SK	1031
	平瓦	端面	Ac1	181SKより下面	1040
	平瓦	端面	Ad1	213SK	1041
万	軒棧瓦 (大坂式)	瓦当面の端	Aa1	001SK	1002
	軒棧瓦 (大坂式)	瓦当面の端	Aa1	025SK	1018
	平瓦	端面	Aa1	001SK西半	1042
	平瓦	端面	Aa1	001SK西半	1043
ヤマ本	軒棧瓦 (東海式)	瓦当面の端	Aa1	001SK	1006
	平瓦	端面	Ac1	181SK東端	1044
○	軒棧瓦 (東海式)	瓦当面の端	Aa1	025SK	1020
	軒棧瓦 (東海式)	瓦当面の端	Ac1	181SK	1032
○ー	軒棧瓦	瓦当面の端	Aa1	001SK	1009
○に (陽刻) 二	平瓦	端面	Ac1	172SD	1045
○三	棧瓦	端面	Ac1	172SD	1028
	軒棧瓦 (東海式)	瓦当面の端	Ab1	攪乱	1046
○大	平瓦	端面	Aa1	025SK	1047
○水	平瓦	端面	Ac1	173SK	1048
○に記号 (柄鏡状)	平瓦	端面	Aa1	025SK	1049

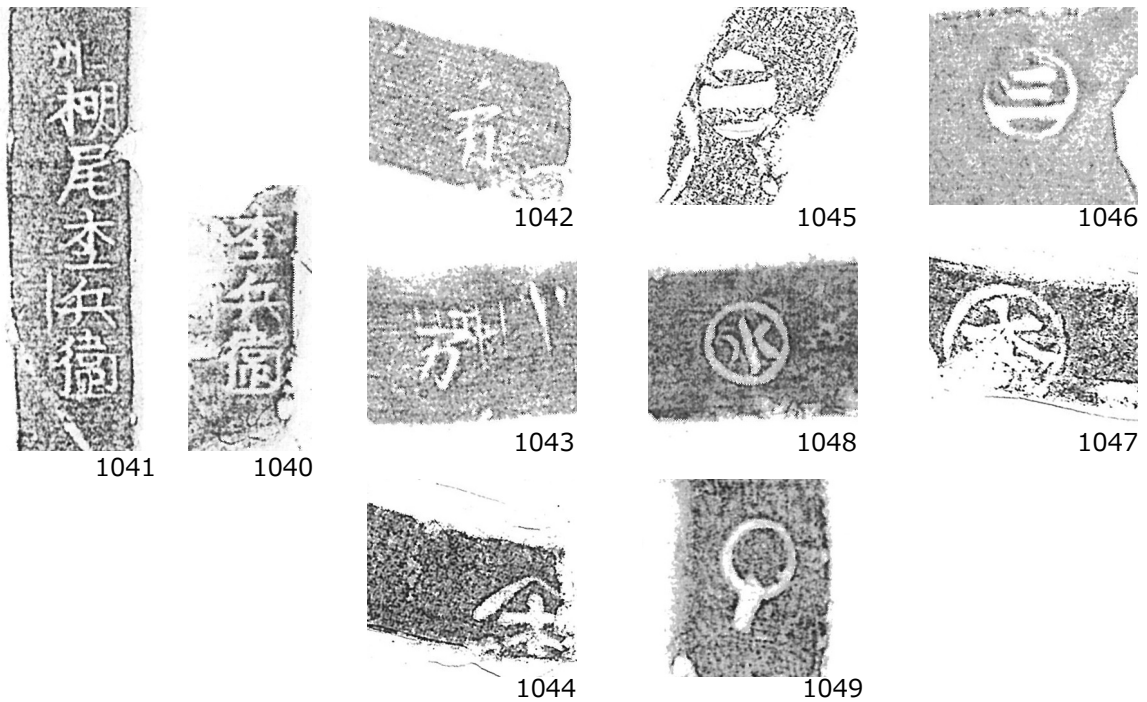


図 61 瓦刻印の拓本 (縮尺 1/1)

## 第 5 章 自然科学分析

### 1 名古屋城三の丸遺跡の花粉分析

#### 分析の目的および分析結果概要

令和5年度の名古屋城三の丸遺跡の調査で検出された江戸時代武家屋敷の庭園遺構に関連して、周辺の古環境復元を目的に（株）パレオ・ラボに委託して花粉分析を行なった。分析試料は、23Ab 区北西部で確認された池（124SG）で採取された2点と23Aa 区北東部で確認された埋甕遺構（025SK）で採取された1点の計3試料である。前者の試料2点は池の底面と想定している白色粘土の直上で採取したものである。ただし、池の廃絶時の埋土との区分は必ずしも明瞭ではない。後者は埋設された常滑窯産大甕の内側に堆積していた土壌から採取した。こちらは18世紀第4四半期以降に構築された「水琴窟」と想定している遺構である。

分析結果により、池（124SG）にはアカマツやクロマツに代表されるマツ属複雑管束亜属やサワグルミ属一クルミ属の花粉が入り込む環境であったこと、サクラ属やツバキ属、ツツジ科など観賞用の樹木やユリ科やフヨウ属などの草本花粉もあり、これらが周囲の植栽として植えられていた可能性が推定された。また、ソバやワタ、ベニバナなどの栽培植物の花粉もみられ、近辺に耕作地が存在した可能性も推定される。埋甕遺構（025SK）では、マツやスギなどの大量に飛散する樹木花粉にほぼ限定された。開口部が狭いという遺構の形状の影響が大きいと考えられる。

以下に（株）パレオ・ラボの分析報告を提示する。

森 将志「名古屋城三の丸遺跡の花粉分析」（株）パレオ・ラボ,2024

#### 分析試料と方法

分析試料は、池124SGから採取された2点と025SK 甕内から採取された1点の、計3試料である（表3）。これらの試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

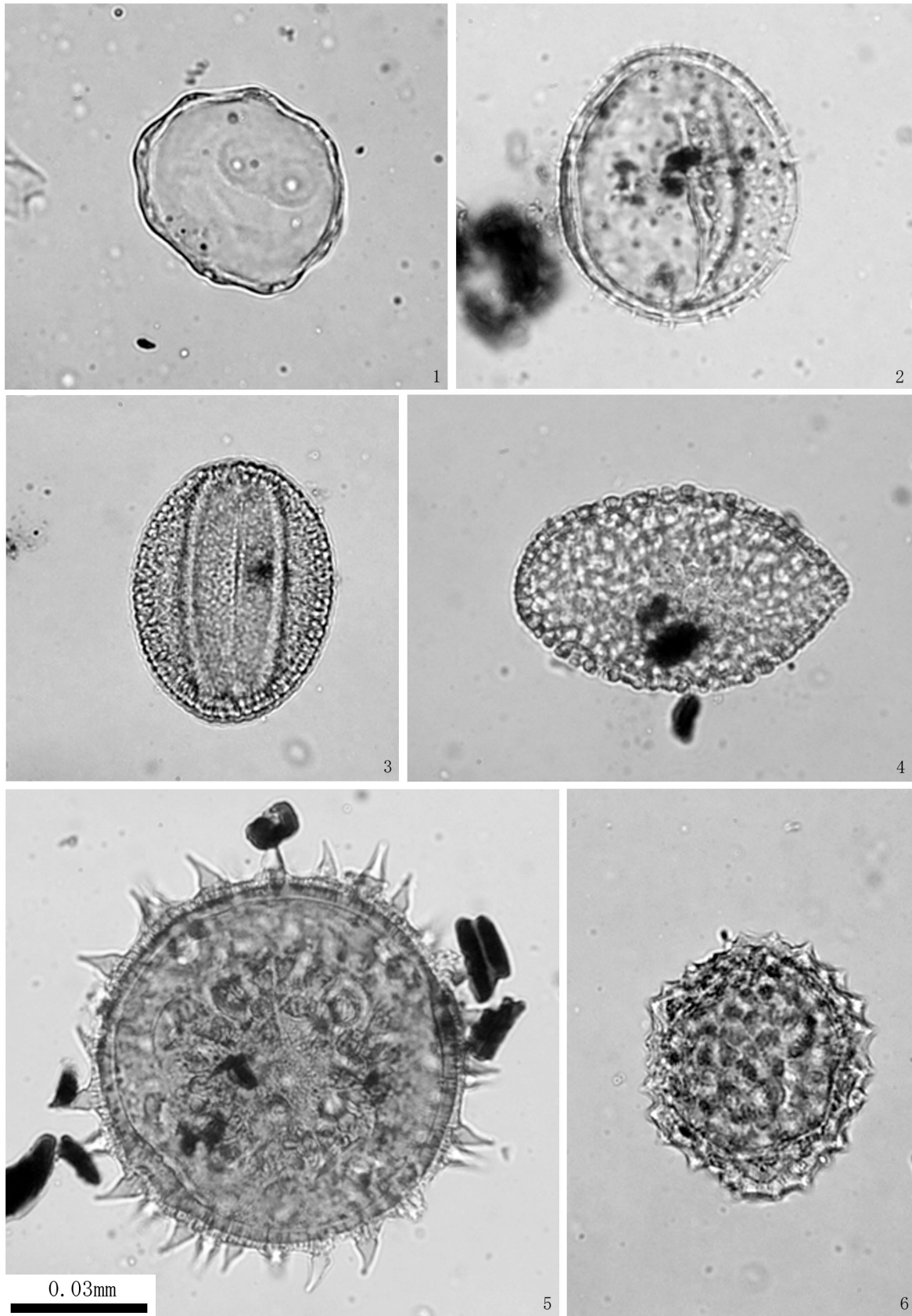
表3 花粉分析試料一覧

遺跡記号・調査区	遺構番号	遺構性格・層位	時期	グリッド	堆積物の特徴
2NS23Ab	池124SG①	池埋土 最下層	江戸	985210_99521	にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト
	池124SG②			0	にぶい黄褐色 (10YR6/3) シルト
2NS23Aa	025SK 甕内埋土	水琴窟甕内埋土		980125	黒褐色 (2.5Y3/2) シルト

試料（湿重量約3g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本(PLC.4140～4145)を作製し、写真を図62に載せた。

#### 結果

3試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉27、草本花粉19、形態分類のシダ植物胞子2の、総計48である。これらの花粉・胞子の一覧表を表4に、花粉分布図を図6に示した。花粉分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数

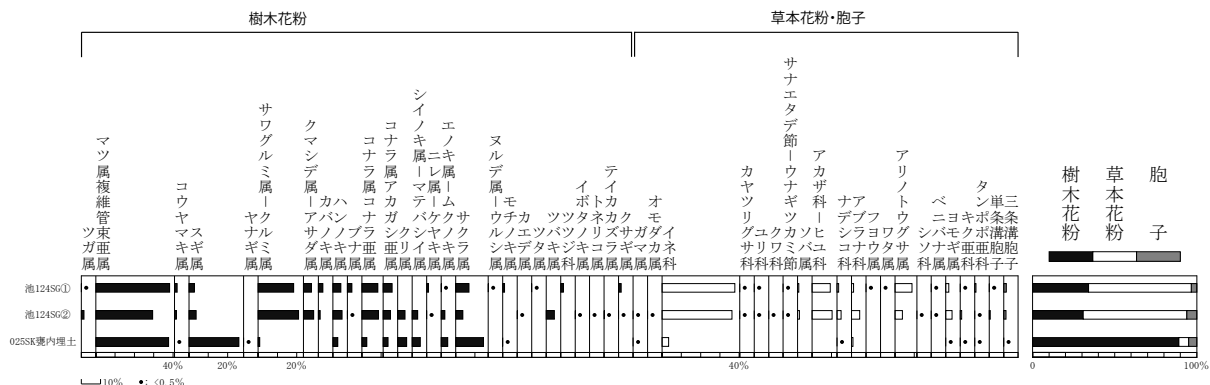


1. サワグルミ属-クルミ属 (PLC. 4140) 2. クサギ属 (PLC. 4141) 3. ソバ属 (PLC. 4145)  
4. ユリ科 (PLC. 4143) 5. ワタ属 (PLC. 4144) 6. ベニバナ属 (PLC. 4145)

図 62 池 124SG ①から産出した花粉化石

表 4 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	池124SG①	池124SG②	025SK甕内埋土
樹木				
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	3	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	83	62	89
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	3	2	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	6	8	61
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	1
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	40	44	2
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	9	11	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	5	2	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	9	10	6
<i>Fagus</i>	ブナ属	5	1	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	18	18	6
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	10	8	6
<i>Castanea</i>	クリ属	-	8	11
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	-	6	10
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	2	1	-
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	1	4	8
<i>Cerasus</i>	サクラ属	15	8	34
<i>Rhus-Toxicodendron</i>	ヌルデ属-ウルシ属	1	-	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	2	-	1
<i>Acer</i>	カエデ属	-	1	-
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属	1	-	-
<i>Camellia</i>	ツバキ属	-	9	-
Ericaceae	ツツジ科	3	-	-
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	1	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	1	-
<i>Trachelospermum</i>	テイカカズラ属	-	1	-
<i>Clerodendron</i>	クサギ属	3	1	-
草本				
<i>Typha</i>	ガマ属	-	1	1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	-	1	-
Gramineae	イネ科	240	247	9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	1	-
Liliaceae	ユリ科	1	1	-
Moraceae	クワ科	-	1	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	1	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	4	6	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	60	71	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	14	1
Brassicaceae	アブラナ科	7	29	2
<i>Hibiscus</i>	フヨウ属	1	-	-
<i>Gossypium</i>	ワタ属	1	-	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	56	26	-
Labiatae	シソ科	-	1	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	3	2	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	22	1
Tubuliflorae	キク亜科	3	5	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	4	2	1
シダ植物				
monolete type spore	単条溝孢子	2	4	-
trilete type spore	三条溝孢子	8	8	1
Arboreal pollen	樹木花粉	217	210	236
Nonarboreal pollen	草本花粉	398	431	16
Spores	シダ植物孢子	10	12	1
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	625	653	253
unknown	不明	11	29	12



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で算出した。)

図 63 花粉分布図

を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン(-)で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科の花粉には樹木起源と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

池 124SG から得られた花粉化石群集は、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やサワグルミ属—クルミ属が、草本花粉ではイネ科やアカザ科-ヒユ科、アリノトウグサ属の産出が目立つ。025SK 甕内から得られた花粉化石群集は、樹木花粉の産出割合が高く、マツ属複維管束亜属やスギ属の産出が目立つ。

**考察**

検鏡の結果、池 124SG と 025SK 甕内から産出した花粉化石群集は組成が異なっていた。その理由はいくつか考えられ、場所による植生の相違を反映している可能性や、遺構の違いによる堆積過程の違いを反映している可能性、時期差による植生の違いを反映している可能性などがある。特に、水琴窟甕の花粉組成はほとんどが樹木花粉で、マツ属複維管束亜属とスギ属の産出率が高いという特徴があった。水琴窟甕は開口部が非常に限定的であるため、大量の花粉を広範囲に飛散する樹木花粉のみが入り込んでいた可能性がある。

池 124SG ①と池 124SG ②は類似した花粉組成を示しており、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属やサワグルミ属—クルミ属が、草本花粉ではイネ科やアカザ科-ヒユ科、アリノトウグサ属の産出が目立つ。よって、池周辺にはこれらの植物が分布していた可能性がある。他にもいくつかの分類群が得られているが、遺跡の性質を考慮すると、産出した分類群は池の周辺に植栽されていた可能性もある。例えば、樹木花粉ではマツ属複維管束亜属以外にもサクラ属やツバキ属、ツツジ科、草本花粉ではユリ科やフヨウ属など、観賞用の植物が含まれる分類群が産出している。また、ソバ属やワタ属、ベニバナ属など、栽培植物の花粉も産出しており、池の周辺において、ソバやワタ、ベニバナなどが栽培されていて、その耕作地から花粉が供給された可能性がある。

## 2 武家屋敷で用いられた「タタキ（三和土）」成分

### 分析の目的と結果概要

名古屋城三の丸遺跡調査では、これまでも各地点でモルタル状物質が検出されている。今回の調査地点で出土した試料についても材質の把握と比較を目的に成分分析を行った。

分析 No.1～3 は武家屋敷庭園に設けられた「水琴窟」に関連するもので、分析 No.2 は 18 世紀第 4 四半期以降に構築された埋甕遺構（025SK）地上部を構成するもの、分析 No.1 は地下の甕の外側埋土に含まれていたものである。分析 No.3 は 18 世紀後半～ 19 世紀前半以降に構築された埋甕遺構（015SK）の地下構造、同じく甕の外側埋土に含まれていたものである。分析 No.4 は、19 世紀前葉までに廃棄された土坑（172SX）、分析 No.5 は幕末（から近代）に廃棄された井戸（23B-301SE）より出土したものである。

分析の結果、いずれも漆喰に土砂を混ぜて作られた「タタキ（三和土）」の材質成分の構成が確認された。このうち蛍光 X 線分析の結果において差異が目立った分析 No.1 は、025SK を構築する材料の一部として埋められていた碎片である。この破片は本来は鉢のような曲面をもった形状の一部であったと推定され、少なくとも 025SK 構築より古い段階に機能していた別の設備の転用（廃棄）物である。また、蛍光 X 線分析と X 線解析分析において、他の試料と若干の傾向の違いがみえる分析 No.5 は、近代まで開口していた可能性のある井戸の出土資料であった。

今回の分析結果に認められた傾向や差異が、例えば構築時期や使用される場所（機能）と関連した可能性を探る上でも、当時の武家屋敷において多面的に用いられていた建築材料について改めて注目し、継続的に分析・検証していく必要があると考える。

以下、(株)パレオ・ラボの分析報告を提示する。

竹原弘展「名古屋城三の丸遺跡出土モルタル状物質の分析」(株)パレオ・ラボ, 2024

### 試料と方法

分析対象は、23A、23B の調査区の遺構で出土した、モルタル状物質 5 点である(表 5、図 64)。時期は、江戸時代とみられている。いずれも固化しており、タタキ（三和土、土砂に漆喰を混ぜて固めたもの）試料は、モルタル状物質より典型的と思われる箇所の一部を採取した。採取した試料は、メノウ製乳鉢で軽くほぐしてピンセットで粗砂や礫を除去した後によく粉碎し、蛍光 X 線分析で化学組成を確認した上で X 線回折分析を実施した。

表 5 モルタル状物質分析対象一覧

分析 No.	遺跡記号・調査区	遺構番号	遺構性格・層位	時期	グリッド
1	2NS23Aa	025SK（水琴窟内）	水琴窟甕内	江戸	980125
2	2NS23Aa	025SK 西半（覆土）	水琴窟埋設土坑上層	江戸	980125
3	2NS23Aa	015SK	水琴窟埋設土坑内	江戸	980125
4	2NS23Ac	172SX	地下室埋土廃棄層内	江戸	020150_020155
5	2NS23Ba	301SE, d-B001	井戸筒内埋土内	江戸	020155

## [蛍光 X 線分析]

蛍光 X 線分析は、マイラーフィルムを張った試料ホルダに粉末試料を入れて、測定した。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置は、X 線管が最大 50kV、1000  $\mu$  A のロジウム (Rh) ターゲット、X 線照射径が 8mm または 1mm、X 線検出器は SDD 検出器 (VorteX) である。この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) であるが、蛍光 X 線分析装置の性質上、軽元素の感度が若干低く、ナトリウムやマグネシウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV (一次フィルタ無し・Cl 測定用)・50kV (一次フィルタ Pb 測定用・Cd 測定用) の 4 条件で、測定時間は各条件 500 ~ 1000s、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダード FP 法による半定量分析を行った。

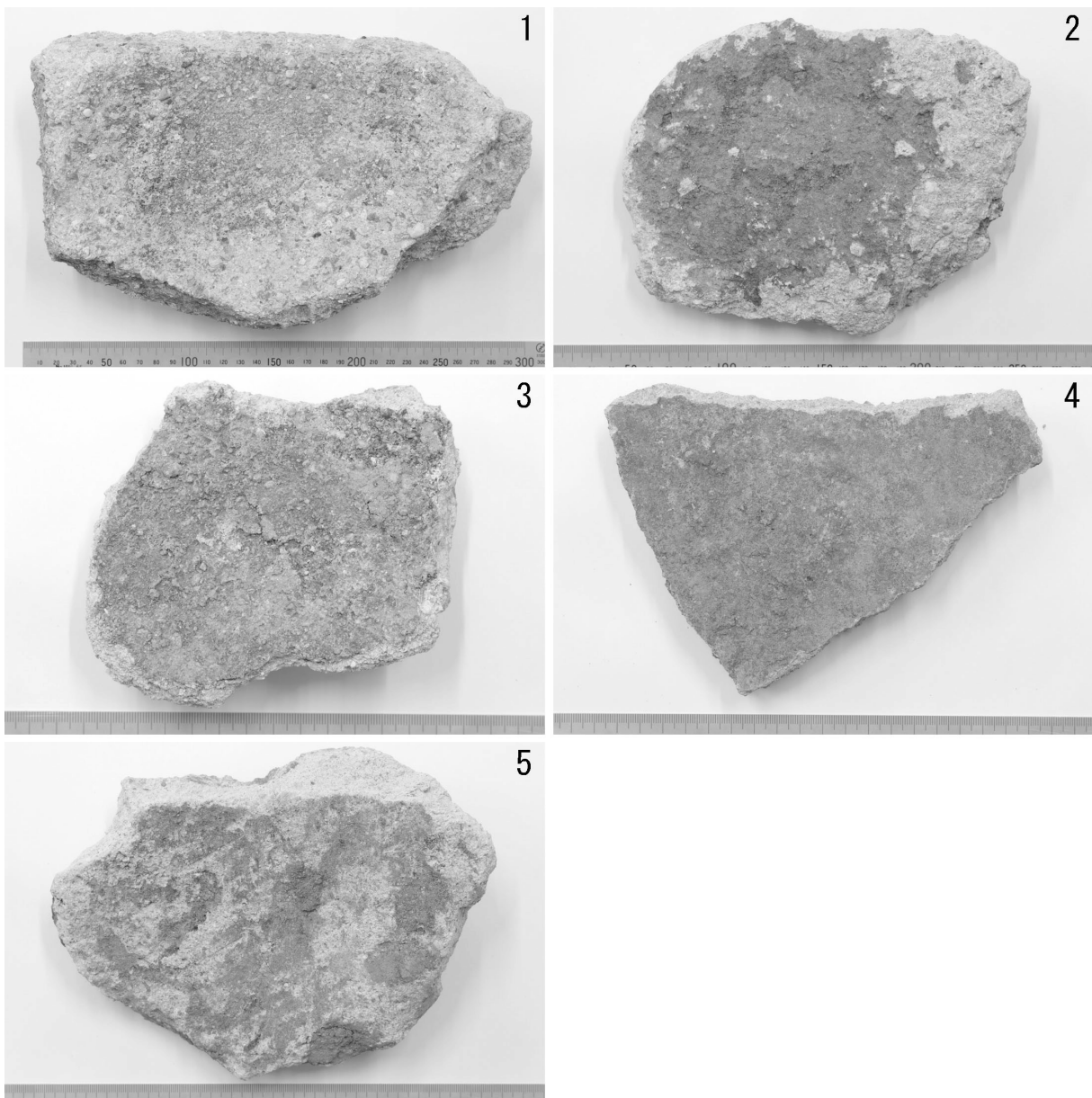


図 64 分析対象試料 (右上数字は分析 No.)

[X 線回折分析]

X 線回折分析は、粉末試料をアルミニウム試料板に充填し不定方位試料として、測定した。  
 分析装置は、株式会社リガク製 X 線回折装置 MiniFlex600 を使用した。装置は、X 線管が銅 (Cu) ターゲット、検出器が一次元半導体検出器 (D/teX Ultra) を使用している。測定条件は、40kV、15mA、走査速度 2deg/min、ステップ幅 0.02deg、走査範囲 3 ~ 65deg、蛍光 X 線軽減モードに設定し、回転試料台で試料を回転させつつ測定した。  
 なお、X 線回折分析では、混合物中の長石類や角閃石類、粘土鉱物等のそれぞれの細分は容易ではなく、回折パターンの図中では一例として典型的な鉱物のピークを示すが、本文および表中ではアルカリ長石、斜長石、角閃石、粘土鉱物 (14Å 鉱物、10Å 鉱物、7Å 鉱物) といった名称を用いた。

結果

[蛍光 X 線分析]

蛍光 X 線分析により得られた半定量分析結果を表 6 に示す。  
 分析の結果、いずれの試料もマグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、硫黄 (SO<sub>3</sub>)、カリウム (K<sub>2</sub>O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO<sub>2</sub>)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、銅 (CuO)、亜鉛 (ZnO)、ガリウム (Ga<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ルビジウム (Rb<sub>2</sub>O)、ストロンチウム (SrO)、イットリウム (Y<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ジルコニウム (ZrO<sub>2</sub>)、バリウム (BaO)、鉛 (PbO) が検出された。

表 6 蛍光 X 線半定量分析結果 (mass%)

分析 No.	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	BaO	PbO
1	tr	35.73	48.89	1.32	0.08	1.56	5.09	0.90	0.13	6.12	0.01	0.01	0.01	0.01	0.04	0.01	0.05	0.02	0.01
2	tr	21.87	32.46	1.28	0.26	1.86	33.41	0.99	0.05	7.65	0.01	0.01	0.01	0.01	0.04	0.01	0.06	0.02	tr
3	0.96	19.88	46.56	0.72	0.15	1.67	22.35	0.83	0.06	6.68	0.01	0.01	tr	0.01	0.04	0.01	0.04	0.03	0.01
4	tr	27.04	43.00	0.66	0.13	1.64	16.60	0.80	0.15	9.82	0.01	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.05	0.03	0.01
5	tr	21.93	42.88	0.74	0.20	2.38	25.07	0.63	0.10	5.88	tr	0.02	0.01	0.02	0.05	0.01	0.07	0.04	0.01

tr : 痕跡量

[X 線回折分析]

X 線回折分析により得られた回折パターンを図 65 に、検出された鉱物を表 7 に示す。  
 分析の結果、いずれの試料も方解石 (Calcite)、石英 (Quartz) と一致するピークが検出された。ほかに、アルカリ長石 (図では正長石 Orthoclase)、斜長石 (図では灰長石 Anorthite)、角閃石 (図では緑閃石 Actinolite)、赤鉄鉱 (Hematite) といった鉱物が検出された。また、粘土鉱物に由来すると考えられる 6.2° (14Å 鉱物：緑泥石、パーミキュライト、スメクタイト等)、8.8° (10Å 鉱物：雲母、ハロイサイト (10Å) 等)、12.5° (7Å 鉱物：カオリン鉱物、蛇紋石類、緑泥石等) 付近のピークも検出された。

表 7 X 回折分析による検出鉱物一覧

分析 No.	方解石	石英	アルカリ長石	斜長石	角閃石	赤鉄鉱	14Å 鉱物	10Å 鉱物	7Å 鉱物
1	○	◎						△	○
2	◎	◎	△			△		△	△
3	◎	◎	△	△		△		△	△
4	◎	◎	△	△		△		△	○
5	◎	◎	△	○	△		○	○	○

◎ : よく一致するピークを検出 ○ : ほぼ一致するピークを検出 △ : 微弱的ピークを検出

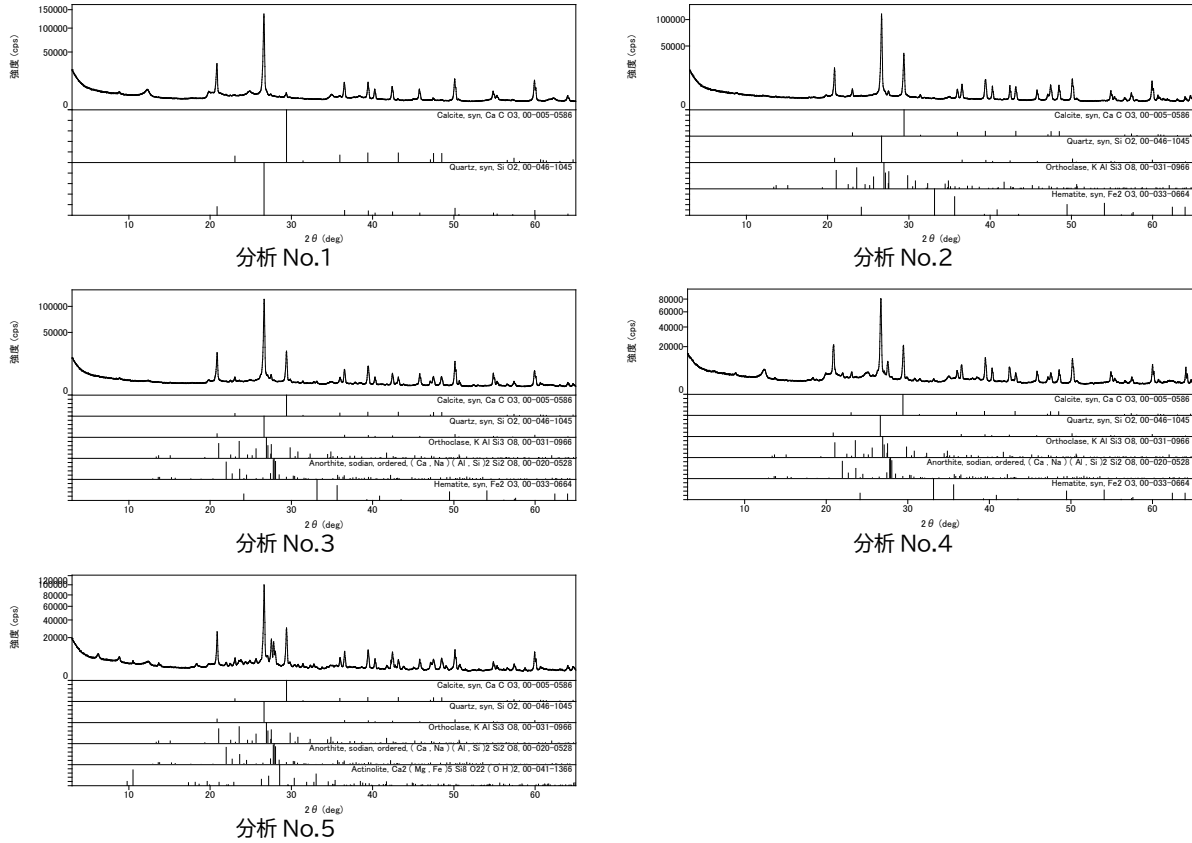


図 65 X線回折パターン図(分析No.1～5)

### 考察

分析の結果、いずれの試料も蛍光 X 線分析でカルシウム (CaO) が多く検出され、かつ X 線回折分析で方解石 (Calcite) が明瞭に検出された。土砂に由来すると考えられるケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、カリウム (K<sub>2</sub>O)、鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 等や、石英、長石類、角閃石、粘土鉱物等も検出された。方解石は漆喰に由来すると推定され、漆喰に骨材として土砂を混ぜて固めた、いわゆるたたきと考えられる。分析 No.1 は、カルシウム (CaO) がやや少なく、ケイ素 (SiO<sub>2</sub>) やアルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が比較的多い一方で、長石類はピークとしては確認できないほど少なく、石英やカオリン鉱物 (7Å 鉱物) が比較的多く含まれていたと推定される。

漆喰は、消石灰 (Ca(OH)<sub>2</sub>) が大気中の二酸化炭素を取り込んで炭酸カルシウム (CaCO<sub>3</sub>、鉱物としては方解石) となり固化する、気硬性のセメント (ここでは広義に接着剤を指す) として利用される。

### おわりに

名古屋城三の丸遺跡出土のモルタル状物質について成分分析した結果、土砂とともに炭酸カルシウムが多く検出された。漆喰に土砂を混ぜて固められた、タタキ (三和土) と考えられる。

### 【参考文献】

堀木真美子・小村美代子 (2005) 名古屋城三の丸遺跡出土の漆喰等の科学分析. 鈴木正貴・早野浩二・永井邦仁・鬼頭剛・古澤明・森勇一・上田恭子・堀木真美子・小村美代子・植田弥生・鶴飼雅弘編「名古屋城三の丸遺跡Ⅶ」: 247-260, 愛知県埋蔵文化財センター.

中井 泉編 (2005) 蛍光 X 線分析の実際. 242p, 朝倉書店.

日本粘土学会編 (2009) 粘土ハンドブック第三版. 990p, 技報堂出版.

リガク編 (2010) X 線回折ハンドブック. 243p, リガク.

## 第6章 総括

### 1 戦国期区画溝

23A 区の主な調査成果として、戦国期遺構では屋敷をめぐる区画溝に関する事例の追加がまず挙げられる。これまでも名古屋城三の丸遺跡の戦国期の溝についての調査と研究は、「形状・規模」「方位」「時期」を基軸とした検討が継続して行われており、これに新しい知見を加えることになった。

まず遺構の断面形状では、断面が V 字状となるいわゆる「薬研堀」の形態をなすグループ (I 類) として 065SD、120SD-b、121SD、122SD があり、それとは異なる 060SD、120SD-a (II 類) に大別される。I 類は仮に溝断面の全体像を把握することができれば、さらに細分が可能と考えられるものである。II 類についても全体像は確認できていないが、今回調査範囲の北側に隣接する愛知県三の丸庁舎地点 (図 66,67-No.8 地点) で確認された SD602 の延長部分がこれらに相当すると考えられるため、断面形状は幅のある逆台形と推定される。

次に規模については、上端幅が確認できたものは I 類では 121SD のみで 5.4m である。II 類では 120SD-b で 11m 前後と推定される。これは I 類よりも格段に規模が大きく違いは明瞭である。

方位について松田 (松田 2002) の示した分類基準に従い記述を行うと、まず「正方位溝群」は主軸が南北・東西方位軸から大きく偏らない (6°未満) 方向を示すものであり、I 類では 065SD、121SD、126SD、122SD がこれに属する。II 類では調査区北西部の 120SD-b で正方位と判断可能である。「準方位溝群」は主軸が南北・東西方位軸から右回転にやや偏る (6°以上) 方向を示すものであり、I 類の 120SD-a、220SD がこれに属する。

遺構の重複関係から II 類の溝は I 類の区画溝を更新する形で新規に構築されたことが確認できる。ただし、それぞれの成立時期については遺物の出土量が非常に少ないため詳細な区分は難しい。また上位の遺構との重複も多く、上層資料の混入としてこれを除くと、I 類では 065SD が 16 世紀中頃から後半

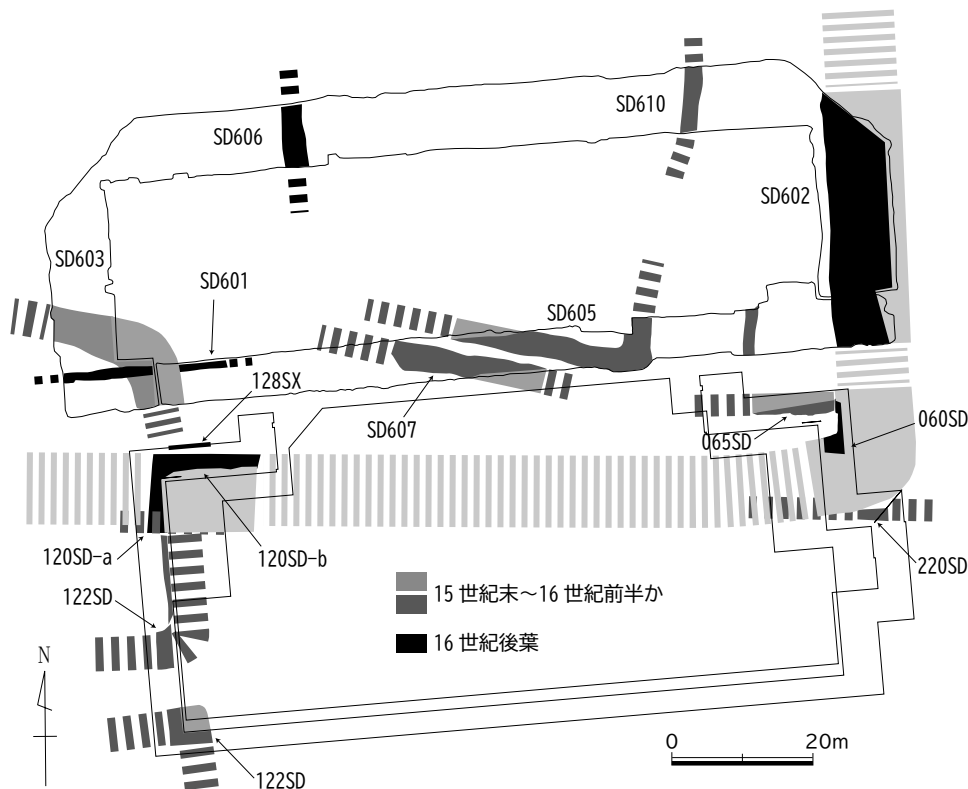


図 66 23A 区と県三の丸庁舎地点の戦国期溝 (堀) の配置

の遺物を含む段階と示すことができる。II類の 060SD では 16 世紀前葉の段階の天目茶碗と 16 世紀後葉の織部製品が提示できる。以上の整理を踏まえ、周辺の調査成果との関係を概観しておきたい。

I類の溝群は、16 世紀の中葉までに構築された断面形状が V 字状をなす屋敷地の区画溝であり、正方位をとるものと準方位をとるものの両者がある。これらの成立の時期の詳細は不明ながらも、121SD と 122SD の配置からは屋敷地区画溝が整然と近接して並ぶ景観を想定することができ、既に開発行為が一定の計画性をもって広範囲に進められていたことを物語っている。

そして II類の大溝 120SD-b が 16 世紀中葉以降に出現する。これと規模・形状が類似するものに愛知県三の丸庁舎地点 SD602（下図 No.4 地点）と簡易家庭裁判所地点 SD501（同 No.17）があり、その両者の間に今回の調査地点は位置している。仮にこれらを同一の遺構と想定すると、東西方向では 350m 以上となる長大な大溝が立ち現れる。SD602、SD501 はそれぞれ西側、北側に土塁を伴う構造が想定されており、上端幅が 12m 前後の規模となる防御施設は屋敷地の区分を主な目的とした I類とは

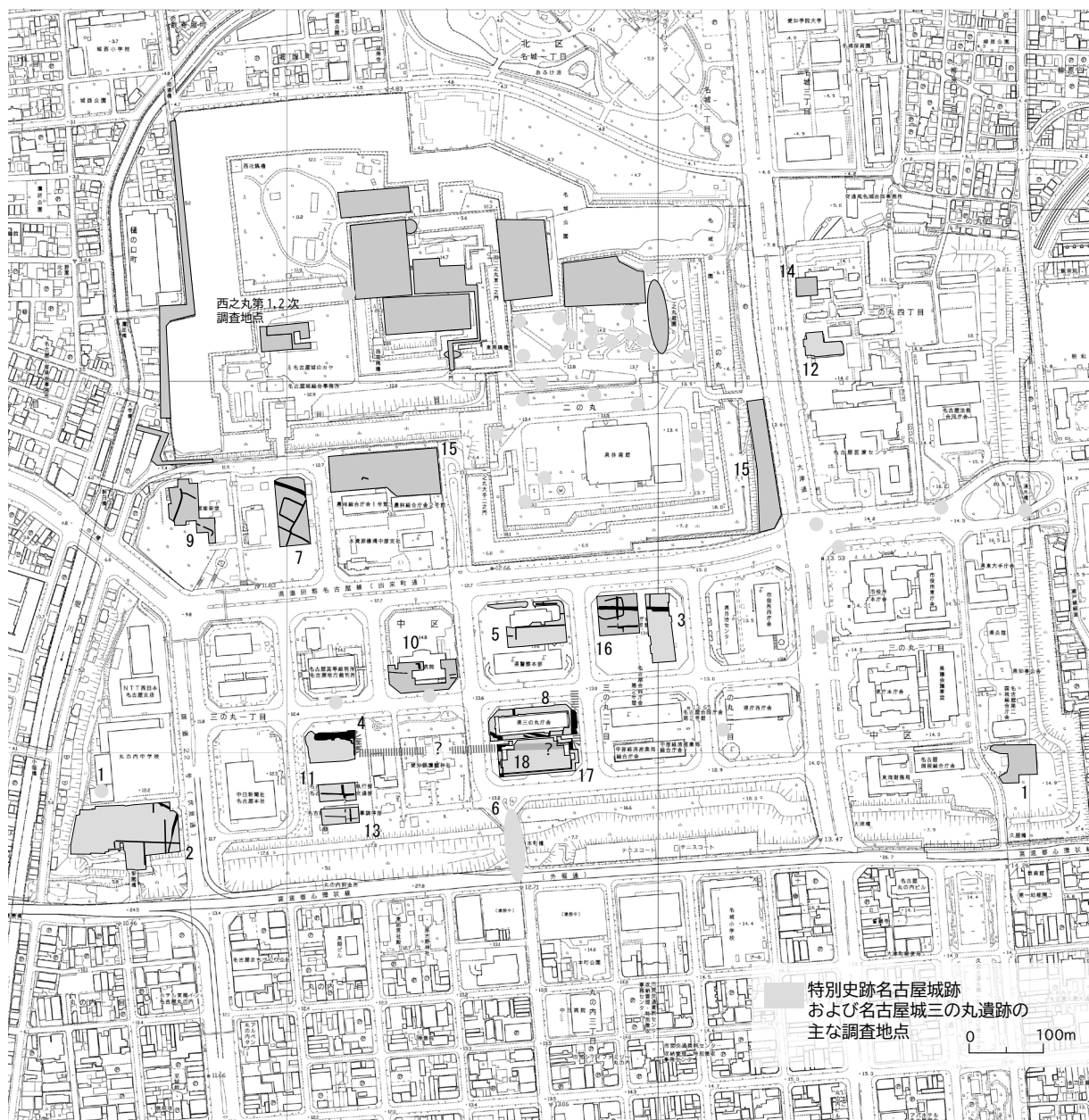


図 67 名古屋城三の丸遺跡の戦国期溝（堀）の分布

全く異なる機能を求めて整備されたと考えられる。そして II 類の溝全体の埋没は、近世名古屋城の整備が始まった慶長 15 年（1610）の頃であろう。

さて、II 類の大溝が構築された際には、周囲の景観は一変した。那古野城との関連を直接に示す証拠は得られていないが、これまでの調査成果は天正年間のうちに大溝が機能した時期があったことを示している。永禄 6 年（1563）から永禄 10 年まで織田信長が拠点とした小牧山城では、城南南辺に「惣構」の堀が確認されており、この城下と街路を取り込む惣構の堀の構築は織田信長段階の整備に伴うとする見方が有力である。今回の調査で明らかとなった大溝は、その規模および想定される広がりから、那古野城のある中心域を含む広大な領域の南側外縁部を画する施設、戦国期のいわゆる「惣構」に相当する施設と考えられよう。範囲の全体像、構築の詳細な時期の解明などは今後も調査の課題として残されている。

## 2 江戸時代における重臣武家屋敷の内部空間

江戸時代については、今回の調査範囲で武家屋敷の庭園に関連する遺構がいくつか確認された。これまでも断片的ではあるが各地点で捉えられていた。ここでは屋敷地内での位置関係や屋敷地居住者との関係性という視点から成果をまとめておきたい。

### (1) 「埋甕遺構」

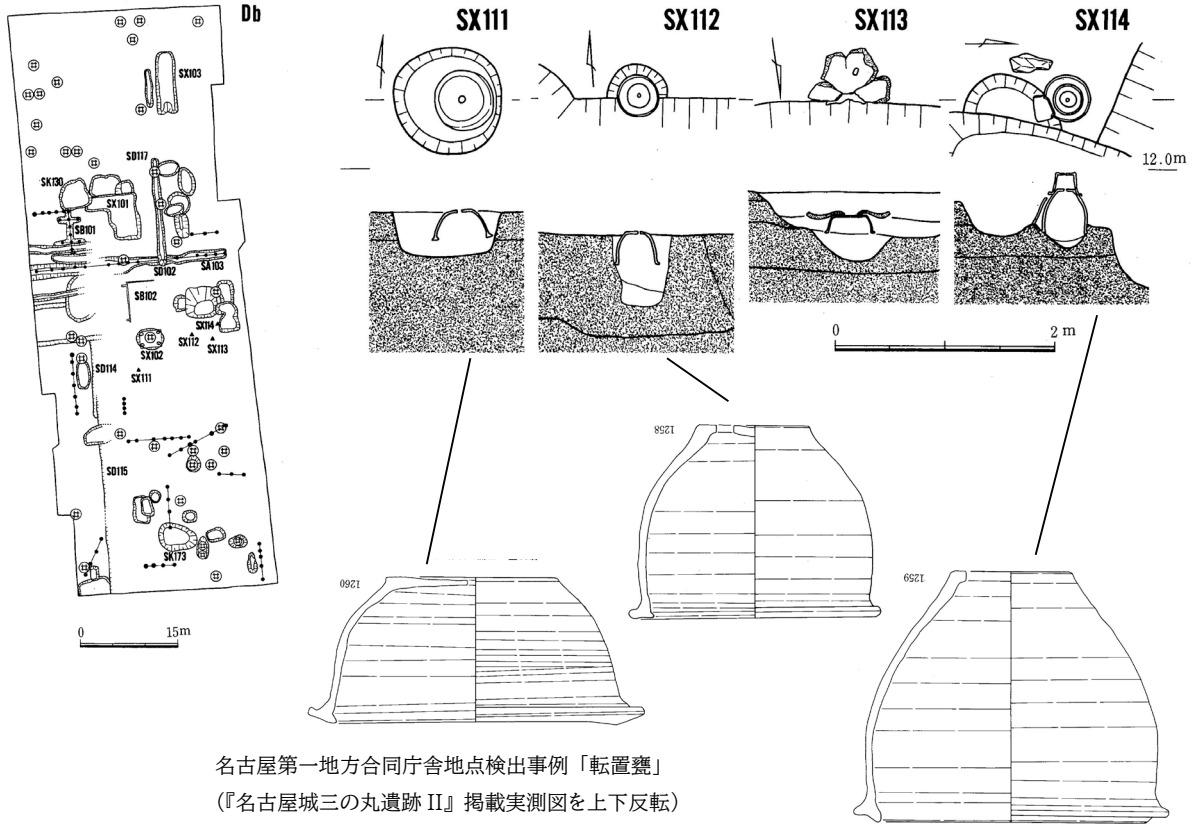
今回の調査では、底部に穿孔のある常滑窯産の甕が、天地逆の状態で見えられた江戸時代の遺構を「埋甕遺構」として取り扱った注 1。東側の屋敷地 1 では 015SK、025SK、042SK の 3ヶ所、西側の屋敷地 2 では 105SK、106SK の 2ヶ所を検出し、以上のうち 015SK と 025SK の 2 基で地上部の構造を確認することができた。

埋甕遺構で共通する機能は、排水施設であるという点であり、現代でいう浸透式の雨水枡（浸透枡）のようにゆっくり地面に浸透させて排水を処理する方法を「小規模に」行ったものである。名古屋城三の丸遺跡の調査では、外部への排水のための溝状の遺構は、少なくとも屋敷表の道路沿いでは確認されおらず、浸透により排水を処理するといった方法は広く採られていたと考えられる。今回の埋甕遺構のような施設のうち、落下する水滴の反響音を聴く庭園の装置がいわゆる「水琴窟」とされるものがあり、今回の調査で確認した資料にその特徴を検討する。

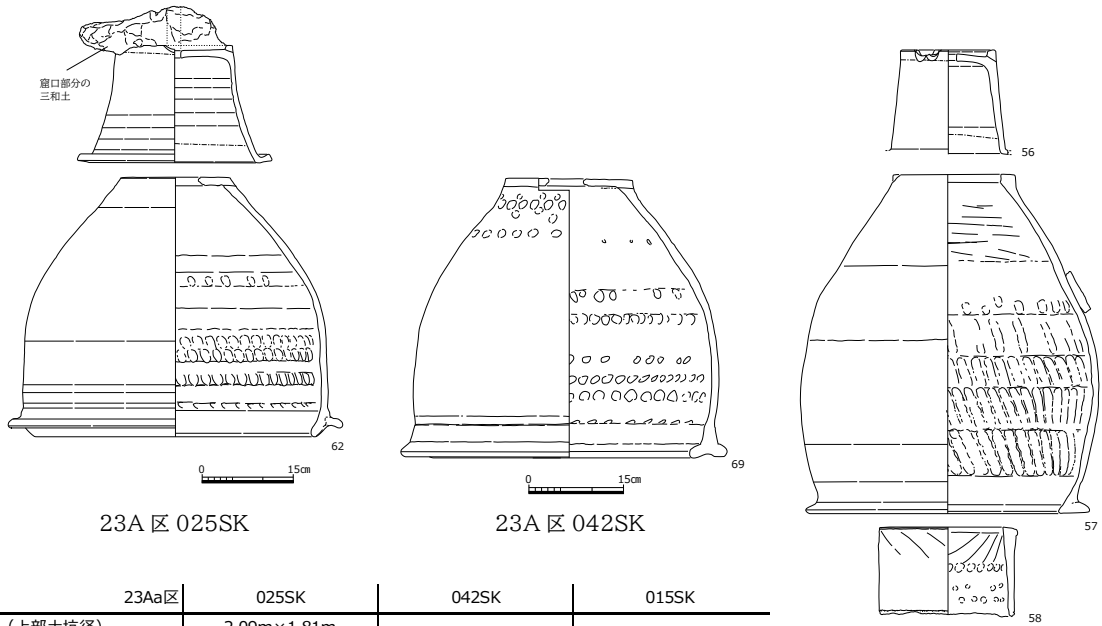
まず、埋甕遺構において確認された甕は、土坑内にどのように埋設されたのだろうか。

屋敷地 2 の 105SK、106SK については土坑の上部は不明である。土坑内には甕以外に何も置かれていない。土坑底面から甕の口までの高さは 8cm 程度とほとんど距離のない状態で据えられる。一方、屋敷地 1 の 015SK、025SK は土坑底面からはそれぞれ 40cm、21cm の距離があり、その間は大量の瓦が敷き詰められる。その効果として排水処理能力や浸透の時間的余裕が付加されている。042SK はその中間的な状況であり、土坑底面から 15cm まで瓦片を含んだ土で埋められている。次に、甕は土坑に据えられと周囲も埋められていく。屋敷地 2 の 025SK では甕の脇下位には破碎されたタタキ（三和土）片が取り巻くように入れられ土で埋められている。015SK では甕の脇に瓦片と割れた植木鉢片が入られ、土で埋められている。それらの効果として、甕の周囲に空隙をつくり、音響効果を高める狙いがあったと想像される注 2。甕の最大径は平均して 55cm 程度であり、これを収容する土坑の直径は、025SK、015SK では約 2.0m、042SK、105SK では約 1.0m、106SK では 0.7m であった。甕の周囲（空隙）を整えるための適切なサイズが選択されたと考えられる。

以上により、015SK、025SK は「水琴窟」の可能性が高いと考えられる。水琴窟であれば甕内に一定程度の深さの湛水部をつくる必要があり、排水がしばらく滞るよう甕の口縁部側を堆積物で塞ぐ、あるいは皿などの陶磁器のを置くといった事例が見られるが、今回の調査では、015SK でのみ内部に常滑窯



名古屋第一地方合同庁舎地点検出事例「転置甕」  
 (『名古屋城三の丸遺跡 II』掲載実測図を上下反転)



23A区	025SK	042SK	015SK
(上部土坑径)	2.09m×1.81m		
土坑径	1.4m	0.98m×(0.53m)	(1.19m)×(0.98m)
土坑深さ	1.06m	0.85m	1.18m
土坑底面標高	11.242m	11.649m	11.195m
土坑底面から甕(口縁部)までの距離	21cm	15cm	40cm
甕 口径	44.7cm	40.8cm	45~47cm
甕 最大径	55.1cm	52.3cm	
甕 底径	18.1cm	20.0cm	19.4cm
甕 器高	42.8cm	44.3cm	53.8cm

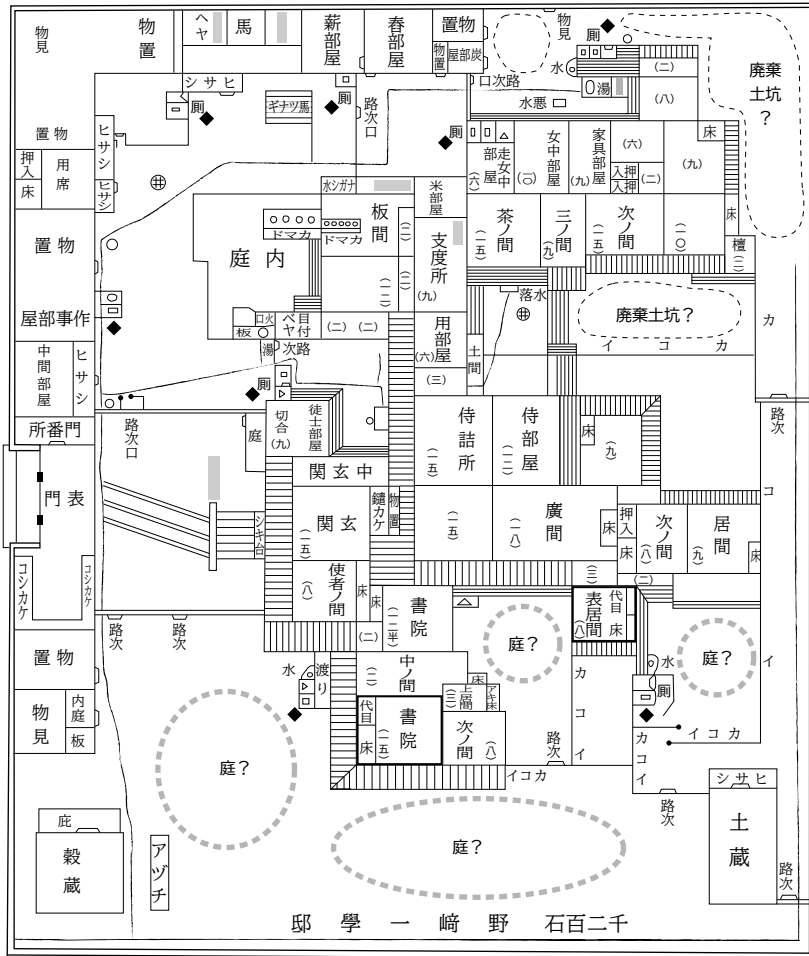
図 68 名古屋城三の丸遺跡の埋甕遺構の事例

御殿

四 千 石 山 澄 右 近 邸

中 小 路

大 名 小 路  
織 田 縫 殿 介 邸



野 崎 一 學 邸

一 万 三 百 三 十 一 石

渡 邊 半 蔵 邸

(三ノ丸本町内)

三千六十三石

瀨川豊後守邸

凡例  
ハ溝 ( ) 内ノ数字ハ畳数ナリ  
野崎兼清氏所蔵図

加筆部分凡例

◆ 廁の位置

○ 廃棄土坑の推定範囲

□ 茶室仕様か (台目床)

○ 庭 (庭園) の推定範囲

図 69 武家屋敷内の構造 (『名古屋市史』藩士住宅平面古図トレースに加筆)

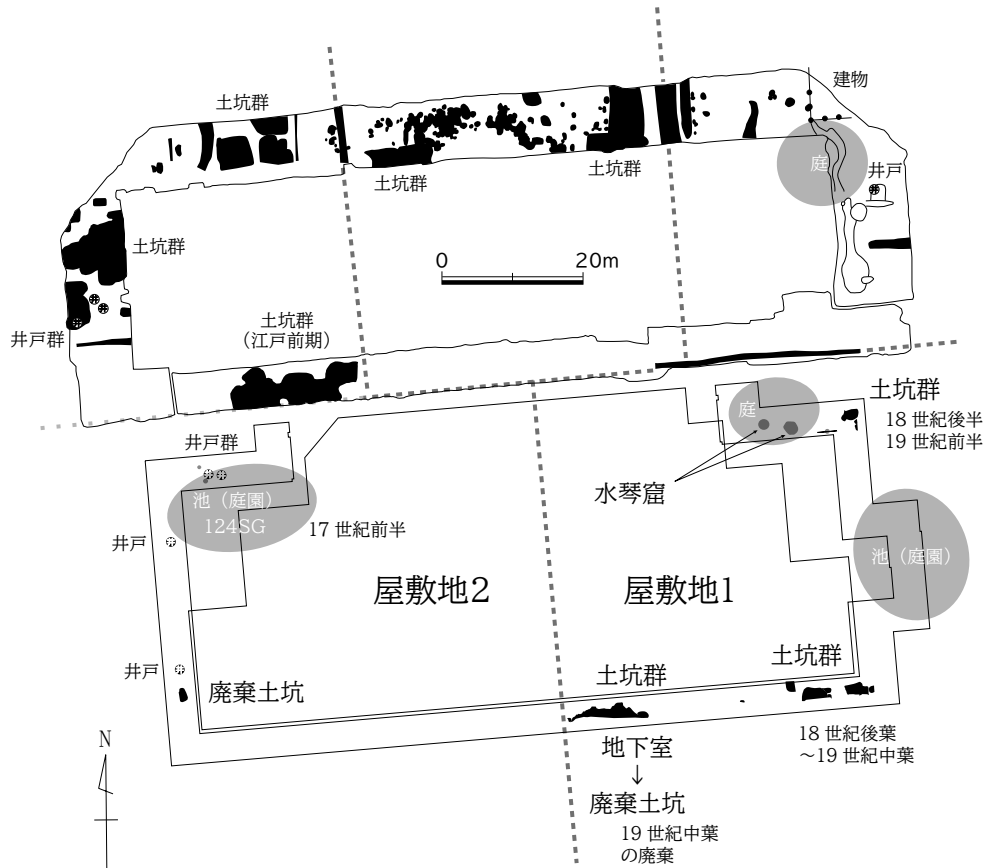


図 70 武家屋敷内の主要遺構配置図 (23A,23B 区および三の丸庁舎地点)

産の円筒状のやきものを検出した。

次に、水琴窟を含む埋甕遺構は、どのような場所に設置されていたのだろうか。18世紀後半から19世紀の資料として40基以上が確認された伊丹郷町遺跡の事例によれば、多い方から順に裏庭、便所、軒下、中庭と整理されている注3。今回調査地点の「屋敷地2」の北側に接する野崎一学邸は、建物構成が伝わる図面が残されており、これを詳細に検討すると、屋敷奥の廁や軒下に水を利用する施設が表現されている(図69)。礎石や柱穴の遺存状況に恵まれないことの多い名古屋城三の丸遺跡調査においては、建物配置などの復元に有効な情報の一つとなろう。

## (2) 庭園に関連する遺構の配置

調査範囲と絵図より推定される屋敷地1(東側)・屋敷地2(西側)の境界を図70に示す。

### a. 屋敷地1

明確な遺構としては確認していないが、Aa区の東側の調査区外にかけて池(庭園)が存在していたと想定される。水琴窟を含む埋甕遺構の分布は、Aa区の北西部に集中する。屋敷地1の区画全体の中でこれらの配置を想定すると、池(庭園)は中央付近から東側にかけて展開する可能性が考えられる。埋甕遺構が設置されたのは、最北端の屋敷奥、背割の境界に近いやや西寄りの場所であったと考えられる。

### b. 屋敷地2

Ab区北西部で池(庭園)の西端を確認している。したがってそれよりも東側にかけて展開すると想定される。池を構成する素材にタタキ(三和土)は使用されておらず、白色粘土が大量に持ち込まれている。白色粘土の分布範囲は埋没後の戦国期大溝(120SD-a)を中心に重複が認められる。そうした点から戦国期の遺構痕跡が未だ判別できる段階に武家屋敷と共に庭園も整備されていた可能性が考えられる。

池の廃絶後は、少なくとも 18 世紀後葉以降には埋甕遺構、井戸などが造られる空間となっている。屋敷地 2 の区画全体の中でこれらの配置を想定すると、屋敷地のほぼ中央付近、元禄九 (1696) 年に拡張された北側区画との境界付近に相当する。

### (3) 居住者と屋敷地内部の様相

屋敷地の居住者の変遷 (図 71) に示す通り、屋敷地 2 は 18 件 (6 家) の居住者の変更があり、埋甕遺構が構築された 18 世紀以降については、天明六 (1786) 年より横井家となっている。本町門に近い屋敷地 2 は名古屋城、三の丸武家屋敷整備の当初から明治まで、代々家老職にあった渡辺半蔵家が継続して居住した。今回の調査範囲は、上級藩士のみが居住した三の丸武家屋敷のうちにあつて、さらに広い敷地面積を占めた重臣の屋敷地のごく一部である。

名古屋城三の丸遺跡で池を伴う規模の庭園としては、国立名古屋病院地点 (図 72-No.12) の藩主の親族が住む御屋形の調査事例があり、床面等が粘土や漆喰で覆われた最大長 12.0m × 最大幅 10.8m 規模の池状遺構 (SX02) とこれに付随する施設、石材、玉石などの配置の状況が明らかにされた。検出された池泉鑑賞式書院庭園は、尾張藩大名屋敷の内では「中庭的庭園」と比較的小規模のタイプに分類されるものであるが注 4、この規模の庭園はもとより三の丸武家屋敷の明確な池状遺構はこれまで確認されていなかった。今回重臣屋敷地で池状遺構 (124SG) が検出されたことは、居住者の階層性と庭園の相関関係を改めて示す事例となった。

「埋甕遺構」は、名古屋第一合同庁舎地点 (図 72-No.3) で 4 基が屋敷奥に 3 基がまとまって、1 基が敷地境界に近接した場所で検出されている。タタキ (三和土) を用いる池や導水部などの遺構は、三の丸庁舎地点 (図 72-No.8) などに散見されるのみである。これまで屋敷奥に相当する範囲が調査された場合には、廃棄土坑が重複して検出されることが多く、背割付近の土坑群が検出された簡易家庭裁判所を含む屋敷地区画 (図 72-No.4,11,13) の規模は、南北に 85m、東西 53m注 5 と推定された。この調査範囲では池 (庭園) は確認されていない。今回の調査範囲が含まれる屋敷地 1・2 はその 2 ~ 3 倍の面積であり、屋敷奥に廃棄土坑が少ない (あるいはほとんど検出されない) ことも含めて、家格や役職に応じた屋敷地により異なる様相を具体的に示す事例となった。

そのほか、上部構造に石材が残されていた 025SK に関連しては、名古屋城域に持ち込まれている緑色岩は桃取石 (三重県鳥羽市答志島)、砂岩は河戸石 (岐阜県海津市南濃町) といった産地が知られている。発掘調査では、当時埋甕土坑の側に配されていたはずの手水鉢、灯籠といった石材が確認されることは少ない。おそらく簡単に廃棄されるものではなく、珍重される高価なものとして持ち去られたと思われる。

#### 【注・参考文献】

注 1: 『名古屋城三の丸遺跡 II』では「転置甕」で報告されている

注 2: 現代の水琴窟制作の手法では栗石を入れる、壁を二重にして空間を作る方法などがある。ただし、造園専門家をも驚かせた事例では、土坑に甕を据えただけのもので十分な音色を響かせていたものがあり、それは周囲を粘土質の土で覆われていたという。龍居竹之介,1990,「IV 水琴窟にいどむ 5 古い作品を掘る」

注 3: 赤松和佳,2006,研究ノート「水琴窟考—伊丹郷町遺跡を中心に—」

注 4: 「第 4 節 御屋形庭園の意義」鈴木正貴,2005,『名古屋城三の丸遺跡 (VII)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集

注 5: 間口二十九間半、奥行四十三間半 (『坪間路頭帖』宝暦 3 年 (1753) 名古屋市博物館所蔵

平山勝蔵,1955,「庭園の水琴窟について」『造園雑誌』23-3

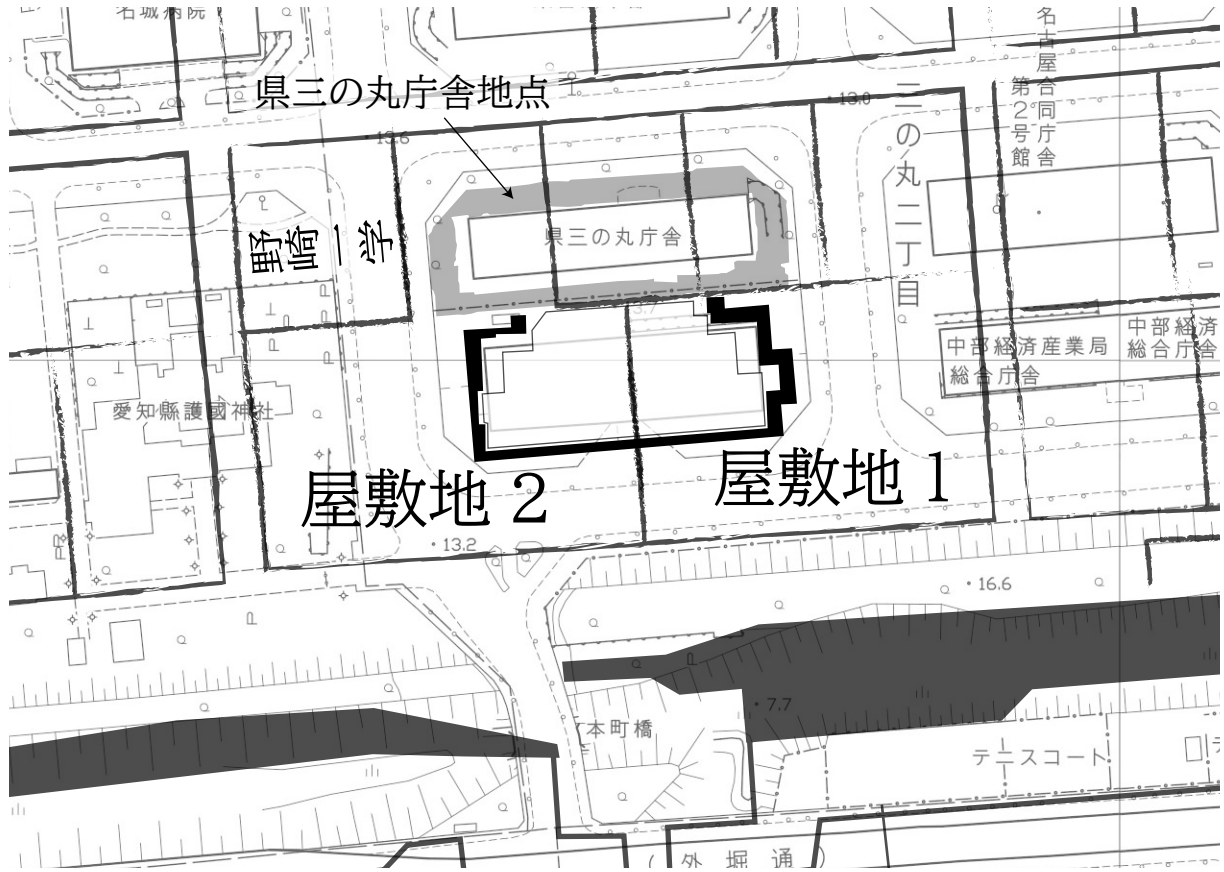
龍居竹之介編,1990,『水琴窟の話—水滴の余情を庭に楽しむ—』建築資料研究社

加藤 忠,1991,『幻の音風景 水琴窟』日本リゾートセンター

名古屋市博物館『名古屋城下お調べ帳』

伊藤秀紀,1995,「第 2 節 三の丸に居住した人々」『名古屋城三の丸遺跡 (V)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 60 集

松田 訓,2002,「遺構からみた那古野城の残影」『研究紀要 3』愛知県埋蔵文化財センター



	屋敷地2	～まで	屋敷地1	～まで
1650	渡辺半蔵守綱	元和 6	津金修理胤久	元和 8
	渡辺半蔵重綱	寛永 20	津金三郎左衛門	寛永 3
1700	渡辺半蔵治綱	明暦 3	上田忠左衛門	万治 3
	渡辺半蔵宣綱	元禄 2	上田甚五平衛正勝	寛文 2
			上田忠左衛門	
1750	渡辺半蔵定綱	正徳 5	鈴木主殿重長	正徳 1
	渡辺源之助直綱	享保 3	鈴木金四郎明雅	寛保 3
			庵原内膳志	延享 4
			鈴木丹後守明雅	宝暦 5
1800	渡辺源三郎綱保	宝暦 4	鈴木繁之進	明和 2
			鈴木繁明雅	天明 6
			鈴木千七郎重期	文化 9
			横井丹後守時申	天保 7
			横井織部有時	
1850	渡辺半五郎綱通	寛政 12	横井伊織介時宣	
	渡辺半蔵綱光	文化 1		
	渡辺半蔵剛綱	文政 2		
	渡辺半蔵寧綱	万延 1	横井兵吉永宣	明治 2
	元治 1	横井兵吉時忠		
	渡辺半蔵潤綱			

図 71 屋敷割の推定範囲と居住者の変遷

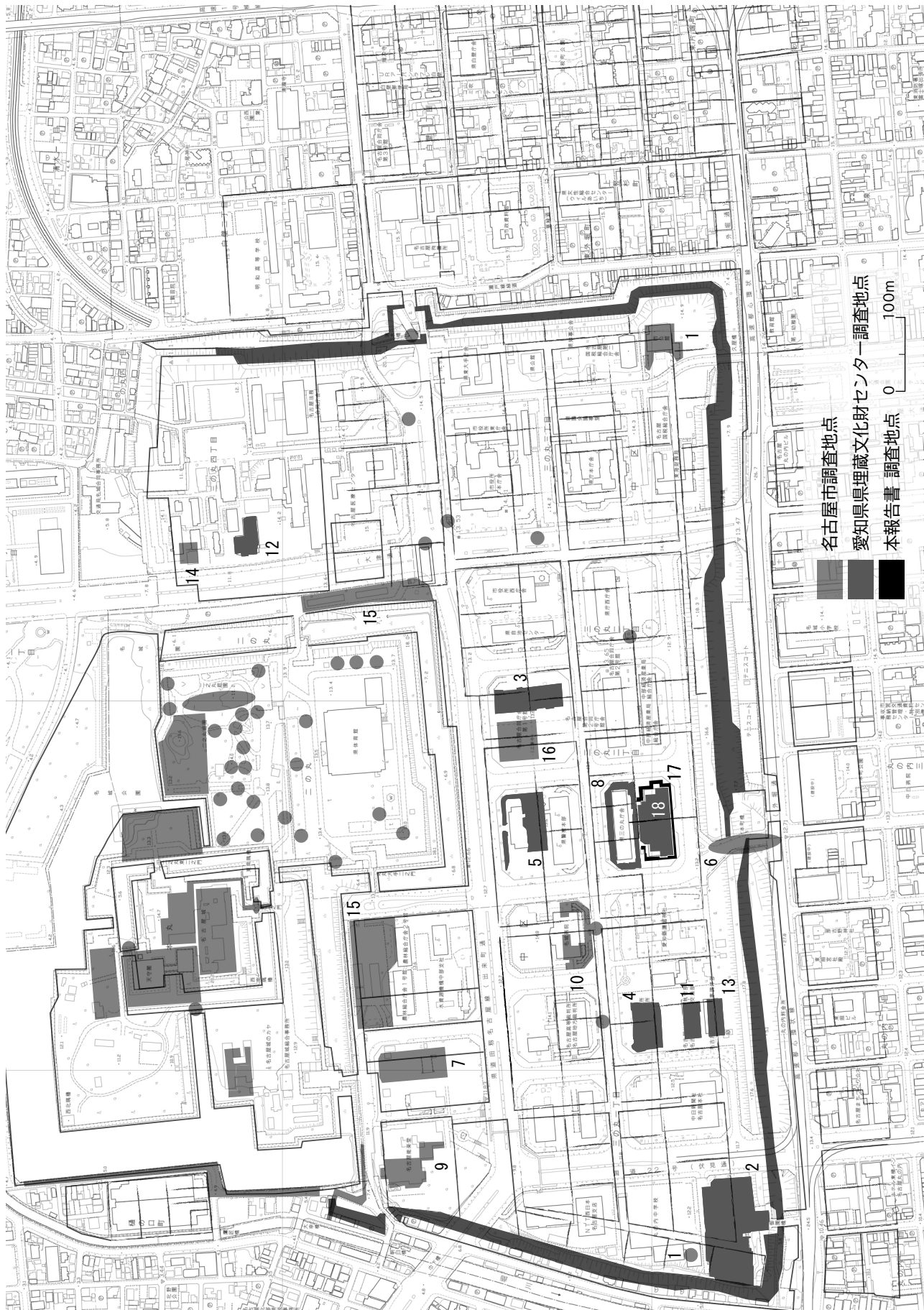


図 72 三之丸敷割推定図と遺跡調査地点（番号は図 4 に同じ、『名古屋城下お調べ帖』をもとに作成）

遺構一覧表 (1)

調査区	グリッド (5m)	遺構No.	長軸 (m)	単軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (T.P.)	土器 陶磁器	瓦	常滑窯 製品	備考
23Aa	980115	001SK	1.73	-0.82	0.46	11.811	●	●	○	
23Aa	980115	002SK	2.14	2.1	0.4	図版	●	●	○	
23Aa	980115	003SE	1.17	1.1	-	-	○			
23Aa	980115	004SK	0.98	0.35	0.12	12.168	○			
23Aa	980115	005SP	0.25	0.22	0.06	12.192				
23Aa	980115	006SP	0.31	0.25	0.04	12.217				
23Aa	980115	007SP	0.21	-0.18	0.02	12.241				
23Aa	980115	008SP	0.27	0.2	0.07	12.194	○			
23Aa	980115	009SP	0.37	0.23	0.06	12.167				
23Aa	980120	010SK	0.5	0.4	0.06	12.176				
23Aa	980120	011SK	0.62	0.3	0.06	12.156	○			
23Aa	980115	012SK	0.48	0.19	0.1	12.066				
23Aa	980115	013SP	0.51	0.32	0.14	12.089	○		○	
23Aa	980125	015SK	-1.19	-0.98	1.18	11.195	○	●	●	埋甕
23Aa	980125	016SX	-1.2	-0.32	0.58	-	○		●	
23Aa		017SK	0.51	0.32	0.12		○			
23Aa	980120	019SK	0.45	0.45	0.05	12.142	○			
23Aa	980120	020SK	0.54	0.4	0.31	11.906	○	○		
23Aa	980120	021SP	0.3	0.26	0.1	12.095				
23Aa	980120	022SK	0.71	0.4	0.09	12.115	○			
23Aa		023SK	0.27	0.23	0.1		○			
23Aa	980115	024SP	0.45	-0.25	0.1	12.145				
23Aa	980125	025SK	2.09	1.81	1.06	11.242	●	●	●	埋甕
23Aa	980125	026SK	0.56	-0.36	0.18	12.202	○	●		
23Aa	980125	027SK	1.03	-0.95	0.23	12.120	○			
23Aa		029SK	0.33	0.25	0.46		○	○		
23Aa	980115	030SK	0.73	-0.43	0.1	12.209				
23Aa	980120	031SP	0.29	0.23	0.16	12.041	○			
23Aa	980120	032SK	-0.5	0.5	0.35	11.853				
23Aa	980120	033SK	0.99	0.7	0.17	12.016	○			
23Aa		034SP	0.19	0.04	0.3	11.915				
23Aa	980120	035SK	1.14	0.89	0.22	11.962	○	○		
23Aa	980115	037SK	0.6	0.52	0.09	12.006		○		
23Aa		038SK	-	-	-		○			壁 際, 051SK の上層
23Aa	980115	039SK	0.54	0.32	0.12	11.985	○	○		
23Aa	980115	040SK	1.33	-0.51	0.28	11.878	○	○		
23Aa	985115	041SK	0.88	0.73	0.25	11.814	○			
23Aa	980120	042SK	0.98	-0.53	0.85	11.649	○	●	●	埋甕
23Aa	980115	043SK	-0.77	-0.49	0.08	12.162				
23Aa		044SK	-	-	-		○	○		
23Aa	980120	045SD	1.85	-1.57	-	11.910~ 11.759	●	○		
23Aa	980120	046SD	-3.05	-0.3	0.24	-				
23Aa	980115	047SP	0.46	-0.1	0.32	11.868				
23Aa		049SK	-	-	-		○			
23Aa	980120_9 80125	050SK	2.13	-1.47	0.35	11.631	○	○		
23Aa	980115	051SK	0.61	-0.25	0.11	12.023				

遺構一覧表 (2)

調査区	グリッド (5m)	遺構No.	長軸 (m)	単軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (T. P.)	土器 陶磁器	瓦	常滑窯 製品	備考
23Aa	980115	052SK	0.43	0.43	0.3	11.586				
23Aa	980125	053SK	-0.62	0.61	0.39	11.980				
23Aa	980120	054SP	-0.45	-0.26	0.24	11.662				
23Aa	985115	055SX	-0.75	-	0.15					
23Aa	985115	059SK	1.15	0.88	0.59	10.985				
23Aa, Ad	980115_9 85115	060SD	-1.18	-0.26	-	*10.653	○			戦国大溝
23Aa	980115	061SK	0.49	0.23	0.23	11.335				
23Aa	980115	062SK	1.3	1.1	-	-	●	●		
23Aa	975115	063SK	-	-	-	-	●	●	●	
23Aa	980120	064SX	-	-	-	-	○	○		
23Aa	980115_9 80120	065SD	-	-	-	*10.7	○	○	○	戦国溝
23Aa	980120_9 80125	067SK	0.6	-0.38	0.32	11.646				
23Aa	980120	068SP	0.33	-0.28	0.03	11.654	○			
23Aa	980115	069SK	1.35	0.89	0.35	11.796	○	○	○	
23Aa	980115	070SP	0.54	-0.26	0.11	11.607	○			
23Aa	980115	071SP	0.31	-0.2	0.05	11.659				
23Aa	980115	072SK	-0.99	0.76	0.23	11.502	○	●		
23Aa	980115	073SX	-2.52	-1.05	0.57	10.992	○	○		
23Aa			-	-	-	-	●	●		074SK (064SX 誤記か)
23Aa	980120	075SK	-0.86	-0.75	0.15	11.784	○	○		
23Aa	980115	076SK	0.67	0.64	0.26	11.299	○	○		
23Aa	980115	077SK	0.95	0.88	0.42	10.945				
23Aa	980125	078SK	1.11	1.08	0.49	11.438				
23Aa	980120	079SX	-1.37	0.93	0.13	11.911	○			
23Aa	980120	080SK	-1.31	0.93	0.14	11.858				
23Aa	980115	081SK	1	0.6	0.14	11.597				
23Aa	980125	082SP	0.58	0.41	0.19	11.507				
23Aa	980125	083SP	0.41	0.33	0.37	11.500				
23Aa	980125	084SP	0.45	0.24	0.24	11.592				
23Aa	985115	085SK	0.29	0.21	0.34	10.844				
23Aa	980125	086SK	1.15	0.47	0.27	11.470				
23Aa	980125	087SP	0.47	0.13	0.07	11.788				
23Aa	980125	088SP	0.32	0.24	0.13	11.724				
23Aa	980125	089SP	0.55	0.4	0.1	-				
23Ab	985200	101SK	1.55	1.24	1	11.429				
23Ab	985205	102SE	1.2	1.05	-	図版	○	●	●	
23Ab	985205	104SE	1.07	0.66	-	図版	○	●	●	
23Ab	985205	105SK	1.35	1.26	0.21	12.025		○	○	
23Ab	985205	106SK	0.75	0.3	0.08	12.320	○		○	
23Ab	985210	107SE	1.38	1.14	-	-	○	○		近代
23Ab	995210	108SE	2.12	1.39	-	-	○			
23Ab	010210	109SK	-	-	-	11.567				
23Ab	020210	110SK	1.99	1.1	-	11.398	●	●	●	
23Ab	015210- 020210	111SX	12.26	0.99	0.28	11.736~ 11.636	○	●		近代

遺構一覧表 (3)

調査区	グリッド (5m)	遺構No.	長軸 (m)	単軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (T.P.)	土器 陶磁器	瓦	常滑窯 製品	備考
23Ab	985200	112SK	0.53	0.38	0.17	12.228		○		
23Ab	985200	113SK	0.39	0.37	0.16	12.148				
23Ab	985205	114SX	1.41	0.82	0.22	12.084	○	○		
23Ab	985210	115SK	0.62	0.46	0.03	12.191				
23Ab	985205	116SK	0.54	0.28	0.07	12.218			○	
23Ab	985210	117SK	0.71	0.39	0.11	12.115				
23Ab	010210	118SK	2.25	1.02	0.45			○		
23Ab	015210	119SE	1.41	1.29	-	-	○	●		近代
23Ab	995210_9 90210_98 5200	120SD-a 120SD-b	-	-	-	*10.665	○	○	○	戦国大 溝・溝
23Ab	015210_0 10210	121SD	-	-	-	*10.4	○	○		戦国溝
23Ab・Ac	025205_0 20210	122SD	-	-	-	*9.9	○	○		戦国溝
23Ab	985210	123SK	0.91	0.62	-	-	○			
23Ab	985210_9 95210	124SG	-	-	-	11.276		○		
23Ab	985210	125SK	0.8	0.77	0.08	12.140				
23Ab	995210	126SD	-	-	-	*11.1		○		戦国溝
23Ab	985205	128SX	-	-	-	断面図				
23Ab	015210	129SE	-	-	-	-				石組井戸
23Ab	015210	130SX	-2.6	-	-	-				
23Ac	025195	151SD	1.56	1.28	0.34	11.585	○			
23Ac	025190	152SP	0.47	0.32	0.11	12.016				
23Ac	025190	153SX	2.92	1.97	0.08	11.973	○	○	○	近代~
23Ac	025185	154SX	1.16	0.94	0.08	12.004				
23Ac	025185	155SK	0.44	0.31	0.27	11.921	○			
23Ac	020180	157SP	0.58	0.28	0.26	11.947				
23Ac	025190	158SP	0.19	0.12	0.58	11.542				
23Ac	025175_0 20175	160SX	1.17	0.89	0.15	11.840		○		
23Ac	025190	162SX	1.98	1.95	0.67	11.134	○	○		
23Ac	025190	163SK	0.87	0.5	0.05	11.932				近代~
23Ac	025185	164SP	0.22	0.15	0.23	11.890				
23Ac	025195	165SK	0.66	0.59	0.4	11.531				
23Ac	025175	166SP	0.38	0.18	0.12	11.708	○			
23Ac	025185	167SK	0.49	0.31	0.16	12.024				
23Ac	025185	168SP	0.19	0.14	0.17	11.778				
23Ac	020180	170SD	1.34	0.52	0.09	11.913				
23Ac	020180	171SD	0.58	0.42	0.04	11.977				
23Ac	020150_0 20155	172SX	4.23	2.78	-	-	●	●	●	
23Ac	020155	173SK	0.7	0.46	-	-	●	●	●	
23Ac	020145	175SK	1.65	0.94	0.24	11.679	○	○		
23Ac	020145	176SP	0.27	0.22	0.08	11.835				
23Ac	020145	177SX	1.79	1.34	0.05	11.880	●	●	●	
23Ac	020140	178SK	-	-	-	-	●	●	●	
23Ac		(179SK)	-	-	-	-	●	●	●	
23Ac		(180SK)	-	-	-	-	●	●	●	

遺構一覧表 (4)

調査区	グリッド (5m)	遺構No.	長軸 (m)	単軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (T.P.)	土器 陶磁器	瓦	常滑窯 製品	備考
23Ac	020150	181SK	5.91	2.18	-	-	●	●	●	
23Ac	020145	182SK	0.6	0.56	0.22	11.618	○	○		
23Ac	020145	183SD	5.71	0.69	0.36	11.630~ 11.574	○	○	○	
23Ac		(185SK)	-	-	-		○		○	
23Ac	020145	186SK	0.34	0.28	0.15	11.723				
23Ad	015115	201SK	1.38	1.26	0.43	11.585	●	●	●	
23Ad	015120	202SK	3.29	1.77	0.65	11.495	●	●	●	
23Ad		(204SK)	-	-	-		●	●	●	
23Ad	015125	205SD	2.39	1.36	0.11	11.725	○	○		
23Ad	015130	206SK	0.51	0.46	0.13	12.174				
23Ad	015130	207SK	0.97	0.75	0.04	12.259	○	○		
23Ad	015120	209SK	0.49	0.44	0.37	11.849				
23Ad	015115	210SK	-0.75	0.49	0.65	11.422				
23Ad	015115	211SK	0.98	0.76	0.39	11.601	●	●	○	
23Ad	015115	212SK	1.67	0.37	-	-				
23Ad	015115	213SK	3	1.58	0.74	11.187	●	●	●	
23Ad	015120	214SK	0.36	0.35	0.13	11.703				
23Ad	015115	215SK	0.4	0.39	0.36	11.690				
23Ad	015115	216SK	0.39	0.38	0.26	11.841	○			
23Ad		217SK	-	-	-		●	●	●	218SK上層
23Ad	015125	218SK	1.49	1.25	1.28	10.945	○	○		
23Ad	015125	219SK	0.6	0.56	0.78	11.401				
23Ad	015125	219SK	0.77	0.69	0.43	11.401				
23Ad	995110	220SD	3.99	1.15	0.46	11.090	○	○		戦国溝
23Ad	005110	221SX	0.6	0.34	0.12	11.539	○	○	○	
23Ad	015120	222SK	0.9	0.76	0.32	11.841				
23Ad	015130	223SK	-	-	0.12	11.849	○			
23Ad	015135_0 20135	224SK	-	-	0.31	11.505	○	○	○	
23Ad	015135_0 20135	225SK	0.98	0.72	0.29	11.508	○			
23Ad	015130	226SK	0.69	0.2	0.15	11.668	○			
23Ad	015115	227SK	1.5	1.1	0.15	12.003				
23Ad	015120	228SK	0.66	0.46	0.27	11.932				

\*遺物の有無、多寡：●多い／○あり

登録遺物一覧表 (1)

登録 番号	23	遺構No	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (/12) 口縁 底部	位置座標 グリッド
001	Aa2	065SD	陶器端反皿	瀬戸・美濃、灰釉、15世紀後葉 (古瀬戸後1V新)	(12.8)	(2.3)	-	1 -	980120
002	Aa2	065SD	陶器稜皿	瀬戸・美濃、鉄釉、1590年代初頭～1610年代 初頭 (大窯4)	-	(1.1)	4.4	- 5	980120
003	Aa2	065SD (中央東)	土師器皿	ロクロ調整皿、16世紀後半	(10.0)	2.3	(7.2)	1 3	980120
004	Aa2	065SDベルト	土師器皿	ロクロ調整皿、スス付着、16世紀後半	-	(1.3)	(3.8)	- 5	980120
005	Aa2	065SD	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃、鉄釉+灰釉、大窯1	(11.8)	(4.9)	-	1 -	980120
006	Aa2	065SD上面	陶器筒形碗	瀬戸・美濃、鉄釉+灰釉、江戸前期	-	(6.4)	-	- -	980120
007	Aa2	065SD (西半)	陶器壺	瀬戸・美濃、鉄釉、古瀬戸後期～大窯初	(24.8)	(4.0)	-	1 -	980120
008	Aa2	065SD (黒褐色土)	陶器壺	常滑	-	(6.1)	(12.0)	- 3	980120
009	Aa2	065SD	土師鍋	半球形内耳鍋	(27.5)	(3.3)	-	1 -	980120
010	Aa2	060SD (黒褐色土)	陶器向付	瀬戸・美濃、志野向付、半環足 (剝離)	-	(1.5)	-	- 1	980115_98 5115
011	Aa2	060SD (東壁際)	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃、鉄釉、1490-1510 (大窯1a)	(11.6)	-	(3.0)	1 -	980115_98 5115
012	Aa2	060SD	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃、鉄釉、1490-1510 (大窯1a)	11.4	-	(3.0)	2 -	980115_98 5115
013	Aa2	060SD	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃、鉄釉、1490-1510 (大窯1a)	(11.6)	-	(5.5)	4	980115_98 5115
014	Ac1	179SK上層攪乱 (下)	須恵器壺	-	-	(5.0)	-	- -	-
015	Aa1	001SK (東半)	陶器鉢	美濃、笠原鉢、17世紀第3四半期後半 (連房4小期)	33.6	-	(3.9)	-	975115
016	Aa1	001SK (2層目)	陶器楕鉢	瀬戸、鉄釉、19世紀前半、江戸後期	46.2	19.1	18.8	2 12	980120
017	Aa1	001SK (2層目)	磁器染付碗	瀬戸、端反碗、19世紀第2四半期 (連房10小期)	(8.2)	4.5	3.2	2 11	980120
018	Aa1	001SK (西半)	陶器植木鉢	美濃、鉄釉、内面に灰釉製品溶着、江戸後期	21.5	18.4	11.8	9 12	980115
019	Aa1	001SK (西半)	陶器壺	瀬戸、半胴壺、鉄釉、底面穿孔、江戸中期	17.7	12.1	11.4	10 12	975115
020	Aa1	001SK (西半)	陶器壺	瀬戸、鉄釉、19世紀第1四半期 (連房9小期)	(19.8)	-	(12.1)	2 -	975115
021	Aa1	001SK (東半)	陶器鉄軸壺	瀬戸、鉄釉、高台摩滅、墨書	-	(4.6)	(12.4)	- 3	980115
022	Aa1	011SK (西半)	陶器鉢	美濃、笠原鉢、17世紀第3四半期後半 (連房4小期)	(27.4)	(4.1)	-	1 -	980120
023	Aa1	019SK (南半) d-001	磁器染付皿	肥前、紅猪口	5.7	2.3	2.5	8 12	980120
024	Aa1	027SK	陶器湯呑	産地不明、乾山写、灰釉、上絵付、 (瀬戸ならば連房8小期)	(9.0)	5.9	3.0	4 12	980125
025	Aa1	027SK	青磁香炉	肥前	-	(5.4)	(8.2)	- 1	980125
026	Aa1	044SK	陶器仏花瓶	瀬戸・美濃、灰釉、アガノ、江戸後期	-	(3.7)	-	- -	980120
027	Aa1	045SD (上層2)	土師器皿	ロクロ調整皿、18世紀頃	10.0	2.1	5.5	10 12	980125
028	Aa1	045SD (上層2)	土師器皿	ロクロ調整皿、18世紀頃	(11.0)	(1.7)	(7.0)	3 9	980125
029	Aa1	045SD (上層)	土師器皿	ロクロ調整皿、18世紀頃	-	(1.8)	7.6	- 11	980125
030	Aa1	049SK	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃、鉄釉、17世紀前半	(9.3)	(2.9)	-	2 -	980125
031	Aa1	050SK	陶器碗	瀬戸・美濃、掛分碗、鉄釉、錆釉、灰釉、 江戸中期	-	(3.9)	(7.4)	- 3	980130 980125
032	Aa1	062SK	陶器染付蓋	瀬戸、具須絵	13.7	2.9	-	10 -	980115
033	Aa2	063SX (東壁上層)	陶器楕鉢	美濃、灰釉、鉄摺絵、18世紀	10.9	3.1	5.9	9 12	980115
034	Aa2	063SX	陶器緑軸皿	肥前、蛇ノ目軸割ぎ、18世紀	-	(2.6)	4.8	- 12	980115
035	Aa2	063SX (黄褐色土層下)	土師器皿	ロクロ調整皿、スス付着、17世紀～18世紀前半 (15.6)	(2.5)	-	-	1 -	980115
036	Aa2	063SX (黄褐色土層下)	土師器皿	ロクロ調整皿、スス付着、17世紀～18世紀前半 (15.6)	(2.7)	-	-	2 -	980115
037	Aa2	063SX (東)	土師器皿	ロクロ調整皿、17世紀～18世紀前半 (10.4)	2.4	4.7	3 6	-	980115
038	Aa2	063SX (東壁中層)・南北 トレンチ	陶器丸碗	産地不明、乾山写、長石釉、上絵付、(瀬戸な らば連房8小期)	12.0	6.2	4.0	11 12	980115
039	Aa2	063SX (黄褐色土下・南側 上部)	陶器丸碗	京・信楽、灰釉、口縁端部に鉄釉	9.8	5.4	3.8	- 12	980115
040	Aa2	063SX (東壁中層)	陶器染付碗	美濃、小中、19世紀	9.8	5.0	3.8	11 12	980115
041	Aa2	063SX, d-065	磁器湯呑	産地不明、染付	8.3	5.8	3.5	12 12	x -90980.0 Y -24118.0 Z 11.325 x -90980.0 Y -24118.0 Z 11.332
042	Aa2	063SX, d-066	陶器花瓶 (中)	美濃、灰釉鉄釉、上下掛分、18世紀前葉	8.8	8.4	20	11 12	x -90981.0 y -24118.0 z 11.164
043	Aa2	063SX (南)	陶器大皿	美濃、長石釉、18世紀第4四半期 (連房8小期)	(30.7)	(6.3)	-	1 -	980115
044	Aa2	063SX (黄褐色土層下)	土師鍋	焙烙	(18.0)	(7.6)	-	5 -	980115
045	Aa2	063SX底面	土人形	犬	-	(10.3)	(5.0)	- 12	980115
046	Aa2	063SX, d-067	陶器植木鉢	美濃、灰釉、江戸後期	-	(4.0)	13.4	- 7	x -90980.2 Y -24117.7 Z 11.402
047	Aa1	072SK	陶器丸碗	美濃、灰釉、江戸後期	(11.0)	(5.0)	-	2 -	980125
048	Aa1	072SK (南半)	陶器志野丸皿	瀬戸・美濃、志野、17世紀第2四半期 (連房2小期)	10.8	2.2	6.3	7 12	980115
049	Aa1	076SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃、灰釉、鉄絵、江戸後期	(10.2)	(3.8)	-	3 -	980115
050	Aa1	076SK	陶器鉢	瀬戸・美濃、黄瀬戸釉、胆礬、柳描文、17世紀 第3四半期 (連房3, 4小期)	(29.0)	(5.8)	-	1 -	980115
051	Aa1	074SK	青花皿	中国、景德鎮窯系	-	12	*1.2	- 3	-
052	Aa1	015SK (漆喰以下)	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、江戸後期	(31.2)	(15.6)	-	2 -	980125
053	Aa1	015SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、鉄釉流し掛け、江戸後期	20.7	(14.0)	-	8 -	980125
054	Aa1	015SK (西半)	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、江戸後期	(20.0)	(10.2)	-	5 -	980125
055	Aa1	015SK (壁外の上)	陶器壺	常滑、灰釉、18世紀	-	-	(5.5)	1 -	980125
056	Aa1	015SK (褐色土層)	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、江戸後期	-	(16.6)	14.5	- 12	980125
057	Aa1	015SK	陶器壺	常滑、灰釉、18世紀末か	45.0~47.1	(19.4)	53.8	12 -	980125
058	Aa1	015SK	陶器筒状製品	常滑	-	17.4	(14.2)	12 -	980125
059	Aa1	016SX (黄色土層)	陶器丸碗	美濃、尾呂茶碗、外)鉄釉、内)灰釉、江戸中期	-	(2.9)	6.2	- 7	980125
060	Aa1	016SX (黄色土層)	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、江戸後期	-	11.2	12.6	- 12	980125
061	Aa1	025SK, d-040	陶器植木鉢	瀬戸・美濃、灰釉、江戸後期	28.1	19.4	19.1	3 12	x -90982.0 Y -24126.2 Z 11.854

## 登録遺物一覧表(2)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率( /12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
062	Aa1	025SK	陶器甕	常滑, 灰釉, 18世紀	(外)55.1 (内)44.7	18.1	42.8	11	11		980125
063	Aa1	025SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸後期	-	(3.6)	7.6	-	8		980125
064	Aa1	025SK	陶器甕	常滑, 19世紀	(外)80.0 (内)68.0	-	(11.0)	10	-		980125
065	Aa1	025SK	陶器甕	常滑, 19世紀	(外)62.8 (内)51.0	-	(8.3)	3	-		980125
066	Aa1	025SK	陶器甕	常滑	-	31.5	(8.0)	-	9		980125
067	Aa1	042SK	陶器搦鉢	瀬戸, 鉄釉, 17世紀末(連房5小期)	(38.9)	(3.6)	-	1	-		98120
068	Aa1	042SK	磁器染付碗	肥前	-	(4.8)	4.3	-	7		98120
069	Aa1	042SK	陶器甕	常滑, 灰釉, 18世紀中葉か	(外)52.3 (内)40.8	20.0	44.3	12/12	10		98120
070	Ac1	172SX	陶器丸碗	美濃, 鉄釉, うのふ釉, 18世紀末頃-19世紀初め(8,9小期)	10.7	5.1	-	9	-		020150_02 0155
071	Ac1	172SX	磁器染付端反碗	肥前, ガラス継ぎ, 18世紀後半~19世紀	(9.9)	(4.2)	-	1	-		020150_02 0155
072	Ac1	172SX	磁器染付丸碗	肥前, 18世紀後半~19世紀	-	(3.6)	(4.8)	-	3		020150_02 0155
073	Ac1	172SX	磁器染付向付	肥前, 18世紀後半~19世紀	-	(4.7)	(4.9)	-	6		020150_02 0155
074	Ac1	172SX	陶器小皿	美濃, 灰釉, 17世紀第3四半期(連房4小期)	(12.4)	2.5	(7.0)	1	6		020150_02 0155
075	Ac1	172SX	陶器灯明皿	美濃, 灰釉, 19世紀中葉から幕末(連房10, 11小期)	(11.8)	(2.2)	-	2	-		020150_02 0155
076	Ac1	172SX	陶器丸皿	美濃, 灰釉油皿, 江戸後期	(9.3)	(1.9)	-	4	-		020150_02 0155
077	Ac1	172SX	陶器皿	美濃, 錆釉油皿, 江戸後期	9.6	2.4	3.5	7	12		020150_02 0155
078	Ac1	172SX	土師器皿	ロクロ調整皿	(9.4)	1.3	(4.8)	2	2		020150_02 0155
079	Ac1	172SX	土師器皿	ロクロ調整皿	-	(0.8)	(2.1)	-	3		020150_02 0155
080	Ac1	172SX	陶器徳利	産地不明, 鉄釉	-	(6.0)	-	-	-		020150_02 0155
081	Ac1	172SX	陶器徳利	美濃, 鉄釉, 江戸後期	-	(1.6)	7.3	-	6		020150_02 0155
082	Ac1	172SX	土器焼塩壺蓋	上面に刻印	(7.2)	1.6	(7.2)	5	4		020150_02 0155
083	Ac1	172SX	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 江戸後期	-	1.2	6.7	-	12		020150_02 0155
084	Ac1	172SX	陶器筒形容器	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	-	(2.4)	(7.1)	-	3		020150_02 0155
085	Ac1	172SX	陶器容器	瀬戸・美濃, 鉄釉, 錢甕, 底部穿孔, 江戸中期	-	(3.7)	5.4	-	7		020150_02 0155
086	Ac1	172SX	陶器搦鉢	瀬戸, 鉄釉, 19世紀初め(連房9小期)	(34.5)	(8.9)	-	3	-		020150_02 0155
087	Ac1	172SX	陶器搦鉢	瀬戸, 鉄釉, 幕末頃(連房11小期)	(46.6)	24.0	(21.0)	1	5		020150_02 0155
088	Ac1	172SX	陶器壺	美濃, 鉄釉, 四耳壺, 江戸後期か	-	(8.3)	-	-	-		020150_02 0155
089	Ac1	172SX	陶器水甕	美濃, 灰釉, 鉄釉流し掛け, 18世紀第4四半期(連房8小期)	(38.0)	(9.7)	-	1	-		020150_02 0155
090	Ac1	172SX	土器鍋	半球形内耳鍋, 外面にスス付着	(29.4)	(3.1)	-	1	-		020150_02 0155
091	Ac1	172SX	土人形(灯籠)	一部に彩色残る	全長 (5.2)	厚 0.6	最大幅4.3	-	-		020150_02 0155
092	Ac1	172SX	土人形(灯籠)		-	(1.3)	-	6	-		020150_02 0155
093	Ac1	172SX	土人形(灯籠)		-	(2.4)	-	-	-		020150_02 0155
094	Ac1	172SX	土人形(灯籠)	内面白化粧, 透明釉	-	(6.0)	9.7	-	12		020150_02 0155
095	Ac1	173SK	陶器端反碗	美濃, 端反碗, 梅文, 19世紀前葉(10小期)	12.0	-	*5.2	-	-		020155
096	Ac1	173SK	陶器丸碗	瀬戸, 灰釉, 江戸中期	-	(1.5)	5.3	-	6		020155
097	Ac1	173SK	磁器染付丸碗	肥前	(11.6)	5.4	4.7	4	12		020155
098	Ac1	173SK	磁器染付鉢	肥前	-	(5.1)	5.2	-	6		020155
099	Ac1	173SK	土器焼塩壺	板作り成形	6.1	7.4	4.7	2	6		020155
100	Ac1	173SK	陶器植木鉢	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	-	(4.1)	8.0	-	12		020155
101	Ac1	173SK	陶器鉢	美濃, 笠原鉢, 17世紀第3四半期(連房3, 4小期)	(28.4)	(4.0)	-	1	-		020155
102	Ac1	175SK	陶器片口	瀬戸, 灰釉, 鉄釉流し掛け, 17世紀末-18世紀初(連房5, 6小期)	(15.0)	(7.1)	-	3	-		020145
103	Ac1	175SK	陶器丸碗	瀬戸, 鉄釉, 江戸前期	-	(2.6)	(4.6)	-	3		020145
104	Ac1	175SK	磁器染付小碗	肥前, 薬物	5.0	2.6	2.4	4	5		020145
105	Ac1	175SK	磁器染付猪口	肥前	-	(3.1)	(5.0)	-	6		020145
106	Ac1	175SK	青花皿	中国, 漳州窯系, 菊花文皿	-	5.6	*1.8	-	-		020145
107	Ac1	175SK	陶器搦鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀第3四半期(連房3, 4小期)	(21.6)	(5.7)	-	2	-		020145
108	Ac1	178SK	陶器火鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸後期	(21.4)	(6.3)	-	1	-		020140
109	Ac1	178SK	磁器染付丸碗	肥前(or青花)	7.8	4.0	3.3	7	12		020140
110	Ac1	178SK	土人形	太鼓もしくは南蛮壺	全長 (8.6)	厚 0.5	最大幅 (3.9)	-	-		020140
111	Ac1	178SK	陶器花瓶(大)	美濃, (上)灰釉, (下)鉄釉, 江戸中期	10.4	19.8	8.8	9	12		020140
112	Ac1	177SX	陶器鍋	美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	(17.1)	(9.0)	(7.8)	5	3		020145
113	Ac1	177SX	土器	エンゴ口蓋	(15.0)	2.7	(8.2)	5	6		020145
114	Ac1	179SK	陶器向付	瀬戸・美濃, 志野織部四方向付, 半環足(痕跡), 16世紀末	-	(1.1)	-	-	-		
115	Ac1	179SK	染付皿	肥前	-	0.7	(5.8)	-	1		

## 登録遺物一覧表(3)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率( / 12)		位置座標	グリッド
								口径	底部		
116	Ac1	179SK	磁器染付皿	肥前	-	(1.8)	(8.5)	-	12		
117	Ac1	180SK	陶器拵鉢	瀬戸・鉄釉, 江戸中期	-	(8.7)	(15.6)	-	6		
118	Ac1	181SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸中期	(14.0)	(7.9)	-	3	-	020150	
119	Ac1	181SK	陶器丸碗	美濃, 灰釉, 江戸中期	(9.8)	(6.2)	-	4	-	020150	
120	Ac1	181SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 京焼風浅碗, 江戸後期	11.3	4.3	4.3	12	12	020150	
121	Ac1	181SK	陶器端反碗	美濃, 長石釉, 鉄絵, 19世紀前葉(9, 10小期)	11.0	5.9	4.4	3	12	020150	
122	Ac1	181SK	磁器染付端反碗	肥前	(13.0)	(3.6)	-	1	-	020150	
123	Ac1	181SK	磁器染付端反碗	肥前	(10.4)	(4.2)	-	3	-	020150	
124	Ac1	181SK	陶器染付広東茶碗	美濃, 灰釉, 19世紀第2四半期(連房10小期)	(11.3)	6.8	5.5	6	12	020150	
125	Ac1	181SK	陶器広東茶碗	瀬戸, 灰釉, 19世紀第2四半期(連房10小期)	-	(4.2)	6.8	-	6	020150	
126	Ac1	181SK	陶器火入れ	瀬戸・美濃, 灰釉, 菅笠底, 京焼風	-	(6.1)	(5.6)	-	3	020150	
127	Ac1	181SK	陶器反り皿	美濃, 灰釉, 江戸中期以前	-	(2.1)	7.0	-	2	020150	
128	Ac1	181SK, d-077	青磁皿	肥前(波佐見)	13.0	4.6	3.4	-	-	X -98021.6 Y -24149.1 Z 11.854	
129	Ac1	181SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 灰釉, 19世紀中葉から幕末(連房10, 11小期)	(12.1)	3.2	(6.5)	4	4	020150	
130	Ac1	181SK	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 鉄釉油皿, 江戸後期	(11.6)	(2.3)	-	3	-	020150	
131	Ac1	181SK	陶器灯明皿	美濃, 錆釉, 江戸後期	(10.0)	(2.0)	-	1	-	020150	
132	Ac1	181SK	陶器灯明皿	美濃, 錆釉, 19世紀初め(連房9小期)	10.2	2.2	4.5	11	12	020150	
133	Ac1	181SK	陶器灯明皿	美濃, 錆釉, 19世紀第2四半期(連房10小期)	9.8	2.3	4.5	12	12	020150	
134	Ac1	181SK	陶器灯明皿	瀬戸, 長石釉, 19世紀中葉から幕末(連房10, 11小期)	11.0	2.4	3.8	12	12	020150	
135	Ac1	181SK	陶器急須	常滑, 朱泥	6.1	8.3	6.6	12	6	020150	
136	Ac1	181SK	陶器壺	美濃, 灰釉, 有耳壺, 江戸中期	-	(6.4)	5.4	-	12	020150	
137	Ac1	181SK	陶器灰落とし	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	11.0	9.9	11.6	12	12	020150	
138	Ac1	181SK	陶器筒形香炉	京・信楽, 灰釉, 蓋物	7.3	6.0	5.2	12	12	020150	
139	Ac1	181SK	陶器容器	瀬戸, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	6.9	3.4	4.1	12	12	020150	
140	Ac1	181SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	7.0	3.4	4.7	9	12	020150	
141	Ac1	181SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中-後期	-	(2.2)	5.9	-	7	020150	
142	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中-後期	10.9	1.9	4.8	5	12	020150	
143	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸後期	11.2	1.7	5.6	12	12	020150	
144	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 有耳壺蓋, 江戸中期	7.0	1.3	4.1	12	12	020150	
145	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 江戸中期	5.8	1.2	2.9	12	12	020150	
146	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 江戸中期	6.8	1.2	4.7	12	12	020150	
147	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中-後期	8.5	1.2	8.5	3	5	020150	
148	Ac1	181SK	陶器容器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中-後期	-	1.1	6.8	-	3	020150	
149	Ac1	181SK	陶器鍋	京・信楽, 鉄釉	(20.6)	(5.2)	-	2	-	020150	
150	Ac1	181SK	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	(19.2)	(8.5)	-	4	-	020150	
151	Ac1	181SK, d-081	土器焼塩壺	輪積み成形	-	(10.3)	(5.0)	-	12	X -91022.7 Y -24148.5 Z 11.597	
152	Ac1	181SK	土器焼塩壺	板作り成形	(6.6)	7.9	4.4	6	12	020150	
153	Ac1	181SK	磁器染付徳利	肥前	1.7	(11.6)	-	12	-	020150	
154	Ac1	181SK	陶器筒形鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 孫太, 江戸後期	17.3	11.8	12.5	10	6	020150	
155	Ac1	181SK	陶器筒形鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 孫太, 江戸中期	13.3	11.4	10.3	12	12	020150	
156	Ac1	181SK	陶器徳利	美濃, 錆釉, 江戸後期	2.3	14.1	5.3	12	12	020150	
157	Ac1	181SK	陶器徳利	美濃, 灰釉, 貧乏徳利, 19世紀第2四半期(連房10小期)	3.6	(2.6)	-	6	-	020150	
158	Ac1	181SK	陶器徳利	美濃, 錆釉, 江戸後期	-	(14.8)	7.6	-	12	020150	
159	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 17世紀第3四半期後半(連房4小期)	(39.2)	(9.8)	-	1	-	020150	
160	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 19世紀第1四半期(連房9小期)	(39.6)	(8.2)	-	1	-	020150	
161	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 幕末頃(連房11小期)	(42.0)	(11.2)	-	2	-	020150	
162	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 幕末頃(連房11小期)	(47.8)	(10.8)	-	1	-	020150	
163	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉	45.0	18.2	20.8	6	5	020150	
164	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉	-	(11.5)	(13.0)	-	5	020150	
165	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 幕末頃(連房11小期)	(42.0)	19.6	(19.4)	4	3	020150	
166	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 江戸後期	-	(7.2)	(14.5)	-	4	020150	
167	Ac1	181SK	陶器拵鉢	瀬戸, 鉄釉, 江戸後期	-	(13.4)	19.0	-	12	020150	
168	Ac1	181SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	(38.0)	(7.0)	-	1	-	020150	
169	Ac1	181SK	陶器植木鉢	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	(34.6)	(6.4)	-	2	-	020150	
170	Ac1	181SK	陶器水盥	瀬戸, 灰釉, 幕末頃(連房11小期)	(29.0)	(6.4)	-	2	-	020150	
171	Ac1	181SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(8, 9小期)	13.5	(8.7)	-	6	-	020150	
172	Ac1	181SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 志野鉄絵, 江戸後期	(21.0)	(14.2)	-	3	-	020150	
173	Ac1	181SK	陶器鉢	瀬戸, 灰釉, 雑鉢, 江戸中-後期	(19.4)	(3.7)	-	2	-	020150	
174	Ac1	181SK	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 鉄・呉須絵, 石皿, 江戸後期	(23.7)	(3.9)	(10.2)	2	7	020150	
175	Ac1	181SK	陶器水盤	瀬戸, 鉄釉, 江戸中-後期	(37.6)	10.4	28.4	3	2	020150	
176	Ac1	181SK	陶器花生	瀬戸・美濃, 灰釉鉄釉, うすばた, 胴部ガラス継, 江戸前期	19.5	22.4	6.4	9	12	020150	
177	Ac1	181SK	陶器火鉢	瀬戸, 鉄釉, 江戸後期	(17.2)	(4.9)	-	3	-	020150	
178	Ac1	181SK	陶器鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 19世紀中葉から幕末(連房10, 11小期)	-	(6.2)	(14.5)	-	4	020150	
179	Ac1	181SK	陶器笠原鉢	美濃, 笠原鉢, 江戸前期	-	(5.0)	(17.0)	-	3	020150	
180	Ac1	185SK	陶器丸皿	美濃, 灰釉, 17世紀第2四半期	(12.6)	(3.1)	(6.4)	1	5	015115	
181	Ad1	201SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 灰釉流し掛け, 江戸中期	(11.8)	(5.9)	7.4	2	3	015115	
182	Ad1	201SK	陶器丸碗	京・信楽, 灰釉, 白釉梅花文, 江戸後期	(8.4)	3.7	(5.0)	3	8	015115	
183	Ad1	201SK	陶器箱形湯呑	美濃, 鉄釉, 江戸後期	-	4.0	(3.4)	-	7	015115	
184	Ad1	201SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 19世紀中葉から幕末(連房10, 11小期)	(11.5)	(4.8)	2.4	3	-	015115	
185	Ad1	201SK	磁器染付鉢	肥前	-	5.4	(3.5)	-	6	015115	
186	Ad1	201SK	磁器染付丸碗	肥前	(10.5)	-	(3.2)	3	-	015115	
187	Ad1	201SK	磁器染付丸碗	関西系窯	(9.7)	-	(3.9)	4	-	015115	
188	Ad1	201SK	磁器染付丸碗	肥前	(8.6)	-	(3.4)	3	-	015115	
189	Ad1	201SK	磁器染付丸碗	関西系窯	7.9	3.2	4.0	7	12	015115	
190	Ad1	201SK	磁器染付碗蓋	関西系窯	(9.2)	-	2.5	5	7	015115	

## 登録遺物一覧表(4)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率( /12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
191	Ad1	201SK	陶器水滴	美濃, 御深井釉, 江戸前期	(1.8)	(4.4)	3.3	3	5		015115
192	Ad1	201SK	陶器土瓶	美濃, 鉄釉, 18世紀末頃-19世紀初め (8,9小期)	(10.0)	-	(7.2)	2	-		015115
193	Ad1	201SK	陶器鍋	瀬戸, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	-	6.8	*9.6	-	4		015115
194	Ad1	201SK	陶器植木鉢	瀬戸, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め (8,9小期)	(19.1)	-	(11.2)	2	-		015115
195	Ad1	201SK	陶器餌播	産地不明, 鉄釉	-	(6.3)	(4.7)	-	3		015115
196	Ad1	201SK	土器鍋	半球形内耳鍋	(42.0)	-	(9.1)	3	-		015115
197	Ad1	201SK	陶器小瓶	美濃, 灰釉, 江戸後期	2.7	4.3	11.9	11	12		015115
198	Ad1	202SK	陶器碗	瀬戸, 麦葉手, 18世紀末頃-19世紀初め (8,9小期)	(11.5)	-	(5.7)	3	-		015120
199	Ad1	202SK	陶器丸碗	美濃, 灰釉	(11.0)	-	(2.8)	2	-		015120
200	Ad1	202SK	陶器丸碗	美濃, 長石釉, 18世紀末頃-19世紀初め (8,9小期)	(11.3)	(3.9)	5.6	3	3		015120
201	Ad1	202SK	陶器丸碗	京・信楽, 灰釉, 蓋物	-	4.4	*2.0	-	-		015120
202	Ad1	202SK	陶器碗	美濃, 灰釉, 柳茶碗, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	(13.3)	(3.5)	6.6	7	7		015120
203	Ad1	202SK	陶器湯呑	美濃, 灰釉, 呉須絵, せんじ, 18世紀中葉 (連房7小期)	(8.8)	3.7	5.2	9	12		015120
204	Ad1	202SK	陶器碗?	瀬戸・美濃, 灰釉・鉄釉, 腰鎗碗, 19世紀第2 四半期(連房10小期)	(8.9)	3.8	5.3	4	8		015120
205	Ad1	202SK	陶器小杯	京・信楽, 灰釉	-	3.5	(1.0)	-	10		015120
206	Ad1	202SK	磁器染付小杯	肥前	(6.4)	-	(3.2)	2	-		015120
207	Ad1	202SK	青花端反碗	中国(清朝)	(7.6)	(3.8)	3.9	2	4		015120
208	Ad1	202SK	磁器染付丸皿	肥前(伊万里)	(13.8)	8.0	3.7	4	12		015120
209	Ad1	202SK	陶器火入れ	京・信楽, 灰釉, 碁笥底, 露胎	(9.4)	(6.3)	7.2	3	2		015120
210	Ad1	202SK	陶器徳利	美濃, 錆釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8,9小期)	-	7.0	(5.3)	-	12		015120
211	Ad1	202SK	陶器植木鉢	瀬戸, 鉄釉, 18世紀末頃-19世紀初め (8,9小期)	-	8.2	(6.6)	-	12		015120
212	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 鉄絵, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8,9小期)	12.5	3.9	4.8	9	12		015120
213	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 江戸後期	(12.2)	-	(3.7)	3	-		015120
214	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀後半	(13.0)	-	(3.6)	2	-		015120
215	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀後半	(12.0)	(3.7)	4.8	2	2		015120
216	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀後半	(12.1)	3.4	4.8	1	4		015120
217	Ad1	202SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀後半	-	(4.2)	(1.5)	-	4		015120
218	Ad1	202SK	陶器染付丸皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 呉須絵, 18世紀第4四半期 (連房8小期)	11.2	6.1	3.3	12	12		015120
219	Ad1	202SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8,9小期)	(11.3)	4.6	3.3	2	12		015120
220	Ad1	202SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 灰釉, 呉須絵, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	12.0	4.8	3.3	9	11		015120
221	Ad1	202SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 灰釉, 呉須絵, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	11.7	4.8	3.2	10	10		015120
222	Ad1	202SK	陶器手付鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 鉄絵, 18世紀末頃-19世紀 初め(連房8,9小期)	19.6	9.0	5.1	6	12		015120
223	Ad1	202SK	陶器灯明皿	美濃, 錆釉, 18世紀第4四半期(連房8小期)	10.8	4.0	2.1	12	12		015120
224	Ad1	202SK	土師器皿	ロク口調整皿	(8.8)	-	(1.6)	1	-		015120
225	Ad1	202SK	陶器折縁皿	美濃, 灰釉, 折縁輪壳皿, 18世紀中葉 (連房7小期)	21.8	-	(4.4)	1	-		015120
226	Ad1	202SK	陶器播鉢	瀬戸, 鉄釉, 18初(連房6小期)	(32.4)	-	(5.7)	2	-		015120
227	Ad1	202SK	陶器土瓶	美濃, 鉄釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8,9小期)	7.8	-	(10.1)	10	-		015120
228	Ad1	202SK	陶器急須	美濃, 鉄釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8,9小期)	-	-	(3.6)	-	-		015120
229	Ad1	202SK	陶器鍋	美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	(17.2)	-	(5.1)	3	-		015120
230	Ad1	202SK	陶器鍋	美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	-	8.5	(4.2)	-	6		015120
231	Ad1	202SK	陶器筒形香炉	瀬戸, 銅緑釉	(16.8)	(12.0)	9.5	2	3		015120
232	Ad1	202SK	陶器火鉢	美濃, 柿釉, 内面に墨書, 18世紀末頃-19世紀 初め(連房8,9小期)	-	(15.8)	(10.7)	-	3		015120
233	Ad1	202SK	土器蓋	火消壺蓋, 内面黒色化	(14.4)	-	(3.7)	2	2		015120
234	Ad1	202SK	陶器蓋	京・信楽, 灰釉	-	4.8	(1.0)	-	10		015120
235	Ad1	202SK	陶器蓋	京・信楽, 灰釉	(5.4)	-	0.7	4	4		015120
236	Ad1	202SK	土器椀格	-	-	-	(4.1)	1	-		015120
237	Ad1	202SK	瓦質土器鍋	双耳鍋	(25.6)	-	上(4.9)+ 下(2.3)	2	2		015120
238	Ad1	202SK	土器鍋	-	-	-	(2.5)	-	-		015120
239	Ad1	202SK	瓦質土器鍋	双耳鍋	-	(11.0)	(2.0)	-	2		015120
240	Ad1	202SK	土器焼塩壺蓋	-	7.2	-	1.7	12	12		015120
241	Ad1	202SK	土器焼塩壺蓋	-	7.5	-	1.8	12	12		015120
242	Ad1	202SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.8	4.8	7.9	12	12		015120
243	Ad1	202SK	土器焼塩壺	板作り成形	-	(5.0)	(8.0)	3	3		015120
244	Ad1	202SK	土器焼塩壺	ロク口調整皿	5.2	4.9	7.4	12	12		015120
245	Ad1	202SK	土器焼塩壺	ロク口調整皿	-	5.0	(3.5)	-	12		015120
246	Ad1	202SK	土器焼塩壺	板作り成形	-	5.4	(4.7)	-	2		015120
247	Ad1	202SK	土人形(飾馬)	-	長(10.2)	幅5.0	高(9.9)	-	-		015120
248	Ad1	202SK	土器燈炉	-	(19.0)	-	(5.2)	6	-		015120
249	Ad1	202SK	土器火鉢	常滑	-	(19.4)	(7.8)	2	2		015120
250	Ad1	202SK	土器くど	常滑	(30.2)	-	(10.2)	2	-		015120
251	Ad1	204SK	陶器向付	瀬戸・美濃, 志野鉄絵, 江戸後期	-	9.2	*3.2	-	-		015125
252	Ad1	204SK	陶器型打ち皿	美濃, 御深井釉, 江戸中期	-	(5.5)	(2.0)	-	5		015125
253	Ad1	204SK	土器鍋	瀬戸, 江戸後期	(20.0)	-	(6.6)	2	-		015125
254	Ad1	204SK	陶器急須	常滑, 鼓肌釉	-	-	-	-	-		015125
255	Ad1	204SK	磁器染付筒形容器	瀬戸, 段重	7.4×7.5	-	3.2	9	9		015125
256	Ad1	204SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	8.2	8.6	4.3	8	10		015125
257	Ad1	204SK	土人形(飾馬)	-	長(11.5)	幅(5.1)	高(9.7)	-	-		015125
258	Ad1	211SK	陶器碗	美濃, 鉄釉, 沈線碗, 江戸中期	10.8	5.1	8.1	10	12		015115

## 登録遺物一覧表 (5)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 ( / 12)	位置座標	グリッド
					口径	底径	器高	口径	底部	
259	Ad1	211SK	陶器丸碗	瀬戸, 灰釉, 呉須絵, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	-	4.8	*4.1	-	-	015115
260	Ad1	211SK	陶器小碗?	京・信楽, 灰釉	-	3.6	(1.0)	-	12	015115
261	Ad1	211SK	陶器浅碗	京・信楽, 灰釉	(13.2)	-	(3.7)	2	-	015115
262	Ad1	211SK	陶器浅碗	瀬戸, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	(12.4)	-	(3.7)	3	-	015115
263	Ad1	211SK	陶器碗	瀬戸, 刷毛目碗, 江戸後期	(11.7)	-	(4.2)	1	-	015115
264	Ad1	211SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 19世紀第2四半期 (連房10小期)	11.6	5.7	2.9	8	12	015115
265	Ad1	211SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	(11.6)	6.0	3.3	3	12	015115
266	Ad1	211SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 18世紀第4四半期 (連房8小期)	11.3	4.1	3.3	12	12	015115
267	Ad1	211SK	陶器皿	美濃, 鏽釉, 油皿, 江戸後期	(10.5)	(4.6)	2.0	1	2	015115
268	Ad1	211SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(11.6)	4.6	1.8	2	-	015115
269	Ad1	211SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(8.8)	5.0	1.7	4	5	015115
270	Ad1	211SK	陶器播鉢	瀬戸, 鉄釉, 17世紀中葉 (連房3小期)	(34.0)	-	(4.1)	1	-	015115
271	Ad1	211SK	磁器容器	肥前, 蓋物	(11.8)	-	(3.9)	2	-	015115
272	Ad1	211SK	磁器染付丸皿	肥前	(17.6)	(11.0)	3.4	2	2	015115
273	Ad1	211SK	陶器染付蓋	美濃, 灰釉, 呉須絵, 18世紀中葉 (連房7小期)	(9.9)	-	1.9	2	-	015115
274	Ad1	211SK	陶器蓋	瀬戸, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	(11.9)	-	1.6	10	-	015115
275	Ad1	211SK	陶器合子蓋	美濃, 灰釉, 江戸中期	(5.5)	-	(1.1)	2	-	015115
276	Ad1	211SK	陶器小型製品	瀬戸, (外) 灰釉・緑釉, (内) 緑釉, 江戸後期	-	4.8	*0.8	-	-	015115
277	Ad1	211SK	陶器土瓶	産地不明, 鉄釉	-	-	(9.9)	-	-	015115
278	Ad1	211SK	陶器鍋	美濃, 鏽釉, 双耳鍋, 江戸後期	(12.0)	-	(4.9)	2	-	015115
279	Ad1	211SK	陶器壺	瀬戸, 灰釉, 江戸中期	-	(9.8)	(6.9)	-	5	015115
280	Ad1	211SK	陶器素燗	瀬戸・美濃, 長石釉, 江戸後期	4.2	2.6	2.2	4	12	015115
281	Ad1	211SK	陶器德利	瀬戸, 灰釉, 胴部に穿孔, 江戸後期	(3.1)	(10.8)	26.5	5	5	015115
282	Ad1	211SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 19世紀第2四半期 (連房10小期)	(28.1)	-	(8.0)	2	-	015115
283	Ad1	211SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 19世紀前葉 (9, 10小期)	(22.4)	-	(14.1)	3	-	015115
284	Ad1	211SK	土器甕	常滑, 赤物甕	(28.8)	-	(12.5)	1	-	015115
285	Ad1	211SK	土器甕	常滑, 赤物甕	-	(33.9)	(18.7)	-	2	015115
286	Ad1	211SK	陶器水甕	瀬戸, 灰釉, 緑釉流し掛け, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	(34.4)	-	(4.2)	2	-	015115
287	Ad1	211SK	陶器水甕	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	-	(23.2)	(2.6)	-	3	015115
288	Ad1	211SK	土器焼塩壺蓋		7.2	-	2.0	6	6	015115
289	Ad1	211SK	土人形 (猫)		長(14.8)	幅(4.5)	高(10.1)	-	-	015115
290	Ad1	211SK	土人形 (飾馬)		長(6.4)	幅(2.5)	高(7.9)	-	-	015115
291	Ad1	211SK	土人形 (食器)	合子	2.0	1.2	0.9	11	11	015115
292	Ad1	213SK	陶器燗台	瀬戸・美濃, 織部写燗台, 19世紀	5.3	4.8	10.7	11	12	015115
293	Ad1	213SK	磁器染付容器	関西系窯, 合子身	(5.4)	(4.0)	2.3	4	4	015115
294	Ad1	213SK	磁器染付容器	関西系窯, 合子身	4.5	4.5	1.5	6	6	015115
295	Ad1	213SK	白磁紅皿	肥前	4.4	1.4	1.4	12	12	015115
296	Ad1	213SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 灰釉, 18世紀	11.8	4.6	6.2	12	12	015115
297	Ad1	213SK	陶器丸碗	京・信楽, 灰釉, 鉄絵	(11.3)	-	(5.8)	2	-	015115
298	Ad1	213SK	陶器丸碗	産地不明, 鉄釉	(12.8)	-	(4.7)	2	-	015115
299	Ad1	213SK	陶器丸碗	京焼, 灰釉	-	(4.9)	(2.5)	-	2	015115
300	Ad1	213SK	陶器丸碗	京・信楽か, 灰釉	-	3.8	(1.1)	-	6	015115
301	Ad1	213SK	磁器染付丸碗	肥前	(14.8)	-	(4.9)	3	-	015115
302	Ad1	213SK	磁器染付丸碗	肥前	(13.3)	-	(2.3)	3	-	015115
303	Ad1	213SK	磁器染付丸碗	肥前	(11.6)	-	(4.1)	2	-	015115
304	Ad1	213SK	磁器染付丸碗	肥前	(9.6)	-	(3.9)	3	-	015115
305	Ad1	213SK	磁器染付端反碗	肥前, 口鏝	(8.8)	-	(3.6)	2	-	015115
306	Ad1	213SK	青磁深皿	肥前, (外) 青磁釉, (内) 染付	(13.9)	7.6	5.2	7	7	015115
307	Ad1	213SK	磁器端反皿	肥前, (外) 青磁釉, (内) 白磁	(17.5)	-	(2.5)	1	-	015115
308	Ad1	213SK	磁器染付丸碗	肥前	-	4.3	(3.0)	-	12	015115
309	Ad1	213SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 鉄絵, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	12.2	3.2	4.5	8	12	015115
310	Ad1	213SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 19世紀前葉 (連房9, 10小期)	(12.5)	(4.2)	4.6	1	5	015115
311	Ad1	213SK	陶器染付丸皿	瀬戸, 19世紀第2四半期 (連房10小期)	(11.2)	4.1	3.3	5	12	015115
312	Ad1	213SK	磁器白磁碗	関西系窯, 青磁釉	-	(4.4)	(1.9)	-	3	015115
313	Ad1	213SK	陶器皿	美濃, 鏽釉, 灯明皿, 19世紀前葉 (連房9, 10小期)	(10.1)	(4.6)	1.7	2	2	015115
314	Ad1	213SK	陶器灯明皿	美濃, 鏽釉, 19世紀前葉 (連房9, 10小期)	10.1	4.8	2.3	12	12	015115
315	Ad1	213SK	陶器皿	美濃, 灰釉, 摺鉢皿, 18世紀中葉 (連房7小期)	(17.6)	5.9	4.2	5	12	015115
316	Ad1	213SK	陶器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	(8.5)	-	(1.2)	4	-	015115
317	Ad1	213SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	(9.6)	(6.0)	5.0	6	6	015115
318	Ad1	213SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 合子身, 江戸中期	(6.2)	(5.4)	3.1	6	6	015115
319	Ad1	213SK	陶器德利	美濃, 鏽釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	2.4	-	(10.8)	12	-	015115
320	Ad1	213SK	陶器小瓶	京・信楽, 白釉, 緑釉流し掛け, 江戸後期	-	3.2	(4.9)	-	7	015115
321	Ad1	213SK	陶器德利	美濃, 鏽釉, 江戸後期	-	2.4	(7.0)	-	12	015115
322	Ad1	213SK	陶器蓋	京・信楽, 灰釉	6.8	5.0	1.9	7	7	015115
323	Ad1	213SK	陶器蓋	京・信楽, 灰釉	2.2	-	1.8	12	12	015115
324	Ad1	213SK	陶器蓋	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	9.0	5.2	2.0	3	12	015115
325	Ad1	213SK	陶器壺	美濃, 灰釉, 双耳壺, 江戸中期	(11.4)	-	(11.4)	9	-	015115
326	Ad1	213SK	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉, 双耳鍋, 江戸後期	14.6	5.9	7.9	8	11	015115
327	Ad1	213SK	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉, 双耳鍋, 江戸後期	-	(6.5)	(1.2)	-	4	015115
328	Ad1	213SK	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉, 双耳鍋, 江戸後期	-	(9.0)	(2.7)	-	3	015115
329	Ad1	213SK	陶器土瓶	瀬戸, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	8.2	10.0	12.1	12	8	015115
330	Ad1	213SK	陶器土瓶	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	(8.6)	(7.1)	12.2	9	7	015115
331	Ad1	213SK	陶器播鉢	瀬戸, 鉄釉, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	39.7	-	(13.8)	9	-	015115
332	Ad1	213SK	土器焙烙		(39.0)	-	(4.1)	2	-	015115
333	Ad1	213SK	土器焙烙		-	-	(3.8)	1	-	015115
334	Ad1	213SK	土器焙烙		-	-	(3.0)	1	-	015115
335	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(15.2)	-	(2.5)	2	-	015115

## 登録遺物一覧表 (6)

登録番号	23	遺構No.	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 ( /12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
336	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(15.2)	-	(3.0)	1	-		015115
337	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	10.2	5.6	1.9	7	7		015115
338	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(11.4)	(6.0)	1.8	2	2		015115
339	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(9.8)	(5.8)	1.9	2	2		015115
340	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿	(10.1)	6.2	1.9	4	4		015115
341	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿, ミガキ調整	(11.5)	(4.8)	1.9	3	3		015115
342	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿, ミガキ調整	11.5	-	2.1	2	-		015115
343	Ad1	213SK	土師器皿	ロクロ調整皿, ミガキ調整, 中央に穿孔	(11.3)	(5.0)	1.8	8	7		015115
344	Ad1	213SK	土人形(飾馬)		長(10.3)	幅(4.5)	高9.4	-	-		015115
345	Ad1	213SK	土人形(飾馬)		長(9.6)	幅(5.0)	高9.6	-	-		015115
346	Ad1	213SK	土人形(猫)		長(8.0)	幅(2.7)	高(4.5)	-	-		015115
347	Ad1	213SK	土人形(猫)		長(5.7)	幅(4.2)	高(4.0)	-	-		015115
348	Ad1	213SK	土人形(鳥)		長(4.5)	(厚)1.9	高(4.5)	-	-		015115
349	Ad1	213SK	土人形(不明)		長(5.9)	幅(1.3)	高(3.6)	-	-		015115
350	Ad1	213SK	土人形(福助?)		高(7.4)	幅(5.9)	厚さ(2.7)	-	-		015115
351	Ad1	213SK	陶器植木鉢	瀬戸, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	13.7	9.9	13.2	8	12		015115
352	Ad1	213SK	陶器鉢鉢	瀬戸, 長石釉, 19世紀第2四半期(連房10小期)	(19.5)	-	(5.2)	3	-		015115
353	Ad1	213SK	陶器瓶掛	瀬戸, 緑釉, 江戸後期	(30.0)	-	(3.6)	2	-		015115
354	Ad1	213SK	陶器半胴甕	瀬戸, 鉄釉, 江戸後期	(33.6)	(23.0)	26.3か	5	4		015115
355	Ad1	213SK	陶器半胴甕	瀬戸, 鉄釉, 底部穿孔, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(20.6)	13.8	19.8	5	12		015115
356	Ad1	213SK	陶器半胴甕	瀬戸, 鉄釉, 底部穿孔, 江戸後期	-	10.7	(10.7)	-	12		015115
357	Ad1	213SK	土器火鉢	常滑, 赤物, 底部穿孔	36.4	28.0	17.1	9	12		015115
358	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.4	-	1.6	12	12		015115
359	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.3	-	1.6	12	-		015115
360	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.2	-	1.7	10	-		015115
361	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.5	-	1.6	12	-		015115
362	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.3	-	1.5	12	-		015115
363	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.2	-	1.6	12	12		015115
364	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.4	-	1.5	12	-		015115
365	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.5	-	1.5	12	-		015115
366	Ad1	213SK	土器焼塩壺蓋		7.3	-	1.9	12	-		015115
367	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.2	5.3	7.5	12	12		015115
368	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	4.8	5.0	7.7	12	-		015115
369	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.3	5.0	7.2	12	-		015115
370	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.2	4.8	7.3	11	12		015115
371	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.4	4.8	7.4	11	-		015115
372	Ad1	213SK	土器焼塩壺	板作り成形	5.0	4.5	7.5	11	-		015115
373	Ad1.5	217SK	陶器碗	肥前, 刷毛目碗, 18世紀末~19世紀前葉	12.6	4.1	5.9	10	12		015125
374	Ad1.5	217SK	陶器丸碗	京・信楽	(12.0)	(5.3)	6.7	3	4		015125
375	Ad1.5	217SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 長石釉, 呉須絵, 鉄絵, 江戸後期	-	4.1	(7.8)	-	12		015125
376	Ad1.5	217SK	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 長石釉, 江戸後期	(10.7)	(3.7)	5.8	4	5		015125
377	Ad1.5	217SK	陶器丸碗	美濃, 灰釉, 鉄絵, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(9.2)	-	(4.5)	2	-		015125
378	Ad1.5	217SK	陶器茶碗	美濃, 腰錆茶碗, 19世紀第2四半期(連房10小期)	9.6	4.2	5.2	-	-		015125
379	Ad1.5	217SK	陶器碗	産地不明, 長石釉, 高台内に墨書	-	3.9	(1.4)	-	11		015125
380	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	12.1	3.5	4.6	10	12		015125
381	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	12.2	3.0	4.9	9	12		015125
382	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(12.2)	-	(3.9)	1	-		015125
383	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(12.3)	(3.5)	4.2	3	3		015125
384	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	美濃, 灰釉, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(12.3)	(5.7)	4.3	3	3		015125
385	Ad1.5	217SK	陶器浅碗	京・信楽	(12.0)	-	(3.6)	2	-		015125
386	Ad1.5	217SK	陶器皿	瀬戸・美濃, 梅文皿, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	(10.9)	4.0	4.7	9	12		015125
387	Ad1.5	217SK	陶器染付皿	瀬戸・美濃, 19世紀前葉(9, 10小期)	(11.4)	5.8	(3.3)	6	6		015125
388	Ad1.5	217SK	陶器皿	瀬戸・美濃, 錆釉, 灯明皿, 18世紀末頃-19世紀初め(連房8, 9小期)	10.3	5.3	2.1	12	12		015125
389	Ad1.5	217SK	土師器皿	ロクロ調整皿	14.9	(8.0)	3.3	9	5		015125
390	Ad1.5	217SK	陶器蓋	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中-後期	(10.0)	-	1.1	5	-		015125
391	Ad1.5	217SK	陶器壺	美濃, 灰釉, 双耳壺, 江戸中期	6.3	5.4	9.8	11	12		015125
392	Ad1.5	217SK	青磁碗蓋	肥前, 外)青磁釉	9.7	-	2.9	8	-		015125
393	Ad1.5	217SK	青磁丸碗	肥前, 外)青磁釉	(11.4)	4.4	6.7	3	12		015125
394	Ad1.5	217SK	磁器染付丸皿	肥前	(9.4)	(5.6)	2.2	6	6		015125
395	Ad1.5	217SK	磁器染付丸皿	肥前	(8.0)	3.0	5.2	6	12		015125
396	Ad1.5	217SK	磁器染付丸皿	肥前	(8.0)	(2.6)	3.9	3	2		015125
397	Ad1.5	217SK	陶器容器	美濃, 灰釉, 合子身, 江戸中-後期	(6.3)	(4.2)	3.2	10	7		015125
398	Ad1.5	217SK	陶器徳利	美濃, 鉄釉, 灰釉, 江戸中期	5.0	-	(5.5)	10	-		015125
399	Ad1.5	217SK	陶器蓋	美濃, 灰釉, 呉須絵, 江戸後期	2.8	-	2.3	12	12		015125
400	Ad1.5	217SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	(14.9)	-	(4.3)	4	-		015125
401	Ad1.5	217SK	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	-	7.0	(3.8)	-	6		015125
402	Ad1.5	217SK	土器焼塩壺	板作り成形, 「泉湊伊織」	5.9	4.8	7.5	12	12		015125
403	Ad1.5	217SK	土器焼塩壺蓋		8.0	-	1.5	6	6		015125
404	Ad1.5	217SK	土器焼塩壺蓋		7.4	-	1.7	12	12		015125
405	Ad1.5	217SK	土器焼塩壺蓋		7.2	2.0	-	12	-		015125
406	Ad1.5	217SK	土器焼塩壺蓋		7.7	-	1.9	12	12		015125
407	Ad1.5	217SK	陶器水甕	瀬戸・美濃, 灰釉, 緑釉流し掛け, 18世紀第4四半期(連房8小期)	(28.8)	-	(5.1)	2	-		015125
408	Ad1.5	217SK	陶器鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 緑釉流し掛け, 鉢鉢, 江戸後期	-	(27.0)	(13.5)	-	5		015125

## 登録遺物一覧表 (7)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (/12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
409	Ad1.5	217SK	土器火鉢	常滑, 赤物	(28.3)	(20.0)	9.1	2	3		015125
410	Ad1.5	217SK	土器焙烙		(30.0)	-	(4.0)	1	-		015125
411	Ad1.5	217SK	土器焙烙		(40.0)	-	(4.7)	2	-		015125
412	Ad1.5	217SK	土人形 (食器)		(4.2)	3.3	1.5	4	12		015125
413	Ad1.5	217SK	土人形 (舟)		長(9.3)		幅(5.1)	高(3.7)	-		015125
414	Ad1	218SK	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀前葉 (連房1小期)	11.3	3.6	7.4	5	12		015125
415	Ad1	218SK	陶器志野鉄絵丸皿	瀬戸・美濃, 長石釉, 鉄絵, 17世紀第2四半期 (連房2小期)	12.0	7.6	2.6	6	7		015125
416	Ad1	218SK	陶器筒形香炉	瀬戸・美濃, 志野釉, 17世紀前-中葉 (連房1, 2小期)	(12.2)	10.3	(8.1)	5	2		015125
417	Ad1	218SK	陶器鉢	瀬戸・美濃, 黄瀬戸鉢, 17世紀前-中葉 (連房1, 2小期)	-	(23.8)	(8.0)	-	3		015125
418	Ad1	218SK	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀中葉 (連房1, 2小期)	-	-	*3.6				015125
419	Ad1	218SK	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀中葉 (連房1, 2小期)	-	(17.2)	(5.4)	-	3		015125
420	Ad1	218SK	陶器浅碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 高台内墨書, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	(12.3)	3.6	4.4	4	12		015125
421	Ad1	218SK	土師器皿	ロクロ調整皿	11.2	-	2.3	5	6		015125
422	Ad1	218SK	土師器皿	ロクロ調整皿	11.1	-	2.0	6	12		015125
423	Ad1	221SX	陶器播鉢	瀬戸, 鉄釉, 17世紀前葉 (連房1小期)	(36.8)	-	(2.9)	1	-		005110
424	Ad1	221SX	陶器浅碗	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	(12.6)	-	(3.6)	1	-		005110
425	Ad1	221SX	陶器灯明皿	美濃, 錆釉, 18世紀第4四半期 (連房8小期)	10.8	5.6	2.2	12	12		005110
426	Ad1	221SX	陶器火入れ	瀬戸・美濃, 灰釉	-	(6.0)	(4.3)	-	5		005110
427	Ad1	221SX	陶器壺	美濃, 灰釉, 双耳壺, 江戸中期	7.0	6.0	10.0	7	12		005110
428	Ad1	221SX	陶器蓋	瀬戸, 鉄釉, 土瓶蓋, 江戸後期	7.2	4.8	2.8				005110
429	Ad1	221SX	陶器蓋	瀬戸, 鉄釉, 土瓶蓋, 江戸後期	12.1	9.4	3.8				005110
430	Ad1	221SX	陶器壺	瀬戸・美濃, 鉄釉, 鉄壺, 底部穿孔	-	(9.8)	(8.9)	-	5		005110
431	Ad1	221SX	磁器染付丸碗	肥前	-	4.1	(4.6)	-	7		005110
432	Ad1	221SX	磁器染付丸碗	瀬戸, 19世紀第2四半期後半 (連房10小期後半)	(8.2)	(3.3)	4.5	5	5		005110
433	Ad1	221SX	磁器染付丸碗	瀬戸, 19世紀第2四半期 (連房10小期)	-	4.1	(4.6)	-	4		005110
434	Ad1	221SX	磁器染付端反碗	瀬戸, 上絵付, 焼成不良品	-	3.4	(2.7)	-	12		005110
435	Ad1	221SX	磁器染付碗蓋	関西系窯	(9.2)	-	2.8	4	-		005110
436	Ad2	224SK	陶器浅碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	(12.6)	-	(4.2)	2	-		015135_02 0135
437	Ad2	224SK	陶器浅碗	瀬戸, 灰釉, 江戸後期	(12.6)	-	(4.1)	2	-		015135_02 0135
438	Ad2	224SK	陶器容器	瀬戸・美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸後期	-	(6.2)	(5.4)	-	5		015135_02 0135
439	Ad2	224SK	土器焼塩壺蓋		7.4	-	2.0	12	12		015135_02 0135
440	Ad2	224SK	土器焼塩壺	板作り成形	6.0	5.8	7.6	12	12		015135_02 0135
441	Ad2	224SK	陶製甕	常滑, 赤物	31.2	33.3	27.8	3	6		015135_02 0135
442	Ad1	225SK	陶器皿	瀬戸・美濃, 鉄釉丸皿, 1530年代前後~1550年代末 (大窯2)	-	(6.0)	(1.3)	-	3		015135_02 0135
443	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 江戸前期	(11.1)	(2.2)	(6.5)	2	3		980120 985120
444	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 大窯4末	(11.2)	2.5	(6.4)	3	5		
445	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 江戸前期	(10.6)	(2.1)	(6.6)	2	3		980120
446	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 江戸前期	-	(1.1)	(6.8)	-	1		985120
447	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 大窯末	(9.0)	(1.7)	(4.9)	2	4		980115
448	Aa1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 長石釉, 17世紀第2四半期 (連房2小期)	(9.3)	(1.4)	(5.2)	4	4		980120
449	Aa1	包含層	陶器蓋	瀬戸・美濃, 灰釉	(9.6)	2.7	4.8	4	12		
450	Aa1	包含層	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸前期	(12.8)	(2.8)	(6.7)	3	2		980120
451	Aa1	包含層	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉	13.8	2.9	7.6	8	8		980120
452	Aa	包含層	陶器皿	瀬戸・美濃, 灰釉	(11.1)	(2.6)	(6.3)	3	3		
453	Aa1	包含層	磁器皿	肥前, 青磁釉	(13.4)	(2.9)	-	2	-		
454	Aa1	包含層	陶器緑釉皿	肥前, 蛇ノ目釉剥ぎ, 18世紀	(13.2)	(2.5)	-	2	-		
455	Aa1	包含層	陶器緑釉皿	肥前, 蛇ノ目釉剥ぎ, 18世紀	(13.3)	(3.7)	4.6	1	12		980125
456	Aa1	包含層	陶器織部向付	瀬戸・美濃, 江戸後期	-	(1.9)	-	-	-		
457	Aa1	包含層	陶器志野織部皿	瀬戸・美濃, 江戸後期	-	(1.0)	(6.2)	-	1		
458	Aa1	包含層	陶器志野織部皿	瀬戸・美濃	-	(1.2)	-	-	-		
459	Aa1	包含層	陶器蓋	美濃, 灰釉, 摺絵, 鉄釉, 呉須絵	(8.0)	(1.3)	-	3	-		
460	Aa1	包含層	陶器餐盤	美濃, 摺絵	-	3.8	-	-	-		980120
461	Aa1	包含層, d-005	陶器碗	瀬戸・美濃, 御室茶碗, 江戸中期	(10.4)	6.2	5.8	2	12	x -90982.4 y -24122.3 z 12.072	
462	Aa	包含層	陶器碗	瀬戸・美濃か, 灰釉	-	(2.7)	5.0	-	10		
463	Aa1	包含層	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 鉄釉	-	(2.1)	(3.5)	-	9		
464	Aa1	包含層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 15世紀後葉 (古瀬戸後1V新)	(28.8)	(3.1)	-	1	-		980120 985120
465	Aa1	包含層, d-018	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉, 17世紀第2四半期 (連房2小期)	31.3	(4.5)	-	1	-	x -90982.7 y -24119/2 z 11.80	
466	Aa1	包含層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 錆釉	(17.1)	(5.8)	-	1	-		980120
467	Aa1	包含層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀第3四半期 (連房3, 4小期)	(40.0)	(5.2)	-	1	-		980120
468	Aa1	包含層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 18世紀初 (連房6小期)	(37.4)	(5.9)	-	2	-		980120
469	Aa1	包含層	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀末 (連房5小期)	(32.0)	(10.0)	-	2	-		980120
470	Aa	包含層	陶器筒形香炉	瀬戸・美濃, 鉄釉	-	(3.4)	(7.2)	-	2		
471	Aa1	包含層	陶器筒形香炉	肥前	(11.0)	(5.0)	-	3	-		980125
472	Aa1	包含層	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 焼成前穿孔, 江戸後期	(13.6)	9.2	8.3	4	12		185120
473	Aa1	包含層, d-003	陶器鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 火鉢	-	(4.5)	14.2	-	12	x -90981.4	

登録遺物一覧表 (8)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 ( /12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
										Y -24121.8 Z 12.095	
474	Aa1	包含層	青花大皿	中国 (漳州窯系)	(30.0)	(5.5)	-	1	-		980125
475	Aa1	包含層	青花大皿	中国	(26.7)	(3.1)	-	1	-		
476	Aa1	包含層	磁器染付皿	肥前	(22.6)	(2.8)	-	2	-		980120 985120
477	Aa1	包含層	陶器植木鉢か	肥前	(23.5)	(4.0)	-	1	-		980120
478	Aa1	包含層, d-002	青花碗	中国 (漳州窯系)	-	(3.3)	-	-	-	x -90982.9 Y -24126.4 Z 12.234	
479	Aa1	包含層	磁器染付碗	肥前	-	(2.2)	(4.4)	-	6		980125
480	Aa1	包含層	磁器染付碗	肥前	(8.4)	(3.3)	-	4	-		185120
481	Aa1	包含層	磁器染付小瓶	瀬戸・美濃, 19世紀前半 (9, 10小期)	1.6	6.6	2.8	12	12		
482	Aa1	包含層	磁器染付皿	肥前	-	(1.6)	(2.8)	-	5		
483	Aa1	包含層, d-008	磁器染付碗	肥前	(10.6)	5.6	4.3	6	10	x -90981.4 Y -24120.1 Z 12.086	
484	Aa1	包含層	磁器染付碗	肥前	(11.5)	(5.7)	(4.8)	4	2		980120
485	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(14.4)	(2.4)	(7.0)	-	6		980125
486	Aa	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(12.8)	(2.6)	(6.0)	1	9		
487	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(12.3)	(2.2)	-	5	-		
488	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(11.9)	(1.8)	-	2	-		980120
489	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(11.0)	(2.0)	-	3	-		980120
490	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(10.7)	(2.1)	(5.6)	2	5		
491	Aa1	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	10.0	2.3	5.7	8	11		980120
492	Aa1	包含層	土器火鉢	常滑, 赤物	(21.0)	(9.0)	-	1	-		980120
493	Aa1	包含層	土器焼塩壺	輪積み成形	6.3	9.5	5.1	11	12		980120
494	Aa1	包含層	土器焔炉	産地不明	-	(2.8)	-	-	-		980120
495	Ac1	包含層	陶器碗	京・信楽, 灰釉, 鉄絵	(11.1)	6.2	(3.8)	2	12		
496	Ac1	包含層	陶器皿	美濃, 灰釉輪赤皿, 摺絵, 江戸中-後期	-	(1.5)	5.2	-	5		
497	Ac1	包含層	陶器筒形香炉	瀬戸, 灰釉	(10.0)	5.7	(4.3)	5	1		
498	Ac?	包含層	陶器蓋	美濃, 灰釉, 合子蓋, 江戸中期	7.3	0.9	7.3	12	12		
499	Ac?	包含層	陶器容器	美濃, 灰釉, 合子身, 江戸中期	6.3	3.9	4.7	9	12		
500	Ac	包含層	陶器壺	美濃, 灰釉, 双耳壺江戸中期	(6.6)	8.9	5.2	3	12		
501	Ac1?	包含層	陶器壺か瓶類	美濃, 長石釉か	-	(4.4)	9.1	-	7		
502	Ac1	包含層	陶器乗燗	瀬戸, 鉄釉	-	(4.3)	5.2	-	12		
503	Ac1	包含層	土器焼塩壺	輪積み成形	5.4	9.5	5.1	12	12		
504	Ac	包含層	土器焼塩壺	板作り成形	-	(6.9)	(4.8)	-	4		
505	Ad	包含層	陶器拳骨碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 拳骨茶碗, 18世紀中葉 (連房7小期)	(11.2)	(4.9)	7.6	5	4		
506	Ad	包含層	陶器丸碗	京・信楽か, 鉄釉	(12.7)	-	(4.7)	2	-		
507	Ad1	包含層	陶器皿	美濃, 灰釉, 摺絵皿, 18世紀中葉 (連房7小期)	12.1	5.8	3.3	11	11		
508	Ad1	包含層	陶器皿	美濃, 灰釉, ひだ皿, 18世紀中葉 (連房7小期)	8.4	3.4	2.3	7	8		
509	Ad	包含層	土師器皿	ロクロ調整皿	(11.4)	(4.1)	1.9	3	3		
510	Ad	包含層	土人形 (飾馬)	長(8.6) 幅(2.3) 高(7.1)	-	-	-	-	-		
511	Ad	包含層	土器焼塩壺蓋	7.2	-	1.7	12	12			
512	Ad1	包含層	磁器染付丸碗	肥前	(7.9)	-	(3.0)	3	-		
513	Ad1	包含層	磁器染付蓋	肥前	(8.8)	-	(1.9)	2	-		
514	Ad1	包含層	磁器染付猪口	肥前	(5.3)	(3.2)	3.3	3	2		
515	Ad1	包含層	磁器染付容器	肥前, 蓋物身	(13.5)	-	(4.4)	2	-		
516	Ad	包含層	陶器皿	肥前, 灰釉	(18.6)	-	(3.0)	2	-		
517	Ad1	包含層	陶器掃鉢	堺, 焼締	-	-	(4.8)	1	-		
518	Ad	包含層	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	-	19.9	(18.3)	-	7		
519	Ad	包含層	陶器土瓶	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸後期	(7.6)	-	(9.0)	3	-		
520	Ad	包含層	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	16.8	-	(7.1)	3	-		
521	Ad	包含層	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸後期	14.2	-	(6.5)	2	-		
522	Ad1	包含層	瓦質鍋	双耳鍋	タテ(7.4) ヨコ(4.7)	-	厚さ(1.0)	-	-		
523	Ab1	102SE	陶器鉢	瀬戸, 灰釉直縁大皿, 15世紀後葉 (古瀬戸後IV新)	(28.7)	(5.1)	-	1	-		
524	Ab1	102SE	陶器掃鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀第3四半期後半 (連房4小期)	(34.3)	(2.9)	-	1	-		
525	Ab1	102SE	陶器蓋	美濃, 鉄釉, 江戸中期	-	-	-	-	-		
526	Ab1	102SE	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野, 大窯4末	-	(1.5)	-	1	-		
527	Ab	102SE	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 長石釉, 江戸後期	-	(2.0)	(10.0)	-	3		
528	Ab1	102SE	陶器井筒	常滑, 赤物, 江戸後期	(外)67.8 (内)56.4	-	56.0	12	12		
529	Ab1	102SE	土器焼塩壺	輪積み成形, 17世紀前半	(5.4)	10.8	4.5	6	12		
530	Ab1	104SE	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 1580年頃 (大窯IV前半)	(11.6)	(3.7)	-	1	-		
531	Ab1	104SE	陶器天目茶碗	瀬戸・美濃, 1580年頃 (大窯IV前半)	(11.0)	(3.7)	-	3	-		
532	Ab1	104SE	陶器丸碗	瀬戸・美濃, 鉄釉, 江戸中期	(12.2)	(6.0)	-	2	-		
533	Ab1	104SE	陶器小碗	美濃, 灰釉, 江戸後期	5.9	4.8	2.8	12	12		
534	Ab1	104SE	陶器片口	美濃, 鉄釉, 江戸中期	(15.0)	(7.6)	(8.0)	2	4		
535	Ab1	104SE	陶器皿	瀬戸・美濃, 鉄釉油皿, 江戸後期	(10.6)	(1.8)	-	3	-		
536	Ab1	104SE	陶器志野四方向付	瀬戸・美濃, 1585年頃 (大窯IV末)	-	(1.3)	(7.8)	-	3		
537	Ab1	104SE	陶器蓋	美濃, 灰釉, 合子蓋, 江戸中期	6.8	9.5	-	12	12		
538	Ab1	104SE	陶器合子身	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	5.2	3.7	4.6	9	12		
539	Ab1	104SE	陶器合子身	美濃, 灰釉, 蓋物, 江戸中期	6.5	3.8	4.0	12	12		
540	Ab1	104SE	陶器蓋	美濃, 鉄釉, 土瓶蓋, 江戸後期	4.9	2.1	-	4	12		
541	Ab1	104SE	陶器蓋	京・信楽, 灰釉, 土絵付	(8.6)	(1.8)	-	3	-		
542	Ab1	104SE	陶器蓋	美濃, 灰釉, 合子蓋, 江戸中期-後期	(10.0)	(1.4)	-	3	-		
543	Ab1	104SE	磁器染付蓋	関西系窯	-	(1.1)	-	-	-		
544	Ab1	104SE	磁器染付丸碗	肥前	(15.0)	(5.2)	-	3	-		
545	Ab1	104SE	磁器染付丸碗	肥前	(11.0)	(4.7)	-	3	-		
546	Ab1	104SE	磁器染付丸碗	肥前	(11.0)	(3.9)	-	2	-		
547	Ab1	104SE	磁器染付丸碗	肥前	(9.6)	(4.6)	(3.6)	2	7		

## 登録遺物一覧表 (9)

登録 番号	23	遺構No.	器種	備考 (時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 ( / 12)		位置座標	グリッド
								口縁	底部		
548	Ab1	104SE	陶器染付徳利	美濃, 灰釉, 具須絵, 江戸後期	3.0	(7.0)	-	12	-		
549	Ab1	104SE	陶器徳利	美濃, 錆釉, 江戸後期	2.6	(7.7)	-	12	-		
550	Ab1	104SE	陶器鍋	美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	(17.0)	(5.6)	-	2	-		
551	Ab1	104SE	陶器鍋	瀬戸・美濃, 鉄釉双耳鍋, 江戸後期	(20.1)	(5.4)	-	1	-		
552	Ab1	104SE	土器焼塩壺	板作り成形	(5.0)	(7.6)	(4.2)	3	5		
553	Ab1	104SE	土器焼塩壺	板作り成形	5.3	7.5	4.4	12	12		
554	Ab1	104SE	土器焼塩壺蓋		-	1.6	7.2	7	7		
555	Ab1	104SE	土器焼塩壺蓋		-	1.6	7.5	12	12		
556	Ab1	104SE	土器焼塩壺蓋		7.0	1.9	-	12	-		
557	Ab1	104SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 19世紀第1四半期 (連房9小期)	(44.0)	(3.8)	-	1	-		
558	Ab1	104SE	陶器植木鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 19世紀前葉 (9, 10小期)	(28.6)	(6.4)	-	1	-		
559	Ab1	104SE	陶器浅碗	瀬戸・美濃, 灰釉, 江戸後期	-	3.4	*1.2	-	-		
560	Ab1	104SE	土人形 (飾馬)		全長 (8.4)	厚 (2.4)	最大幅 (6.4)	-	-		
561	Ab1	104SE	土師器皿	ロクロ調整皿	(18.3)	(3.5)	-	2	-		
562	Ab1	104SE	土師器皿	ロクロ調整皿	(10.2)	(1.8)	-	2	-		
563	Ab1	104SE	土師器皿	ロクロ調整皿	(9.6)	2.2	(5.0)	3	4/12		
564	Ab1	104SE	土師器皿	ロクロ調整皿	6.6	0.8	5.0	11	12/12		
565	Ab1	104SE	土師器皿	ロクロ調整皿	-	(1.1)	(7.0)	-	3/12		
566	Ab1	104SE	陶器井筒	常滑	67.8	61.2	52.3				
567	Ab1	105SX	陶器丸碗	瀬戸, 灰釉, 江戸中期	12.0	4.4	6.8	12	12		
568	Ab1	108SE	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀前葉 (連房1小期)	(35.3)	(3.2)	-	1	-		
569	Ab	114SX	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 灰釉, 17世紀前葉	(10.8)	(2.2)	(6.1)	6	-		
570	Ab	114SX	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 16世紀末か(大窯)	-	3.2	(8.0)	-	2		
571	Ab2	120SD	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 17世紀前葉	(29.0)	(5.8)	-	1	-		
572	Ab2	120SD	陶器腰緒茶碗	美濃, 江戸中期, 17世紀末-18世紀初 (連房5, 6小期)	-	(1.1)	(5.2)	-	6		
573	Ab	121SD	陶器鉢	瀬戸・美濃, 灰釉, 折縁鉢, 18世紀初 (連房6小期)	(29.6)	(4.5)	-	1	-		
574	Ab1	121SD	陶器播鉢	瀬戸・美濃, 鉄釉, 18世紀初 (連房6小期)	(40.2)	(9.0)	-	1	-		
575	Ab1	121SD	磁器染付碗	関西系窯	(19.8)	(2.2)	-	2	-		
576	Ab1	124SG	陶器志野丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 高台内に墨書, 17世紀前 -中葉 (連房1, 2小期)	-	(1.4)	6.0	-	8		
577	Ab1	包含層	陶器大皿	備前, 焼締大皿, 火糲痕, 16世紀末-17世紀前半	(41.6)	8.3	(22.6)	2	1		
578	Ab1	包含層	磁器染付丸皿	肥前	(14.6)	(2.2)	-	1	-		
579	Ab1	包含層	陶器丸皿	瀬戸・美濃, 志野釉, 17世紀前-中葉 (連房1, 2小期)	(15.0)	(2.0)	(6.5)	2	2		
580	Ab1	包含層	土器焼塩壺	輪積み成形	-	(3.9)	3.5	-	12		
581	Ab1	包含層	土器高杯	弥生土器高杯	脚柱部(3.3)-	-	(5.7)	-	-		
582	包含層		陶器浅碗	美濃, 灰釉, 京焼風, 18世紀末頃-19世紀初め (連房8, 9小期)	12.4	3.9	4.7	12	12		
583	A	包含層	磁器染付碗蓋	肥前	(3.8)	2.8	(9.6)	2	5		
584	A	包含層	磁器染付丸皿	肥前	-	(1.9)	10.2	-	9		
585	包含層		陶器鉢	肥前, 二彩手鉢	(24.6)	-	(3.2)	1	-		
586	包含層		陶器花入	備前, 焼締	-	4.4	(11.9)	-	10		
587	包含層		陶器火鉢	瀬戸, 鉄釉, 江戸前期	(19.1)	14.5	13.2	7	12		
588	包含層		土師器皿	ロクロ調整皿	-	6.0	(0.8)	-	6		
589	包含層		土器焼塩壺	輪積み成形	5.6	-	(4.9)	3	-		
590	Ab1	102SE	井筒 (全周残り)	常滑, 赤物 (掲載図なし)							
591	Ab1	102SE	井筒 (全周残り)	常滑, 赤物 (掲載図なし)							
1001	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (8.2)	厚 9.1	最大幅 (18.1)				
1002	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (9.2)	厚 1.6	最大幅 (18.3)				
1003	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 26.5	厚 8.9	最大幅 29.7			980115	
1004	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (8.9)	厚 (4.5)	最大幅 (14.9)				
1005	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (12.1)	厚 1.7	最大幅 (14.2)			975120	
1006	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦03型	全長 (12.2)	厚 5.1	最大幅 28.5				
1007	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦03型	全長 (16.5)	厚 1.2	最大幅 (11.0)			975120	
1008	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦05型	全長 (3.9)	厚 6.8	最大幅 (8.7)				
1009	Aa1	001SK	軒棧瓦	軒棧瓦05型	全長 (12.9)	厚 6.6	最大幅 20.6			980115	
1010	Aa1	015SK	軒丸瓦	軒丸瓦01型	全長 (4.7)	厚 2.2	最大幅 16.5				
1011	Aa1	015SK	軒棧瓦	軒棧瓦04型	全長 (9.8)	厚 1.7	最大幅 (15.6)				
1012	Aa1	015SK	軒棧瓦	軒棧瓦02型	全長 (13.2)	厚 1.8	最大幅 (15.2)				
1013	Aa1	015SK	軒棧瓦	軒棧瓦02型	全長 (14.9)	厚 1.8	最大幅 (16.1)				
1014	Aa	015SK	輪違い瓦		全長 14.2	厚 1.8	最大幅 10.2				
1015	Aa1	015SK	輪違い瓦		全長 9.8	厚 1.4	最大幅 (11.2)				
1016	Aa1	025SK	軒平瓦	軒平瓦01型	全長 (3.0)	厚 (1.8)	最大幅 (18.5)				
1017	Aa1	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (5.8)	厚 1.6	最大幅 (20.2)				
1018	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦01型	全長 (23.8)	厚 1.7	最大幅 (23.7)				

登録遺物一覧表 (10)

登録番号	Z3	遺構No.	器種	備考(時期ほか)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (/12)	位置座標	グリッド
								口縁 底部		
1019	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦04型	全長 (10.4)	厚 1.9	最大幅 (17.1)			
1020	Aa1	025SK	軒棧瓦	軒平瓦06型	全長 (7.2)	厚 1.2	最大幅 (14.2)			
1021	Aa1	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦02型	全長 (9.3)	厚 1.6	最大幅 (17.4)			
1022	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦03型	全長 (2.9)	厚 1.9	最大幅 8.6			
1023	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦04型	全長 -	厚 2.1	最大幅 9.2			
1024	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦04型	全長 (2.2)	厚 2.0	最大幅 9.4			
1025	Aa	025SK	軒棧瓦	軒棧瓦03型	全長 (9.3)	厚 2.0	最大幅 (10.2)			
1026	Aa1	025SK	菊丸瓦		全長 (3.9)	厚 1.9	最大幅 9.7			
1027	Aa1	042SK	菊丸瓦		全長 -	厚 1.2	最大幅 (9.6)			
1028	Ac1	172SX	道具瓦 (棧瓦系)		全長 (7.1)	厚 1.9	最大幅 (10.2)			
1029	Ac1	181SK	棧瓦片	李兵衛 刻印	全長 (6.5)	厚 1.7	最大幅 (10.0)			
1030	Ac1	181SK	棧瓦片	李兵衛 刻印	全長 (11.7)	厚 1.6	最大幅 (12.1)			
1031	Ac1	181SK	棧瓦片	李兵衛 刻印	全長 (24.1)	厚 1.8	最大幅 (16.8)			
1032	Ac	181SK	軒棧瓦	軒棧瓦06型	全長 (3.1)	厚 1.8	最大幅 (10.1)			
1033	Ac1	181SK	棧瓦片		全長 28.2	厚2.0	最大幅 (16.0)			
1034	Ac1	181SK	丸瓦		全長 35.9	厚 2.0	最大幅 17.0			
1035	Ab1	105SK	丸瓦	李兵衛 刻印	全長 (8.8)	厚 1.9	最大幅 12.7			
1036	Ab2	120SD	輪違い瓦		全長 (2.6)	厚 1.8	最大幅 8.9			
1037	Ab1	包含層	鯰瓦		全長 (16.6)	厚 2.4	最大幅 (7.8)			
1038	Ab1	包含層	軒丸瓦	軒丸瓦02型	全長 -	厚 1.8	最大幅 (14.0)			
1039		包含層	軒丸瓦	軒丸瓦02型	全長 -	厚 2.2	最大幅 (7.4)			
1040	Ac1	181SK	平瓦	李兵衛 刻印						
1041	Ad1	213SK	平瓦	三州欄尾李兵衛 刻印						
1042	Aa1	001SK	平瓦	万 刻印						
1043	Aa1	001SK	平瓦	万 刻印						
1044	Ac1	181SK	平瓦	ヤマに木か大 刻印						
1045	Ac1	172SX	平瓦	凸で二 刻印						
1046	Ab1	包含層	軒棧瓦	○に三 刻印						
1047	Aa1	025SK	平瓦	○に木か大 刻印						
1048	Ac1	173SK	平瓦	○に水 刻印						
1049	Aa1	025SK	平瓦	柄鐙状記号 刻印						
M-001	Aa1	015SK	キセル吸口	重量1.4g	長(4.1)	幅(0.8)	厚さ(0.8)			
M-002	Ac1	172SX	キセル吸口	重量7.1g	長7.5	幅1.0	厚さ1.0			
M-003	Ac1	181SK	銭貨(寛永通宝)	重量1.9g	タテ2.4	ヨコ2.4	厚さ0.10			
M-004	Ac1	181SK	鉄釘	重量6.9g	長(7.0)	幅1.5	厚さ1.0			
M-005	Ac1	181SK	鉄釘	重量2.2g	長(3.8)	幅0.9	厚さ0.6			
M-006	Ac1	181SK	鉄釘	重量2.3	長4.5	幅0.6	厚さ0.5			
M-007	Ac1	181SK	鉄釘	重量2.3	長(5.7)	幅0.5	厚さ0.6			
M-008	Ac1	181SK	不明	重量152.9g 木部あり	長17.5	幅0.6	厚さ2.1			
M-009	Ad1	221SX	鋸前	重量74.9g	長5.1	幅9.0	厚さ2.4			
S-001	Aa	002SK	硯	凝灰質泥岩	長(3.1)	幅(2.4)	厚さ2.4			980120
S-002	Aa	015SK	玉石	安山岩	タテ8.3	ヨコ8.8	厚さ7.5			
S-003	Aa	025SK	玉石	安山岩	タテ8.4	ヨコ8.1	厚さ7.0			
S-004	Aa	025SK	玉石	安山岩	タテ8.9	ヨコ6.5	厚さ7.3			
S-005	Aa	025SK	玉石	花崗岩	タテ8.6	ヨコ7.5	厚さ5.2			
S-006	Ac	172SX	砥石	凝灰質泥岩	タテ(7.6)	ヨコ (2.8)	厚さ(1.2)			
S-007	Ad1	201SK	砥石	凝灰質泥岩	タテ(5.2)	ヨコ (5.3)	厚さ0.7	-	-	015115
S-008	Aa1	包含層	硯	凝灰質泥岩	残長 (5.7)	残幅 (3.2)	最大厚 (1.0)	-	-	980115

【中世・近世陶磁器の時期区分参考資料】

瀬戸・美濃窯製品

井上喜久男,1992,『尾張陶磁』ニューサイエンス社…(大窯Ⅰ～Ⅴ)

2007,『愛知県史 別編 窯業 2』中世・近世 瀬戸系

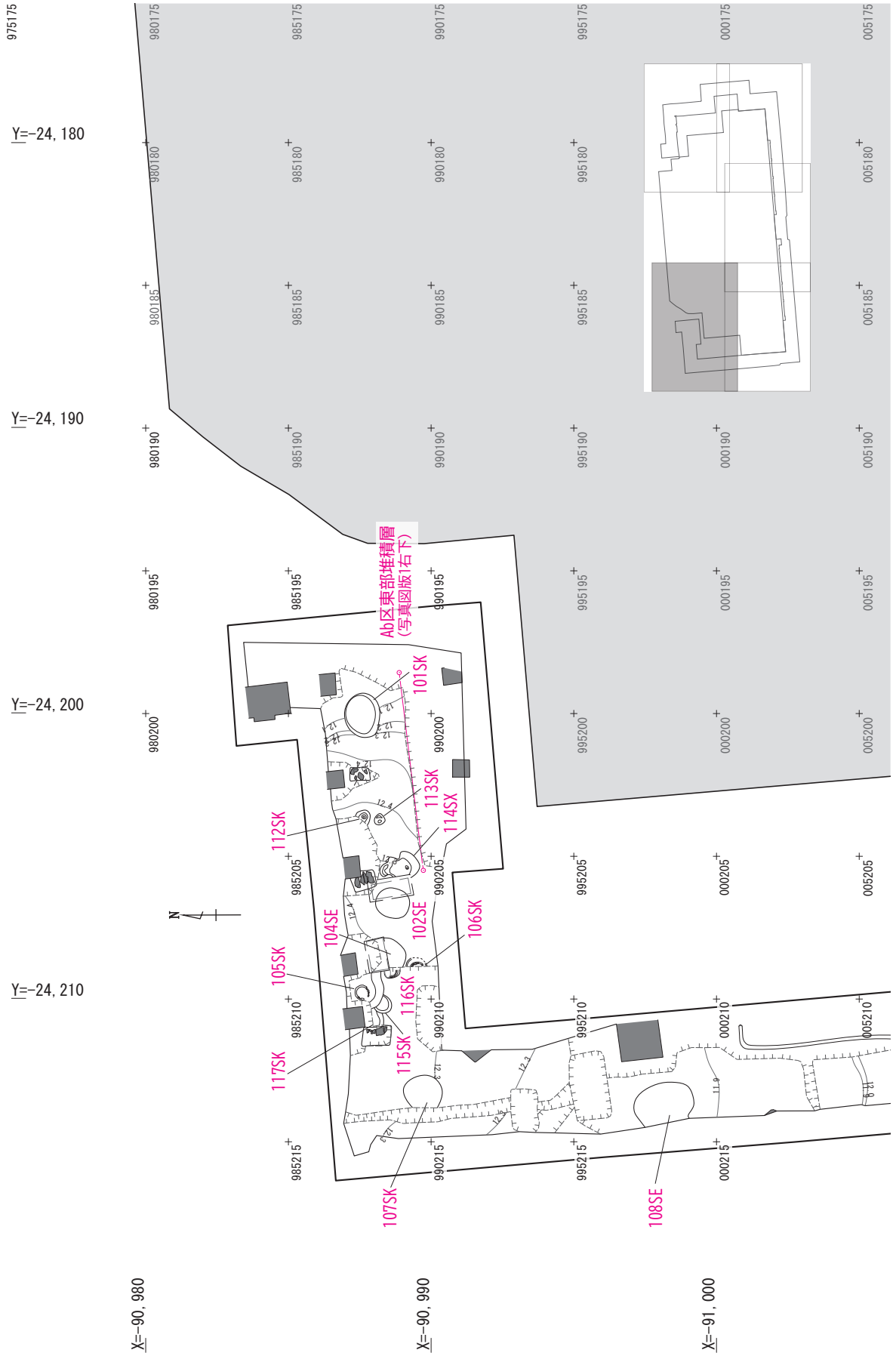
…(古瀬戸前期～後期)…(大窯Ⅰ～4)

…(連房式登窯第1～11小期)

江戸前期:連房第1～第4小期 江戸中期:連房第5～第7小期 江戸後期:連房第8～第11小期

常滑窯製品

2012,『愛知県史 別編 窯業 3』中世・近世 常滑系



X=-90, 980

X=-90, 990

X=-91, 000

Y=-24, 210

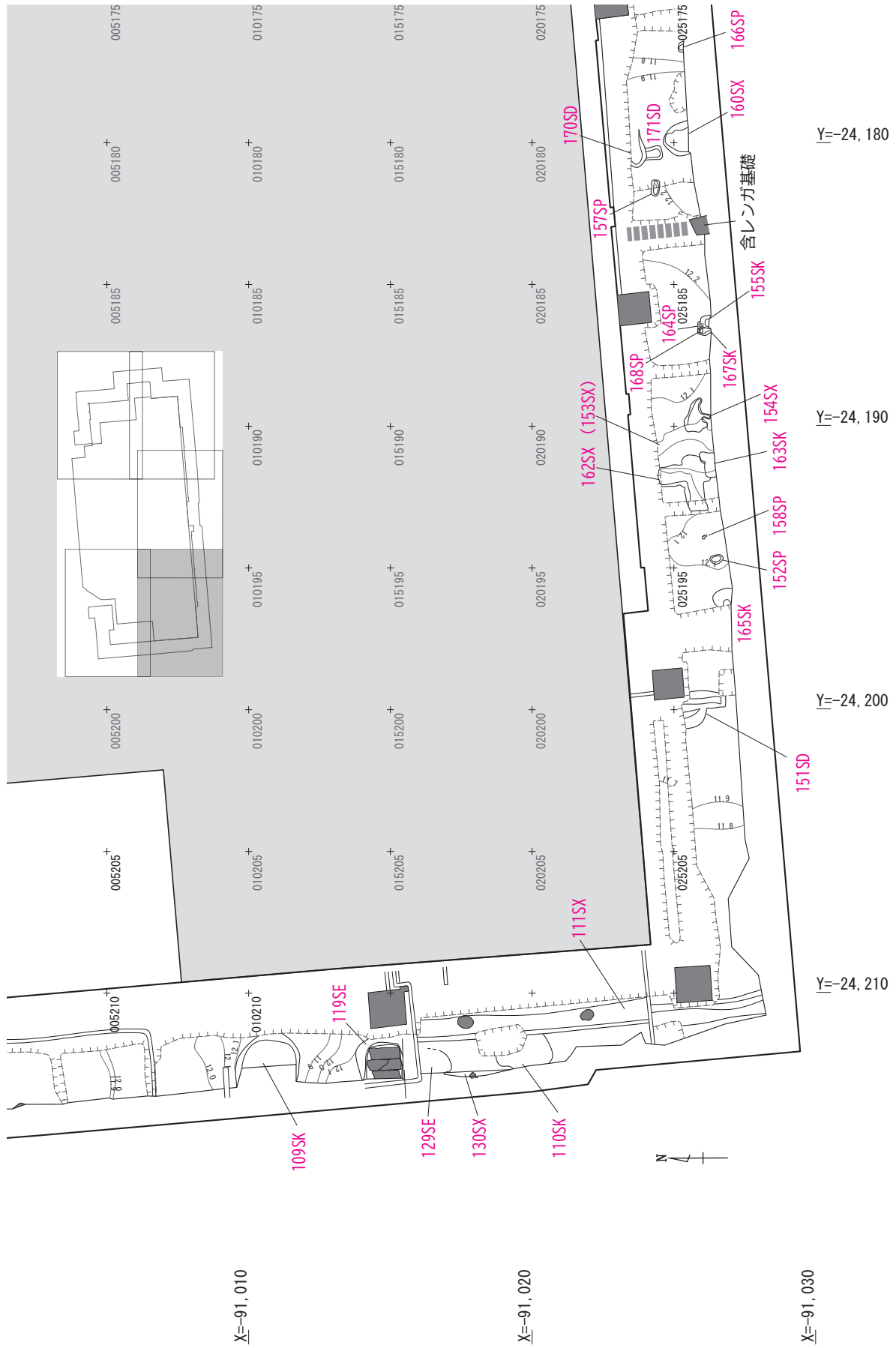
Y=-24, 200

Y=-24, 190

Y=-24, 180

23A 区平面図 上面 1 (S=1/200)

基本平面図 2

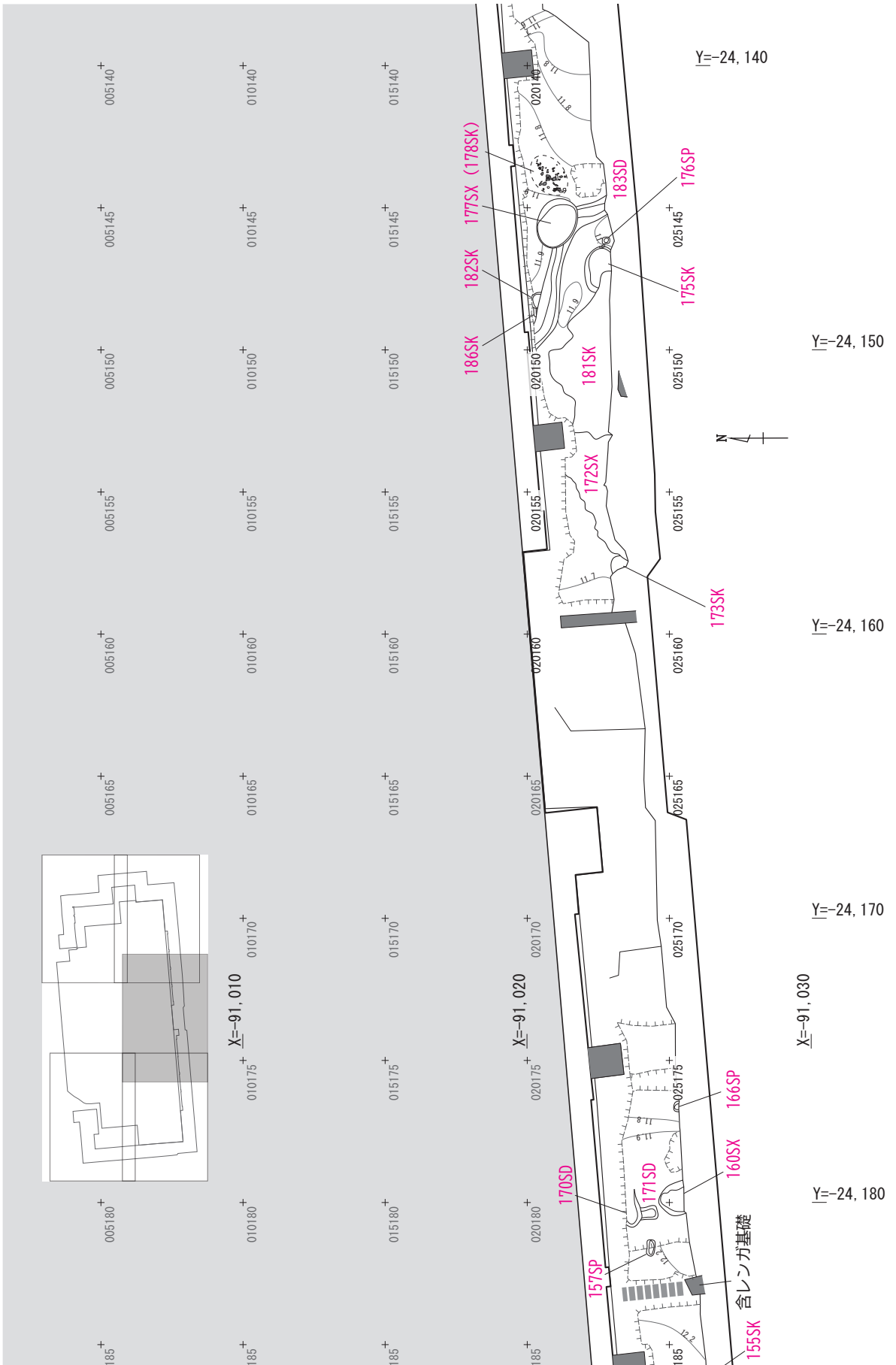


X=-91, 010

X=-91, 020

X=-91, 030

23A 区平面図 上面 2 (S=1/200)



23A区平面図 上面 3 (S=1/200)

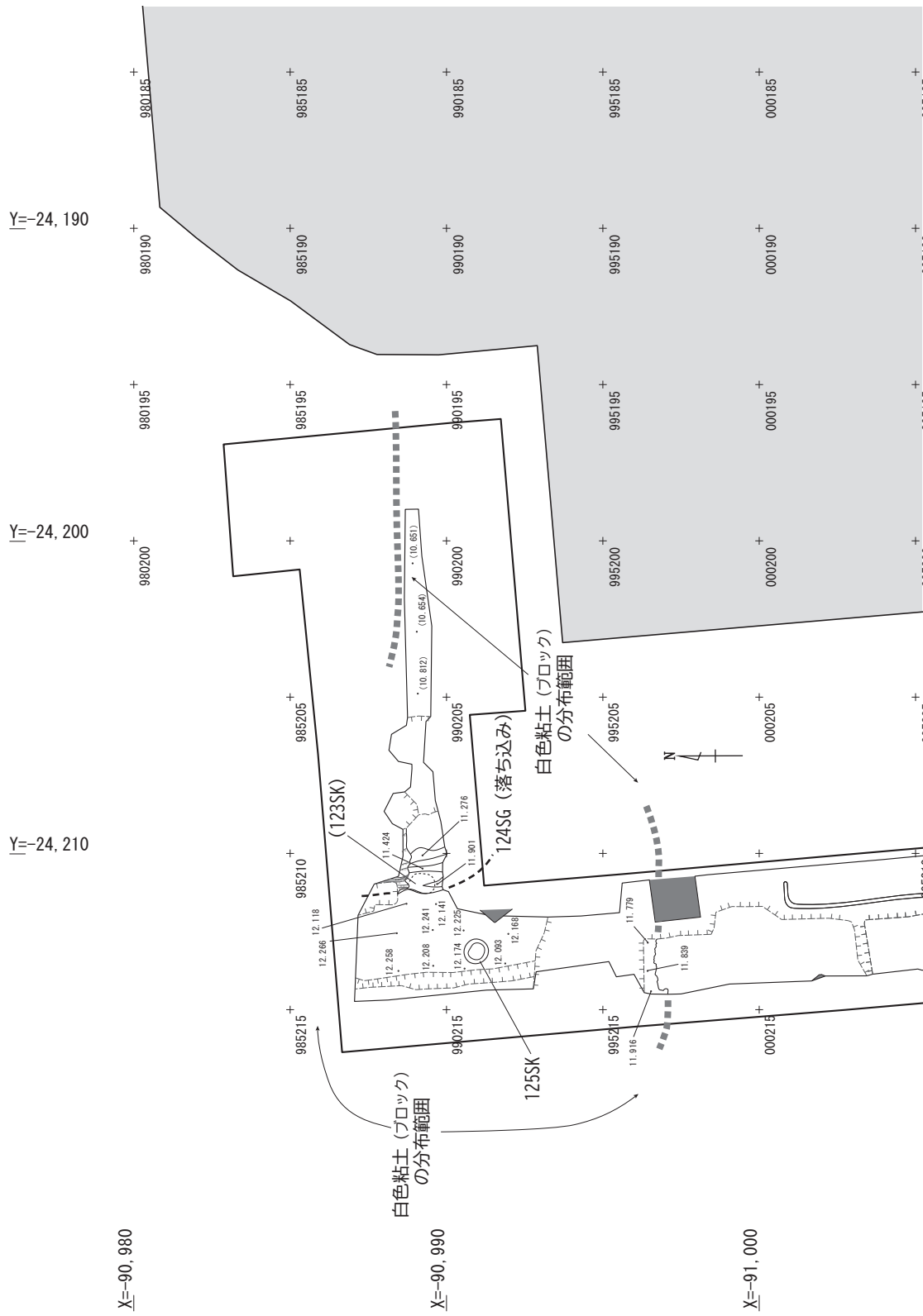
基本平面図  
4



23A 区平面図 上面 4 (S=1/200)



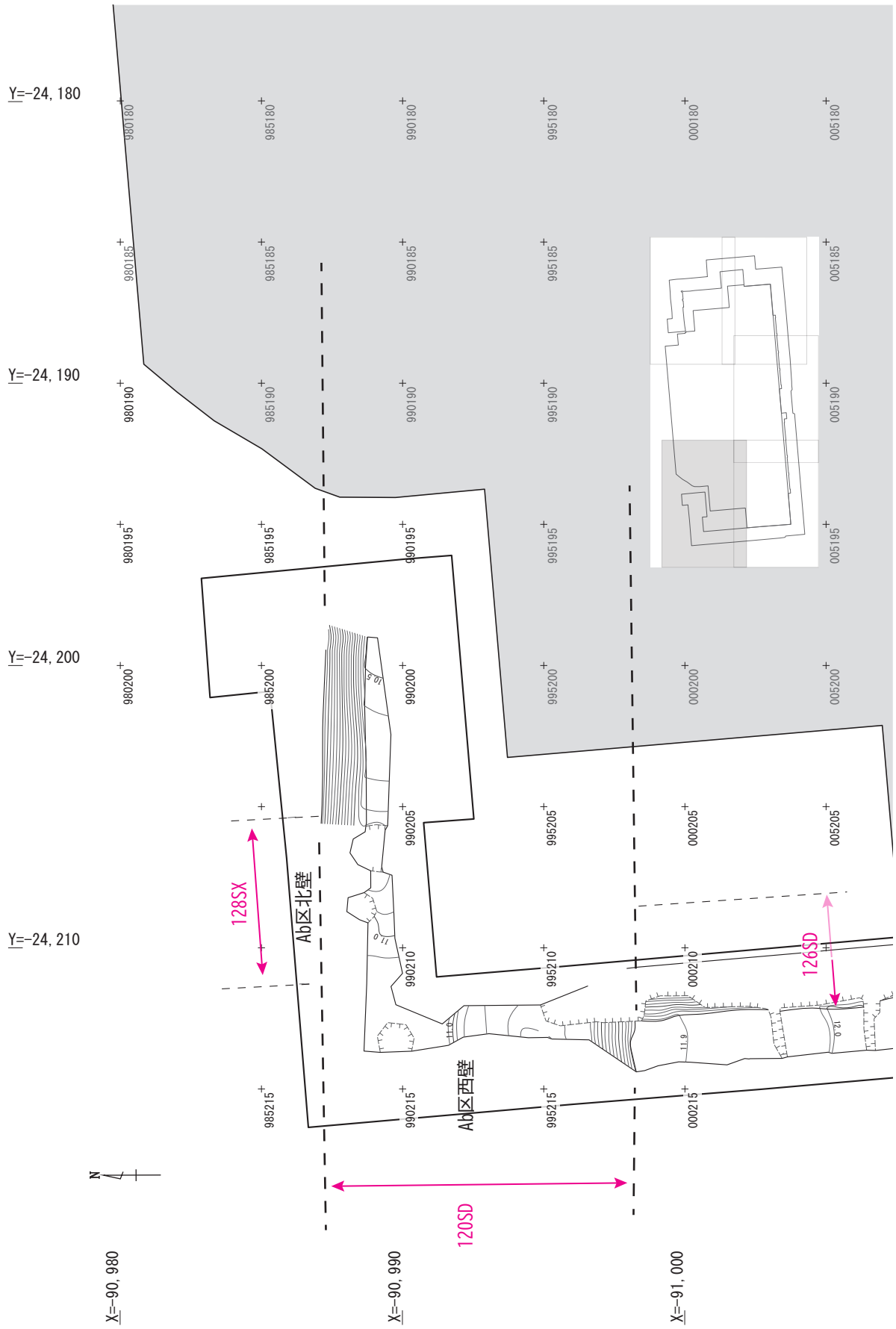
基本平面図 6



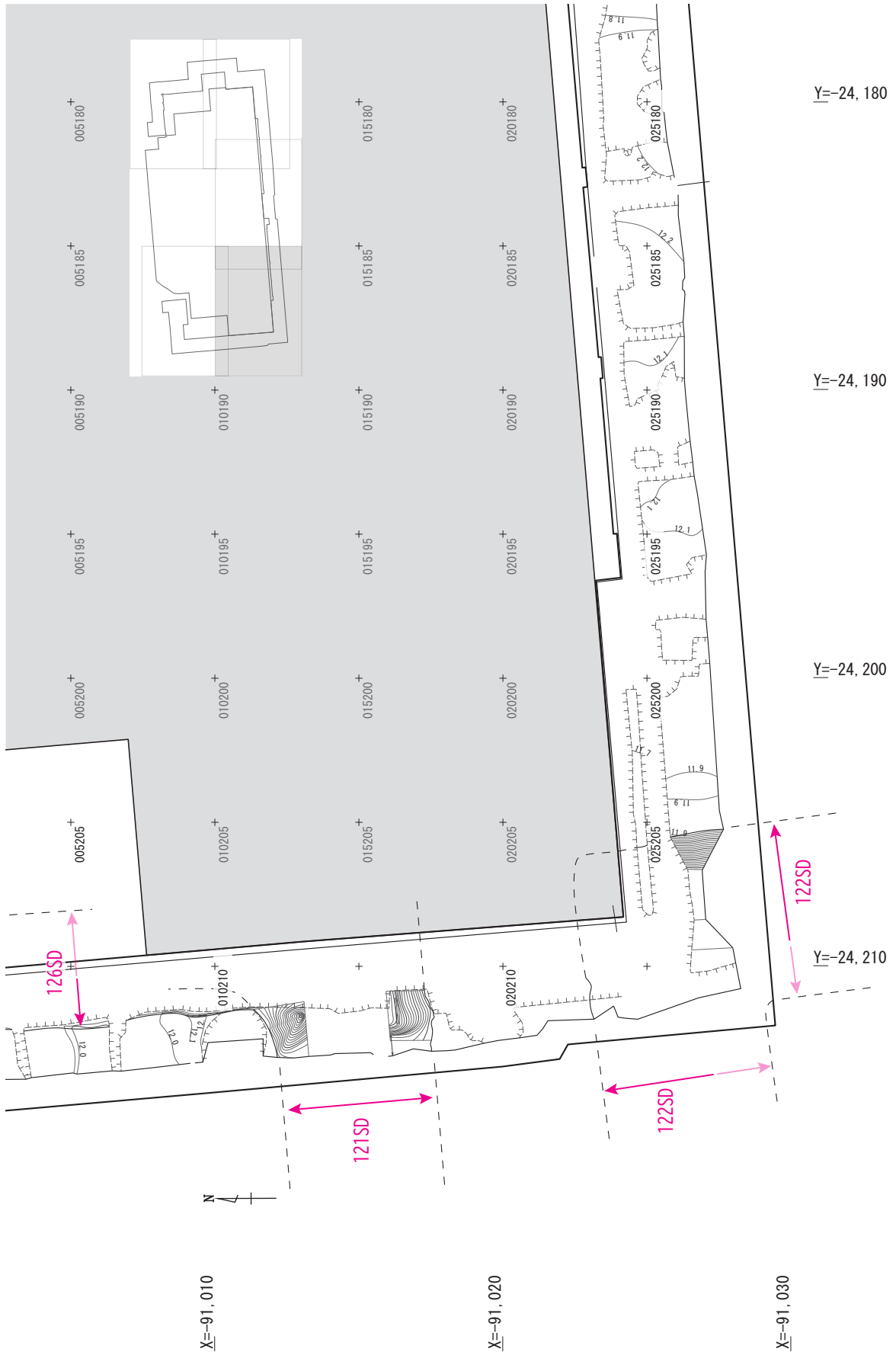
23Ab区 124SG (池) 付近 平面図 (S=1/200)



23Aa 区上面第2面遺構 平面図 (S=1/200)

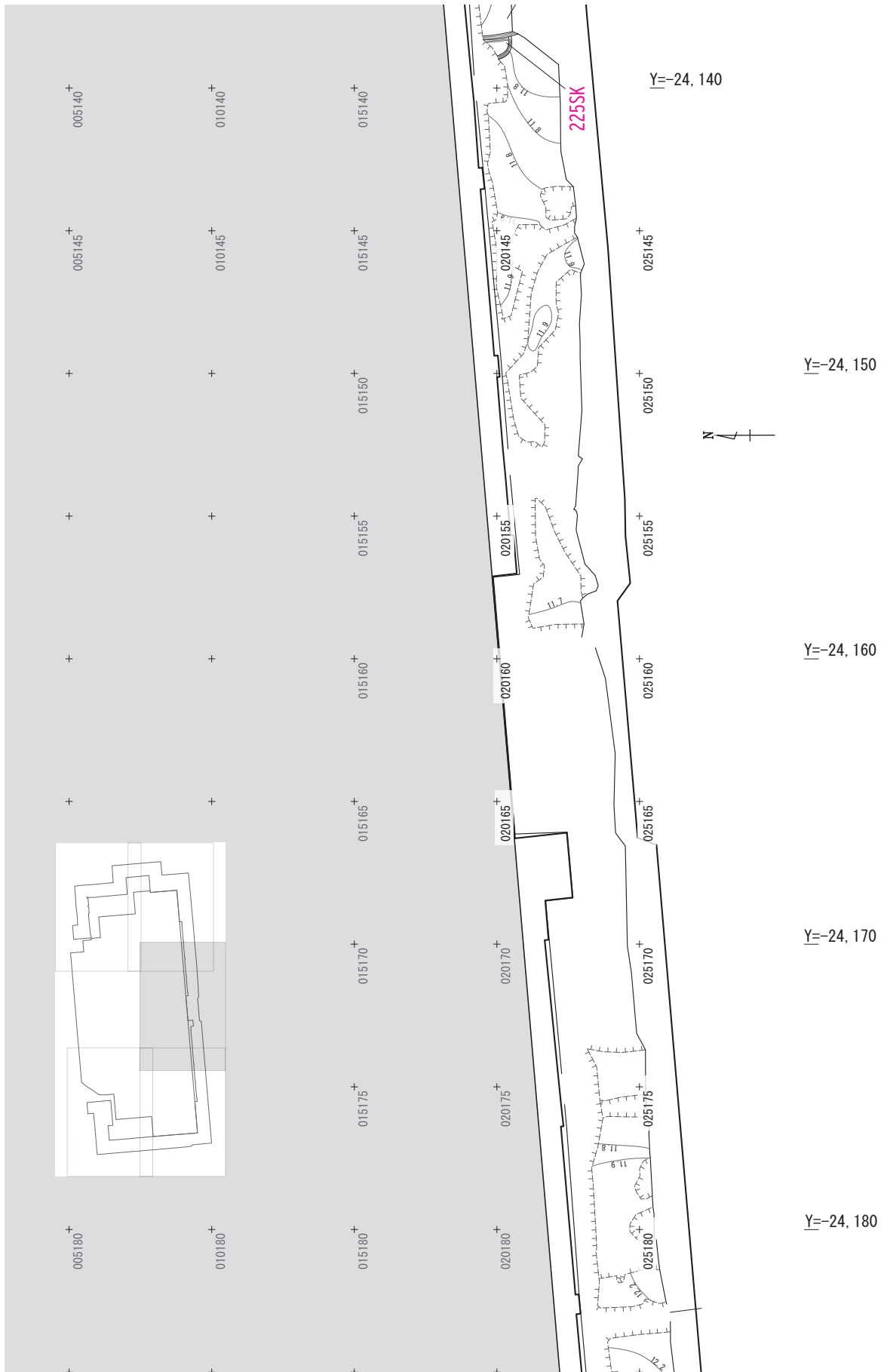


23A 区平面図 下面 1 (S=1/200)

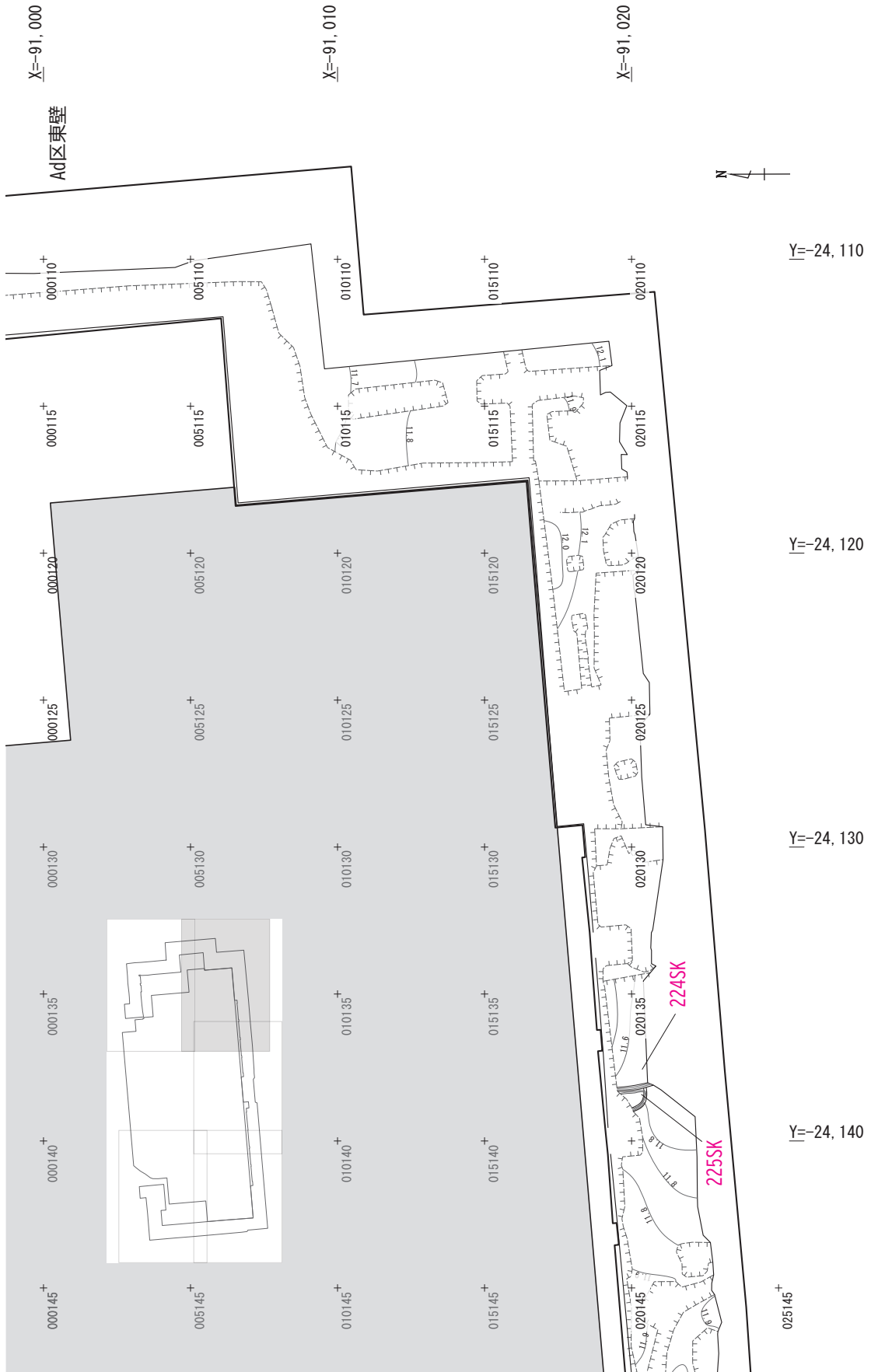


23A 区平面図 下面 2 (S=1/200)

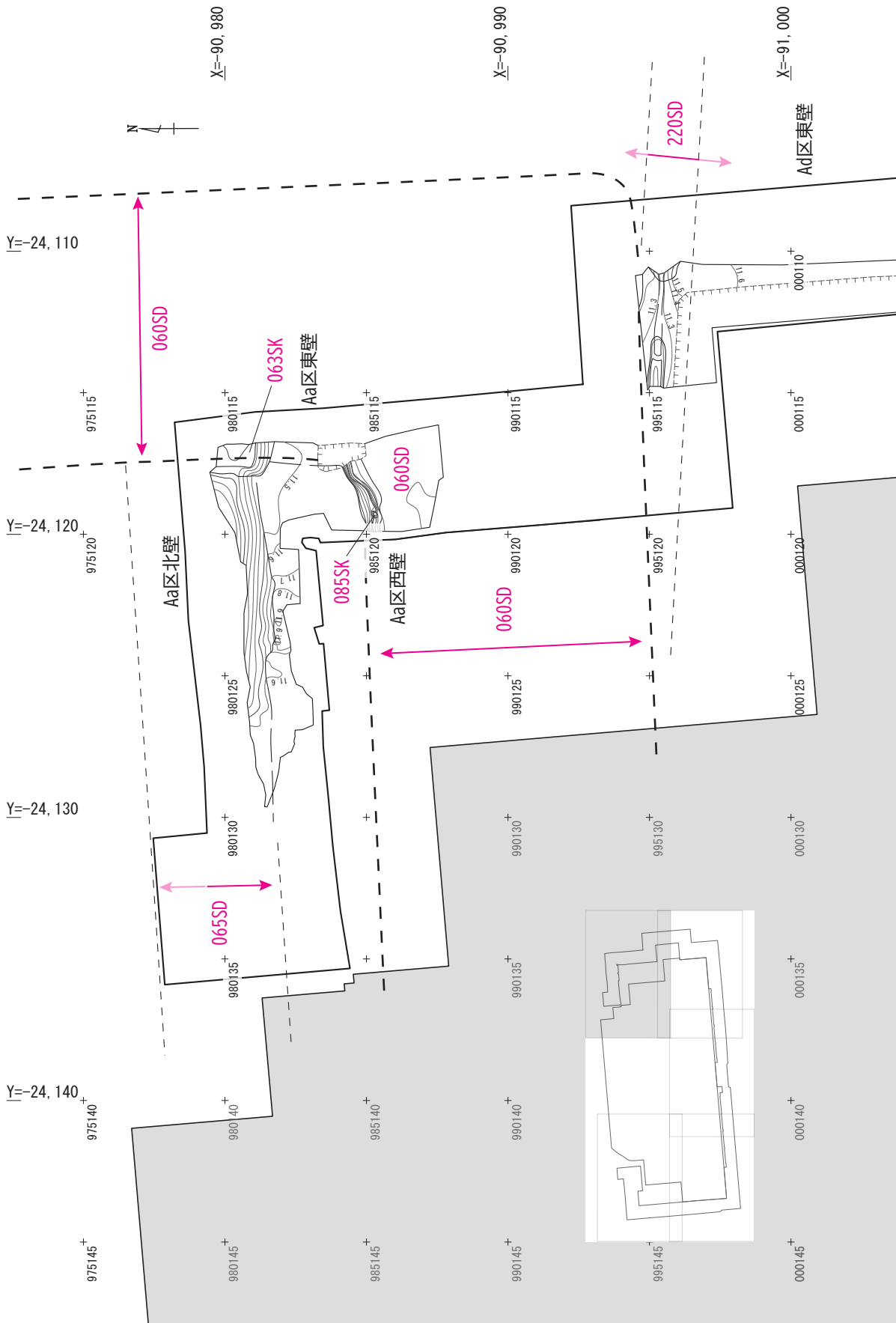
基本平面図  
10



23A 区平面図 下面 3 (S=1/200)



23A区平面図 下面4 (S=1/200)



23A区平面図 下面5 (S=1/200)



23Aa 区上面全景 (西から)



23Aa 区下面全景 (西から)



23Aa 区東部 (南から)



23Ac 区全景 (西から)



23Ab 区全景 (東から)



23Ab 区全景 (画面左が北)



23Ad 区全景 (画面上が北)



23Ab 区東部堆積層断面 (南から)



1.23Aa 区下面（東から）／ 2.23Aa 区 065SD 断面（東から）／ 3.23Aa 区 060SD 断面上部（南から）



4.23Ac 区戦国期堀の屈曲部分 122SD 断面（北東から）／ 5.122SD 断面（北から）／ 6.122SD 断面（東から）／ 7.23Ab 区溝 126SD 黒色土埋土検出状況（北から）／ 8. 溝 126SD 断面（南から）



1.23Ab 区戦国期堀 121SD 検出状況（東から）／2. 戦国期堀 121SD 検出状況（西から）  
 ／3. 戦国期堀 121SD と石蓋で塞がれている近代井戸 119SE（東から）／4.23Ad 区戦国期堀 220SD 検出状況（西から）  
 ／5.23Ad 区東壁土層断面、戦国期堀 220SD 左側に大溝 060SD が重複する（西から）／6.23Ab 区で確認できた大溝 120SD の北側肩（画面上が西）  
 ／7.23Aa 区大溝 060SD 屈曲部（東から）／8. 大溝 060SD 埋土最上層の除去後（東から）  
 ／9,10. 大溝 060SD 壁面の傾斜に対して垂直に掘削された土坑 085SK 断面（南東から）





1と2.23Ab区戦国期大溝 120SD 西壁断面。(東から) 上端で幅約12m、この時点で深さが3m以上と確認。埋土上部は白色粘土がブロック状に多く含まれ、この下に厚さ30cm程度の褐色シルト層がみられる(庭園の池に関連する構造か)。さらにその下はシルトと砂質土の細かいブロックが連続して斜めに堆積しており、北側から人為的に埋められていることがわかる。／3.23Aa区上面全景(画面上が北)／4.23Aa区北東隅壁面(南から)／5.23Ab区廃棄土坑001SK遺物出土状況(西から)／6.廃棄土坑001SK,002SK断面(東から)





1.2.3Aa 区上面全景（西から）／ 2.2.3Aa 区上面全景（東から）／ 3.2.3Ac 区東部（西から）／ 4.2.3Ac 区溝 183SD、土坑 181SK 付近（西から）／ 5.2.3Ac 区土坑 172SX 完掘状況と土坑 181SK（画面上が北）／ 6. 土坑 181SK 上部遺物出土状況（北東から）



1.23Ac 区土坑 172SX 遺物出土状況（東から）／ 2.23Ac 区土坑 181SK 遺物出土状況（南から）／ 3. 土坑 181SK 遺物出土状況（西から）／ 4. 土坑 181SK 遺物出土状況（北西から）／ 5. 土坑 181SK 掘削状況（北東から）／ 6.23Ad 区土坑 218SK 断面（西から）／ 7.23Ad 区土坑 213SK 検出状況（北西から）／ 8. 土坑 213SK 断面（東から）



1. 23Aa区埋甕遺構 015SK 検出状況(北から) / 2. 埋甕遺構 015SK 上部断面(西から) / 3. 埋甕遺構 015SK 断面(北から) / 4. 埋甕遺構 015SK 断面(西から) / 5. 埋甕遺構 015SK 上部植木鉢設置状況(西から) / 6. 埋甕遺構 015SK 甕検出状況(画面上が西) / 7. 埋甕遺構 015SK 甕内検出状況 / 8. 埋甕遺構 015SK 完掘状況(西から)



1.23Aa 区埋甕遺構 025SK  
上部構造完掘状況（北東から）

／ 2.23Aa 区 016SX, 埋甕遺構 025SK・015SK など上面西部の遺構完掘状況（画面上が南）／ 3. 埋甕遺構 025SK 埋土上層半截状況（北東から）／ 4. 埋甕遺構 025SK 上から三和土、植木鉢、埋甕の設置状況（東から）／ 5. 埋甕遺構 025SK 上部検出状況（北東から）／ 6. 埋甕遺構 025SK 下部構造上位断面（南から）／ 7. 埋甕遺構 025SK 下部構造検出状況（東から）





1.23Aa 区埋甕遺構 025SK の甕の内部（東から）／ 2. 埋甕遺構 025SK 甕周囲下位検出状況（東から）／ 3. 埋甕遺構 025SK 甕除去後の内部（東から）／ 4. 埋甕遺構 025SK 完掘状況（南東から）／ 5.23Aa 区土坑 016SX 内部断面（南から）／ 6. 土坑 016SX 壁面内部礫検出状況（南東から）／ 7.23Aa 区埋甕遺構 042SK 断面（北西から）／ 8. 埋甕遺構 042SK 甕除去後最下層断面（北西から）

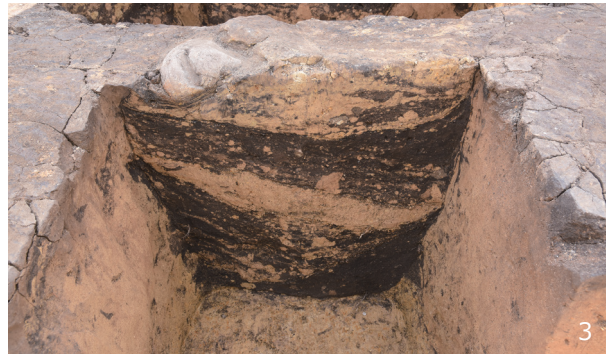


1.23Ab 区北壁断面のみで検出された溝 128SD (南東から) / 2.23Ab 区井戸 102SE 断面 (東から) / 3.102SE 井戸筒接合部(東から) / 4.102SE 井戸筒接合部の瓦片検出状況(東から) / 5.23Ab 区井戸 104SE 断面(南から) / 6.23Ab 区埋甕遺構 105SK 検出状況 (南から) / 7.23Ab 区土坑 101SK (東から) / 8.23Ab 区井戸 108SE 断面 (東から)



1.2.3Ab 区上層全景（西から） /  
2.2.3Ab 区上層西部 白色粘土ブロックの分布状況（北西から） / 3.2.3Ab 区池 124SG の落ち込みと底面付近の白色粘土（北東から） / 4.2.3Ac 区廃棄土坑 172SX,181SK 境界付近（西から） / 5.2.3Ac 区土坑 173SK 遺物出土状況（北から） / 6.2.3Ad 区上層の白色粘土の検出状況と基盤層断面（北西から） / 7.2.3Ad 区北部完掘状況（南から）





1.23Ab 区井戸 103SE 遺物出土状況（北から）／ 2.23Ab 区建物基礎 111SX（割石列）と戦国期堀 122SD（手前黒色土）の検出状況／ 3.23Ac 区土坑 162SX 断面（北から）／ 4. 土坑 162SX 完掘状況（北東から）／ 5.23Ac 区土坑 181SK 遺構掘削作業風景（南から）



6,7.23A 区地元説明会風景 2023.7.22.



213SK (廃棄土坑) の出土遺物



181SK (廃棄土坑) の出土遺物





155



154



19



355



232



587



137



425



223



314



441



416



132



404



231



133



497



134









329



429



111



330



428



42



135



032



195



321



254



326



197



156



408



320



138



83



140



209



537



317



191



274



577



586



538



539



222



292



139



499



176



331



1016



16



165



1003



1010



1027



1009



1036



1006



1037



1020



1035

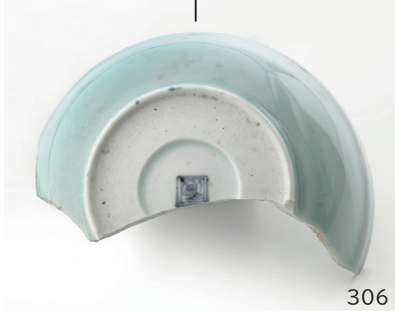




480



109



306



68



23



208



395



396



584



483



041



51



97



189



478



432



128



583



207



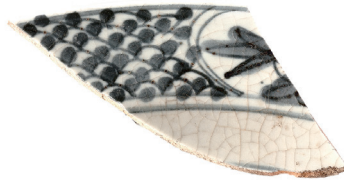
474



293



392



475



515



435



295



294



190



153



337



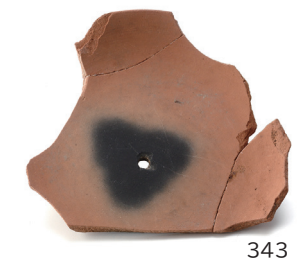
255



481



196



## 報告書抄録

ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき 9							
書名	名古屋城三の丸遺跡 IX							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第235集							
編著者名	武部真木(編) 鈴木正貴							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2026年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごやじょう 名古屋城 さんのまるいせき 三の丸遺跡	あいちけん なごやし 愛知県名古屋市 なかくさんのまる 中区三の丸2丁目	23106	007027	35度 10分 45秒	136度 54分 4秒	2023.05.17~ 2023.08.31	1,119	名古屋第4 地方合同庁舎 整備等事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
名古屋城 三の丸遺跡	集落 城郭	奈良時代 戦国時代 ～ 江戸時代	溝(堀)、井戸  溝、土坑、井戸、 庭園遺構(池)		須恵器  土師器(皿・鍋・人形)、 国内産陶磁器、 輸入陶磁器、 金属製品、石製品等		尾張藩武家屋敷の 庭園遺構(池)及び 水琴窟	
文書番号	発掘届出(5埋セ第3号 2023.4.5) 通知(5文芸第94-1号 2023.4.11) 終了届・保管証・発見届(5埋セ第149号 2024.3.21) 鑑定結果通知(6文芸第130号 2024.4.15)							
要約	調査地点は、名古屋城三の丸尾張藩武家屋敷のうちでも本町御門に最も近い重臣屋敷の一角にあたり、広大な敷地を継続して保有した渡邊半蔵家とその東側屋敷地が含まれる。屋敷奥となる範囲には池の痕跡や水琴窟を含む多数の埋蔵遺構が確認され、廃棄土坑からは多数の植木鉢も出土した。広い屋敷地ならではの空間の利用方法と、17世紀後半以降に活発に流行した園芸趣味の武家地での様相が窺われる資料である。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第235集

## 名古屋城三の丸遺跡Ⅸ

2026年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社